

歴代天皇の御歌

— 初代から昭和天皇まで二千首

小田村寅二郎・小柳陽太郎 共編

日本教文社

は し が き

日本では、そのむかし神武天皇が國を肇められてから今に至るまで、二千六百三十三年の歲月が數へられてゐる。(＊本書の初版、昭和四十八年でのこと)

この間、百二十四代にわたって歴代の天皇方が、つき／＼に皇位を受け継いで来られたが、その多くの方々は、つねに「和歌」に親しまれ、しかもすばらしい「歌人」であられた。しかし、このことについては、どういふわけか国民のあひだによく知られてゐない。それは、たいへんに残念なことであり、いつまでもそのまゝにしておくべきことではなからうと思ふ。

世に「文化遺産」とよくいふが、歴代の天皇がたが數へ切れないほどの「和歌」を遺してをられるのであるから、日本人にとって、これに勝る「文化遺産」はなからうと思ふ。もと／＼世界の人が多種多様な文化遺産の中でとくに大切にされて来たのは、文字に書かれた過去の文献であつた。それは、むかしの人たち——祖先たち——が、どのやうな物の考へかたをして生きてゐたのか、それを直接にわれ／＼に知らせてくれるからにほかならない。しかも、文字に書かれたこの種の「文献資料」の中では、とくに「詩歌」が大切にされてきた。詩歌は、むかしの人びとの赤裸々な心情を、生き生きと現実に甦らせ、味ははせてくれるからである。いまの日本では、ともすると文化遺産とは書画・骨董・建築・造園などのやうに、目に映り、形のあるものばかり思ひ込み勝ちで

あるが、「ことば」とその「ことばに宿る心」こそは、実にかげがへのない文化遺産”ではあるまいか。

『歴代天皇の御歌―初代から昭和天皇まで二千首』と題した本書には、天皇の御人数で九十一方、御歌の数で二、〇八一首を、尨大な量の御歌の中から編者兩名が不徳・浅学をも省みず、謹んでお選びし、こゝに集録させていたゞいたものである。御詠草の総数（明治天皇約十万首、靈元天皇約六千首、後柏原天皇・約四千首、をはじめ、編者が知りうる限りで一千首以上を今日に残されてをられる方々が、御十三方もおいでになられること）から見ると、ここに編した御歌の数は、ごくその一部分に過ぎないことになる。（*増補改訂版での集録数）

しかしご覧いたゞければお判りになるやうに、どの御歌一つを選んで聲を出して拜誦してみても、作者であられる天皇のお心の籠ったやまとことばが生き生きとしたリズムに乗って、格調高く響いてくるものばかりである。お喜びのとき、お悲しみのをり、また、国を憂へられるあまり、さらには、つねに国民を慈しまれるにつけ、ご祖先のみたまをお慰びなされるにつけて、その折々のさまざまな御心懐が、時に、はげしい御心の律動を伴って、読む者の心の底ひにしみじみと伝はってくるやうである。遠い遠いところに居られるやうに感じてゐた御歴代の天皇がたが、御歌を拜誦するわれわれの目の前に、身近かにお姿を現され、お聲をかけてくださるやうな気さへしてくる。「詩歌」とはまことに不思議なものであり、とくに「和歌」を介しての作者と読者とは、時

空の隔りを超えて心一つに通ひ合ふことができさうである。

「神武天皇から昭和天皇までの御歌を、できるだけ沢山に、そして手ごろな一冊の本にまとめ、青年・学生諸君とともにつねに座右にそなへ、ときには小脇にも抱へて、折にふれての研鑽に使へたら、日本歴史がどんなにか総合的に把めもしようし、天皇のことも、きつと判りやすく親しみ深くなるのだが……」

と、こゝ数十年にわたって友らとともに翹望してきた悲願が、——さうした書物が戦前戦後を通じてなかなか見当らなかつたので——こゝにやうやく実現の運びに至つたのは、何と申しても嬉しいこと、有難いことである。

恐らくこれからの日本では、天皇制論議が活潑に繰りひろげられるであらうと思はれるにつけ、本書に集録申上げた御歴代の天皇がたのすばらしい御歌のかずかずと各時代の御治世についての拙い歴史解説とが、それらの論議に潤ひを与へ、生きた素材を提供することにでもなれば、編者兩名にとって望外の喜びである。

さいごに編者の一人として渾身の努力を傾けてくださった小柳陽太郎氏、また本書の出版を心から祝福して下さって色々の御助言のほかに、巻末に『寄稿—皇室と「しきしまのみち」の歴史』をお寄せ下さった亜細亜大学教授・夜久正雄氏（『歌人・今上天皇』昭和三十四年・明治書院刊の著者）を

はじめ、考証に校正に終始協力を惜しまれなかった舞岡八幡宮々司・關正臣氏せまらみ、貴重な研究をご提示下さった富山県立図書館長代理・廣瀬誠氏ひろせまことをはじめ、国民文化研究会の同人諸友に心からの感謝を申し上げたい。そして、本書の出版を快くご承諾下さった日本教文社の各位ならびに、かなり手のかんだ活字組み作業を完遂してくださった奥村印刷の方々にも、深甚の謝意を表したい。

考証と校正には十分に意をつくしたつもりであるが、なほ行き届かないところがありうることを憂へ、多くの読者各位の御叱正を得て、本書が他日より良きものになる日を待たせていたゞきたいと思ふ。

昭和四十八年（一九七三）七月十日

昭和六十四年一月七日、天皇崩御の御事あり。全日本国民は御哀悼の誠を捧げる中で、本書の増補改訂のことが出版社から告げられた。

依って、従来の表題『歴代天皇の御歌』はそのままとしながらも、副題の「初代から今上陛下まで二千首」は、「初代から昭和天皇まで二千首」と改題させていたゞくことにした。また、「はしがき」の文中の「今上陛下」も「昭和天皇」に書き替へ、同天皇の項（本文）も、見出し、本文とも同様に改め、かつ、御在世・御在位の終年を記入し、御陵墓を加筆させていたゞいた。

平成元年（一九八九）二月十五日

小田村寅二郎

編集に当たってのいくつかのノート

一、初代の天皇・神武天皇からさきの昭和天皇まで、天皇の皇位は百二十四代にわたって継承されたが、そのうち、重祚（お一人の方が皇位に二回おつきになられること）が二度見られるので、御人数から申すと、「歴代天皇」は百二十二人の方々といふことになる。うち、女性で天皇になられた方が御八方おいでになられる。

そのほかに、中世の南北朝時代、すなはち正統の皇位である南朝と併立して、足利幕府が擁立した北朝の皇位が、五代続いてゐる。（註、北朝第六代・後小松天皇は「南北朝」の合体によって、北朝としての御在位十一年目以降は、正統の皇位第百代の天皇となられた。）この北朝五代にわたる天皇がたの御名は、皇室におかせられては、皇位順位からは除外せられながらも、わが皇室の「皇統譜」への御登録も規定せられてゐる由で、「歴代、外天皇」といふ名称でお呼びになつてをられ、御命日その他の「祭祀」については、「歴代天皇」（正統の皇位に即かれたさきの方々）と同じやうに執り行つてをられると拜聞する。

従つて本書においては、「歴代外天皇」御五方の御歌も、「歴代天皇」の御製とあはせ御集録申し上げた。

二、天皇がお詠みになられた「和歌」は、本来「御製」と申し上げるのが正しい言ひ方であるが、やゝ堅苦しう感じがしないでもないので、本書の表題には「歴代天皇の御歌」と題させていた。古くは、「おうた」「みうた」双方の呼称も使はれてゐるので。

また、天皇の御年齢を記す場合には、本来「宝算」といふ文字を用ひるのが正しいが、これも親しみ易く通常の人々のやうに、「御年何歳」といふ書き方に代へさせていた。なほ、御年齢は「数へ年」で御記載申し上げた。

三、歴代・歴代外あはせて百二十七人の天皇がたのうち、御製が今日まで伝へられてゐる方々の数は、圧倒的多数であられる。すなはち、御製のみならず具体的な史実も、さう詳しくは伝へ残されなかつたであらうと思はれる古代の第二代から第九代までと、第十一代から第十四代までとの十二人の方々、ならびに第七十九代・六條天皇の御年十三歳での崩御、第八十一代・安徳天皇の御年八歳での崩御、第八十七代・四條天皇の御年十二歳での崩御などを考へ合はせると、百二十七人の天皇がたのうち、二十人の方々の御製が今日に伝はらぬ理由も、自ら理解できることである。

本書に謹選・集録申し上げた天皇の御人数が、実に九十一人の方々を算することを見れば、歴代の天皇がたと「和歌」との深い深いつながりは、誰の目にも一驚に値するものがあらう。

四、わが日本に皇室が連綿として続いてゐることと、右のこととが、一体どういふ関連性を持つてゐるかについては、軽々に論じ得ないが、せめて次のことだけはここに記しておきたいと思ふ。

日本最古の和歌としては、タケハヤスサノヲノミコトの

「八雲立つ 出雲八重垣 妻隠みに 八重垣つくる その八重垣を」(『古事記』・上巻)

の御歌があり、古くから五・七・五・七・七の句節をもつた三十一文字といふ短歌形式が、日本に伝へられてきた。「古今和歌集」(九〇五)の編者の一人紀貫之も、その「序文」にこのことに触れて

「やまとうたは、人のこころをたねとして、よろづのことはとぞなれりける。世中にある人、ことわざしげきものなれば、心におもふことを、みるものきくものにつけて、いひいだせるなり。花になくうぐひす、水にすむかはづのこゑをきけば、いきとしいけるもの、いづれかうたをよまざりける。ちからをもいれずして、あめつちをうごかし、めにみえぬおに神をもあはれとおもはせ、おとこをむなのなかをもやはらげ、たけきものふの心をもなくさむるはうたなり。」

と和歌とわが国民との深いつながりについて、懇切な説明をしてゐる。

今日では、「和歌」は一種の趣味的な教養の一つに考へられ勝ちであるのに対して、古代からの日本人は（歴代の天皇がたは率先されてそれをなされたのであるが）、「和歌を詠む」といふそのことをもって、「やむにやまれぬ思ひを発露させるための大切なてだて」と受けとめ、「和歌を詠む」ことが、とりもなほさず「人の踐むべき道」「日本人の誰もが踐むことのできる道」と理解してきたやうである。

ふりかへって考へてみると、「自己の心のうちに生れた感動」を、喜びにつけ、悲しみにつけ、また憤りにつけ、それらありのままに素直な「ことば」で、五・七・五・七・七の三十一文字の中に詠み上げるといふことは、さう簡単に出来ることではない。まづ第一には、素材となる「心の感動」が生れないやうな弛緩した生活からは、まともな和歌は決して生れて来ない。そのうへ、心の中の感動を「ことば」に表現すると言つても、それを「虚飾なく言ひ表す」といふことは、さらにむづかしいことで、よほど虚心坦懐な心境に立たなくては、容易にできることではない。それは、「我を他人に良く見せよう」とし勝ちな心情とは、まさに正反対の努力を必要とするからである。

このこと一つ考へてみても、わが歴代の天皇がたが、この「和歌」の御修業をその御生涯を通じて、かくも熱心にご努力された、といふことは、とりもなほさず、天皇が、その御主観が独善化しがちなことをきびしく御自省なされ、万人にかよふやうな広く豊かな御心をお持ち続けなさらう、と目指され、「私心」を離れるために絶大な御努力を一貫して承け継いで来られたことを意味するであらう。いづれにしても、人の上に立つやうになればなるほど、世の人々は、自分の心のうちをあからさまに他人に示すことをためらひ勝ちになるのに反して、萬世一系の皇統を踐みつゞけられた歴代の天皇がたは、かくも厳しい「しきしまのみち」の道統を、正しく踐み分けて今日に至つてをられるのであるから、このことは、御歴代の天皇がたが、天皇といふ御地位にあられたことに照らし合はせれば照らし合はすほど、まことに稀有最勝の史実といふほかはなからうと思ふ。

五、なほ、本書においては、それ／＼の天皇の御治世について、簡単な説明文（ときには数ページにわたつた

ものもあるが)を添へて、若い人たちの勉学の資に供したが、小活字で印刷してあるこれらの「御治世の説明文」を次々に読まれることによって、「天皇を中心に見た日本歴史」が、それなりに浮び上ってくると思ふ。なほ、「説明文」の中の日本年号には、できるだけカッコで西暦年を添へた。

また、「各御治世の説明文」の末尾に、カッコにして、御陵墓の型式と御名称と、そして所在地についても附記し、御陵墓参拝への手引にした。

また、各天皇について御生歿年を西暦年で記載したほか、天皇になられた御年齢と、御退位になられた御年齢とをあはせ調べて記載したのは、その方々がおいくつぐらゐで天皇になられたか、などを知ることが、大変重要な意味を持つことを考へたためであった。さらに、後の天皇の院政をなされた方、前の天皇の院政を受けられた方については、それ／＼その期間を記載して、読者の便をはかることゝした。これらは、いづれも各天皇ごとに、表題名に続いて記してあるので、ご利用いたゞきたいと思ふ。

六、本書における時代区分は、初代・神武天皇から第四十九代・光仁天皇までを「古代」(B.C.六六〇)A.D.七八一)、第五十代・桓武天皇から第八十一代・安徳天皇までを「中古」(七八一)一八三三)、第八十二代・後鳥羽天皇から第一百五代・後奈良天皇までを「中世」(一八三三)一五五七)、第一百六代・正親町天皇から第二百一十一代・孝明天皇までを「近世」(一五五七)一八六六)、第二百二十二代・明治天皇以降を「近代」として五つの時代区分をした。

なほ、近世以降の御歌については、御歌をお詠みになった年がはっきりしてゐるものが多く、読者の便をはかつて、御作年順の配列をし、かつその年号、御年齢を明記した。

また、巻末には「皇室御系圖」を図表にして掲載したので、ご利用いたゞければ幸ひである。

七、本書の原典にしたものは、

「列聖全集」(大正六年・同全集編纂会刊行)のうち「御製集全十二巻」

「歴代天皇御製集、全七卷」(大正四年・芙蓉会刊行)

「新輯・明治天皇御集全二卷」(昭和三十九年・明治神宮刊行)

をはじめとして、多くの既刊書の恩恵に浴したことをこゝに謝するものである。また、小田村寅二郎が編者としてさきに出版した「新輯・日本思想の系譜・文献資料集、上下二卷」(昭和四十六年・時事通信社刊)(A5判・一七六九ページ)の中の第一章「古代における歴代天皇の御歌とその時代背景」、第十九章「中世における(同前)」、第四十章「近世における(同前)」、第九十一章「孝明天皇の御歌」、第九十三章「明治天皇の御歌」の五章目を基にして、小柳陽太郎が本書を編集し直したこと、大正天皇・昭和天皇の御二方おなたたについては、全く新しく編者二名で謹選申し上げたこと、かつ、御歴代天皇の御治世についての「説明文」は、小田村がすべて執筆し、小柳が補足したこと、本書の校正責任は、編者両名が負ふこと、などを附記しておきたい。

八、なほ、本書より二年前に同じく日本教文社から刊行されてゐる小田村著「日本思想の源流——歴代天皇を中心にして——」(四六判・三〇五ページ)は、御歴代の天皇の御歌について記したものであり、あはせて御披見いたゞければ幸ひである。

編者

凡例

一、歴代天皇の御製は、すべて「正仮名づかひ」であるので、こゝに謹選収録した御製・御文はもとより、各天皇の御治世についての説明文その他すべて「正仮名づかひ」すなはち「歴史的仮名づかひ」を用ひた。

二、「振り仮名」は読者の便を考へて、できるだけ附けるやうに努力したが、「振り仮名」については、

「漢字音」でその文字を読む場合には、「現代仮名づかひ」による「音読み」を用ひ、

「日本読み」和訓」でその文字を読む場合には、「歴史的仮名づかひ」を用ひることにした。

すなはち、漢字音で読むときの天皇の「皇」は「わう」ではなく「のう」に、「交」は「かう」ではなく「こう」に、「蝶」は「てふ」ではなく「ちよう」に、した。

また和訓で読むときの「川」は「かわ」ではなく「かは」に、「申」は「もおす」ではなく「まをす」か「まうす」にしたことである。なほ前後の関係で右の例外もいくつかあることをご了承願ひたい。

三、「漢字」は、天皇の御名ならびに御製および御文については、原則として「正漢字」を用ひた。また、「御治世」についての説明文」などでも、「略字体」では、その語の本来の意味がそこなはれさうな感じがする場合には、「正漢字」を用ひるやう配慮した。すなはち

國體・皇國・大御國・儀禮・禮節・萬葉集・攝政などの場合の「國」「體」「禮」「萬」「攝」などがそれであり、また、「藝」「佛」「歿」「樂」「盡」「聲」「疊」「蟲」「註」などの文字は、できるだけ「正漢字」を用ひて、それらの語が持つ本来のニュアンスを生かすやうにつとめた。

四、「難解な単語」や「由来のある言葉」と思はれるものについては、できるだけ註解をつけるやうにし、

*印をその語の左下に附し、末尾に、同じくその*印とその用語を書き記して、簡単な解釈を附した。

五、近世以降については、とくに年号を追うての御歌の配列が整ってゐるので、その御歌が詠まれた年に起きた主要な内外問題の名称を、年号の次に*印をつけて記載した。それは、御歌の背景がよりよく理解できるやうに、との配慮からである。

六、第九版の折に謹選・追加させていたゞいた昭和四十八年から六十一年當初までの御製六十四首のうち六十
二首は、夜久正雄氏編著『歌人・今上天皇―増補・新版』（昭和六十年十一月十日、初版・日本教文社刊）に據ら
せていたゞいたが、原本は、宮内庁発表の当用漢字のままになってゐたものを、本書では本書の表記方針を
繼承して正漢字にさせていゞいだいた。

七、第十版「増補改訂版」の折に謹選・追加させていたゞいた昭和六十一年から崩御までの二十七首は、御
発表の御製すべてとし、本書に収録した御製の総数は、二、〇八一首となり、昭和天皇の御製は二七八首
となった。

目次

はしがき……………1

編集に当たってのいくつかのノート……………5

凡 例……………10

古代（大和・奈良時代）（B.C.六六〇～A.D.七八二）……………15

神武天皇（第一代）……………	八首……………	17
崇神天皇（第十代）……………	一首……………	21
應神天皇（第十五代）……………	五首……………	23
仁德天皇（第十六代）……………	五首……………	26
履中天皇（第十七代）……………	三首……………	28
允恭天皇（第十九代）……………	二首……………	30
雄略天皇（第二十一代）……………	四首……………	31
顯宗天皇（第二十三代）……………	二首……………	33
武烈天皇（第二十五代）……………	四首……………	35
安閑天皇（第二十七代）……………	一首……………	37
推古天皇（第三十三代・女帝）……………	一首……………	38
舒明天皇（第三十四代）……………	二首……………	39
〔皇極天皇（第三十五代・女帝）……………	九首……………	40
〔齊明天皇（第三十七代・女帝・重祚）……………	一首……………	43
孝德天皇（第三十六代）……………	四首……………	44
天智天皇（第三十八代）……………	三首……………	46
天武天皇（第四十代）……………	五首……………	48
持統天皇（第四十一代・女帝）……………	二首……………	50
元明天皇（第四十三代・女帝）……………	六首……………	52
元正天皇（第四十四代・女帝）……………	九首……………	54
聖武天皇（第四十五代）……………	二首……………	56
〔孝謙天皇（第四十六代・女帝）……………	一首……………	58
〔稱徳天皇（第四十八代・女帝・重祚）……………	一首……………	58
淳仁天皇（第四十七代）……………	一首……………	58

中古（平安時代）（七八一～一一八三）

59

中世（鎌倉・室町時代）（一一八三～一五五七）

109

桓武天皇（第五十代）	五首	61	三條天皇（第六十七代）	四首	86
平城天皇（第五十一代）	五首	63	後朱雀天皇（第六十九代）	四首	87
嵯峨天皇（第五十二代）	二首	64	後冷泉天皇（第七十代）	一首	89
陽成天皇（第五十七代）	一首	65	後三條天皇（第七十一代）	三首	90
光孝天皇（第五十八代）	八首	66	白河天皇（第七十二代）	八首	91
宇多天皇（第五十九代）	六首	68	堀河天皇（第七十三代）	四首	93
醍醐天皇（第六十代）	九首	70	鳥羽天皇（第七十四代）	四首	95
朱雀天皇（第六十一代）	三首	72	崇徳天皇（第七十五代）	一九首	97
村上天皇（第六十二代）	六首	74	近衛天皇（第七十六代）	五首	100
冷泉天皇（第六十三代）	三首	76	後白河天皇（第七十七代）	九首	102
圓融天皇（第六十四代）	七首	78	二條天皇（第七十八代）	八首	105
花山天皇（第六十五代）	二九首	80	高倉天皇（第八十代）	四首	107
一條天皇（第六十六代）	三首	84			
後鳥羽天皇（第八十二代）	四九首	111	後宇多天皇（第九十一代）	二六首	141
土御門天皇（第八十三代）	二九首	118	伏見天皇（第九十二代）	四五首	145
順徳天皇（第八十四代）	二九首	123	後伏見天皇（第九十三代）	一首	152
後堀河天皇（第八十六代）	四首	127	後二條天皇（第九十四代）	一六首	154
後嵯峨天皇（第八十八代）	二五首	129	花園天皇（第九十五代）	二八首	157
後深草天皇（第八十九代）	二首	134	後醍醐天皇（第九十六代）	三七首	161
龜山天皇（第九十代）	二三首	136	後村上天皇（第九十七代）	二三首	169

長慶天皇(第九十八代)……………	一九首…173	後圓融天皇(歷代外天皇・北朝第五代)二首…	188
後龜山天皇(第九十九代)……………	七首…177	後小松天皇(第百代)……………	一一首…190
光嚴天皇(歷代外天皇・北朝初代)一〇首…	180	後花園天皇(第百二代)……………	二四首…194
光明天皇(歷代外天皇・北朝第二代)四首…	183	後土御門天皇(第百三代)……………	三一首…199
崇光天皇(歷代外天皇・北朝第三代)四首…	184	後柏原天皇(第百四代)……………	三七首…204
後光嚴天皇(歷代外天皇・北朝第四代)八首…	186	後奈良天皇(第百五代)……………	九首…209

近代(江戸時代) (一五五七—一八六六)……………

213

正親町天皇(第百六代)……………	一三首…215	櫻町天皇(第百十五代)……………	六〇首…278
後陽成天皇(第百七代)……………	三九首…219	桃園天皇(第百十六代)……………	四五首…288
後水尾天皇(第百八代)……………	九一首…227	後櫻町天皇(第百十七代・女帝)……………	三八首…295
後光明天皇(第百十代)……………	五首…241	後桃園天皇(第百十八代)……………	二首…301
後西天皇(第百十一代)……………	三四首…243	光格天皇(第百十九代)……………	三三首…303
靈元天皇(第百十二代)……………	一七四首…248	仁孝天皇(第百二十代)……………	三四首…310
東山天皇(第百十三代)……………	八首…274	孝明天皇(第百二十一代)……………	一三八首…317
中御門天皇(第百十四代)……………	一一首…276		

近代(明治時代・以降)(一八六七以降)……………

343

明治天皇(第百二十二代)……………	二〇六首…345	昭和天皇(第百二十四代)……………	二七八首…393
大正天皇(第百二十三代)……………	一一八首…374		

(寄稿) 皇室と「しきしまのみち」の歴史(亜細亜大学・教授・夜久正雄)…………… 433

皇室御系圖…………… 448

古

代

(大和・奈良時代) (B.C. 六六〇) (A.D. 七八一)

第一代・神武天皇 (第四十九代・光仁天皇)

神武天皇（第一代）

御在世 B.C.七一一—B.C.五八五
御在位 B.C.六六〇—B.C.五八五

神武天皇は、神日本磐余彦尊と申し上げ、鸕鷀草葺不合尊の第四皇子である。「古事記」「日本書紀」によれば、神武天皇の御東征は、九州、日向国高千穂から美々津の港を舟出せられ、豊後水道から今の佐賀関を経て、豊前（大分県）の宇佐、筑紫（福岡県）の岡水門、安藝（広島県）、吉備（岡山県）を経、途中諸準備を整へられて、皇軍「久米の子」を満載した軍船は、瀬戸内海を東へと進み、明石海峡を通過して浪速のみさき、「青雲の白肩津」に到着。大和へ直行しようとしてトミのナガスネヒコの軍勢と戦はれたが敗れ、のち兄君五瀬命の御戦死といふ悲劇もあり、紀伊半島を迂回して熊野から大和に向ふといふ作戦を断行。その後数々の苦闘を経て大和平定に至った。かくて皇居を、敵傍の橿原に定められ、こゝで御即位せられたのであるが、この年が、わが日本の紀元元年（西暦元年をさかのぼること六六〇年）となった。ここに引用したお歌の中、「榎並めて」までの六首は、大和平定の折のたたかひの御歌、あとの二首は、相聞（恋愛）の御歌であるが、天皇が橿原で即位せられたのはその両者のあひだにあたってある。建国といふ偉大な御事業の前と後に、戦闘と恋の歌が両翼として連らなるところに、古代の人々が描いた理想的な英雄の姿が遺憾なく示されてあるやうである。こゝに引用した御歌は「古事記・中巻」所載のものに拠った。

なほ、神武天皇をはじめ三、四世紀までの天皇方は、全く架空に創られた人物である

かのごとき説が一般に信じられてゐるやうである。たしかに、天皇の御生誕御崩御の年月については、記紀の記載通りに信じられないところもあるが、だからといって、それがすべて後世の讖緯説による創作であるときめつけることには、まだ問題が残されてをり、その他、天皇の御事業についても、これを単なる創作として軽々しく否定することは、許されないと思ふ。さらに以下にかゝげる御製がその天皇御自身のものか否かについても、決定出来ない場合もあるが、かりに作者についてその間に微妙な変化が行はれてゐるにしても、それは決して恣意的なものではなく、永い民族の伝承の中に生まれ、古代の人々のこころの表現である以上、われわれは、記紀が成立した当時の人々が信じてゐた伝承を、すなほに受けとつて読んでゆくべきであると思ふ。

(神武天皇の御陵墓は、奈良県橿原市にあり、畷傍山東 北 陵〔円墳〕と申し上げる。)

宇陀(註・奈良県宇陀郡)に兄宇迦斯、弟宇迦斯の二人有りき。故、先づ八咫鳥を遣はして、二人に問ひて曰ひしく、「今、天つ神の御子幸でましつ。汝等仕へ奉らむや。」といひき。是に兄宇迦斯、鳴籥を以ちて其の使を待ち射返しき。……待ち撃たむと云ひて軍を聚めき。然れども軍を得聚めざりしかば、仕へ奉らむと欺陽りて、大殿を作り、其の殿の内に押機を作りて待ちし時に、弟宇迦斯、先づ参向へて拝みて曰しけらく、「僕が兄、兄宇迦斯……殿を作り、其の内に押機を張りて待ち取らむとす……」とまをしき。ここに道臣命、……大久米命の二人、兄宇迦斯を召びて、罵言りて云ひけらく、「伊賀作り仕へ奉れる大殿の内には、意礼先づ入りて、其の仕へ奉らむとする状を明し白せ」といひて、……追ひ入るる時、乃ち己が作りし押に打たえて死にき。……然して其の弟宇迦斯が獻りし大饗をば、悉に其の御軍に賜ひき。此の時に歌曰ひけらく、(*伊賀・意礼)いづれも「お前が」の意)

宇陀の

高城に

鳴畏張る

我が待つや

鳴は障らず

いすくはし

くちら障る

前妻が

看乞は

さば 立たち椶せう梭げの 實みの無なけくを こきしひ多おほね 後う妻はなが 着な乞こはさば 杓いち實さかの多かけくを こきだ
 ひ多おほね ええ しやごしや 此こは伊い能の碁ご布ふ曾ぞ ああ しやごしや 此こは嘲あざわ咲らふぞ（*くちら鯨じやう、鷹たかな
 どの説せあれど未み詳じやう *こきしひ多おほね、こきだひ多おほね（いづれも未詳） *ええしやごしや、ああしやごしや（いづれも囃子詞）

土雲つちぐもを打うたむとすることを明あして、歌うた曰いひけらく、

忍お坂さか（註・奈良県忍坂村）の 大おほ室むろ屋やに 人ひと多おほに 來き入いり居をり 人ひと多おほに 入いり居をりとも みつみつし
 久く米めの子こが 頭く椎づい 石い椎づいもち 撃うちてし止やまむ みつみつし 久く米めの子こ等らが 頭く椎づい 石い椎づいもち 今いま
 撃うたば良よらし

とうたひき。如此かく歌うたひて、刀たを抜ひきて、一ひと時ときに打うち殺ころしき。（*頭椎・石椎（刀の柄頭がそれぞれ頭の形、石の形をしてゐるもの））

登と美み毘び古こ（註・トミのナガスネビコ）を撃うたむとしたまひし時とき、歌うた曰いひけらく、
 みつみつし 久く米めの子こ等らが 粟あ生は（註・粟畑）には 葦あ（註・臭かひのするニラ）一ひと莖こ そねが莖こ そね芽め撃つ
 ぎて 撃うちてし止やまむ

とうたひき。又また歌うた曰いひけらく、
 みつみつし 久く米めの子こ等らが 垣か下もとに 植うゑし椒か（註・山椒） 口くちひひく 吾われは忘われじ 撃うちてし止やまむ

神か風かぜの 伊い勢せの海うみの 大おほ石いしに 這はひ廻もろふ 細した螺たの い這はひ廻もり 撃うちてし止やまむ

兄師木・弟師木を擧ちたまひし時、御軍暫し疲れき。ここに歌曰ひけらく、

橋並めて 伊那佐の山（註・奈良県伊那佐村）の 樹の間よも 行きまもらひ 戦へば 吾はや飢ぬ
鳥つ鳥 鶺鴒が伴 今助けに来ね（*鶺鴒が伴||鶺鴒を使って魚を捕へることを職として天皇に仕へる人々）

七媛女（註・七人の乙女）高佐士野（註・香具山近くの野原）に遊行べるに、伊須氣余理比賣其の中に在りき。ここに大久米命、其の伊須氣余理比賣を見て、歌を以ちて天皇に白しけらく、「倭の高佐士野を七行く媛女ども誰をし枕かむ」とまをしき。ここに伊須氣余理比賣は、其の媛女等の前に立てりき。乃ち天皇、其の媛女等を見したまひて、御心に伊須氣余理比賣の最前に立てるを知らして歌を以ちて答曰へたまひしく、

かつがつも（註・まあまあの意） いや先立てる 兄（註・よい乙女または、年上の乙女の意）をし枕かむ

とこたへたまひき。……其の嬪子「仕へ奉らむ」と白しき。是に其の伊須氣余理比賣命の家、狹井河の上に在りき。天皇、其の伊須氣余理比賣の許に幸行でまして、一宿御寝し坐しき。後に其の伊須氣余理比賣、宮の内に参入りし時（註・お后として後宮にはいられた時）、天皇御歌よみしたまひけらく、

葦原の しけしき小屋に 萱疊 いや清敷きて 我が二人寝し（*しけしき||荒れた、きたない）

とよみたまひき。

崇神天皇 (第十代)

御在世 御在位
 B.C. B.C. 一四八一—B.C. 三〇〇
 九七一—B.C. 三〇〇

崇神天皇は、御間城入彦五十瓊殖尊と申し上げ、第九代・開化天皇の第二皇子。第二代・綏靖天皇以降、八代・五百六十三年間は、神武天皇の御創業を継がれて、守成を御事となされたが、この天皇の御代の五年、国内に疫病流行、多くの人々が死に、また治安も乱れるさまとなった。崇神天皇は、それまでの歴朝が皇居内に奉安した三種の神器のうち、八咫鏡と天叢雲劍との御二つを鄭重に大和の笠縫にお遷しになられ、御靈代として天照皇大神を奉祀せられ、さらに、御鏡と御劍とを模造せしめて、これを皇居内に安置せられることになった。このほか、この天皇の御代に、北陸・東海・西海・丹波の四地方に四道將軍が派遣され、特に、皇族を用ひられて人心の收攬に当てられ、永く文武の大権が天皇におかれる基礎を確立された。崇神天皇に対し「御肇國天皇」と後世から御讚へ申し上げるやうになったのも故あることであつた。なほ、次の垂仁天皇の御代 (B.C. 五) に、皇大神宮を伊勢の五十鈴川のほとりに遷された。こゝへの引用は、「日本書紀・卷五」に拠つた。

(御陵墓は、奈良県天理市にあり、山邊道勾阿上陵〔前方後円〕と申し上げる。)

冬十二月の丙申の朔、乙卯(二十日)に、天皇、大田田根子を以て、大神(三輪明神・大神神社)を祭らしむ。是の日に、活日(大神神社の神酒を醸造する人)自ら神酒を挙げて、天皇に獻る。仍りて、歌して曰

く、「此の神酒は我が神酒ならず倭成す大物主の醸みし神酒幾久幾久」如此歌して、神宮に宴す。即ち宴
竟りて、諸大夫等、歌して曰はく「味酒三輪の殿の朝門にも出でて行かな三輪の殿門を」(*朝門にも出でてゆ
かな||一晚中酒盛りをして、朝になつてから帰つて行きたい)

伎に、天皇歌して曰はく、

味酒

三輪の殿の

朝門にも押し開かね

三輪の殿門を

(*押し開かね||押し開いて行きなさい)

やがて神宮の門を開きて牽行しき。

應神天皇 (第十五代)

御在世 二〇〇—三二〇
御在位 二七〇—三二〇

應神天皇は、譽田別尊と申し上げ第十四代・仲哀天皇の第四皇子である。この天皇から三代前の第十二代・景行天皇の御代に、皇子・日本武尊の東征・西征あり、大和朝廷による日本国内の統一がほど達成せられた。また、先代・仲哀天皇の時代には、神功皇后による朝鮮半島の新羅に出征のこともあり、その間御母君・神功皇后の御胎中にあられたことから應神天皇を「胎中天皇」とも申し上げた。

この時代は、大和朝廷の勢力が、内外に飛躍的に発展した時期で、朝鮮半島の百濟国王から貢物があり、これに対して、天皇は、「品物もよいが、賢い人がゐたら、さういふ人をいただきたい」と御希望になり、その御要請にに応じて、百濟王から派遣されて来たのが有名な王仁といふ学者である。この王仁が「論語」十卷、「千字文」一卷を日本に伝へ、またあはせて、機織・造酒などの大陸文明が、日本に伝来することになった。(御陵墓は大変大きなもので、大阪府羽曳野市にあり、惠我草堂伏岡陵〔前方後円〕と申し上げる。)

あるとき、天皇、近つ淡海の国に越え幸でましし時、宇運野の上に御立ちたまひて、葛野を望けて歌曰ひたまひしく、

千葉の
葛野を見れば 百千足る
家庭も見ゆ 國の秀も見ゆ
(* 百千足るは民家が満ち榮えてゐる)

とうたひたまひき。

天皇、日向国の諸県君の女、名は髪長比賣、其の顔容麗美しと聞し看して、使ひたまはむとして喚上げたまひし時、其の太子大雀命(註、後の仁徳天皇)、其の嬪子の難波津に泊てたるを見て、其の姿容の端正しきに感でて、即ち建内宿禰大臣に誂へて告りたまひけらく、「是の日向より喚上げたまひし髪長比賣は、天皇の御所に請ひ白して、吾に賜はしめよ。」とのりたまひき。爾に建内宿禰大臣、大命を請へば、天皇即ち髪長比賣を其の御子に賜ひき。賜ひし状は、天皇豊明聞し看しし日に、髪長比賣に大御酒の柅を握らしめて、其の太子に賜ひき、爾に御歌曰みしたまひしく、

いざ子ども 野蒜摘みに 蒜摘みに 我が行く道の 一番ぐはし 花橘は 上枝は 鳥居枯らし
下枝は 人取り枯らし 三つ栗の 中つ枝の ほつもり 赤ら嬪子を いざささば 良らしな

とうたひたまひき。又御歌曰みしたまひしく、

水溜る 依網の池の 堰杵打ちが 插しける知らに 尊練り 延へけく知らに 我が心しぞ いや
愚にして 今ぞ悔しき(＊印まで、太子が姫に心を寄せてゐたことを知らずに、といふことの比喩)

とうたひたまひき。……故、其の嬪子を賜はりて後、太子歌曰みしたまひしく、

(仁徳天皇御歌) 道の後古波陀嬪子を雷の如聞えしかども相枕枕く(＊道の後Ⅱ都から遠く離れたところ)
とうたひたまひき。又歌曰みしたまひしく、

(同) 道の後古波陀嬪子は争はず寝しくをしぞも愛しみ思ふ

とうたひたまひき。

天皇、百済の国に「若し賢しき人有らば貢上れ。」と科せ賜ひき。故命を受けて貢上れる人、名は和邇吉師

(註・王仁)。即ち論語十卷、千字文二卷、并せて十一卷を是の人に付けて即ち貢進りき。……及、酒を醸むことを知る人、名は仁番、亦の名は須須許理等、參渡り來つ。故是の須須許理、大御酒を醸みて獻りき。是に天皇、是の獻りし大御酒に宇羅宜て(註・心が浮き浮きされて)、御歌曰みしたまひしく、

須須許理が 醸みし御酒に 我酔ひにけり 事無酒 笑酒に 我酔ひにけり (以上、古事記、中卷)

三十一年(三〇〇)の秋八月、「枯野と名ぐるは、伊豆国より買れる船なり。是朽ちて用ゐるに堪へず。然れども久に官用と為りて、功忘るべからず。何でか其の船の名を絶たずして、後葉に伝ふることを得む」とのたまふ。群卿、……其の船の材を取りて、薪として塩を焼かしむ。……焼きし日に、餘燼有り。その焼えざることを奇びて獻る。天皇、異びて琴に作らしむ。其の音、鏗鏘にして遠く聆ゆ。是の時に、天皇、歌して曰はく、

枯野を 鹽に焼き 其が餘 琴に作り 掻き弾くや 由良の門の 門中の海石に 觸れ立つ なづ
の木の さやさや (*なづの木) 水の中につかてゐる木、海藻のことか) (日本書紀、卷第十)

仁徳天皇（第十六代）

御在世 二九〇—三九九
御在位 三三三—三九九

仁徳天皇は、大鷦鷯おほささぎのみにこと尊と申し上げ、應神天皇の第四皇子である。御在位の半ばにして朝鮮半島に出兵。百濟と新羅を従へ、高句麗と対戦され、四世紀半ばごろ半島南端に「任那日本府」を設置せられた。また、当時の中国「宋」にも使が派遣された。国内では農業・開拓事業も盛んで、わが国が統一国家としての名実ともに備はった姿を内外に示すに至った。

（御陵墓は、大阪府堺市にあり、百舌鳥耳原中陵〔前方後円〕と申し上げ、歴代天皇の御陵の中、もっとも規模の大きいものである。）（註・前の欄に、太子の折の御歌二首掲載。）

沖方には

天皇、吉備の海部直の女、名は黒日賣、その容姿端正しと聞こしめして、喚上げて使ひたまひき。然るにその大后の嫉みを畏みて、本つ國に逃げ下りき。天皇、高臺に坐して、その黒日賣の船出でて海に浮かべるを望み瞻て歌曰ひたまひしく

小船連らくくろざやのまさづ子吾妹國へ下らす

とうたひたまひき。かれ大后この御歌を聞きて、大く忿りまして、人を大浦に遣して、追ひ下して、歩より追ひ去りたまひき。

ここに天皇、その黒日賣に戀ひたまひて、大后を欺きて、曰りたまひしく「淡路島を見むと欲ふ」とのりたまひて幸行でましし時に、淡路島に坐して、遙に望けて、歌曰ひたまひしく、

おしてるや
難波の崎よ
出で立ちて
我が國見れば
淡島
自凝島
檳榔の
島も見ゆ
放つ島

見ゆ
とうたひたまひき。乃ちその島（淡路島）より伝ひて、吉備の國に幸行でましき。ここに黒日賣、其の國の山方の地に大坐し、まさしめて、大御飯を獻りき。是に大御藥を煮むと爲て、其地の菘菜を採む時に、天皇その嬪子の菘採める処に到り坐して、歌曰ひたまひしく、

山縣に蒔ける菘菜も吉備人と共にし摘めば楽しくもあるか

とうたひたまひき。天皇上り幸でます時に、黒日賣御歌を獻りて曰ひしく、「倭方に西風吹き上げて雲離れ退き唐りとも我忘れめや」といひき。又歌曰ひけらく、「倭方に往くは誰が夫隱水の下よ延へつつ往くは誰か夫」とうたひき。（以上、古事記、下卷）

履中天皇 (第十七代)

御在位 三三九—四〇五
御在位 四〇〇—四〇五

履中天皇は、仁徳天皇の第一皇子。履中天皇のときに、皇位を御弟君に譲られることになり、ここに御兄弟相承のことがはじめて見られる。天皇御在位四年目に、諸国に史官（国史）を置かれ、六年目にはのちに蔵職をつくって、官物の出納をつかさどらせられた。

（御陵墓は、大阪府堺市石津ヶ丘町にあり、百舌鳥耳原南陵〔前方後円〕と申し上げる。）

難波の宮に坐しし時、大御酒に宇良宜て大御殺したまひき。ここに其の弟墨江中王天皇を取らむと欲ひて火を大殿に着けき。是に倭の漢直の祖阿知直盗み出して、御馬に乗せて倭に幸でまさしめき。故、多遲比野に到りて、磨めまして、「此間は何処ぞ。」と詔りたまひき。ここに阿知直白しけらく、「墨江中王、火を大殿に著けましき。故、率て、倭に逃ぐるなり。」とまをしき。ここに天皇歌曰ひたまひしく、

多遲比野の寝むと知りせば立薦も持ちて来ましもの寝むと知りせば

とうたひたまひき。波瀨賦坂に到りて、難波の宮を望み見たまへば、その火なほ炳かりき。ここに天皇また歌曰ひたまひしく、

波瀨布坂我が立ち見ればかぎろひの燃ゆる家群妻が家のあたり

とうたひたまひき。故、大坂の山口に到り幸でましし時、一りの女人に遇ひたまひき。其の女人の白しけらく、「兵を持てる人等、多に茲の山を塞へたり。当岐麻道より廻りて、越え幸でますべし。」とまをしき。ここに

天皇すめらみこと曰たまひたまひしく、

大坂に遇ふや嬢子をとめを道問へば直には告らす當藝麻道たぎまぢを告る

とうたひたまひき。(以上、古事記、下巻)

允恭天皇（第十九代）

御在世 三七四—四五三
御在位 四二—四五三

允恭天皇は、第十六代・仁德天皇の第四皇子である。昔から日本では、氏氏の職業が、各々定まらぬで、世々これを継承してきてゐたが、其の職がそのまゝ其の家の名であつた。氏姓といふ姓は、氏を尊んだ号のこと。允恭天皇は、この氏姓の混乱を正しくされ、多くの職業の伴（グループ）の長の氏姓を定められた。（允恭紀四年の条に、その詔がある。）また、新羅から良医を招かれなどされた。

（御陵墓は、大阪府南河内郡美陵町にあり、惠我長野北陵〔前方後円〕と申し上げる。）

八年（四二〇）の春二月、藤原に幸す。密に衣通郎姫の消息を察たまふ。是夕、衣通郎姫、天皇を恋びたてまつりて独居り。其れ天皇の臨せることを知らずして、歌して曰く、「我が夫子が来べき夕なりささがねの蜘蛛の行ひ是夕著しも」天皇、是の歌を聆しめて、則ち感でたまふ情有します。而して歌して曰はく、

ささらがた錦の紐を解き放てて敷は寝ずに唯一夜のみ（*ささらがた細かな紋様を織り出した錦）

明旦に、天皇、井の傍の桜の華を見して、歌して曰はく、

花ぐはし櫻の愛で同愛では早くは愛でず我が愛づる子ら（*同愛では早くは愛でず同じく愛するなら、早く

皇后、聞しめて、且大きに恨みたまふ。（以上、日本書紀、卷第十三）

から愛すればよかつたのに）

雄略天皇（第二十一代）

御在世 四一八—四七九
御在位 四五六—四七九

雄略天皇は、第十九代・允恭天皇の第五皇子で、大泊瀬幼武尊とも申し上げる。支那の「宋書」の「倭國傳」は、五世紀ごろの大和朝廷の勢力が海外に伸張したことを述べてゐるが、雄略天皇の治世は、大和朝廷において皇室の威勢が他の中央豪族を圧倒してゐた最後の時期であり、朝鮮半島における日本の立場が次第に弱まってゆく転換の時期であった。吉備田狹が任那に拠つて謀叛したのもこの時代であった。しかし、土地を百濟に賜つて再興をはかれたり、任那日本府の兵が、新羅をたすけて高麗を破つたことなどもあった。国内では、諸国に桑を植ゑさせ、養蚕事業をすゝめ、また、豊受大神宮を丹波から伊勢に遷し（四七八）、伊勢外宮の起りとなつた。

天皇の御歌は、まさしくそのお名前の通り、雄渾な力にあふれてゐるが、殊に「萬葉集」巻頭の歌が、雄略天皇の御歌からはじめられてゐるところから見ても、古代の人々たちが、天皇に寄せたなみなみならぬ思ひが偲ばれるのである。

（御陵墓は、大阪府羽曳野市にあり、丹比高鷲原陵〔円墳〕と申し上げる。）

天皇、吉野の宮に幸行でましし時、吉野川の浜に童女有りき。其の形姿美麗しかりき。故、是の童女と婚ひして、宮に還り坐しき。後更に、また、吉野に幸行でましし時に、その童女の遇ひし所に留まりまして、其処に大御與床（註・足を組んで坐る台）を立てて、その御與床にましまして、御琴を弾きて、その嬪子に舞為しめたま

ひき。ここにその嬖子の好く舞へるに因りて、御歌作たまひき。その御歌に曰ひしく、

呉床居の神の御手もち弾く琴に舞する女常世にもがも

といひき。即ち阿岐豆野に幸でまして、御猶したまひし時、天皇御呉床に坐しましき。ここに蝸(註・虻)御腕を咋ふ。即ち、蜻蛉(註・トンボ)来て其の蝸を咋ひて飛びき。是に御歌を作たまひき。其の歌に曰ひしく、

み吉野の 衰牟漏が嶽に 猪鹿伏すと 誰ぞ 大前に奏す やすみしし 我が大君の 猪鹿待つと
呉床に坐し 白栲の 衣手著具ふ 手躰に 蝸かきつき その蝸を 蜻蛉早咋ひ かくの如 名に
負はむと そらみつ 倭の國を 蜻蛉島とふ (*手躰 手手のふくらんだ所) (以上、古事記、下卷)

六年(四六一)春二月、天皇、泊瀬の小野に遊びたまふ。山野の体勢を觀して、慨然みて感を興して歌して曰はく、

隱國の 泊瀬の山は 出で立ちの よろしき山 走り出の よろしき山の 隱國の 泊瀬の山は
あやにうら麗し あやにうら麗し (日本書紀、卷第十四)

天皇の御製歌

籠もよ み籠持ち 搦串もよ み搦串持ち この岳に 菜摘ます兒 家聞かな 名告らさね そら
みつ 大和の國は おしなべて われこそ居れ しきなべて われこそ座せ われこそは 告らめ
家をも名をも (萬葉集、卷第一の巻頭第一首)

顯宗天皇（第二十三代）

御在世 四五〇—四八七
御在位 四八五—四八七

顯宗天皇は、第十七代・履中天皇の御孫に当られる方である。「日本書紀」によれば、顯宗天皇は、かつて、御一身の危険を避けられるために、久しく、播磨の縮見の屯倉の首のもとにかくれられて、その使役に従事されたご経験があられるために、「悉に百姓の憂へ苦ぶることを知しめせり。」とあり、人々の苦しむさまについて「恆に枉げ屈かれたるを見ては、四体を溝隍に納るるが若くおもほす。」と御身に惚ばれつゝ「徳を布き恵を施して、政令流き行はる。貧を郵み……」とある。

（御陵墓は、奈良県北葛城郡香芝町にあり、傍丘岩坏丘南陵〔前方後円〕と申し上げる。）

此の天皇、其の父王市邊王の御骨を求めたまふ時、淡海国に在る賤しき老嫗、参出て白しけらく、「王子の御骨を埋みしは、専ら吾能く知れり。……」とまをしき。ここに民を起して土を掘りて、其の御骨を求めき。即ち其の御骨を獲て……御陵を作りて葬りて、……其の陵を守らしめたまひき。然て後に……その老嫗を召して、其の失はず見置きて其の地を知りしを養めて、名を賜ひて置目の老嫗（註・その場所に目をつけてゐたお婆さん）と號けたまひき。仍りて宮の内に召し入れて敦く廣く慈みたまひき。其の老嫗の住める屋は、近く宮の辺に作りて、日毎に必ず召しき。かれ、鐸（註・大鈴）を大殿の戸に懸けて、其の老嫗を召さむと欲ほす時は、必ず其の鐸を引き鳴らしたまひき。ここに御歌を作たまひき。其の歌に曰りたまひしく、

浅茅原小谷を過ぎて百傳ふ鐸響くも（上）置目來らしも

とのりたまひき。是に置目老嫗白しけらく、「僕は甚老にき。本つ国に退らむと欲ふ。」とまをしき。故、白し
し隨に退る時、天皇見送りて歌白ひたまひしく、

置目もや淡海の置目明日よりはみ山隠りて見えすかもあらむ

とうたひたまひき。(以上、古事記、下卷)

武烈天皇（第二十五代）

御在世？ 一五〇六

御在位 四九八—五〇六

武烈天皇は、第二十四代・仁賢天皇の第一皇子。この時代に、大臣・平群眞鳥の専横あり、大伴金村、これを誅し、のち、大連となり、大和朝廷の政務をつかさどることとなつた。なほ次の第二十六代・繼體天皇の御代（五二二）朝鮮半島の百濟の国から、わが朝廷に対して、日本の直轄領の任那のうち、いまの慶尚南道のはほとんど全域に及ぶ四県（オコシタリ・アロシタリ・サダ・ムロ）を自分の国に呉れと申し越してきた。当時、大連の一人であつた大伴金村は、百濟国の使者から賄賂を受けて、この四県を勝手に与へてしまつた。それから十五年後（五二七）には、九州、筑紫国造、磐井が、朝鮮の新羅と結んで謀叛を企てた。

このやうに、朝鮮各地における日本蔑視の風潮は、刻一刻と倍加してゆき、まことに重大な転期が近づいてゐた。やがて二代をおいて次の欽明天皇（第二十九代）の御代に、朝鮮半島におけるわが日本の直轄領、「任那の日本府」は、度かさなる数次の援軍の派遣も効なく、遂に新羅のために滅ぼされてしまひ（五六二）、二度とその再興を実現することができなかつた。

（御陵墓は、奈良県北葛城郡香芝町にあり、傍丘磐坏丘北陵（山形）と申し上げる。）

大臣・平群眞鳥臣、專國政を擅にして、日本に王とあらむと欲ふ。隔りて太子の為に宮を營るまねす。

了りて即ち自ら居む。觸事に驕り慢りて、都て臣節無し。是に、太子(註・後の武列天皇)……影媛を聘へむと思はして媒人を遣はして影媛が宅に向はしめて會はむことを期る。影媛、曾に真鳥大臣の男、鮎に好されぬ。太子の期りたまふ所に違はむことを恐りて、報して曰さく、「妾望はくは、海柘榴市の巷に待ち奉らむ」とまうす。是に由りて、太子、期りし處に往てまさむとす。……太子、期りし所に之きて、歌場の衆に立たして、影媛が袖を執へて、躑躅ひ從容ふ。俄ありて鮎臣、來りて、太子と影媛との問を排ちて立てり。是に由りて、太子影媛が袖を放したまひて移廻り向きたまひて前に向みて立ちて直に鮎に當ひたまふ。歌ひて曰はく、

潮瀬の波折を見れば遊び來る鮎が鱗手に妻立てり見ゆ (* 鱗手 II すぐ脇の所)

鮎、答歌して曰さく、(歌、省略)。太子歌ひて曰はく、

大太刀を垂れ佩き立ちて抜かずとも末果しても會はむとぞ思ふ

鮎臣、答歌して曰さく(歌、省略)。太子歌ひて曰はく、

臣の子の八節の柴垣下動み地が震り來ば破れむ柴垣

太子、影媛に歌を贈りて曰はく、

琴頭に來居る影媛玉ならば吾が欲る玉の鯁白珠(以上、日本書紀、卷第十六)

安閑天皇 (第二十七代)

御在世 四六六—五三五
御在位 五三一—五三五

安閑天皇は、御父・第二十六代・繼體天皇がまだ大和におでましになる以前、越前に
をられた時にお生れになられた。御父・繼體天皇は、大和の国で第二十九代・欽明天皇
となられる方をお生みになったが、欽明天皇が御成長になるのをお待ちになる形で、安
閑天皇と宣化天皇が次々に天皇にお立ちになったものと思はれる。この天皇の御代には
屯倉が全国各地に設置され、皇室の力が著しく強化された時期であった。

(御陵墓は、大阪府羽曳野市にあり、古市高屋丘陵〔前方後円〕と申し上げる)

繼體天皇の七年(五一三) 九月に、勾大兄皇子(註・後の安閑天皇)、親ら春日皇女(註・第二十四代・仁賢天
皇の皇女)を聘へたまふ。是に月の夜に情談して、不覺に曉けぬ。斐然之藻(註・ことばに表現しようとなさる
おこころ)、忽に言に形る。乃ち口唱して曰はく

古代・安閑天皇
八島國 妻枕きかねて 春日の 春日の國に 麗し女を 有りと聞きて 宜し女を 有りと聞きて
眞木さく 檜の板戸を 押し開き 我れ入り坐し 脚取り 端取して 枕取り 端取して 妹が手
を 我に纏かしめ 我が手をば 妹に纏かしめ 眞析葛 たたき交はり 鹿くしろ 熟睡寢し間に
庭つ鳥 鶏は鳴くなり 野つ鳥 雉は響む 愛しけくも いまだ言はずて 明けにけり我妹(日本書
紀 卷第十七) (*眞木さく、眞析葛、鹿くしろ=いづれも枕詞)

推古天皇 (第三十三代・女帝)

御在位 五五四—六二八 (崩御・七十五歳)
御在位 五九二—六二八 (三十九歳—七十五歳)

推古天皇は、第二十九代・欽明天皇の第三皇女であらせられる。日本における最初の女帝。先代・第三十二代の崇峻天皇は、わが国歴史上で前代未聞の事であったが、蘇我馬子の腹心によって弑逆せられた方であった。しかもそれに先立つ三十年前には、朝鮮半島南端の任那日本府が滅亡してをり、内外ともにまことにきびしい時代であった。しかも推古天皇の御母は、蘇我馬子の妹・堅塩媛であり、時代の苦難のたゞなかを生きられた方であった。天皇は御即位の翌年(五九三)聖德太子(註・御兄君の第三十一代・用明天皇の第二皇子)を攝政にお立てになり政治を行はれたが、太子は、冠位十二階・憲法十七條の制定、隋との対等の国交の樹立、遣唐使の派遣など、内治外交にわたって画期的な事業を行はれ、さすがの蘇我氏も、なすすべを知らず、次のお歌にも見られるやうに、

天皇を中心とした安定した時代がつづいた。
(御陵墓は、大阪府南河内郡太子町にあり、磯長山田陵〔方墳〕と申し上げる。)

二十年(六一二)の春正月、置酒して群卿に宴す。是の日に大臣(註・蘇我馬子)寿上りて歌ひて曰さく、(歌、省略)天皇和へて曰はく、
眞蘇我よ 蘇我の子らは 馬ならば 日向の駒 太刀ならば 呉の眞刀 諾しかも 蘇我の子らを
大君の 使はすらしき (日本書紀、卷第二十二)

舒明天皇（第三十四代）

御在世 五九三—六四一（崩御・四十九歳）
御在位 六二九—六四一（三十七歳—四十九歳）

舒明天皇は、第三十代・敏達天皇の御孫に当られる。この御代、六三〇年に、遣唐使の派遣がはじめられた。また、さきに六〇八年、小野妹子とともに隋に派遣された高向玄理・南淵請安等が唐から帰国（六四〇）し、三十餘年にわたる留学を終へて彼の地の学問・技術を日本に伝へ、これが大化改新に対する大きな原動力となった。
（御陵墓は、奈良県桜井市にあり、押坂内陵〔上円下方〕と申し上げる。）

天皇、香具山に登りて望闕したまふ時の御製歌
大和には 群山あれど とりよろふ 天の香具山 登り立ち 國見をすれば 國原は 煙立ち立つ
海原は 鷗立ち立つ うまし國そ 蜻蛉島 大和の國は（萬葉集、卷第一の巻頭第二首）

岡本天皇（註・高市岡本宮を皇居とし給うた天皇、即ち舒明天皇であるが、その皇后で後に天皇になられた皇極（齊明）天皇といふ説もある。）の御製歌一首

夕されば小倉の山に鳴く鹿は今夜は鳴かずい寝にけらしも（萬葉集、卷第八、秋）

皇極天皇こうぎょくてんこう

(第三十五代・女帝)

御在世 五九四—六六一(崩御・六十八歳)

御在位 六四二—六四五(四十九歳—五十二歳)

齊明天皇さいめいてんこう

(第三十七代・重祚)
女帝

御在位 六五五—六六一(六十二歳—六十八歳)

皇極天皇は、第三十四代・舒明天皇の皇后であられた方で、また第三十八代・天智天皇、第四十代・天武天皇の御母君に当られるが、一代をおいて前後二代の皇位につかれた女帝であられるので、こゝでは、御一生の作品を選ぶために一項にまとめさせていた。皇極天皇の御代には、聖德太子の御子であられる山背大兄王御一族を、蘇我入鹿が斑鳩寺に包圍したのに対し、大兄王は「吾、兵を起して入鹿を伐たば、其の勝たむこと定し。然るに一つの身の故に由りて、百姓を残り害はむことを欲りせじ。是を以て、吾が一つの身をば、入鹿に賜ふ」と仰せられて、御一族全員、御自害せられた(六四三)。御父・聖德太子の御精神を継承せられての、まことに悲痛な御生涯であった。その二年後に、中大兄皇子が、藤原鎌足と共に、入鹿を誅伐(六四五)、大化改新となった。

齊明天皇の御代は、大化改新のあとであり、中大兄皇子がひきつゞき皇太子であられた。御即位後、四年(六五八)孝德天皇の皇子・有間皇子が誅せられるといふ悲劇がおこつてゐるが、同年阿倍比羅夫を派遣して水軍一八〇艘をもつて遠く蝦夷を征討(六五八—六六〇)させ、さらに肅清(註・蝦夷以外の北方民族を指す)を討つて、大和民族の勢

威は北方に強く及んだ。そのあと、朝鮮半島では、百濟が新羅に攻められ、救援を求めてきた(六六〇)のに対し、御高齡の女帝であられながらも、大化改新後の困難な対外政策に御身をもつて当られることとなり、中大兄皇子をはじめ、群臣を率ゐて新羅征討軍を起して御親征になられたが、途中、九州の朝倉宮(福岡県)に御駐留の折、御病気で崩御せられた。

(御陵墓は、奈良県高市郡高取町にあり、越智岡上陵〔円墳〕と申し上げる。)

齊明天皇四年(六五八)五月に、皇孫建王、年八歳にして薨せましぬ。今城谷の上に、殯を起てて収む。天皇、本より皇孫の有順なるを以て、器重めたまふ。故、不忍哀したまひ、傷み慟ひたまふこと極めて甚なり。群臣たち、詔して曰はく、「萬歳千秋の後に、要す朕が陵に合せ葬れ」とのたまふ。廻ち作歌して曰はく、

其一

今城なる小丘が上に雲だにも著くし立たば何か歎かむ

其二

射ゆ鹿猪を認ぐ川上の若草の若くありきと吾が思はなくに

其三

飛鳥川漲ひつつ行く水の間も無くも思ほゆるかも

天皇、時に唱ひたまひて悲哭す。同四年冬十月、紀温湯に幸す。天皇、皇孫建王を憶てて、愴爾み悲泣

其一

山越えて海渡るともおもしろき今城の中は忘らゆましじ

其二

水門の潮のくんだり海くんだり後も暗に置きてか行かむ

其三

愛しき吾が若き子を置きてか行かむ

秦大藏造萬里に詔して曰はく、「斯の歌を傳へて、世に忘らしむること勿れ」とのたまふ。(以上、日本書

崗本天皇(註・皇極)齊明天皇(註・天孫)のことであるが、夫君であられた舒明天皇といふ説もあるの御製一首并に短歌

神代より 生れあ繼つぎ來くれば 人多ひとに 國くにには満みちて あぢ群むらの 去來かよひは行いけど わが戀こふる 君きみに
しあらねば 晝ひるは 日ひの暮くるるまで 夜よるは 夜よの明あくる極きはみ 思おもひつつ 眠いも寢ねがてにと 明あしつ
らくも 長ながきこの夜よを

反歌

山の端はにあぢ群むら騒さわぎ行いくなれどわれはさぶしゑ君きみにしあらねば
淡海路あふみぢの鳥籠とこの山やまなる不知い哉さ川が日ひのころころは戀こひつつもあらむ(以上、萬葉集、卷第四)

孝徳天皇（第三十六代）

御在世 五九六—六五四（崩御・五十九歳）

御在位 六四五—六五四（五十歳—五十九歳）

孝徳天皇は、第三十五代・女帝・皇極天皇（齊明天皇）の御弟に当られる。この御代に中大兄皇子が皇太子として大化改新を断行せられ（六四五）、「改新の詔」の宣布（六四六）によって、新たに百官をおかれることになった。さらに、冠位十九階を制定し（六四九）、班田収授法を施行（六五二）せられるなど、内政の整備が展開した時代である。しかし晩年は、次の御歌にも見られるやうに、悲痛な御心境のまま、その御生涯を終へられたやうである。

（御陵墓は、大阪府南河内郡太子町にあり、大阪磯長陵〔円墳〕と申し上げる。）

白雉四年（六五三）是歲、太子（中大兄皇子）、奏請して曰さく、「冀はくは倭の京に遷らむ」とまをす。天皇、許したまはず。皇太子、乃ち皇祖母尊（註・皇極天皇）・間人皇后（註・孝徳天皇の皇后・中大兄皇子の御妹）を奉り、并て皇弟等を率て、……公・卿・百官の人等、皆隨ひて遷る。是に由りて、天皇、恨みて国位を捨りたまはむと欲して、宮を山崎に造らしめたまふ。乃ち歌を間人皇后に送りて曰はく、

鉗着け吾が飼ふ駒は引出せず吾が飼ふ駒を人見つらむか（* 鉗||馬が逃げないやうに首にはめておく木）

（日本書紀、卷第二十五）

天智天皇 (第三十八代)

御在世 (一説あり) 〔六一四〕 六七二 (崩御・四十六歳)
御在位 六六一—六七二 (または五十八歳) (三十六歳) (四十六歳または四十八歳) (五十八歳)

(皇太子として六四五年から政治を御担当)

天智天皇は、第三十四代・舒明天皇(皇極・齊明天皇の御夫君であられた方)の第二皇子。天皇は皇太子中大兄皇子として、早くから藤原鎌足を信頼され御政務を御担当せられた。孝徳天皇と齊明天皇の皇太子として「大化の改新」の政治を進められたが、齊明天皇が亡くなられた後、皇位におつきになる前のいはゆる「称制時代」に、朝鮮半島における日本の勢力は、決定的な後退を餘儀なくさせられた。即ち半島西南部の白村江(後の錦江)における戦で、百濟救援のためのわが軍が唐と新羅との連合軍のために完敗(六六三)の憂き目に遭ひ、これで百濟は滅亡し、半島におけるわが国の経営方策は全く挫折するに至ったのである。

顧みると、任那日本府滅亡(五六二)から、白村江の戦までの約百年間、歴代天皇は「任那再興」を次々に御遺言なされ、その達成を悲願として継承せられたが、この白村江の敗戦を境にして、任那再興の願ひは、遂に断念せられることになる。かくて、大和朝廷の政治の関心は、この天智天皇以降、もっぱら内政中心へと移行することになった。六六七年に、都を難波から近江の天津の宮に遷されたが、御即位の年の六六八年に「近江令」(民法典、行政法典と見なすべきもの)が完成、戸籍としての「庚午年籍」は、その二年後に設定された。

(御陵墓は、京都市東山区にあり、山科陵〔上円下方〕と申し上げる。近代になって昭和十三年、大津の近江神宮に祀る。)

冬十月、天皇(註・先帝、齊明天皇)の喪掃りて海に就きき。ここに皇太子(註・中大兄皇子、後の天智天皇)一所に泊て、天皇を哀慕びたてまつりたまひ、すなわち口號ひたまひしく、

君が目の戀しきからに泊て居てかくや戀ひむも君が目を欲り(日本書紀、卷第二十六)

皇太子の時、題知らず

わたつみの豊旗雲に入日さし今夜の月夜まさやかにこそ

中大兄の三山の歌

香具山は 敵火を愛しと 耳梨と あひあらそひき 神代より かくなるらし いにしへも 然な
れこそ うつせみも 妻を あらそふらしき

(右の) 反歌

香具山と耳梨山とあひし時立ちて見に來し印南國原(以上、萬葉集、卷第二)

天武天皇 (第四十代)

御在世 六三二—六八六 (崩御・六十五歳)
御在位 六七三—六八六 (五十二歳—六十五歳)

天武天皇は、第三十四代・舒明天皇の第三皇子で、第三十八代・天智天皇の御実弟であられ、母君は同じく第三十五代・女帝・皇極天皇 (齊明天皇)。壬申の乱 (六七二) を平定された後、大和の飛鳥淨御原宮で即位せられた。対外関係から内政に政治の重点が移った時期に、天智天皇のあとを継がれた天武天皇は、内政の諸秩序を鋭意ととのへられるかたはら、「国史編纂」といふ意義深い御事業にも意を注がれた。後になって (約三十年後) 第四十三代・元明天皇の御代に撰録される「古事記」は、実は天武天皇のこの御意向を反映したものであった。

すなはち「古事記」の「序文」には太安萬侶の記述によって次のやうに天武天皇の御志が記されてゐる。

「……是に天皇詔りたまひしく、『朕聞く、諸家の賣る帝紀及び本辞、既に正實に違ひ、多く虚偽を加ふと。今の時に當りて、其の失を改めずば、未だ幾年をも經ずして其の旨滅びなむとす。斯れ乃ち、邦家の經緯、王化の鴻基なり。故惟れ、帝紀を撰録し、舊辭を討覈して、偽りを削り實を定めて、後葉に流へむと欲ふ。』とのりたまひき。時に舍人有りき。姓は稗田、名は阿禮、年は是れ廿八。……」

この末尾にある名の稗田阿禮の誦習する所を、後に、太安萬侶が撰録して「古事記」

が出来上ったものである。

なほ、天皇の第三皇子・大津皇子は、幼少のころから文武に長じられ、天武十二年（六八三）には皇太子・草壁皇子に次ぐ地位にあって朝政に参画されたが、天皇崩御の直後、皇位継承問題の矢面に立たれることとなり、謀叛の嫌疑で捕へられ、磐余池のほとりて死を賜ふ（御自害）こととなった。

（御陵墓は、奈良県高市郡明日香村にあり、檜隈大内陵〔円墳〕と申し上げる。）

天皇の御製歌

み吉野の 耳我の嶺に 時なくそ 雪は降りける 間なくそ 雨は降りける その雪の 時なきが
如 その雨の 間なきが如 隈もおちはず 思ひつつぞ來し その山道を

天皇（註・天智天皇）、蒲生野に遊獵したまふ時、額田王（註・後の天智天皇の后）の作る歌「あかねさす
紫野行き標野行き野守は見ずや君が袖振る」に皇太子（註・後の天武天皇）の答へましし御歌（天智七年一六六
八）

紫草のにはへる妹を憎くあらば人妻ゆゑにわれ戀ひめやも（以上、萬葉集、卷第一）

天皇、藤原夫人（註・鎌足の娘、五百重娘）に賜ふ御歌一首

わが里に大雪降り大原の古りにし里に落らまくは後

〔参考〕 藤原夫人、和へ奉る歌一首「わが岡の霧に言ひて落らしめし雪の摧けし其処に散りけむ」（萬葉集、卷
第二）（* 霪Ⅱ山や水中に住んでゐて、雨雪をつかさどる蛇身の神、竜神をいふ）

持統天皇（第四十一代・女帝）

御在世 六四五—七〇二（崩御・五十八歳）
御在位 六八六—六九七（四十二歳—五十三歳）

持統天皇は、第三十八代・天智天皇の皇女であり、第四十代・天武天皇の皇后であられた方である。都を大和三山の中間の平地にある藤原京に遷された（六九四）。奈良近くの都であつて、奈良時代の黎明が間近くなる時代である。六八九年には飛鳥浄御原律令の最後の令二十二卷が施行され、六九〇年には、初めて支那（唐）のこよみ、元嘉曆・儀鳳曆を日本に採用された。ともに太陰曆であるが、七年後には、後者だけになつた。なほ、「萬葉集」において、柿本人麿が最も活躍して数々の名歌を残したのが、ほば持統天皇の御代を中心とした時代であつた。

（御陵墓は、夫君であられた天武天皇と御一緒である。なお御遺体を火葬申し上げた最初の天皇と伝へられる。）

天皇（註・天武天皇） 崩（註・後の持統天皇）の御作歌一首
やすみしし わご大君の 夕されば 見し給ふらし 明けくれば 問ひ給ふらし 神岳の 山の黄
葉を 今日もかも 問ひ給はまし 明日もかも 見し賜はまし その山を 振り放け見つつ 夕さ
れば あやに悲しび 明けくれば うらさび暮し 荒栲の 衣の袖は 乾る時もなし

一書に曰はく、天皇崩りましし時の太上天皇の御製歌二首

（* 持統天皇は御讓位の後、太上天皇の称号でお呼び申し上げた）

燃ゆる火も取りて裏みて袋には入ると言はずや面知らなくも

北山にたなびく雲の青雲の星離り行き月を離りて（以上、萬葉集、卷第二）

天皇の御製歌

春過ぎて夏來るらし白栴の衣乾したり天の香具山（萬葉集、卷第二）

天皇、志斐の姫に賜ふ御歌一首

不聽と言へど強ふる志斐のが強語このころ聞かずて朕戀ひにけり（萬葉集、卷第三）

元明天皇げんめいてんのう

(第四十三代・女帝)

御在世 六六一—七二二(崩御・六十一歳)

御在位 七〇七—七二五(四十七歳—五十五歳)

(以前は「げんみょうてんのう」と呼びならはされたが、昭和十五年八月宮内省の読法で「げんめい」とされたので、それに拠った)

元明天皇は、第三十八代・天智天皇の第四皇女であらせられる。奈良の都(平城京)に遷都(七一〇)せられた。後世から見て、この御代から第五十代・桓武天皇が京都府乙訓郡の長岡京に遷都(七八四)せられるまでを、奈良時代と称する。

御叔父君に当られる第四十代・天武天皇の御遺志を受け継がれて「古事記」を完成された。また、この頃になると、国内の鉱産資源の開発が進んで、関東の武蔵国秩父郡から熟銅が産出され、和銅(それまでは銅は外国から入っていたので、和銅の語が作られたのであらう)が献上され(七〇八)、年号も「和銅」と改正されるとともに、「和同開珎」が鑄造された。

(御陵墓は、奈良市奈良阪町にあり、奈保山東陵〔山形〕と申し上げる。)

御製

ますらをの鞆ともしの音ねすなりもののふの大おほまへつぎみ臣おみ楯たて立つらしも

〔参考〕

御名部皇女(元明天皇の同母姉)の和へ奉る御歌「我が大君おほみものな思おもはし皇神すめみかみの嗣つぎぎて賜たまへる吾われが無なけなくに」

和銅三年庚戌（七一〇）の春二月、藤原宮より寧樂宮に遷りましし時に、
御輿を長屋の原（奈良県、天理市のあたり）に停めて廻かに古郷を望みて詠みませる御歌
飛鳥の明日香の里を置きて去なば君があたりは見えずかもあらむ（以上、萬葉集、卷第一）

元正天皇げんしょうてんのう（第四十四代・女帝）

御在世 六八〇—七四八（崩御・六十九歳）
御在位 七二五—七二四（三十六歳—四十五歳）

元正天皇は、第四十代・天武天皇の御孫に当られ、第四十三代の女帝・元明天皇の皇女であられた。この御代に舍人親王が「日本書紀」を撰上してをられるが（七二〇）、この舍人親王は、天武天皇の皇子で元正天皇には叔父君に当る方であり、「日本書紀」編纂の主宰者であられた。天武天皇以来の国史編纂の御素志は、このやうにして受け継がれていった。なほ、「養老律令」（七一八）が出来たのも、この時代であった。

（御陵墓は、奈良市奈良阪町にあり、奈良山西陵〔山形〕と申し上げる。）

天平十五年（七四三）、次の聖武天皇の御代）、群臣を内裏に宴し、皇太子（註・後の孝謙天皇）、親ら五節を舞ひたまふ。右大臣 橋 宿禰諸兄、詔を奉じて太上天皇（註・元正天皇）に奏す。因りて御製歌に曰はく

そら見つ大和の國は神故し貴くあるらし此の舞みれば
天つ神皇孫の命の取り持ちて此の豊御酒を齋み 獻る（統日本紀）

山村に幸行しし時、先の太上天皇（註・元正天皇）の陪従の王臣に詔りたまはく、それ諸王卿等 和ふる歌を賦みて奏すべしとのりたまひて即ち御口號したまはく、

あしひきの山行きしかば山人の朕に得しめし山つとそこれ（*山つと山里のみやげ）

舍人親王の、詔に応へて和へ奉る歌一首「あしひきの山に行きけむ山人の心も知らず山人や誰」（萬葉集、卷

御製の歌一首（左大臣・橋卿の宅に在して肆とこのあかり・宴まじきこしめしし時）

橋たちばなのとのをの橋や彌やつ代にも吾あれは忘れじこの橋を（*とをの橋||たわむばかりに突つつた橋、左大臣・橋たちばな諸もろ兄もえを指

す）（萬葉集、卷第十八）

先の太上おほすみのらみこと天皇（註・元正天皇）の御製の霍公鳥ほととすの歌一首

霍公鳥ほととすなほも鳴かなむもとつ人かけつつもとな吾あを哭ねし泣くも（萬葉集、卷第二十）

（*もとつ人||昔なじみの人 * かけつ||心にかけて）

左大臣・長屋王（註・高市皇子の御子で、天武天皇の御孫。七二九年藤原氏の陰謀の犠牲となって薨去）の佐保の宅に聖武天皇、御在おほすのして肆とこのあかり・宴まじきこしめす。太上おほすみのらみこと天皇（註・元正天皇）の御製歌一首

はだすすき尾花おなはな逆さか葺かき黒木もち造れる室いへは萬代よろづよまでに（萬葉集、卷第八）

聖武天皇 (第四十五代)

御在世 七〇一—七五六(崩御・五十六歳)
御在位 七二四—七四九(二十四歳—四十九歳)

聖武天皇は、第四十二代・文武天皇(註・第四十代・天武天皇の御孫。草壁皇子の御子)の御長男であられた。この天皇の頃から、藤原氏の勢力が強大になり、他氏を排斥するきざしが出てくる。他方、支那東北地区の渤海国が、はじめてわが国に朝貢した(七二八)。聖武天皇の皇后・光明皇后(註・御父は藤原不比等)は、施薬院・悲田院(七三〇)を置かれ、病弱者・困窮者の救済に献身された。天皇は、「鎮護国家」の大御心から、「国分寺・国分尼寺建立の詔」を発せられ(七四一)、七四三年に「大佛鑄造の詔」を、七四五年には東大寺建立の発願をせられた。

「あをによし奈良の都は咲く花の薫ふがごとく今盛りなり」(小野老)とたたへられた天平時代は、聖武天皇を中心としたこの御代であり、山部赤人・大伴旅人・山上憶良らの歌人が輩出したのも、この時代であった。

(御陵墓は、奈良市法蓮町にあり、佐保山・南陵「山形」と申し上げる。)

天 皇の、酒を節度使の卿等(註・藤原房前・宇合ら)に賜ふ御歌一首。短歌を并せたり(天平四年—七三三)
遠の朝廷に 汝等し 斯く罷りなば 平けく 朕は遊ばむ 手抱きて 朕は御在さむ 天
食國の 皇朕が うづの御手以ち かき撫でそ 勞ぎたまふ うち撫でそ 勞ぎたまふ 還り來む日 相飲

まむ酒そ　この豊御酒は

(右の) 反歌一首

大夫の行くとふ道そおほろかに思ひて行くな大夫の伴(萬葉集、卷第一八)

天皇、酒人女王を思ひます御製歌一首

道にあひて咲まししからに降る雪の消なば消ぬがに戀ふとふ吾妹(萬葉集、卷第四)

遠江守櫻井王(註・天武天皇の曾孫)、天皇に「九月のその初雁の使にも思ふ心は聞え來ぬかも」と奉る。

天皇の賜へる報知の御歌一首

大の浦のその長濱に寄する波寛けく君を思ふこの頃

左大臣長屋王の佐保の宅に御在して肆宴きこしめす天皇の御製歌一首

あをによし奈良の山なる黒木もち造れる室は座せど飽かぬかも

天皇の御製歌一首

秋の田の穂田を雁が音聞けく夜に鳴き渡るかも

今朝の朝明雁が音寒く聞きしなべ野邊の浅茅そ色づきにける(以上、萬葉集、卷第八)

左大臣葛城王等に姓橘氏を賜ひし時の、御製歌一首(天平八年―七三六)

橘は實さへ花さへその葉さへ枝に霜降れどいや常葉の樹

左大臣橘朝臣の宅に在して、肆宴きこしめす時太上天皇(註・聖武天皇)の御歌(天平勝宝四年―七五二)

外にのみ見てはありしを今日見ては年に忘れず思ほえむかも(萬葉集、卷第十九)

孝謙天皇 (第四十六代・女帝)

御在世 七一八—七七〇(崩御・五十三歳)
御在位 七四九—七五八(三十二歳—四十一歳)

稱徳天皇 (第四十八代・女帝)

御在位 七六四—七七〇(四十七歳—五十三歳)

孝謙天皇は、第四十五代・聖武天皇の第二皇女であられた。中一代をおいて、前後二代の皇位につかれた女帝で、皇極・齊明(女帝)について、史上、二度目の御事である。重祚は、日本全史を通じて二回だけであり、二度とも女帝であられた。孝謙天皇の御代には、東大寺大佛殿竣工(七五二)、大佛開眼供養(七五二)、鑑眞の来朝(七五四)、「正倉院北倉」に聖武天皇の御遺品が光明皇太后によって収蔵された(七五六)などの事があつた。

なほ、我国最初の漢詩集「懷風藻」の成立が七五一年で、「萬葉集卷二十」にある防人の歌を大伴家持が集録したのは七五五年、ともに孝謙天皇の御代のことであつた。

しかし稱徳天皇として重祚せられた後には、道鏡をあまりにも重用されたため、道鏡が皇位を要求するといふ暴挙が発生、和氣清麻呂の忠誠によって危機一髪の危局回避がなされた(七六九)のもこの御代のことであつた。

(御陵墓は、奈良市山陵町にあり、高野陵〔前方後円〕と申し上げる。)

天平勝宝二年(七五〇)九月、従四位上高麗朝臣福信に勅して、難波に遣し、酒肴を入唐使藤原朝臣清河等に

賜ふ御歌一首。短歌を并せたり

そらみつ 大和の國は 水の上は 地行く如く 船の上は 床に坐る如く 大神の 鎮むる國そ
の船 船の舳並べ 平安けく 早渡り來て 返言 奏さむ日に 相飲まむ酒そ この豊御酒は
四

反歌一首

四の船はや還り來と白香著け朕が裳の裾に鎖ひて待たむ（以上、萬葉集、卷第十九）

（* 白香 || 麻や楮の類を細かく裂いて白髪の様にして神事に使ったもの * 鎖ひて || 身をつゝしんで）

淳仁天皇じゆんにん てんのう（第四十七代）

御在世 七三三—七六五（崩御・三十三歳）

御在位 七五八—七六四（二十六歳—三十二歳）

淳仁天皇は、第四十代・天武天皇の御子の舍人親王とねりの第七皇子。すなはち天武天皇の皇孫。天皇は女帝の孝謙・稱徳天皇（同じ御方）重祚ちゆうそくのあひだで皇位につかれたが、道鏡の勢力と対決してゐた藤原仲麿なかざら（惠美押勝と称し、後太政大臣に相当する大師といふ地位にいた）の反道鏡政争が失敗し、仲麿が妻子もろとも斬罪に処せられると共に、淳仁天皇は、道鏡のために、淡路島に流されるといふ悲劇が起り（七六四）、配流先で翌年、崩御せられた。

なほ、淳仁天皇の御代、天平宝字三年—七五九年—正月一日、大伴家持が一首の歌を残してゐるが、これが「萬葉集」における最後の歌となつてゐる。

（御陵墓は、兵庫県三原郡南淡町にあり、淡路陵〔山形〕と申し上げる。）

天平宝字元年（七五七）十一月十八日、内裏にして肆とりのあかり宴まじりきこしめす歌二首のうち、皇太子みろこのみこ（註・淳仁天皇）の御歌

天地を照らす日月の極きはみ無くあるべきものを何をか思はむ（萬葉集、卷第二十）

中

古

(平安時代) (七八一～一一八三)

第五十代・桓武天皇～第八十一代・安德天皇

桓武天皇（第五十代）

御在世 七三七—八〇六（崩御・七十歳）

御在位 七八一—八〇六（四十五歳—七十歳）

桓武天皇は、第四十九代・光仁天皇の第一皇子。御年四十五歳で皇位につかれた天皇は、その後二十六年にわたり在位せられた。はじめ首都を、京都に近い山背（山城）の長岡京に遷され（七八七）、のち京都（平安京）に遷された（七九四）。これが「平安時代」のはじまりである。内政においては、坂上田村麿が「征夷大將軍」（註・これがわが国における「征夷大將軍」の称号のはじまり）に任ぜられて（七九七）、蝦夷を平定した（八〇一）。外交面では、七九五年に渤海国に使を派遣する事があつた。

また、佛教に対する天皇の御信仰は篤く、七八三年には、私に佛寺を造ることを禁止されると共に、最澄（傳教大師）・空海（弘法大師）を重んぜられた。最澄は比叡山に延暦寺を創建（七八八）し、空海とともに支那（唐）に渡つた（八〇四）。翌八〇五年、最澄は帰国して天台宗を伝へ、空海は一年おくれて、八〇六年（桓武天皇崩御後、平城天皇に代られてから）に帰国して眞言宗を伝へた。

（御陵墓は、京都市伏見区桃山町にあり、柏原陵〔円墳〕と申し上げる。また、後世、明治一十八年—一八九五—に、桓武天皇の平安養都千百年を記念して創建せられた平安神宮には、桓武天皇が祀られてある。）

延暦十五年（七九六）四月丙寅の曲宴（註・天皇が宮中で臣下に宴を賜ふこと）に歌ひたまはく

今朝の朝明汝をといひつる時鳥今も鳴かぬか人の聞くべく

延暦十六年（七九七）冬十月癸亥、曲宴に酒酣にして歌ひたまはく

此の頃の時雨の雨に菊の花ちりぞしぬべきあたらしその香を

延暦十七年（七九八）八月庚寅、北野に遊獵して、便伊豫親王（註・桓武天皇の第四皇子）の山荘に御し、飲酒高会
したまひ、時に日暮る。天皇歌ひたまはく

今朝の朝け鳴くちふ鹿の其の聲を聞かずばいかじ夜は更けぬとも（以上、類聚国史）

延暦二十年（八〇二）春正月丁酉、曲宴あり、是の日雪ふり、上歌ひたまはく

梅の花こひつつをれば降る雪を花かも散ると思ひつるかも

延暦二十二年（八〇三）三月庚辰（二十九日）、遣唐大使葛野麿・副使石川道益に、餞を賜ひ、宴設の事、一に漢
法に依る。酒酣にして上、葛野麿を御床の下に喚びて酒を賜ひて歌ひたまはく

此の酒はおほにはあらず平かに歸り來ませといはひたる酒

葛野麿、涕涙雨の如し。宴に侍る群臣流涕せざるはなし（以上、日本紀略）

平城天皇（第五十一代）

御在世 七七四—八二四（崩御・五十一歳）

御在位 八〇六—八〇九（三十三歳—三十六歳）

平城天皇は、第五十代・桓武天皇の第一皇子。御在位は、御病気のため早く讓位されたので短かかったが、参議の廃止や觀察使の設置などのことがあり、「奈良の帝」とも申し上げる。御退位の後、「薬子の変」（寵愛なきった藤原薬子の兄、仲成をも重用されたことから、この兄妹が天皇の重祚を計画して失敗）が起り、藤原閥族間の闘争の渦の中で、悲劇的な御生涯を終へられた。弘仁十二年（八二二）、御年四十八歳の時に、空海から灌頂（註・佛弟子が一定の地位に進む儀式）を受けられた。（御陵墓は、奈良市佐紀町にあり、楊梅陵〔円墳〕と申し上げる。）

「奈良御集」から

故郷となりにし奈良のみやこにも色はかはらず花さきにけり
そめなくに我に移れる妹が香のゆら／＼こゝにこゝら匂へる
人こそはさはに多かれ息のをにあやしくのれる妹にもある哉
片戀に死にするものにしあらませば千度ぞ我は死に返らまし

大同二年（八〇七）九月乙巳、神皇苑に幸し、時、女之（註・御弟君、後の嵯峨天皇）に和して歌ひたまはく
折る人の心のまにまふぢばかまうべ色深く匂ひたりけり（日本逸史）

嵯峨天皇 (第五十二代)

御在世 七八六—八四二 (崩御・五十七歳)
御在位 八〇九—八二三 (二十四歳—三十八歳)

嵯峨天皇は、第五十代・桓武天皇の第二皇子で、第五十一代・平城天皇の御弟君。天皇御治世のはじめには「薬子の変」などがあったが、政情不安の時であったが、後、天皇の御努力によって、その波も治まり、平安初期における文化の隆盛期を迎へた。天皇は、漢詩に秀でてをられ「凌雲集」などを撰ばしめられた他、書を良くせられ、空海・橘逸勢と共にわが国三筆の一人と称せられる。

内政においては、御即位間もなく「藏人所」を置き(八一〇)、重要文書を取扱はせられ、検非違使を置いて(八一六ごろ)、京都周辺の治安維持に当らせられた。なほ、八一年には渤海国から来貢の挨拶使が来てをり、八一六年には空海が高野山に金剛峯寺を創建してゐる。

(御陵墓は、京都市右京区北嵯峨朝原山町にあり、嵯峨山上陵〔円墳〕と申し上げる。)

大同二年(八〇七)九月乙巳、(御兄君にあたる平城天皇が)神泉苑に幸しし時皇太弟(註・後の嵯峨天皇)頌歌して云はく

宮人の其の香に愛づるふぢばかま君のおは物手折りたる今日

弘仁四年(八一三)夏四月甲辰、皇太弟(註・次の第五十三代・淳和天皇)南池に幸し、文人に命じて詩を賦せしめたまふ。天皇和して曰はく

時鳥鳴く聲聞けば歌主とともに千代にと我も聞きたり(以上、日本逸史)

陽成天皇 (第五十七代)

御在世 八六八—九四九(崩御・八十二歳)
御在位 八七六—八八四(九歳—十七歳)

陽成天皇は、第五十六代・清和天皇の第一皇子。第五十五代・文德天皇、第五十六代・清和天皇には、御歌は伝はっていない。たとえ解説を附すれば、藤原良房が文德天皇の御代に太政大臣となり、清和天皇の御代八六六年に攝政に任ぜられて、人臣で攝政の実を行なった者のはじめとなった。

また、第五十六代・清和天皇の御代には、八七三年に、皇子・皇女に「源氏」の姓を賜はったが、後に強大な勢力に発展して行つたいはゆる「清和源氏」は、ここにはじまるのである。なほ、在原業平をはじめ、いはゆる六歌仙が活躍したのも、この時代であった。

陽成天皇の御代には、勅撰の歴史書である「六國史」の一つである「日本文德天皇實錄」(略して「文德實錄」)が、藤原基經らの撰によって成った。

(御陵墓は、京都市左京区浄土寺真如町にあり、神樂岡東陵〔八角墳〕と申し上げる。)

釣殿のみこに遣はしける

筑波嶺のみねより落つるみな
の川戀ぞつもりて淵となりける
(後撰集)

光孝天皇 (第五十八代)

御在世 八三〇—八八七 (崩御・五十八歳)
御在位 八八四—八八七 (五十五歳—五十八歳)

光孝天皇は、第五十四代・仁明天皇の第三皇子。第五十七代・陽成天皇の御代に攝政に任ぜられた(八七〇)藤原基経は、その後、專横をきはめ、遂に陽成天皇を廢して光孝天皇を皇位につけまつるといふ專断を強行し、そのあと基経は、百官に命じて、天皇への政事の奏上に先立って、自分に先にその内容を稟申(申し上げること)することを命じた(八八四)。この藤原基経は、次の宇多天皇が即位せられるや、史上はじめて人臣最初の「関白」に任ぜられる詔を受け(八八七)、死後は昭宣公と諡されるが、まさに日本史上、天皇を私に利用した典型の一例といふべき人物であらう。なほ、古義眞言宗の御室派大本山である仁和寺は、この光孝天皇の勅願によって着工(八八〇)、次の宇多天皇の御代に落成した(八八八)ものである。

(御陵墓は、京都市右京区宇多野馬場町にあり、後田邑陵〔円墳〕と申し上げる。)

まだみこにおはしましけるに(註・皇位につかれる前の意)若菜人にたまふとて
君がため春の野に出て若菜つむ我が衣手に雪はふりつつ

更衣(註・女官の一つ、女御に次ぐもの)さとよりまゐりたりけるあした

梅の花ちりぬる迄に見えざりし人と今朝はうぐひすぞ鳴く

おなじ人にたまふ

山ざくら立ちのみかくす春霞いつしかはれて見るよしもがな

更衣うい久しくまゐらぬに御文みふみたまはせけるに

君がせぬわが手枕たまくらはくさなれやなみだの露のよなくにおく

また

跡たえて戀しきときのつれづれは面影にこそはなれざりけれ

ひさしくもなりにけるかな秋萩の古枝ふるえの花は散りすぎにけり（以上、仁和御集）

仁和にんなの御時、僧正そうじょう遍昭へんしょうに七十賀ななそひたまひける時（八八五）の御歌

かくしつゝとにもかくにもながらへて君が八千代に逢あふよしもがな（古今集）

戀の御歌の中に

逢はずして經たるころほひのあまたあれば遙とほけき空にながめをぞする（新古今集）

宇多天皇 (第五十九代)

御在世 八六七—九三一(崩御・六十五歳)
御在位 八八七—八九七(二十一歳—三十一歳)

宇多天皇は、第五十八代・光孝天皇の第七皇子。天皇は、攝関政治といふ時代の潮流の中にあられて、政治の刷新に御心を傾けられ、後世の人々から「寛平の治」とたたへられた方である。また御譲位の折、第一皇子で次の天皇になられる十三歳の醍醐天皇にお与へになった御言葉は、「寛平御遺誠」として、後世長く、歴代の天皇がたにとつても、治世の御指針となったものである。

忠誠の人、菅原道真もこの時代の人で、藤原氏を抑へるために重く用ひられ、藏人頭に任ぜられ(八九二)、翌年(八九三)、「類聚国史」を撰した。また、道真は遣唐使に任ぜられたが(八九四)、建議して、奈良時代から続いた遣唐使を廃止に至らしめた。この御代にも渤海国から来貢があった(八九四)。

宇多天皇のこの御代に、第五十代・桓武天皇の曾孫に当る高望王に「平氏の姓」を賜ふ(八八九)。高望王は上総介に任ぜられ、以後その地に土着して、強大な関東平氏の基礎を築いた(この高望王を、桓武平氏の祖といふ)。

(御陵墓は、京都市右京区鳴滝宇多野谷にあり、大内山陵「方形」と申し上げる)。

題しらず

世の中をいづかたにかはうらむ人こそあさき心なるらめ

あま雲のそらのよそにも偽りのあるものとだに知る人のなき

人にたまはせける

人しれず心のうちのくるしきは思ひしことのたがふなりけり

おりさせ（註・皇位を）給はむとてのころ、伊勢が弘徽殿の壁に「わかるれどあひもをしまぬもよしきを見ざらむ事やなにか悲しき」と書きつけたりけるを後に御覽じて壁にかゝせたまうける

身一にあらぬばかりをおしなべて行廻りてもなどか見ざらむ（*身一にあらぬばかりを||次の天皇が位におつ

きになるのだから）（以上、寛平御集）

尹子内親王賀茂の齋院におはしましける時、菊の花につけて奉らせ給ひける（*齋院||賀茂神社に奉仕する未婚

の皇女）

行きて見ぬ人のためにとおもはずは誰か折らまし庭の白菊（統古今集）

亭子院の歌合に、左方にうへの御心（註・大御心）よせありとて、右の頭の女七のみこ恨み給ふよし聞しめして

立ちかへり千鳥なくなり濱木綿の心へだてゝ思ふものは（新拾遺集）

醍醐天皇 (第六十代)

御在世 八八五—九三〇 (崩御・四十六歳)
御在位 八九七—九三〇 (十三歳—四十六歳)

醍醐天皇は、第五十九代・宇多天皇の第一皇子。後世「延喜の治」といはれ、律令政治が最後の光をはなつて天皇親政が積極的になされた時代であるが、はじめはさうではなかった。さきの宇多天皇は、菅原道真を用ひて、藤原基經の専横にくさびをおいれに なつたが、醍醐天皇の御代になると、藤原基經の子、藤原時平が、天皇の御幼少なるを利用して再び政權を握るやうになり、即位後二年目(八九九)には、時平は自ら左大臣・兼近衛大将となり、道真を右大臣とする。そしてさらに二年後(九〇二)には、遂に天皇に中傷して道真を大宰権帥に左遷追放してしまひ、藤原氏の地位の確保を狙つた。道真は、九州太宰府で、二年後(九〇三)歿するが、その忠誠は、以後長く人びとの心に残り、天満宮に祀られることゝなつた。

なほ、醍醐天皇の御代には、紀貫之等が「古今和歌集」を撰して上つた(九〇五)。九二七年には「延喜式」が完成、その後の政治の大きなよりどころとなつた。また、能書家、小野道風がでたのも、天皇の御晩年で、天皇は、崩御の二年前(九二八)に、小野道風をして、聖賢の言行を清涼殿(天皇の御居所)において書せしめられた。

(御陵墓は、京都市伏見区醍醐古道町にあり、後、山科陵〔円形〕と申し上げる。)

うへのをのことも菊合し侍りけるついでに(＊うへのをのこ殿上人) * 菊合し平安時代の遊戯で、人数を左右

しぐれつゝかれゆく野邊の花なれど霜のまがきに匂ふ色かな
に分け、双方から歌をつけた菊花を出して優劣をきそつた)

近江の更衣につかはしける

はかなくも明けにける哉朝露のおきての後ぞ消えまさりける (以上、新古今集)

恋の御歌の中に

あかでのみ経ればなりけり逢はぬ夜も逢ふ夜も人を哀とぞ思ふ

しぐれつゝいろまさりゆく草よりも人の心ぞかれにけらしな (以上、新勅撰集)

亭子院の歌合に

春風の吹かぬ世にだにあらませば心のどかにはなは見てまし

水底に春やくるらむ三吉野のよしのゝかはにかはづ鳴くなり (統後撰集)

残菊のこゝろを

散り果てゝ花なき時の菊なればうつろふ色の惜しくもあるかな

延長元年(九三三)三月、文彦太子の事を歎き給ひてよませ給ひける

春ふかきみやまざくらも散りぬれば世を驚のなかぬ日ぞなき (以上、続古今集)

(* 文彦太子 第一皇子。延喜三年(九〇三)御誕生、翌年皇太子にお立ちになり、同十一年、御名を保明親王と改められた。御歳二十一で御病氣のため薨去。御奉葬後、「文献珍命」と諡し奉る)

天曆のみかど (註・第六十二代・村上天皇) 生れさせ給ひて (延長四年—九二二) 御百日の夜参議伊衡「日を月にこよひぞかふる今よりや百とせまでの月かげも見む」とよみ侍りけるに御返し

祝ひつる言靈ならば百年の後もつきせぬ月をこそ見ぬ (玉葉集)

朱雀天皇 (第六十一代)

御在世 九三三—九五二 (崩御・三十歳)
御在位 九三〇—九四六 (八歳—二十四歳)

朱雀天皇は、第六十代・醍醐天皇の第十一皇子。この御代には、京都にも盗賊多く、また海上では南海に海賊が横行するので (九三三)、翌九三四年には「追捕海賊使」がはじめて設けられた。はじめ臨時の官であったが、「追捕使」は後に常置されて莊園や神社にも置かれ、約八十年後になると、源頼朝が勅許を得て諸国に「総追捕使」を置くやうになり、これが「守護」といはれるものになっていった。また、この御代には、東国で平将門の叛乱「承平の乱」(九三五)、西国で藤原純友の叛乱「天慶の乱」(九三九)があり、それ／＼一、二年後に平定された。

なほ、紀貫之が「土佐日記」(九三五)を出してをり、僧・空也は、はじめて念佛を唱へて諸国を巡歴し(九三八)、民間に念佛が盛んになった。

(御陵墓は、京都市伏見区醍醐御陵東裏町にあり、醍醐陵〔平墳〕と申し上げる。)

女御恩子女王かくれて後よませ給うける

獨寝にありし昔のおもほえて猶なき床をもとめつるかな (玉葉集)

梅花をよませ給うける

梅の花咲けるあたりをゆきすぎてむかしの人の香をば尋ねむ (統後拾遺集)

東宮ひつぎのみこ（註・次の村上天皇）に国ゆづらせ給ひける日、大后おほきさきの宮に奉らせ給うける。

（* 大后の宮に朱雀天皇の御母。醍醐天皇の皇后）

日の光出でそふけふのしらるゝはあまべいづれの方の山邊やまべなるらむ

（* しらるゝはに大鏡には「しぐるるは」に作る）

村上天皇（第六十二代）

御在世 九二六—九六七（崩御・四十二歳）
御在位 九四六—九六七（二十一歳—四十二歳）

村上天皇は、第六十代・醍醐天皇の第十四皇子。攝政・藤原忠平の死（九四九）後、村上天皇は攝政・関白を置かれず、御自分で政務をとられ、天曆八年（九五五）には、菅原文時ほか諸臣から政事所見を求められるなど、後世から「天曆の治」とたゞへられるやうに、政治史・文化史上の一時期を劃すことになった。九五一年には、宮中に「和歌所」を設けられ、源順ら「梨壺の五人」が定められて、「後撰和歌集」が撰ばれたが、また一方では、「萬葉集」に訓点が施されるなどがあった。九六四年には、紫宸殿（天皇が公務をなさる御殿）の南階の下、西側に橋を植ゑられ、翌九六五年には、同じ階の下、東側に櫻を植ゑられた。これが「右近の橋・左近の櫻」のはじめとなった。また、第五十六代・清和天皇の御孫、經基王（九一七—九六一）に「源氏の姓」を賜はり、これが「村上源氏」の始祖となる。

（御陵墓は、京都市右京区鳴滝字多野谷にあり、村上陵〔円墳〕と申し上げる。）

いまだ帥のみこ（註・大宰府長官の職にあられたときの皇子、御歳十八か九）と聞えしとき、太政大臣・眞信公（註・藤原忠平）の家にわたりおはしまして、帰らせたまふ御贈物に、御本奉るとて眞信公の「君がためいばふ心の深ければ聖の御代の跡ならへとぞ」とよみて奉りけるに御返し

教へおくことたがはずばゆくすゑの道遠くとも跡はまどはじ（後撰集）

女御藤原述子かくれ侍りにける頃、初雪を御覽じて

降る程もなくて消えぬる白雪は人によそへてかなしかりけり（以上、統後撰集）

八月十五日夜月の宴させ給ひけるに

月ごとに見る月なれどこの月のこよひの月に似る月ぞなき

女御まうのぼり給へとありける夜、なやましきとてさも侍らざりければ、又の日たまはせける

寐られねば夢にもみえず春の夜を明しかねつる身こそつらけれ（以上、統古今集）

弘徽殿の女御うせて後、雪のふるを御覽じて

ふるからにとまらず消ゆる雪よりもはかなき人を何にたとへむ（玉葉集）

天曆四年三月十四日藤壺にわたらせ給ひて花惜しませ給ひけるに

圓居して見れどもあかぬ藤浪のたたまく惜しき今日にもある哉（新古今集）（*たたまく||座を立つことが）

冷泉天皇 (第六十三代)

御在世 九五〇—一〇二一 (崩御・六十二歳)
御在位 九六七—九六九 (十八歳—二十歳)

冷泉天皇は、第六十二代・村上天皇の第二皇子。村上天皇が崩ぜられて踐祚なさったが、その時御歳十八、二年後の二十歳で御譲位せられ、あと六十二歳までの御生涯がある。その時御歳十八、二年後の二十歳で御譲位せられ、あと六十二歳までの御生涯がある。すなはち、天皇御親政の村上天皇が崩ぜられ、お若い冷泉天皇が踐祚されると、御即位式をなさる前に、藤原實頼が関白になってしまふ。そして、藤原氏が企てた「安和の変(九六九)」によって源高明(註・醍醐天皇の皇子)を失脚せしめるなど、他氏排斥を達成し、冷泉天皇の御譲位となる。以後、藤原氏の全盛時代が到来することになるのである。

(御陵墓は、京都市左京区鹿ヶ谷法然院町にあり、櫻本陵〔円墳〕と申し上げる。)

花山のみかど(註・冷泉天皇第一皇子)より、たかむな(註・竹の子) 奉らせたまふときの御歌の御かへし
年へぬる竹のよはひを返してもこのよを長くなさむとぞ思ふ(詞花集)

藤原助信朝臣、備中守になりてくだりけるに、承香殿より扇幣など給はせけるよし聞しめして

(*) 承香殿 || 平安京内裏十七殿告の一、内宴や御遊などの行はれる所、ここではそこををられた妃)

我にあらぬ人の手向くる幣なれど祈りぞ添ふる疾くかへれとて（続新古今集）

清涼殿の庭に植ゑたまへりける菊を、位さり給ひて後おぼしいでて

うつろふはこゝろのほかの秋なれば今はよそにぞ菊（菊）の上の露（新古今集）

（*こころのほかの秋なれば心ならずものことだったので）

圓融天皇（第六十四代）

御在世 九五九—九九一（崩御・三十三歳）
御在位 九六九—九八四（十一歳—二十六歳）

圓融天皇は、第六十二代・村上天皇の第五皇子。「安和の変」（九六九）といふ藤原氏の他氏排斥によって、第六十三代・冷泉天皇が御歳二十で御讓位になつたあと、この圓融天皇は、御歳十一で御即位、御歳二十六で御讓位になられる。幼帝・若帝を擁して、政治を私する藤原氏の専横が、よくうかゞはれるといふべきか。攝政、藤原實頼の死（九七〇）のあと、藤原伊尹がその職を継ぎ、ついでその死（九七二）後、藤原兼通が関白、その死（九七八）後、藤原頼忠がこれを継ぐ、といふ目まぐるしいほどの早さで、攝関が独占され続けた。このころ、右大將・道綱の母（註・藤原兼家の妻）の手になる「蜻蛉日記」が成立してゐる。

（御陵墓は、京都市右京区鳴滝字多野谷にあり、後、村上陵〔円墳〕と申し上げる。）

堀河の中宮おそくまゐらせ給ひけるに

大方おほかたの春はきぬるにいかねればした待つ花のおそく咲くらむ（玉葉集）

堀河の中宮かくれ給ひて、わざの事はてゝのあしたにませ給ひける（*わざの事〓法会、こゝでは御とむらひのこと。中宮がなくなられたのは、天元二年（九七九）で天皇は御歳二十一であられた）
おもひかねながめしかども鳥部山とりべやまはては煙も見えずなりにき（詞花集）

二品尊子内親王の御かたより堀河の中宮おはしまさでのち「亀の上の山」（註・蓬萊山、不老不死の薬のある所）

をたづねし人よりも空に恋ふらむ君をこそ思へ」とよみて奉らせ給ひけるに御返し

尋ぬべき方だにもなきわかれには心をいづちやらむとぞ思ふ（統古今集）

加賀乳母、紀伊の国へくだりける時、餞たまはずとて

朝夕に馴れ見しことをおもひ出でよ吹上の濱の風につけても（新千載集）

天延三年（九七五）十一月六日、殿上にて、宇佐の使の餞を給ふとてよませ給うける

萬代をいのりにたつる使をばわかれもいたく惜しまざらなむ（統古今集）

位さりたまひてのち、實方朝臣、馬命婦と物語りし侍りけるときに、山吹の花を屏風の上よりなげこし給ひて侍りければ、實方朝臣「八重ながら色もかはらぬ山吹のなどこゝのへに咲かずなりにし」とよみて侍りけるに御かへし

九重にあらで八重咲くやまぶきのいはぬ色をばしる人もなし（*いはぬ色〓山吹は、くちなし色であるから

これを言はぬ色と言った。ここでは宮中を離れた私の心、の意）（新古今集）

雑の御歌の中に

光さす雲の上のみこひしくてかけはなるべきこゝちだにせず（新後拾遺集）

花か山さん天てん皇おう
(第六十五代)

御在世 九六八—一〇〇八(崩御・四十一歳)

御在位 九八四—九八六(十七歳—十九歳)

花山天皇は、第六十三代・冷泉天皇の第一皇子。十七歳で御即位せられたが、わづか一年十ヶ月を平安京で御在位せられただけで、藤原兼家の謀略にかゝり、十九歳で寛和二年(九八六)御讓位となる。その翌日、御出家せられ、入いり覺かくと号せられた。その後諸國に旅を重ねつゝ生涯を終られたやうである。まことに御痛いたしいことであつた。兼家は天皇御讓位後、直ちに攝政になり、そのあとで一い條天皇が御歳七つで即位せられたことも見落してはなるまい。花山天皇は、和歌をよくせられ、歌集「花山院御集」が残されてゐる。また、僧、源信が「往生要集」をあらはしたのは、花山天皇の御在位中の寛和元年(九八五)であつた。

(御陵墓は、京都市北区衣笠北高橋町にあり、紙屋上かみやのぼりのみまき陵〔田墳〕と申し上げる。)

きりぎりすの近くなきけるをよませ給うける

秋あきふかくなりなりにけらしな蟋蟀せむしゆかのあたりあたりにこゑきこゆなり

三身如来を觀する心をよませ給うける(*三身如来は佛の三つの姿。法身・應身・報身をいふ)

世の中はみな佛なりおしなべていづれの物とわくぞはかなき(以上、千載集)

みこたちを冷泉院(註・御父)の親王になして後よませたまひける

思ふこと今はなきかな撫子の花さくばかりなりぬとおもへば

書写のひじりに逢ひに、播磨國におはしまして明石といふ所の月を御覽して（*書写のひじり||性空上人のこと、兵庫の書写山に留まる。）

月かげは旅の空とてかはらねどなほみやこのみ戀しきやなぞ（以上、後拾遺集）

修行しありかせ給ひけるに、桜の花の咲きたりける下にやすみ給ひてよませ給ひける

木のもとを住家とすればおのづから花見る人になりぬべきかな

寛和二年（九八六）内裏の歌合によませ給ひける

秋の夜の月に心のあくがれてくもぬにもものをおもふころかな（以上、詞花集）

九月ついたちがたに

秋の夜ははや長月になりにけりことわりなれや寐覺めせらるゝ

夏の御歌の中に

なにゆゑにしのおなるらむ郭公聲たてぬ音はくるしきものを（以上、統古今集）

夢

長き世のはじめをはりも知らぬまに幾世の事を夢に見つらむ（統拾遺集）

東院の桜を御覽して

世の中のうきもつらきも慰めて花のさかりはうれしかりけり

世を捨てむとおぼしめしける頃、三條関白の女の女御のもとに遺させ給ひける

世の中をはかなき物と思ふにもまづ思出づる君にもあるかな

物思ふ由きかせ給ふ人に

わが身には苦しき事も知りぬれば物思ふ人のあはれなるかな

雑の御歌の中に

つくづくとあかしくらして年月を遂にはいかゞ數へなすべき

歎くともいふともかひはあらじ世を夢の如くに思ひなしけむ

修行せさせ給ひける時、「みくにのわたり」といふ所にとゞまらせ給ひてよませ給うける

名にしおはゞ我世はこゝに盡してむ佛のみくに近きわたり(以上、玉葉集)

寛和元年(九八五)八月十日、殿上に出でさせ給うて歌合せさせ給うけるに

秋くれば蟲もや物を思ふらむこゑも惜しまず鳴きあかすかな(新拾遺集)

實方朝臣、みちのくにへくだり侍りけるときたまはせける(陸奥國)

何事もかたらひてこそ過しつれいかにせよとて人のゆくらむ(新後拾遺集)

夏の御歌の中に

郭公ほととぎすまれなる聲を聞くごとにさも住みうくもなりまさるかな(萬代集)

春の御歌の中に

苗代なほろの水かけあをみわたるなりわさ田の苗なへの生おひいづるかも

山吹やまぶきを

もろこしの人に見せばややきがねのこがねの色に咲ける山吹

月あかき夜

わが宿の軒のうらいたかず見えてくまなくてらす秋の夜の月

無常のこゝろを

たゞしばしおく後れ先だつきせうま競馬のはしりげならぬ世にはあらずや

十首の御歌の中に

山田守いやねざるらむ雁がねの秋の夜ふかく鳴き渡るなり

三條の太皇太后のみやより猫やあるとありしかば、人のもとなりしかば、をかしげなりしを、とりて奉りしに、あふぎ(註・扇)のをれ(註・折)を、ふだにつくりて頸くびにつなぎて書きつけさせたまへりし御歌

敷島のやまとにはあらぬ唐猫からねこを君がためにぞもとめいでたる(以上、夫木抄)

春の御歌の中に

あしびきの山に入日の時しもぞあまたの花は照りまさりける

人にたまはせける

今よりはあひも思はじ過ぎにける年月さへにねたくもある哉(以上、風雅集)

世をそむかせ給ひてのち、花桶はなづくを御覧ごらんじてよませたまひける

宿ちかく花たちばなはほり植ゑじ昔をしのぶつまとなりけり(詞花集)

山田の心を詠ませたまうける

山田もる人とはなしにひたはへて時ぞともなく物をこそ思へ(新續古今集) *ひたはへて思ひをかけて

花の木どもをあまた植ゑさせ給ひて風吹きける日よませ給うける

木立をばつくるはずして櫻花風がくれにぞ植うべかりける(玉葉集)

一條天皇いちじょうてんのう（第六十六代）

御在世 九八〇—一〇二一（崩御・三十二歳）
御在位 九八六—一〇二一（七歳—三十二歳）

一條天皇は、第六十四代・圓融天皇の第一皇子。御歳七つで御即位せられ、三十二歳で崩御せられた。一條天皇のこの御代が藤原氏全盛の時期であった。藤原兼家は太政大臣（九八九）、関白（九九〇）となり、この年死するや、藤原道隆が攝政（九九〇）となりついで関白（九九三）。かくて長徳元年（九九五）に兼家の子、藤原道長は、まだ左大臣にもなつてをらぬのに、「内覧」（政治向きの文書を、天皇がごらんになる前にまづ内見して政務を処理すること）となつて、政務を掌中に握つた。

内政面では、皇居の内裏に出火あり、寛弘三年（一〇六〇）神鏡が災にかゝり、同年、興福寺の僧徒が入京して強訴することがあり、また、九九七年には、高麗の賊が壹岐・對馬に來寇して、おだやかではなかつたが、一方、天皇の後宮には、藤原道隆の女の定子中宮あり、藤原道長の女の彰子も女御として入内し、後宮を中心として紫式部・清少納言・赤染衛門・和泉式部などの女流文人・歌人が活躍、「源氏物語」「枕草子」など、平安時代の女流文学の代表作が、つぎつぎに生まれた。

（御陵墓は、京都市右京区竜安寺朱山にあり、圓融寺北陵〔円墳〕と申し上げる。）

長保二年（一一〇〇）十二月に、皇后宮（註・藤原道隆の女・定子）うせさせ給ひて葬送の夜、雪の降りて侍りければよませ給うける

野邊までに心一つは通へどもわが御幸とはしらずやありけむ（後拾遺集）

後朱雀院（註・一條天皇の第三皇子。後朱雀天皇）生れ給ひて（註・寛弘六年—一〇〇九）御百日の夜よませ給ひける

二葉より松のよはひを思ふには今日ぞ千年のはじめとは見る（統古今集）

例ならぬ事（註・御病氣）重くなりて御ぐしおろし給ひける日、上東門院（註・藤原道長の女・彰子）、中宮と申しける時遣はしける

秋風の露のやどりに君をおきて塵を出でぬることぞ悲しき（新古今集）（*塵を出でぬる＝出家する）

三條天皇さんじょうてんのう（第六十七代）

御在世 九七六一—一〇二七（崩御・四十二歳）
御在位 一〇一一—一〇二六（三十六歳—四十一歳）

三條天皇は、第六十三代・冷泉天皇れいぜいの第二皇子。左大臣、藤原道長が権勢をふるひ、天皇はその庄迫により御在位わづか四年七ヶ月で、御讓位となった。天皇は生来眼をお病みになり、あぢきない月日をお送りになった御様子は「大鏡」に詳しい。
（御陵墓は、京都市上京区衣笠西尊上院町にあり、北山陵〔円墳〕と申し上げる。）

世を敷かせ給うて

つくぐくと浮世にむせぶ河竹のつれなき色はやるかたもなし（新拾遺集）

例ならずおはしまして、位など去らむとおぼしめしける頃、月のあかりけるを御覽ごらんして

心にもあらでうき世にながらへば戀こひしかるべき夜半よなの月かな（後拾遺集）

月を御覽してよませ給ひける

秋に又逢はむ逢はじもしらぬ身は今宵ばかりの月をだに見む（詞花集）

皇后宮の御方へ申させ給ひける

うちはへて覺束おぼつかなさを世と共におぼめく身ともなりぬべきかな（栄花物語）（*うちはへてはずっと長い間）

後朱雀天皇（第六十九代）

御在世 一〇〇九—一〇四五（崩御・三十七歳）
御在位 一〇三六—一〇四五（二十八歳—三十七歳）

第六十八代・後一條天皇（第六十六代・一條天皇の第二皇子）は、九歳で御即位、二十九歳で崩御されたが、御歌がのこつてをらず、たゞこの御代は、藤原道長が、寛仁元年（一〇一七）、太政大臣の位について専断の限りをつくし、盗難火災が相つき、悪疫流行して多事な時期であった。またその間、刀伊の賊（沿海州・黒龍江沿岸に住んでゐた女真族）が突如五十餘隻の船で、寛仁三年（一〇一九）壹岐・對馬に來寇、太平に慣れた人々をおどろかせ、國內では、長元八年（一〇三五）園城寺（寺門派）と延曆寺（山門派）の僧徒のあひだで鬭争が起きてゐる。平忠常の叛乱（一〇二八）もあり、世相は次第に騒がしいきざしを見せはじめた。

後朱雀天皇は第六十六代・一條天皇の第三皇子で、この御代には、なほ藤原一族の全盛が続き、関白・藤原頼通が、父祖の威を藉りて専權をほしいまゝにした。諸国に旱魃が続き、国民生活も疲弊してゆく。なほ、藤原公任によって「和漢朗詠集」が長久元年（一〇四〇）撰上されてゐる。

（御陵墓は、京都市右京区竜安寺朱山にあり、圓乗寺陵〔円墳〕と申し上げる。）

麗景殿（*）の女御（*）まゐりて後雨ふり侍りける日、梅壺の女御に（*麗景殿内裏の殿舎で、中宮・女御などの居所）

春雨はるさめのふりしくころはあをやぎのいとみだれつゝ人ぞ戀こひしき（新古今集）

（糸・甚）
東宮と申しける時故内侍のかみ（女御・嬉子。道長の女、後冷泉天皇御母）のもとにはじめてつかはしける

ほのかにも知らせてしがな春霞かすみのうちに思ふころを

故中宮うせ給ひての又の年の七月七日、宇治前太政大臣の許につかはしける

こそぞのけふ別れし星も逢ひぬめりなど類たぐひなきわが身なるらむ（以上、後拾遺集）

贈皇后宮（嬉子）の後のわざの夜おぼしめしやりてよませ給うける

ほどもなく雲となりぬる君なれどむかしの夢の心地こそすれ（新千載集）

後冷泉天皇（第七十代）

御在世 一〇二五—一〇六八（崩御・四十四歳）
御在位 一〇四五—一〇六八（二十一歳—四十四歳）

後冷泉天皇は、第六十九代・後朱雀天皇の第一皇子。関白、藤原頼通が依然として専横を続ける。だが「前九年の役」が永承六年から康平五年まで（一〇五一—一〇六二）十二年間にわたって起きた。代々陸奥六郡に半独立的な族長制を形成してゐた安倍氏は、次第に隣郡を攻略し、朝廷への義務を怠るやうになつたので、源頼義・義家父子を派遣し、安倍頼時・貞任父子を征伐させた。苦戦の末、出羽の豪族、清原武則の助けを得て鎮庄に成功したが、これによつて武家としての源氏の基盤が固まつてゆくのである。

また、永承七年（一〇五二）は、佛滅二〇〇一年といふことで末法思想が流行、翌永承八年（一〇五三）には、京都宇治平等院鳳凰堂が落成し、佛師・定朝作の同堂阿彌陀像が出来上つた。「更級日記」「堤中納言物語」など平安後期の代表的な文学作品が成立したのも、このころであつた。

（御陵墓は、京都市右京区竜安寺朱山にあり、圓教寺陵〔円墳〕と申し上げる。）

賀陽院（註・賀陽親王の邸で、後に後冷泉天皇の内裏）におはしましける時、石たて滝落しなどして御覽じける頃、九月十三夜になりければ

岩間よりながるゝ水は速けれどうつれる月のかげそのどけき（後拾遺集）

後三條天皇（第七十一代）

御在世 一〇三四—一〇七三（崩御・四十歳）

御在位 一〇六八—一〇七二（三十五歳—三十九歳）

後三條天皇は、第六十九代・後朱雀天皇の第二皇子。東宮二十四年の間学問に精進され衆望をになつて御即位、御在位は五年弱であられたが、藤原氏と直接の姻戚関係があられなかつたので、全盛をきはめる藤原氏を抑へ、新たに「記録所」を設けるなど劃期的な政策を断行、天皇御親政に努力されて新たな一時期を劃されるに至つた。

（御陵墓は、京都市右京区竜安寺朱山にあり、圓宗寺陵〔円墳〕と申し上げる。）

行路霧（こうろの霧）といふ事をよませ給ひける

秋の野に旅寝せよとや夕霧の行くべきかたをたちへだつらむ（統古今集）

延久五年（一〇七三）三月、住吉にまゐらせ給ひてかへさ（註・御帰り道）によませ給ひける

住吉の神はあはれとおもふらむむなしき舟をさしてきたれば（後拾遺集）（*むなしき舟は舟、臣は水と

いふことから位をお去りになった仙洞の異称）

みこの宮と申しける時大宰大貳實政、學士にて侍りける、甲斐守にて下り侍りけるにはなむけたまはずとて

思ひ出でば同じ空とは月を見よほどは雲居にめぐりあふまで（新古今集）

白河天皇（第七十二代）

御在世 一〇五三—一二二九（崩御・七十七歳）
御在位 一〇七二—一〇八六（二十歳—三十四歳）

第七十三代・堀川天皇の御在位全期間
第七十四代・鳥羽天皇の御在位全期間
第七十五代・崇徳天皇の御在位はじめの六年間
} における院政期間 一〇八六—一二二九
（三十四歳—七十七歳）

白河天皇は、第七十一代・後三條天皇の第一皇子。二十歳で御即位、三十四歳で御讓位されたあと、白河上皇として「院政」をはじめられ、引き続いて次の堀河・鳥羽・崇徳三天皇の政治を、七十七歳で崩御されるまで四十三年間にわたって掌握せられた。これが院政のはじまりである。

天皇として御在位中、承保二年（一〇七五）延暦寺（山門派）と園城寺（寺門派）の僧徒相たゝかふことあり、延暦寺の僧徒の強訴（一〇七九）熊野の僧徒の強訴（一〇八一）もあつた。また永保三年（一〇八三）から寛治元年（一〇八七）まで「後三年の役」が起きた。「前九年の役」で功勞のあつた出羽の豪族、清原氏は、安倍氏を破つたあと、鎮守府將軍として陸奥に威を振つたが、一家の内に内紛が起り、これを平定すべく源義家が苦戦の末、遂に勝をおさめた（一〇八七）。これで源氏の基礎は、いよ／＼東国に確固たるものとなった。

（御陵墓は、京都市伏見区竹田淨菩提院町にあり、成菩提院陵〔方形〕と申し上げる。）

八月ばかり殿上ののをのこどもをめして歌よませさせ給ひけるに、旅中聞し鴈といふ心を

さしてゆく道はわすれて雁がねの聞ゆる方にこゝろをぞやる（後拾遺集）

夏の御歌の中に

庭の面は月もらぬまでなりにけりこずゑに夏のかげ繁りつゝ

熊野へ詣でたまひける道に花のさかりなりけるを御覽じて

咲きにはふ花のけしきを見るからに神の心ぞそらにしらるる（以上、新古今集）

熊野に参らせ給ひける時よませ給ひける

山の端にしぐるゝ雲をさきだてゝ旅の空にもふゆは來にけり（新後撰集）

藤原範永朝臣久しく参らざりければ給はせける

春といへば花やかをると山櫻見るべき人の尋ねこぬかな

熊野に御幸の時よませ給うける

沖つかぜ吹上の千鳥夜やさむきあげがたちかき波に鳴くなり（新千載集）

平清盛のいまだをさなかりしほど、いたく夜泣するよし聞しめして、忠盛に下されける

夜泣きすとたゞもりたてよ末の世に清くさかゆる事もこそあれ（平家物語）

冬の御歌の中に

跡もなく雪ふりつもる山路をばわれひとりゆく心地こそすれ（統詞花集）

堀河天皇（第七十三代）

御在世 一〇七九—一〇七七（崩御・二十九歳）

御在位 一〇八六—一一〇七（八歳—二十九歳）

（この間、御父・白河上皇の院政が行はれた）

堀河天皇は、第七十二代・白河天皇の第三皇子。御歳八つで御即位されて、御父・白河上皇の院政がはじめられたが、これは藤原専横に対する御対抗策であられたにせよ、皇位に幼帝を迎へられたことに關する限り、藤原氏と同じなされ方、といふことになつた。堀河天皇は二十九歳で崩御されてをられるが、その最後まで、御父君の御政治が続いたと見るべきであらう。堀河天皇は、特に音楽に秀でられ、また、賢王としての譽が高かつた。天皇の崩御の前後を記しとどめたすぐれた文学として、「讀岐典侍日記」がある。

承徳二年（一〇九八）には源義家が院の昇殿を許され、武士の地位が公家に近づいていった。興福寺・延暦寺などの僧徒は強訴をくりかへし、嘉保二年（一〇九五）には「北面の武士」が院の警護のため置かれることになる。また奥州では、藤原氏が中尊寺を建立（一一〇五）し、一方、「大鏡」「榮華物語」「今昔物語」など、平安時代の最後を飾る歴史物語や説話物語が、この頃までに出来上つてくる。なほ、鳥羽離宮（鳥羽殿のこと）は、白河上皇が御讓位とともに造営せられ、一〇九八年、堀河天皇御在位中に出来上つた。（御陵墓は、京都市右京区竜安寺朱山にあり、後圓教寺陵〔円墳〕と申し上げる。）

長治二年（一一〇五）三月、中殿にて竹不改色、といふ題を講ぜられ侍りけるに、京極前関白家肥後（藤原

節實せつじつ、御製をうけたまはりおよびて、「川竹のながれてきたる言の葉は世にたぐひなきふしとこそ聞け」とよみて奏し侍りけるに御かへし

神代よりながれ絶えせぬ河竹にいろます言の葉をぞ添へける（統後撰集）

肥後の内侍たしをここに忘れて歎きけるを御覽ごらんしてよませ給ひける

忘られて歎く袂たもとを見るからにさもあらぬ袖そでのしをれぬるかな（金葉集）

雲間うも微月といふことを

しきしまや高圓山たかまどのくもまよりひかりさしそふゆみはりの月（新古今集）

贈皇后宮かくれての春の頃山の霞を御覽して

梓弓はるの山べのかすむこそこひしき人のかたみなりけれ（統古今集）

鳥と羽ば天てん皇のう (第七十四代)

御在世 一一〇三—一一五六 (崩御・五十四歳)
御在位 一一〇七—一一二三 (五歳—二十二歳)

(この間、御祖父・白河法皇の院政が行はれた)

第七十五代・崇徳天皇の御在位期間後期十三年間 } における院政期間
第七十六代・近衛天皇の御在位全期間 } 一一二九—一一五六
第七十七代・後白河天皇の御在位はじめの二年間 } 一二七歳—五十四歳

鳥羽天皇は、第七十三代・堀河天皇の第一皇子。五歳で御即位、二十一歳で御讓位。御在位は十七年。御祖父・白河法皇の院政のためにお若い間だけの御在位で、あと三十四年間を上皇として過された。永治元年(一一四二)三十九歳で落飾され、空覺と号され、殊のほか佛教を崇信された。

御在位中の嘉承三年(一一〇八)源平二氏をして延暦寺の僧徒が入京するのを防がせられた。天永二年(一一二二)には、興福寺と東大寺との僧徒が互に闘ひ、二年後には、延暦・興福二寺が兵を構へて、和解をすゝめられる詔に從はず、白河法皇の御所に迫るなどのことがあった。

(御陵墓は、京都市伏見区竹田内畑町にあり、安樂壽院 陵〔法華堂〕と申し上げる。)

五十の御賀過ぎて又の年の春、鳥羽殿の櫻のさかりに御前の花を御覧してよませ給うける

心あらばにほひをそへよ櫻はなのちの春をばたれか見るべき

わづらはせ給うける時、鳥羽殿にて時鳥の鳴きけるをきかせ給うてよませたまうける

つねよりもむつまじきかな時鳥（死出）しでの山路のともとおもへば（以上、千載集）

水上月といへる事をよませ給うける

さどなみの志賀の浦わにきり晴れて月澄みわたる唐崎のはま（続後拾遺集）

白河の花見御幸によませ給へる

尋ねつる我をや花もまちつらむ今日ぞさかりにはひましける（金葉集）

崇徳天皇すくとくてんのう（第七十五代）

御在世 一一一九—一二六四（崩御・四十六歳）

御在位 一一三三—一一四一（五歳—二十三歳）

（御在位のはじめ六年間は、御曾祖父・白河法皇が、そのあとで御在位の全期間は御父・鳥羽上皇が院政をおとりになった。）

崇徳天皇は、第七十四代・鳥羽天皇の第一皇子。御父・鳥羽天皇と同じく五歳で御即位になり、二十三歳で御讓位。「保元の乱」（一一五六）で四国の讃岐に遷られ、四十六歳で悲劇的な御生涯を終へられた。「保元の乱」については、後白河天皇の御歌の項に記すが、この事件が、やがてわが国に武家政治が擡頭してくる導火線となっていたことは周知の通りである。なほこれより先、天皇としての御在位中、保安四年（一一三三）延暦寺の僧徒が日吉神社の神輿を奉じて入京、源平がこれを防いだことがあり、また平忠盛は、山陽・南海の海賊を捕へ（一一二九）、一一三二年には内の昇殿（註・清涼殿の殿上の間に出仕すること）を許された。これは、「平家物語」に「殿上の鬮討」として名高い事件であるが、さきに源氏が受けたのと同じ榮譽であって、武家の擡頭に画期的な動因をつくることとなる。文化面では、中尊寺に金色堂が建立され（一一二四）、保延六年（一一四〇）には、西行が出家して諸国を行脚した。

（御陵墓は、香川県坂出市青梅町にあり、白峯陵「方墳」と申し上げる。）

久安六年（一一五〇）御百首、春

山吹の花のゆかりにあやなくも井出の里びとむつまじきかな

同、冬

ひまもなく散るもみぢ葉に埋れて庭のけしきも冬ごもりけり

同、神祇

闇のうちににぎてをかけし神遊あか星よりや明けそめにけむ（*にぎてⅡ神に供へる麻の布 *神遊Ⅱ神樂のこと）

道のべのちりにひかりをやはらげて神も佛のなりなりけり

同、隠旅

都いでゝいくかになりぬあづまぢの野原篠原つゆもしみゝに

岩がねのこりしく山を越えくればわが黒駒は黄になりけり

蛭のすむ濱の藻屑をとりしきてこゝにとまると妹しらめやは（以上、久安六年御百首）

若菜を

春くればゆきげの澤に袖垂れてまだうらわかき若菜をぞ摘む（雪消）

山家月

山ざとは月もこゝろやとまるらむ都にすぎて澄みまさるかな

雑の御歌の中に

わが心たれにか言はむ伊勢の蛭の釣のうけひく人しなれば（以上、風雅集）

雑の御歌の中に

郭公夜半になくこそあはれなれ闇にまどふはなれひとりかは（今撰集）

崇徳院遠き御すまひのころ、西行上人より女房どもに「水莖のかき流すべき方ぞなき心のうちは汲みてしるむ」とよみてつかはしけるに、院の御返事

ほど遠みかよふころのゆくばかりなほかきながせ水莖の跡（拾遺風體集）

御軍敗れて後、御室の寛通法務が房に入らせ給ひて

思ひきや身を浮雲になしはてゝあらしの風にまかすべしとは

憂きことのまどろむ程は忘られてさむれば夢の心地こそすれ（保元物語）

讃岐の松山の津につかせたまひて、廳野大夫高遠の御堂に三年過し給へる時、その柱にかきつけさせたまへる

こゝもまたあらぬ雲居となりにけり空ゆく月の影にまかせて（白峰寺縁起）

蓮如法師、讃岐の国へ下り、御所に参りてあひ奉らむと申入れたりけるが、院はかゝるあさましき御かたちを見

え給はむことも憚ればとて召されざりければ、「朝倉や木の丸殿に入りながら君にしられて帰るかなしさ」とよみて、人につけて見参に入れたりけるに、御返し

朝倉やたゞいたづらにかへすにも釣する蟹のねをのみぞなく（源平盛衰記）

題しらず

うたたねは萩吹く風におどろけどながき夢路ぞ覺むるときなき（新古今集）

蟲をよませ給うける

蟲のごと聲たてぬべき世の中に思ひむせびて過ぐるころかな（玉葉集）

杉山へおはしまして後、都なる人のもとにつかはせ給ひける

思ひやれ都はるかにおきつ浪たちへだてたる心ぼそさを（風雅集）

近衛天皇このあてんのう（第七十六代）

御在世 一二三九—一二五五（崩御・十七歳）
御在位 一二四一—一二五五（三歳—十七歳）

（この間、御父・鳥羽法皇の院政が行はれた）

近衛天皇は、第七十四代・鳥羽天皇の第九皇子。御歳三つで御即位、十七歳で早逝せられた。御在位中の御政事は、すべて鳥羽法皇がとられた。なほ、第七十三代・堀河天皇以降、鳥羽・崇徳・近衛と続く四天皇をはじめ、平安時代の中期以降は、代々の天皇が大変御幼少の御歳で御即位されるのが目立つ。これは、天皇といふ御位みくらゐとその御威光とが、政争の具に供されてきた悲劇的な姿をよく示してゐる。

（御陵墓は、京都市伏見区竹田内畑町にあり、安樂壽院あんらくじゆいん南みなみ陵のみささぎ〔木造多宝塔〕と申し上げる。）

忍恋の心を

戀こひしともいはと心のゆくべきにくるしや人目つゝむおもひは（新古今集）

冬の御歌の中に

（此歌）このねぬる夜の間の風やさえぬらむかけひ水の今朝けさはこほれる（統古今集）

御こゝち例ならずおはしましける秋、よませたまうける

蟲むしの音ねの弱るのみかは過ぐる秋を惜む我身ぞまづ消えぬべき（玉葉集）

恋の御歌の中に

さぶれ石の巖いははとならむ程まで迄も君をば戀ひむ逢はずだにあらば（後葉集）

從一位藤原宗子、病おもくなりて久しく参り侍らで心細きよしなど奏せさせて侍りけるに遣しける

うきぐものかゝる程だにあるものをかくれなはてそ有明の月（千載集）

後白河天皇（第七十七代）

御在世 一一二七—一一九二（崩御・六十六歳）
御在位 一一五五—一一五八（二十九歳—三十二歳）

第七十八代・二條天皇の御在位全期間
第七十九代・六條天皇の御在位全期間
第八十代・高倉天皇の御在位全期間
第八十一代・安徳天皇の御在位全期間
第八十二代・後鳥羽天皇の御在位中期まで
（三十二歳—六十六歳）

における院政期間

一一五八—一一九二

（三十二歳—六十六歳）

第七十七代・後白河天皇は、第七十四代・鳥羽天皇の第四皇子。御踐祚の翌年に「保元の乱」が起り、御在位四年で御讓位になられたが、以後、二條・六條・高倉・安徳・後鳥羽の五天皇の三十餘年間にわたって「院政」をお執りになり、六十六歳でお亡くなりになられた。

「保元の乱」は、皇位継承についての崇徳上皇の御不満と攝政家あるいは関白家であった藤原氏内部の攝関の争ひとが結びついて、鳥羽上皇の崩御を機として、崇徳上皇側の藤原頼長は、源爲義・平忠正と結び、後白河天皇側の藤原忠通は、源義朝・平清盛と結んで激突した政争であった。その結果は、後白河天皇側が勝ち、崇徳上皇は讃岐に配流せられ給ひ、頼長は戦死、爲義・忠正は斬首となった。骨肉相争ふ一大悲劇であるが、藤原氏専横の長期化によって、神聖なるべき皇位継承の御事が、長い間、権勢の具に供されたことの、悲しむべき結末であったといふべきか。

いづれにせよ、この「保元の乱」のもたらしたものは、源平二氏の武家としての実力が示され、政治に対する武家の比重を重からしめることになったとともに、公家勢力の

衰兆を決定づけるものになって、以後七百年に及ぶ武家ならびに幕府による政治が生れ出る契機となつてしまつたものである。

なほ、後白河天皇は、民衆の間に流行する雑藝を特に好まれ、それらの歌謡を分類・集大成された「梁塵秘抄」二十巻を撰述（二七九）されて、わが文藝史上、劃期的な業績を残してをられる。

（御陵墓は、京都市東山区三十三間堂廻にあり、法住寺陵〔法華堂〕と申し上げる。）

みこにおはしましける時、鳥羽殿（註・白河上皇が讓位と同時に京都の南、鳥羽に造営し給うた離宮）にわたらせ給うける頃、池上花といへる心をよませ給うける

池水にみぎはのさくら散りしきて波の花こそさかりなりけれ（千載集）

鳥羽殿にて、旅宿時雨といふ事を

まばらなる柴のいほりにたびねして時雨にぬるゝ小夜衣かな（新古今集）

神祇のこゝろを

いはしろの松にちぎりをむすび置きて萬代までの恵をぞまつ

熊野御幸（熊野三山への御参詣。白河・鳥羽・後白河・後鳥羽各上皇は、屢行幸あらせられた）三十二度の時、御前にておぼしめしつゞけさせ給うける

わするなよ雲は都をへだつともなれてひさしきみくま野の月（以上、玉葉集）

後白河院、熊野の御幸、三十三度になりける時、

みもとといふ所にて、つげ申させ給ひける

有漏うろうよりも無漏むろうに入いぬる道みちなれば是こゝぞ佛ぶつのみもと成なるべき（*有漏＝煩惱の世界 無漏＝悟りの世界）（風雅集）

鹿かの聲こゑ何方いづかといふことをよませ給たまひける

山里やまのは秋あきの寢覺ねざめぞ哀あはれなるそこともしらぬ鹿かの鳴なく音ねに（続古今集）

春はるの御歌みかの中に

をしめども散ちりはてぬれば櫻花うめ今はこずゑをながむばかりぞ

御みなやみ重おもくならせ給たまひて後雪ごゆきのあしたに

露つゆの命いのち消きえなましかばかくばかりふる白雪しらゆきをながめましやは（以上、新古今集）

平治元年十二月二十六日の夜半ばかり殿上人の體にて仁和寺の方へまきれいでさせ給たまひける御道みちすがら

難たがきにはいかなる花はなの咲さくやらむみになりてこそ思おもひ知らるれ（平治物語）

二條天皇じょうてんのう

(第七十八代)

御在世 一一四三—一一六五(崩御・二十三歳)
御在位 一一五八—一二六五(十六歳—二十三歳)

(この間、御父・後白河上皇の院政が行はれた)

第七十八代・二條天皇は、第七十七代・後白河天皇の第一皇子。十六歳で踐祚なされ、御在位は八年。二十三歳でなくなられた。この御代には、さきの「保元の乱」に続いて、「平治の乱」(一一五九)が起きた。前の戦乱で勝者側の平清盛と源義朝とのあひだに勢力争ひが起きたからである。清盛は、後白河上皇の寵臣であった藤原通憲と結んで権勢を誇り、義朝を圧倒する。そこで義朝は、通憲の対抗者、藤原信頼と組み、清盛の熊野参詣中に挙兵し、後白河上皇を幽閉しまつり、通憲を殺害する。源義朝は、そこまでは目的を達したが、急を聞いて帰京した清盛のためにたちまちにして敗れ、信頼は斬罪、義朝は尾張まで落ちのびたが、そこで殺された。これで源平二氏のうち、源氏の勢力はこゝで一時衰へ、これに反して、平氏は全盛時代を迎へることになった。この「平治の乱」のあと、二條天皇は御父・後白河上皇の院政に従はれず、御親政をなされたが、御在位の期間も短く、かつ御若くして崩御になられた。

なほ「平治の乱」の後仕末で、源義朝の一族は多く殺されたが、第三子・源頼朝は、死一等を減じられて伊豆に流され、その生命を救はれた。これがやがて平氏を亡ぼす大将に育ってゆくのである。

(御陵墓は、京都市北区平野八丁柳町にあり、香隆寺陵〔円墳〕と申し上げる。)

うへのをのこ(註・殿上人)ども千首の歌奉りける時、雪の歌とてよませ給うける

雪つもる嶺にふぶきやわたるらむ越のみ空にまよふしらくも

うへのをのこども百首の歌奉りける時、祝の心をよませ給うける

白雲に羽うちつけて飛ぶ鶴の遙かに千世のおもほゆるかな(以上、千載集)

御輿行幸の御後、前左兵衛督惟方、長官にてつかうまつりて次の日、雨降り侍りければ、空も心ありけるにや、など奏し侍りけるついでに「御輿せしみゆきの空もこゝろありて天の下こそけふくもりけれ」とつかうまつりけるに御返し(*御輿行幸||天皇が即位され、「大嘗会」に先立って十月下旬に行はれる、みそぎの儀式)

空はれし豊のみそぎに思ひしれなほ日の本のくもりなしとは(玉葉集)

(*豊のみそぎ||大嘗会の前、十月下旬に賀茂の河原で行はれたみそぎ。大嘗会は、大嘗祭と同じで、天皇が即位禮のあと、はじめて大嘗宮で行ふ新嘗祭のこと。また新嘗祭は、その年の新穀を、天皇自ら天地の神々にそなへ、天皇自らも食し、臣下にも賜はる式典で、大嘗会・大嘗祭は御在位中の神事の最大のものである)

百首御歌の中に

冬の夜のさゆるにしろし三吉野の山の白雪今ぞ降るらし(新拾遺集)

神祇の御歌の中に

天の下人のこゝろや晴れぬらむ出づる朝日のくもりなければ(新後拾遺集)

正治二年(一一〇〇)百首御歌の中に

秋ふかみ杜の下草うらがれてこずゑにすさむ日ぐらしのこゑ(夫木抄)

百首の御歌の中に

雲は皆峯のあらしにはらはせてさやく月の澄みのぼるかな

よと共ににごりたえせぬさび江にもうつれる月は曇らざりけり(以上、統詞花集)(*さび江||古びた入江)

高倉天皇 (第八十代)

御在世 一一六一—一一八一 (崩御・二十一歳)
御在位 一一六八—一一八〇 (八歳—二十歳)

(この間、御父・後白河上皇の院政が行はれた)

第七十九代・六條天皇は、第七十八代・二條天皇の第二皇子であられたが、御父・二條天皇の御葬送にあたって、延暦寺と興福寺との闘争などがあつた。天皇は、御歳十三(御在位四年)でなくなつてをられるので、御年少の御生涯のゆゑ、御歌も伝はつてゐない。この御代も、後白河上皇の院政がつよいた。なほ、六條天皇のこの御代に、平清盛が太政大臣(一一六七)となり、武士で位人臣を極めた最初の人となつた。

(御陵墓は、京都市東山区清閑寺歌ノ中山にあり、清閑寺陵〔円墳〕と申し上げる。)

第八十代・高倉天皇は、第七十七代・後白河天皇の第七皇子。八歳で踐祚、二十歳で讓位、二十一歳で崩御せられた。天皇は、寵姫小督局との仲を、平清盛にさかれるといふやうなことも重なつて、世をあぢけなくお思ひになられて位を去られた。「平家物語」の語るところである。この御代も、後白河上皇の院政がつよく、なほ後白河上皇は、御代の二年目(一一六九)に落飾なされて以後、法皇と申し上げることになつた。

當時は清盛の全盛期であつて、天皇は、御父君・後白河法皇と中宮徳子(建禮門院)の父・清盛との反目のあひだにあつてお苦しみになられた。治承元年(一一七七)には、鹿谷の謀議があり、平家打倒の動きが開始されたが、この動きに激怒した清盛は、天皇の

御讓位の前年、内大臣・平重盛が死ぬに及んで、遂に後白河法皇を鳥羽殿に幽閉しまつり、法皇の近臣たちの官職を奪ふといふ暴挙に及んだ。なほ天皇がおもひやりの深さにおいても比類のないお方であったことは、「平家物語」の「紅葉」の巻にも詳しく述べられてゐる。

なほ、法然が専修念佛を唱へはじめたのもこのころであり、鎌倉佛教の新たな胎動がすでにこの時期に始まつてゐるのも、注目すべきであらう。

(御陵墓は、京都市東山区清閑寺歌ノ中山にあり、後清閑寺陵〔方形〕と申し上げる。)

瞿麥露澌とこなつるしけしといふことを

白露のたまもて結ゆへるませのうちに光さへそふとこなつの花 (*ませ 竹・木で作った低く目の荒い垣)

紅葉透霧あかぢゆりとうりといふことを

薄霧のたちまふ山のもみぢ葉ははさやかならねどそれと見えけり

うへのをのことも 眺望山雪あかつきせんせつといへる心をつかうまつりけるに

音羽山さやかにみするしらゆきを明けぬと告ぐる鳥の聲かな (以上、新古今集)

深夜千鳥をよませ給うける

浪の音にふし定まらぬ浦人のともなひ明あかす小夜千鳥さよちどりかな (統後拾遺集)

中 世
(鎌倉・室町時代)(一一八三～一五五七)

第八十二代・後鳥羽天皇～第一百五代・後奈良天皇

後鳥羽天皇（第八十二代）

御世位 一一八〇—一二三九（崩御・六十歳）

御在位 一一八三—一二九八（四歳）十九歳

（一二九二年まで御祖父・後白河法皇の院政がつゞく）

第八十三代・土御門天皇の御在位全期間 } における院政期間

第八十四代・順徳天皇の御在位全期間 } 一一九八—一二二二

第八十五代・仲恭天皇の御在位全期間 } （十九歳）四十二歳

第八十一代・安徳天皇は、第八十代・高倉天皇の第一皇子（御母は平清盛女・徳子）建禮門院であられるが、御年三歳で踐祚、御在位六年、御年八歳で平家の人々と共に、長門の壇の浦に入水せられた。まことに悲劇的な御生涯であられた。治承四年（一一八〇）

源頼政は、後白河天皇の第二皇子であられる以仁王を奉じて平氏を打倒すべく兵を挙

げて敗れたが、源頼朝も、以仁王の令旨をうけてゐたので、ついで挙兵、石橋山の戦

に敗れて安房にのがれた。さらに、源義仲（木曾義仲）も、同じく以仁王の令旨によつ

て挙兵する、といふ状況であつて、平氏打倒を目ざしてはげしい動きが出てきた。同じ

年、頼朝は鎌倉に拠り、「侍所」を開設して東国経営の地歩固めにはいった。この間、

都が平安から福原（現在の神戸市兵庫区）に移され（その年に再び平安の都に復帰）、平氏は

興福寺をはじめ南都（奈良）の諸寺に焼打ちをかけたが、それらはいづれもみな、

この治承四年（一一八〇）のことであつた。

その後、清盛は世を去り、寿永二年（一一八三）には、木曾義仲が北陸道から京に兵を

進め、このため、平氏は西を指して都を離れ、平宗盛が幼い（六歳の）安徳天皇を擁して西に逃れることになる。しかし、義仲は範頼、義経に敗れ、平家は一旦勢をもりかへしたが、源氏のために一の谷、四国の屋島などで敗れ、遂に長門の壇の浦で、亡びる（一一八五）に至ったのである。

（安徳天皇の御陵墓は、山口県下関市阿弥陀町にあり、阿弥陀陵〔円墳〕と申し上げ、御霊は下関の赤間神宮に祀られてある。）

第八十二代の後鳥羽天皇は、第八十代・高倉天皇の第四皇子。安徳天皇の御西下により御年四歳で踐祚されたが、御譲位の御歳も、わづか十八といふ御若さであられた。しかし、土御門・順徳・仲恭三天皇の「院政」をおとりになったので、実質的には、三十九年間にわたる御政治をなさったことになる。しかしながら、源頼朝の死（一一九七）後、鎌倉幕府の実権は、執権・北條氏の手握られるやうになり、朝廷の政権も鎌倉の手に移り、遂に「承久の変」（一二三二）に敗れたまひ、後鳥羽上皇は隠岐の島に遷され、十九年の歳月を孤島に過され、延応元年（一二三九）六十歳で亡くなられた。まことに御痛ましいことであった。なほ後鳥羽院は、宮中に「和歌所」を再興（一二〇二）して藤原定家らに「新古今和歌集」を撰せしめられ、隠岐に赴かれた後も自ら「新古今和歌集」の切継を続行せられ、和歌の世界になみ／＼ならぬ情熱をそそがれた。御自身も二千首をこえる和歌を遺してをられ、歌論書に「後鳥羽院御口傳」が残されてゐる。

なほ、頼朝は平氏滅亡の年に早くも「守護地頭」を置き（一一八五）、奥州を征伐し（一一八九）、「公文所」を「政所」に改め（一一九二）、征夷大將軍に任ぜられる（一一九二）、

など、幕府の体制は着々と整備されて行った。

また、文化面では、僧、榮西えいせいが帰国して「臨濟宗」を日本に伝へた（二一九一）のも、

後鳥羽天皇の御代のことであった。
（御陵墓は、京都市左京区大原勝林院町にあり、大原陵おほはらのみさぎ「十三重塔」と申し上げる。）

雑（詠五百首和歌）

鹽がまの浦こぐ舟のつなで繩くるしきものはうき世なりけり
笠ゆひの鳥こぎわかれこぐ舟の跡ゆく波のあはれ世の中

鳥（正治二年—二〇〇—御百首）

春くればみどりの空になくたづのながみの浦に友さそふなり

海邊（同）

蟹かまをがね小舟ゆくへもしらぬ波の上にいづくの浦へさしてゆくらむ

祝言（同）

千早振神ぞ知るらむふしておもひおきてかぞふる萬代よろづよのおく

祝（建仁元年—二〇一—内宮御百首）

四方よもの海の浪に釣するあま人もをさまれる代の風はうれしや

神祇（同）

みもすそやたのみをかくる神風の心にふかぬときのまぞなき（*みもすそ＝五十鈴川の意）

雜(同)

哀^{あはれ}なるあまの磯屋もいかゞせむさらで世にふる方^{かた}しなければ

秋(同、外宮御百首)

かり人もあはれしれかし秋かぜに妻こふ鹿のゆふぐれのこゑ

神祇(同)

ひさかたの空ゆくかぜに雲きえてつきかげさむし宮河のあき

雜(同)

昔には神も佛もかはらぬをくだれる世とはひとのこころぞ

なにとなく過ぎこしかたのながめまで心にうかぶ夕暮のそら

雜(建仁二年—二〇二—日吉三十首御会)

みずしらぬむかしの人の戀しきは此世を歎くあまりなりけり

をのことも、詩を作りて歌に合はせ侍りしに「水郷春望」といふ事を(元久二年—二〇五—元久詩歌合)

見渡せば山もと霞むみなせ川夕べは秋と何思ひけむ

寄山雜(承元二年—二〇八—住吉御歌合)

おく山のおどろが下もふみわけて道ある世ぞと人に知らせむ(＊おどろ||草木の乱れ茂りあってあるところ)

寄海朝(承元四年—二二〇—粟田宮御歌合)

とまりする一夜^{ひとよ}のちぎりこぎ別れおのがさまく出づる舟人

花下(建暦二年—二二二—紫宸殿)

吹く風もをさまれる世の嬉しきは花みる時ぞまづおほえける

述懐（建暦二年―二二二―）

人もをし人も恨めしあぢきなく世をおもふ故に物おもふ身は

冬（建保四年―二二六―御百首）

わけいれどとふ人もなし嵐山木の葉ふりしくおとばかりして

秋百首の中に

天の原雲吹きはらふあきかぜに山の端^{はた}たかく出づるつきかな

露しげきむぐらの宿のさびしきに昔に似たるすゝむしのこゑ

心あらばよきて吹かなむ秋の風物おもふ人の夜半の寢覺を

淡路島月おちかゝるあけがたにこぐやみ舟のおとぞ身にしむ

冬五十首の中に

難波がたそよぎしあしも霜がれてしほせの浪の音のみぞする（*しほせ||潮水の流れ寄るところ）

いかばかり木の葉の色のまさるらむ昨日もけふも時雨^{ときぐれ}ふるころ

ゆきつもるたびの家ゐにたつ煙これも世にふる道^{（道）}やくるしき

雑百首の中に

けふもくれあすも過ぎなばと思ふまに空しき年の身に積りつつ

すてやらぬ憂き身のはての悲しさを嘆きながらも猶すごすかな

我^{わが}思ひつもりつもりてあらたまの年をあまたもなげきこしかな

久方の空もあはれとてらさなむあふぐかひなく年のへぬれば（以上、御鳥羽院御集、詠五百首）

夏

みのうきはとふべき人もとはぬ世にあはれに（米）きなく時鳥かな

秋

思ひやれましばのとほそ押しあけてひとりながむる秋の夕暮
故郷を別路におふるくずの葉の風は吹けどもかへる世もなし
いたづらに秋の日數はうつりきていとど都はとほざかりつつ

雑

藻汐（もしほ）やく蜃（あま）のたく繩（な）うちはへてくるしとだにもいふ方（なた）ぞなき（*たく繩（な）|| 楮（か）でつくった繩）

波間分け沖のみなどに入るふねのわれそこがるゝたえぬ思ひに

しほ風に心もいとどみだれ蘆のほに出でてなけどとふ人もなし（*ほに出でて|| 表にあらはして）

なにとなく昔がたりに袖ぬれてひとりぬる夜も（寝）つらき鐘かな

我こそは新島守（にのしまもり）よ隱岐（おき）の海のあらきなみかぜこゝろしてふけ（以上、後鳥羽院遠島御百首）

郭公（たけのこ）

さのみやはつれなかるべきほととぎす（ねざめ）寢覺（ねざめ）の空に一聲もがな（遠島御歌合）

承久後百首の御歌の中に

風はやみおきこぐ舟のかちまにも忘るるまなき世（よ）の故郷（ふるさと）

くま山

ふもとゆくふなびといかに寒からむくま山だけをおろす嵐に（以上、夫木抄）

美作と伯耆との中山を越えたまふに、向ひの峰に細き道あり。いつくへかよふ道かと問はせ給ふに、

古き道にて今は人もかよはず、と申しければ

都人たれふみそめてかよひけむむかひの道のなつかしきかな（承久兵亂記）

七條院（後鳥羽院御母）より参れる御文を御顔におしあてて

たらちねの消えやらで待つ露の身を風よりさきにいかでとはまし

八百よろづ神もあはれめたらちねの我待ちみんとたえぬ玉の緒（*玉の緒は命）

家隆の二位（藤原家隆、新古今集の撰者）より、あはれなる消息の奥に「ねざめして聞かぬを聞きてわびしきは

荒磯浪のあかつきの聲」とあるに

浪間なき隠岐の小島のはまびさし久しくなりぬ都へだてゝ（*はまびさしは「久しく」の序）

をりくよませ給へる御歌ども書きあつめて、修明門院（後鳥羽院妃・順徳院御母）の御方へたてまつらせ給ひ

ける中に

水無瀬山わがふるさとは荒れぬらむ籬は野らと人もかよはで

限りあればさても堪へける身のうさよ民のわら屋に軒をならべて（以上、増鏡）

題しらす

夜を寒み聞のふすまのさゆるにもわら屋の風をおもひこそやれ（続後撰集）

土御門天皇（第八十三代）

御在世 一一九五—一二三二（崩御・三十七歳）
御在位 一一九八—一二二〇（四歳）十六歳

（この間、御父・後鳥羽上皇の院政がつよく）

第八十三代・土御門天皇は、第八十二代・後鳥羽天皇の第一皇子。十六歳で御讓位なされたが、これは、御父・後鳥羽上皇の討幕計画に御熱心でなかったためといはれてゐる。御歳二十七歳の時「承久の変」（一二三二）に遭はれた。御父・上皇は隠岐に、皇弟・順徳天皇は佐渡に流され給うたが、幕府は、土御門上皇には御処分を加へず、ために自ら御心苦しく思はれて望んで土佐に配流せられ、のち阿波に移られて、配所で崩ぜられた。

土御門天皇の御在位中、源頼朝の死（一一九九）後、その子・頼家が征夷大将軍に任せられた（一二〇二）が、北條時政が幕府の執権職に任じ（一二〇三）、頼家を幽閉して、翌年これを殺害してしまふ。これに先立ち、源實朝が將軍（一二〇三）となるが、間もなく時政の子・北條義時が執権となり、次第に北條氏専制の基礎を築いていった。實朝には、後世、正岡子規によって、「萬葉集」以来比肩するものなしと評された歌集「金槐和歌集」が残されてゐるのは、周知の通りである。なほ、この御代に、元久二年（一二〇五）藤原定家らが「新古今和歌集」を撰進してゐるが、一方、建永二年（一二〇七）には、専修念佛宗が他派佛教徒の排斥にあひ、七十五歳の法然は讃岐に、その弟子・親鸞は越後

に流された。法然は、その年勅免の宣示が、四年後には京都に帰ることについての勅免がくんだり、親鸞も謫居四年にして赦免され、その後関東に移って教へをひろめた。

(御陵墓は、京都府乙訓郡長岡町にあり、金原かねはらのつとまさ陵「八角形」と申し上げる。)

寄風述懐(詠述懐十首和歌)

吹く風のためにもぬかたを都としてしのぶもくるしゆふぐれの空

寄山述懐(同)

岩がねの枕はさしもなれにしににおどろかす松のあらしぞ

霰あられ(承久三年—二二二—詠百首和歌)

聞きわかぬまきの板戸いたどの寢覺ねざめかな木の葉降る夜も霰あられふる夜も

曉(同)

曉あかつきをうしとおもひしわれしもぞことしはいたく寢覺がちなる

松(同)

たかまどやあれのみまさる宮のうちに残るむかしの庭の松風

海路(同)

明石瀉やまとしまねも見えざりきかき曇りにし空(袖の誤に)のまよひに

夏(承久四年—二二三—詠二十首和歌)

庭のおもの土さへさくる夏の日にひとりつゆけき姫百合ひめゆりの花

野寺訪僧帰帯月(詠五十首和歌)

法の師にまどへる道をたづねてぞ野寺の月にひとりかへりし

花

いそのかみふる野の花に言とはむかゝるなげきやありし昔も

寄水祝（貞應三年—二三四—詠五首）

いすゞ川たえせぬ水のみなかみも清きながれを照らさざらめや

春

かぞふればなげきも老もつもりけりよそなる春を送り迎へて

夏

ももしきの庭のたちばな思ひ出でてさらに昔をしのぶ袖かな

夏草のふかきおもひもあるものをおのればかりと飛ぶ螢かな（統拾遺集）

冬

山陰にふるしら雪の消えやらでのこるうき身の末ぞかなしき

雑

ゆきとまる里をわが世とおもへどもなほ戀しきは都なりけり

草名十首の中に

野邊に出でゝ誰家づとと折りつらむ春の蔭にまじるいたどり

年のうちにまた咲く花のなきまゝに菊の籬をなほぞつくるふ

虫名十首の中に

ひぐらしの鳴く夕ぐれの山風やまかぜに色をもまたで散る木の葉かな

名所春

菅原や伏見のあら田うちかへし民のしわざになれるこのごろ

寄燈戀

窓ふかき秋のともし火きえやらでもゆるは胸の思ひなりけり

蚊遣火

夏くればふせやにくゆる蚊遣火かやうびの煙もしろし明けぬこの夜は

鹿

深山田みやまだにあかつきかけて鳴く鹿の聲すむかたに月ぞかたぶく

月

秋の夜もやゝ更よけにけり山鳥のをろの初尾にかゝるつきかげ（*をろ＝尾、「ろ」は接尾語）

紅葉

奥山のちしほの紅葉あきばいろぞこきみやこの時雨しぐれいかに染むらむ

神樂

さかきとる八十氏人やそうちびとの袖のうへに神代をかけたのこる月かけ

離別

朝霧あさぎりの淀よどのわたりを行く舟の知らぬわかれもかなしかりけり

祝

あまつそら雲居をさしてゆくつるのゆくすゑ遠き聲ぞ聞ゆる（以上、土御門院百首）

承久三年（一二二二）閏十月十日、土佐国の幡多といふ所にわたらせ給ひぬ。……いとあやしの御手輿にて下らせ給ふ。道すがら雪かきくらし風吹き荒れふどきして、来しかた行くさきも見えず、いと堪へがたきに、御袖もいたく氷りて、わりなき事多かるに

うき世にはかゝれとてこそ生まれけめことはり知らぬ我涙かな（増鏡）

のち、土佐より阿波国につかせ給ひて

浦々うらうらによするさなみに言こととはむ隠岐の事こそ聞かまほしけれ（承久兵亂記）（*さなみ||さざなみ）

順德天皇（第八十四代）

御在世 一九七—二四二（崩御・四十六歳）
御在位 二二〇—二二二（十四歳）—二二五歳）

（この間、御父・後鳥羽上皇の院政がつよく）

第八十四代・順德天皇は、第八十二代・後鳥羽天皇の第二皇子。「承久の変」（二二二）に敗れられて佐渡に遷られ、二十一年間を過されて四十六歳で崩ぜられた。順德天皇の和歌は千四百首前後残されてゐるが、その大部分は、佐渡に配流せられる以前のもの、すなはち、御年二十五、六歳までのもので、それ以後の御歌は、残念ながらごく少数しか伝へられてゐない。

なほ、順德天皇の御在位中には、鎌倉幕府第三代将軍・源實朝の不慮の死（二二九）によって源氏の正統が断絶することになった。また一二二〇年ごろには、僧、慈圓の「愚管抄」が出され、また、「保元物語」、「平治物語」なども出来上つてゐた。順德天皇が御自ら撰したまうた「禁秘御抄」は、宮中における大切な秘事、伝承事項など故実を記されたものであり、同じく順德天皇によって記された歌學書「八雲御抄」と共に、後世にその名を誦はれるものとなつた。

（御陵墓は、京都市左京区大原勝林院町にあり、大原（大原）と申し上げる。）

旅恋（建曆元年—二二—五十首）

いづよりもねざめさびしき草枕かりに見し夜の人ぞこひしき

野外秋望（建暦二年—二二二—内々歌合）

袖におくあさけの露のほしもあへず霧にわけゆく秋のたび人
故郷恋（同、当座）

待つ人のこゝろもしらぬふるさとなほ秋はてぬ蟲の聲かな
春（建保元年—二二三—三月ごろの当座）

もろ人は若菜つむめりかすがなるみかさの森の春のひかりに
秋（同五月当座）

秋山の眞柴いろどる霜の上にうたてはげしく行くあらしかな

霰あられ（同十一月当座）

この里も霰あられふりきぬしがらきのとやまのあらし雲さわぐらむ
（紫香菜）

述懐（建保二年—二二四—）

おく山の柴しばのした草おのづから道ある世にもあはむとすらむ
日ひをへても猶なほやたのまむ月讀つきよみのかはらぬ影にすまむかぎりは

閑中雜（同七月ごろの当座）

山賤やまがたのよをすみわけるすまひにもありふる程の道はありけり
沐浴みそぎ（同）

夕ゆふけぶり民のかまどにたつる湯のかけても誰か身を祈るらむ

夏草（建保三年—二二五—）

夏草はしげりもゆくかいにしへの野中の清水かげくもるなり

春歌の中に（建保四年―一二二六―）

さは姫の染めゆく野邊はみどり子の袖もあらはに若菜つむらし

夏歌の中に（同）

かた山のならの葉がしは吹く風の音こそまさされ夏は來にけり

冬歌の中に（同）

夜やさむきとよのあかりの冬の月をとめの袖は霜に冴えつゝ

題しらず（同）

百敷やふるきのきばの忍ぶにも猶あまりある昔なりけり（*忍ぶししのぶ草との懸詞）

あまたよめる中に（建保六年―一二二八―）

我身から人のつらさもありやとて心のとがをもとめわびぬる

春興（承久二年―一二三〇―）

もろこしの春の御舟ぞおもひやるやまとしま人花かづらせり

禁中（同）

かぞふれば十年の秋は馴れにけりさやかにてらせ雲の上の月

田家（同）

さびしさも思ひなれてやながむらむ田中の庵の秋のゆふぐれ（以上、順徳院御集）

春二十首の中に

鳴けや鳴けしのぶの杜もりの喚よこどり子鳥つひにとまらむ春ならずとも

秋二十首の中に

おひかぜにたなびく雲の早ければ行くとも見えぬ秋の夜の月（以上、順徳院御百首）

承久三年（一二三二）七月二十日九條道家のもとにつかはし給ひける御書のおくに

ながらへてたとへば末に歸るともうきはこの世の都なりけり

後鳥羽院かくれ給うての頃

のぼりにし春のかすみをしたふとて染むる衣ころもの色もはかなし

大原にをさめ奉るよし聞えれば（註・後鳥羽上皇は隠岐の島で崩御せられ、その御遺骨は京都の大原に納められた）

入る月のおぼろの清水いかにして遂にすむべき影をとむらむ

春の夜のみじかき夢と聞きしかどながき思ひの醒さむるともなし（以上、統古今集）

後鳥羽院かくれさせ給うてのち、御惱ごのうらみの程の御文ごみづかひを御覽ごらんして

君もげにこれぞ限りの形見かたみとは知らでや千世の跡をとめけむ

同じ御歎ごなげきのころ、月を御覽ごらんじてよませ給ひける

おなじ世の別れは猶ぞしのばるゝ空ゆく月のよその形見かたみに（以上、新拾遺集）

佐渡国におはしますころ御手ならひのついでに、からうじて洩しやれけるにや、

消えかぬる命ぞつらきおなじ世にあるもたのみはかけぬ契ちぎりを（増鏡）

佐渡にて（と伝ふ）

思ひきや雲の上をば餘所よそに見て眞野の入江に朽ち果てんとは（眞野山皇陵記）（*入江||佐渡島、眞野湾）

後堀河天皇（第八十六代）

御在世 一二二二—一二三四（崩御・二十三歳）
御在位 一二三一—一二三二（十歳—二十一歳）

第八十五代の仲恭天皇は、第八十四代・順德天皇の第四皇子であられたが、御年四歳で即位、「承久の変」により四ヶ月で御讓位、十七歳でなくなつてをられ、御歌も残されてゐない。

（御陵墓は、京都市伏見区深草本寺山町にあり、九條陵〔円墳〕と申し上げる。）

次の第八十六代・後堀河天皇は、第八十代・高倉天皇の第二皇子の後高倉院（守貞親王）と申し上げる方の第三皇子。早く大僧正・仁慶の弟子となられて十樂院にはいられたが、「承久の変」後、北條義時は仲恭天皇を廢したてまつり、そのあとに後堀河天皇が義時に迎へられて、十歳で御即位、御在位は十二年。しかし、御讓位後二年、二十三歳のお若さで崩せられた。天皇は學を好まれ、文藻豊かであられたと伝へられる。この御代では、北條泰時が執権になり（一二三四）、同年、親鸞の「教行信證」が成立、浄土真宗を開いた。また道元が帰朝して曹洞宗を伝へた（一二三七）。貞永元年（一二三三）鎌倉幕府は「貞永式目」（別名「御成敗式目」）を定めて、幕府政治における法令を整備した。

（御陵墓は、京都市東山区今熊野にあり、観音寺陵〔円墳〕と申し上げる。）

うへのをのことも（註・殿上人）海邊月といへる心をつかうまつりけるついでに

和歌の浦葦邊のたづのなく聲に夜わたる月のかげぞさびしき

うへのをのことも未見恋といへる心をつかうまつりけるついでに

山の端を分出づる月のはつかにも見てこそ人は人をこふなれ

うへのをのことも忍久恋といへる心をつかうまつりけるついでに

よそにのみ思ひふりにし年月のむなしき數ぞつもるかひなき

をのことも述懐の歌つかうまつりけるついでに

くりかへし賤のをだまき幾たびもとほき昔を戀ひぬ日ぞなき（以上、新勅撰集）

後嵯峨天皇（第八十八代）

御在世 一二三〇—一二七二（崩御・五十三歳）
御在位 一二四二—一二四六（二十三歳—二十七歳）

第八十九代・後深草天皇の御在位全期間
第九十代・龜山天皇の御在位のはとんどの期間

一三四六—一二七二
（二十七歳—五十三歳）

第八十七代・四條天皇は、第八十六代・後堀河天皇の第一皇子。即位は御年二歳、御在位十一年とは申しても、北條泰時執権のもとに、十二歳で崩御。御歌は残されてゐない。

（御陵墓は、京都市東山区今熊野にあり、月輪陵〔九重塔〕と申し上げる。）

次の第八十八代・後嵯峨天皇は、第八十三代・土御門天皇の第七皇子。ひさ／＼に青年で即位された天皇が登場せられた。御歳二十三歳で御即位、御在位わづかに五年ではあったが、御讓位のと、後深草、龜山の両天皇の院政をおとりになること三十年間近くに及び、五十三歳でなくなられた。和歌に長ぜられ、三百四十首前後の御詠草が残されてゐる。後嵯峨上皇の御志には、遠く後鳥羽上皇の倒幕の御志を継ぐものが強くうかがはれ、それがやがて「大覺寺統」と「持明院統」の二つの皇統系を生むことになり皇位継承についての悲劇的要因になるのであるが、それにも拘らず、朝威恢復の御志は、御子の第九十代・龜山天皇へ、やがて第九十六代・後醍醐天皇へと受け継がれていった

如くである。その御志は、次に載せるしらべの高い数々の御歌の中に拝察できるやうに思はれる。道元が越前に永平寺を開いたのも、後嵯峨天皇の御代であった。

(御陵墓は、京都市右京区嵯峨天竜寺芒ノ馬場町にあり、嵯峨南陵〔法華堂〕と申し上げる。)

歸雁 (宝治元年—二四七—御百首)

何故にいざなはれつゝ雁がねの行きては歸るならひなるらむ

早苗 (同)

あしびきの山田のさなへとりづくに民のしわざはにぎはひにけり

水邊螢 (同)

山水のたぎりて落つる岩かげに玉ちりまがひ飛ぶはたるかな

夕立 (同)

かきくらすそらとも見えす夕立のすぎゆく雲に入日さしつゝ

初雁 (同)

ほのくくと朝霧がくれ初雁のはつかに(過)すぐるこゑきこゆなり

鳴鶴 (同)

をぐる崎みつの小島にあさりする鶴ぞなくなる波たつらしも

柚山

(同)

(註・この御歌との関係は判らぬが、この年九月十六日は、伊勢神宮内宮の第三十回式年遷宮の日であった)

斧の柄も朽木のそまの山人は世をつくしてやみや木ひくらし

都初春（文永二年—二二六—白河殿七百首）

もろ人の袖をつらねてたちまふに春きたりとも見ゆる宿かな

河夏威（同）

河邊なるあらぶる神にみそぎして民しづかにと祈るけふかな

荻鷺夢（同）

さらでだにねざめがちなるおいらくの夢なさましそ荻の上風

維摩会（同）（*十月七日から七日間「維摩経」を講読する法会）

神無月しぐれふりおける御法とて奈良のみやこに残る言の葉

寄枕述懐（同）

わが肱を枕にしつゝ思ふかなげにたのしびはこれに過ぎじと

寄笛述懐（同）

末の世と思ふもひさしより竹はきりてぞ笛の音をもたてける（*より竹に流れ寄った竹）

位におはしましける時、うへののをのこども題を探りて歌つかまつりけるついでに霞を

敷島ややまと島根のあさがすみもろこしまでも春は立つらし

宝治二年（一二四八）前の大きだいまうちぎみ（註・太政大臣）の西園寺の家に御幸ありて、帰らせ給ふ御おくりものに、代々のみかどの御本奉るとて、つゝみ紙に「つたへきくひじりの代々の跡を見てふるきをうつす道ならはなむ」と書きて侍りけるに御返し

知らざりし昔に今やかへりなむかしこき世世の跡ならひなば（以上、続後撰集）

八幡にこもり侍りし時

石清水こがくれたりしいにしへをおもひ出づればすむ心かな

述懐の歌に

笹竹のわがよの程の思ひ出にしのばれぬべき一節もがな

六帖題の歌の中に國を

ひさかたの天よりおろす玉鉾の道ある國ぞ今のわが國

三百首の歌の中に雜

ぬるが中に思ひの外のことも見つ夢よいかなるものと知らばや(以上、統古今集)

百首の歌よませ給うけるに

少女子が袖しろたへに霜ぞおく豊のあかりも夜やふけぬらむ(以上、新嘗祭の翌日に行はれた節會)

た節會

神祇の御歌の中に

榊とりますみのかぐみかけしより神の國なるわがくにぞかし(以上、續拾遺集)

初冬のことろを

搔き暮し雲の旗手ぞしぐれゆく天つ空より冬や來ぬらむ(新後撰集)

宝治百首歌めしけるついでに、寄日祝

久方の天の岩戸のあけしより出づる朝日ぞくもる時なき(統千載集)

建長六年(一二五四)三首歌合に

吹く風のうらみは身にぞかへりぬる治れる世は花も散らじを（新千載集）

秋の御歌の中に、題しらず

神世より幾よろづ代になりぬらむ思へば久し秋の夜の月（新拾遺集）

後ご深ふか草くさ天てん皇のう（第八十九代）

御在世 一二四三—一二三〇四（崩御・六十二歳）

御在位 一二四六—一二五九（四歳）十七歳）

（この間、御父・後嵯峨法皇の院政が行はれた）

——通称「持明院統・初代」——

第八十九代・後深草天皇は、第八十八代・後嵯峨天皇の第三皇子。十七歳で御父君の御命令で御讓位になったが、そのわけは後深草天皇の弟君にあたられる龜山天皇に皇位をお継がせになって、以後、龜山天皇の系統を皇位継承者としようとせられたからで、そのことを御遺勅で記されるに至った。これに對し、時の鎌倉幕府の執権・北條時宗は、後深草上皇に御同情申し上げ、龜山天皇の皇子・後宇多天皇のあとは、後深草天皇の皇子が伏見天皇（二二八六）として皇位をおつぎになるやう幹旋した。このことから、いつの間にか皇位継承者としては、龜山天皇の系統（大覺寺統）と、後深草天皇の系統（持明院統）の二つが生れ、大覺寺統・持明院統の「兩統迭立」（交互に皇位につく）といふ弊風を到来させてしまふことになった。それはやがて、北條高時・足利高氏の反逆意志に利用されて、不幸にもわが皇統の中に、歴代天皇と、「歴代外天皇」といふ二つの皇位（俗に、「南朝」と「北朝」といふ）を生む悲劇にもつながっていったのである。

なほ、後深草天皇御在位の御代のことを付言すれば、天皇御即位の直後に、鎌倉幕府では北條時頼が執権に任じ（二二四六）、時頼は鎌倉に建長寺を建立し（二二四九）、また、

日蓮が法華宗を唱へた（一二五三）のも、この御代のことであつた。

（御陵墓は、京都市伏見区深草坊町にあり、深草北陵〔法華堂〕と申し上げる。）

神祇の御歌の中に、題しらず

石清水ながれの末のさかゆるはこゝろの底のすめるゆゑかも（玉葉集）

弘安二年（一二七九）秋山のけしきを御覽ぜむとて伏見殿へ御幸ましましけるに、鷹司殿の殿もまゐり給ふべしと聞えけるを、物忌とてとまり侍りければ「伏見山いく萬代も枝そへてさかえむ松の末ぞ久しき」とよみて五葉の松につけて奏し侍りけるに御返し

さかゆべきほどぞ久しき伏見山生ひそふ松のえだをつらねて（増鏡）

龜山天皇かめやまてんのう

(第九十代)

御在世 一二四九—一三〇五(崩御・五十七歳)

御在位 一二五九—一二七四(十二歳—二十六歳)

(一二七二年まで御父・後嵯峨上皇の院政がつゞく)

——通称「大覺寺統・初代」——

第九十一代・後宇多天皇の御在位全期間における 院政期間 一二七四—一二八七

(二十六歳—三十九歳)

第九十代・龜山天皇は、第八十八代・後嵯峨天皇の第七皇子。後深草天皇の項で述べた通りの事情で御即位になったが、御歳二十六の御若さで、御子の後宇多天皇に御讓位になられた。

御父君に当られる後嵯峨上皇は、文永九年(一二七二)に五十三歳で崩ぜられるまで院政をお執り続けになったので、龜山天皇が天皇として親政なされたのは、御在位十六年間のうち、最後の二年だけであられたことになる。そして引き続き御子の後宇多天皇の御在位十四年間は、全期間を通じて龜山上皇が院政をおとりになられたのである。

龜山天皇の御在位中および院政をおとりになられた時期には、かの蒙古が日本に国書を持参して服属を要求してきた。時の幕府では、間もなく北條時宗が執権に就任して、この要求を断乎としてしりぞけるが、それに先立ち、幕府は御家人ごけいじんに九州地区海辺の警

戒を指令し、また朝廷による寺社の祈禱も始められ、国内は、にはかに緊張につままれていった。かくて、文永十一年（一二七四）一月に龜山天皇が御讓位されたが、その秋十月、蒙古は、蒙古・高麗の兵約二万三千からなる日本遠征軍を差し向け、對馬・壹岐を侵したあと、松浦郡（いまの長崎県）を襲撃し、ついで博多湾にはいり、北九州を攻めるに至った。これは、わが国が海外から受けた來寇のはじめてのことであり、皇室も幕府も、全国民一体となつてこの国難に対処したのである。幸ひにして、我が軍の武勇にあはせ、暴風雨によつて蒙古の兵船が壊滅するといふ天運に恵まれて、やうやく蒙古軍を撃退することを得た。「文永の役」といふのがこれであつた。

かくて、北條時宗は、この苦難を経ていよいよ本格的に九州地方の防衛に意を用ひ、九州の御家人、非御家人を問はず督励し、北九州沿岸に防壘（石積み）を築く一方、翌建治元年（一二七五）、弘安二年（一二七九）の二回にわたつて來日した蒙古の使者を、いづれもその首をはねて、強硬姿勢を一貫した。

この頃、蒙古は、国号を元と称してゐたが、弘安二年（一二七九）ごろには、支那大陸の南宋を完全に滅ぼして支那全土の支配権を握り、この餘勢を馳つて弘安四年（一二八二）一、南宋の降服軍十万余（江南軍）と、蒙古・高麗軍四万（東路軍）の二手をもつて、再びわが国に挑戦し來つた。東路軍は、對馬・壹岐を経て、博多湾の志賀島に來襲したが上陸を阻まれ、その後、平戸島、鷹島で戦備を整へながら、江南軍の到着を待った。この二手の軍勢を合すると、軍勢十四万二千人、糧食六十二万三千五百六十石、艦船四千四百艘と伝へられてゐる。しかしまことに天恵といふべきか、江南軍が大挙して博多湾

に迫った時、再び大暴風雨の襲来と、わが三島水軍（瀬戸内水軍）の河野通有をはじめとする九州・四国・瀬戸内周辺の各将兵の奮戦によって、敵は完膚なきまでの大敗を喫し、やがて海上遠く敗走するに至った。これすなはち、「弘安の役」である。

またこの間、龜山上皇が国難克服の御祈願を、京都の石清水八幡宮になされたことは、有名であり、その御徳を慕って福岡市の東公園には、龜山上皇の銅像が今もなほ建てられてゐる。また、福岡の宮崎宮には、龜山上皇御宸筆といはれる勅額「敵國降伏」の御文字がかゝげられてゐる。なほ、日蓮が「立正安國論」その他を著はし、龍口の法難の後、佐渡に流されたのも、僧・一遍が時宗を唱へたのも、この時期のことであつた。龜山上皇は嘉元三年（一三〇五）五十七歳で崩ぜられたが、後鳥羽上皇・後嵯峨上皇と受継がれた皇威恢復への御努力は、その御一生に御生命をかけて受け継がれ、やがて後の後醍醐天皇の御志へと連なつていったものと見うけられる。

（御陵墓は、京都市右京区嵯峨天竜寺芒ノ馬場町にあり、龜山陵〔法華堂〕と申し上げる。）

春（弘安御百首）

よもの海浪をさまりて長閑なる我が日のもとに春は來にけり
世のためも風をさまれと思ふかな花のみやこの春のあけほの

冬（同）

きのふ今日みやこのそらも風さえて外山の雲に雪はふりつゝ

あふぎみる空なる星のかずよりもひまなきものは心なりけり
 津の國の難波のあしの世の中をのどかにとおもふわが心かな
 世のために身をば惜しまぬ心ともあらぶる神は照し見ゆらむ^(る)
 すべらぎの神のみことをうけきつる^(つ)いやつぎ／＼に世を思ふかな
 神風や伊勢のをとめが袖たれて祈るひつきに我が世やすけむ

早春

今よりはのどけかるらしかすが山さすや朝日も春のけしきに

夏草

夏草のことしげかりしむかしにもあらずさびしき山の奥かな

澤螢^{わたる}

身にたへぬおもひは誰れもあるものを澤の螢のいかにもゆらむ

攤衣

もの思ふとねられぬ賤^{しづ}がなぐさめに幾夜かさねて衣^{ころも}うつらむ

夜燈

このよには消ゆべき法^{のり}のともし火を身にかへてこそ我は照らさめ

羈旅

東路^{あづまぢ}はきゝても遠き旅なれどこゝろのおくはへだてなきかな

神祇

ゆくすゑもさぞなさかえむ誓あれば神の國なる我が國ぞかし（以上、昭慶門院より被_レ出_レ之、詠百首の中）

祝

ちはやぶる神のさだめむわが國は動かじものをあらがねの土（龜山院御集）

祝（嘉元仙洞御百首）

祈りおくことは違はず神もきけ我がすべらぎの千代の行末

石清水の社に御幸ありし時よませ給うける

石清水たえぬながれは身にうけつ_(て)我が世の末を神にまかせむ

神祇の心をよませ給うける

今もなほ久しく守れちはやぶる神のみづが_(瑞垣)き世々をかさねて（以上、統拾遺集）

雑の御歌に

いくほどかながらへて見む山櫻花よりもろきいのちと思へば（玉葉集）

弘安七年（二二八四）九月九日、三首の歌講ぜられけるとき、菊花宴久といふことを

千年_(ちとせ)までかはらぬ秋はめぐりきてうつろはぬ世の菊のさかづき（緯千載集）

嘉元元年（一三〇三）百首の御歌の中に、初秋を

天津風そらにたちつゝあらがねの土のいろにぞ秋も見えける（夫木抄）

嘉元百首の歌よませ給うけるに

命にもかへばやおもふ心をば知らでや花のやすく散るらむ

後宇多天皇（第九十一代）

御在世 二二六—二二七（崩御・五十八歳）

御在位 二二七—二二八（八歳）

（この間、御父・龜山上皇による院政が行はれた）

——通称「大覺寺統・第二代」——

第九十四代・後二條天皇の御在位全期間における 院政期間 一三〇—一三〇八

第九十六代・後醍醐天皇の御在位期間の初期における 院政期間 一三一—一三二二

第九十一代・後宇多天皇は、第九十代・龜山天皇の第二皇子。御在位中は御父君・龜山上皇が院政をおとりになられたが、「兩統迭立」のため、龜山上皇と後宇多上皇と二代にわたって「大覺寺統」でなされた院政も、そのあとは、「持明院統」の上皇の院政に交替といふことになる。従って後宇多天皇が御讓位後、上皇（法皇）として院政をなさるのは、九十四代と九十六代の天皇の御時、すなはち飛び飛びの時期といふことになった。

なほ後宇多法皇は、元亨四年（二三三—四）五十八歳で、大覺寺で崩ぜられたので、龜山天皇・後宇多天皇の御血統を「大覺寺統」と申し上げることになったものである。なほ、この天皇の御代に蒙古襲来（元寇）があったが、龜山天皇の項で詳記したので、ここでは省略する。

（御陵墓は、京都市右京区北嵯峨朝原山町にあり、蓮華峯寺陵〔法華堂〕と申し上げる。）

竹鷲(元亨三年一二三二)龜山殿七百首

うぐひすの千代のはつねはさゝたけの大宮人に春やつぐらむ

苗代(同)

せきかくる苗代水のさまぐにわくるや人のこゝろなるらむ

田家早苗(同)

山ざとの門田のおもに水こえてすどしくけふは早苗とるなり

原薄(同)

わけいればあしたの原の花薄ほにいづる秋ぞふかくなりゆく

掛穂水(同)

聞くまゝにかけひの音も絶えぬなり夜のまにこほる谷川の水

竹箨(同)

さゆる夜の寢覺のとおとづれて竹の葉そよぎ降る霰かな

平野神を(同)

今もなほ民のかまどのけぶりまでまもりぞすらむ我が國のため

百首の歌めされしついでに、神祇を

ちはやぶる七代五代の神世より我があし原にあとを垂れにき

(* 七代五代 古事記によれば天御中主神から伊邪那岐・伊邪那美神まで十二代)

神祇の御歌の中に、題しらす

ちはやぶる神もひかりをやはらげてくもらず照らせ秋の夜の月

百首の歌めされしついでに、述懐

ふして思ひ起きても歎く世の中に同じ心と誰をたのみむ（以上、新後撰集）

春月を

眺むればそこはかとなくかすむ夜の月こそ春のけしきなりけれ（玉葉集）

顯密の教法の心をよませ給うける長歌（註・引用省略）の反歌

代々たえず法のしるしを傳へきてあまねくてらす日の本の國

寄國祝といへる心をよませ給うける

かたぶかぬ速日の峰に天降るあめのみまごの國ぞ我が國（* 速日の峰 || 日向の高千穂峯、* あめのみまご || 天

孫、瓊々杵尊をさす）

百首の歌めされしついでに、神祇のこころを

我が國に内外の宮と顯はれてつたへし法を今まもるらむ

世を思ふ我がすまもれ石清水きよきこゝろのながれ久しく

百首の歌めされしついでに

山鳥の初尾のかぐみひとめ見しおもかげさらず人のこひしき

恨みてもかひこそなけれ蟹少女いさりたく火の燃え焦れつゝ

山中瀧水といふ事を

分け入れば深きみ山の高嶺より落ちくる瀧の音のさやけさ

嘉元（二三〇三）の百首の歌めされしついでに、雜

いとどまた民やすかれといはふかな我が身世にたつ春の始は（以上、續千載集）

千首の歌よませ給うけるに、賀のこゝろを

槻の木つぎの木のいやつぎ／＼の末までも世に仰がるゝ影とならなむ

千首の歌よませ給うけるに、釋教のこゝろを

心にてやがて心をつたふるぞ三世にかはらぬ誠なりける（以上、統後拾遺集）

神祇

天つ神國つやしるをいはひてぞわが葦原の國は治まる（風雅集）

嘉元（二三〇三）百首歌めされけるついでに、雜

ときしあれば谷より出づる鶯うぐひすに代よを扶たすくべき人を問はゞや（新千載集）

花を

山櫻ひと木なりともやどしめてしづかに花は散るまでも見む（統現葉集）

嘉元仙洞御百首のうち、雜二十首の中に祝を

今もかも天あめの日嗣ひつぎのたえせねば限かぎりもあらじよよのすべらぎ

樛つがの木のいやつぎ／＼に傳ふべき天あめの位くらゐは神のまにまに

伏見天皇（第九十二代）

御在世 一二六五—一三一七（崩御・五十三歳）
御在位 一二八七—一二九八（二十三歳—三十四歳）

（当初の四年間は御父・後深草上皇の院政が行はれた）

—通称「持明院統・第二代」—

第九十三代・後伏見天皇の御在位全期間における

院政期間 一二九八—一三〇一

（三十四歳—三十七歳）

第九十五代・花園天皇の御在位期間の前半期における

院政期間 一三〇八—一三一一

（四十四歳—四十九歳）

第九十二代・伏見天皇は、第八十九代・後深草天皇の第二皇子。御在位後四年目からは、なほ御父君・後深草上皇が御存命中であられたが、ひさ／＼に天皇親政を復活せられた。しかし御讓位の後は、御自身で「持明院統」の天皇に対して院政を再開され、政治に対して強い御関心を示されたが、正和六年（一一三七）五十二歳で崩せられた。伏見天皇の御歌は二千六百首以上と拝せられるが、上皇の院政が多かった時期に幕府政権の折ながらも、天皇親政に取り組まれただけに、御詠草の内容には、歌調の高いものが数多く拝せられる。また伏見上皇の院宣によって出来上った「玉葉和歌集」は、京極爲兼が撰進したものであるが、この撰集に当っては、伏見上皇が種々御意見を加へられたと伝へられてゐる。皇后・永福門院も歌人として令名高い方であられた。

（御陵墓は、京都市伏見区深草坊町にあり、深草北陵〔法華堂〕と申し上げる。）

梅

花の中に春をいそぐがうれしきに軒ちかくしも梅むいの咲きける

花

もゝしきやはしのひだりの櫻花なれてながむる春もへにけり

春の御歌の中に

咲きそむる一木の花とみるほどによもの櫻もさかりにぞなる
この雨にふりめぐまれてまたれつる梢こすえの花のあすやひらけん

暮春述志

時をしたひ人を思ふもすべて世に別れてふ事ぞ悲しかりける
春はそれかならずかへる時もあらん長き別れは人の身ぞうき

花

あたら世のわが身のはての悲しさよ盛ほどなき花をみるにも

初秋夜

たなばたのあふ夜ちかしと天の河そらに涼しき風わたるなり

秋月

庭くらく傾く月は壁にみちて鳴くきりくすこゑ更よけにけり

秋雨

枯れはつる草葉もなほぞしをれゆくさむき雨ふるあきのくれがた

月

久方の空てりきよみあきらけき秋の月夜は見れどあかぬかも（以上、伏見院御詠草）

夕野

野邊とはき夕日のすゑの山本に一筋しろきけぶりをぞ見る

秋露（乾元二年—一三〇三—仙洞五十番歌合）

われもかなし草木も心いたむらし秋風ふれて露くだる比こほ

花（筆をとよめずこれを書く、とある十首）の中に

咲きやすると待ちつゝあれば櫻花けさふる雨にはころびにけり

春

昨日けふ春とやそらのかすむらん物をもふ身（思）は時もしらぬを

古木花稀

ふりにけるいく世の春をしたふらん朽木（くもき）に咲ける花の一ふさ

述懐（延慶三年—一三二〇—正月石清水に参籠之時、当座十首の内）

世をまもる神のこゝろをかへりみてをろかにたらぬ身をぞ恐るゝ

持明院にうつり居侍（ゐはやく）しころ、夏

夏ふかきみぎはの木だち物ふりて池にのぞめるかげぞ涼しき

祝

跡たれて神のてらせる日の本の國のかためはひさにつきせじ

冬神祇といへる事をよませ給ひける

天の戸のあけし昔をうつし來て神代にかへす朝倉のこゑ（*朝倉||神樂の曲名、朝方近く「神送り」の名残を

こめて奏するもの）

いなづまを

宵まよのまの村雲つたひ影見えて山の端めぐる秋のいなづま（以上、伏見院宸筆御集）

春二十首の中に

降りけりな音にはたてぬ春雨の見れば草葉のうへぞぬれゆく

夏十五首の中に

大ぬさや麻のゆふし（*）でうちなびきみそぎすゞしき賀茂の河風

（*大ぬさ||襦はらの用具。麻、木綿、紙などでつくる *ゆふしゆふで||「木綿」を垂らしたもの）

雑十首の中に

猶すべてくるしいとはしいくほどの命まつまのよとは思へど

夏十五首の中に、早苗

傾くる田子の小笠のいくならびおなじ心にとるさなへかな

秋二十首の中に、袴衣

長月や身にしむ風の夜をかさねうつやきぬた（註）の聲いそぐなり（*きぬた||冬の服の仕度のためにうつもの）

雑二十首の中に、祝

あめつちのやはらく國のことわざのさかりにとめる敷島の道（以上、伏見院御百首其他）

秋の御哥の中に

露ふかきまた朝あけの草がくれ夜のまの蟲のこゑぞのこれる

寄國祝といふ事をよませ給うける

代々たえずつぎて久しくさかえなん豊蘆原とよあしはらの國やすくして

御讓位の日、おまへの萩のわづかに咲きそめたるを折らせ給ひて、大納言三位、さとに侍りけるにつかはさせ給うける

咲きやらぬ籬まがきの萩の露をおきてわれぞうつろふもよしきの秋

遊義門院(註・後深草天皇第一皇女)かくれさせ給ひてのち、後深草院の御忌日ごきびに法花堂へ御幸ありてよませ給うける

こぞまではわけこし友も露ときえてひとりしをるゝ深草の野べ

たまづさと申す(箱)しやうの琴、後深草院に侍りけるを、後には永福門院(註・伏見天皇の皇后)へ奉らせ給ふべきよし、申しおかせ給ひければ、かくれさせ給ひて後、御忌などはてゝ、かの御琴を奉らせ給ふとて

玉章たまづさのその玉の緒のたえしより今は形見かたみのねにぞなかるゝ

龜山院かくれさせ給ひにしころ(二三〇五)、去年こぞの秋、後深草院失せさせ給ひしを、又また程なく衰れなる御事など、女房の中へ申し送り侍るとて、前大納言爲兼(註・玉葉集撰者)の許もとより「ふたとせの秋のあはれは深草や嵯峨野の露もまた消えぬなり」とありけるに御返し

まだほさぬこぞの秋たもとかけて消えそふ露もよそにやは思ふ

述懐の御歌の中に

いたづらにやすきわが身ぞ恥かしき苦しむ民の心おもへば

懷舊のこゝろを

なさけある昔の人はあはれにて見ぬわが友とおもはるゝかな
惜しむべく悲しぶべきは世の中に過ぎて又こぬ月日なりけり

河月といへるこゝろを

五十鈴川絶えぬ流れの底きよみ神代かはらず澄める月かげ

秋の御歌の中に

やまかぜも時雨しぐれになれる秋の日にもやうすき遠まちの旅人

後深草院かくれさせ給うけるころ(二三〇四)、深草へ御幸ごぎょうはべりけるに、霧のふかく立ちて侍りければ

消えはてしけぶりのすゑのおもかげも立ちそふ霧の深草の山

雑の御歌の中に、題しらず

世をすくふ心のうちのなほざりに民の愁うれへをなすぞ悲しき(以上、新千載集)

秋歌あまたよませ給ひける中に

庭のおもに夕べの風は吹きみちて高きすすきの末ぞみだるる

冬夕の心をよませ給うける

梢には夕あらし吹きてさむき日の雪げの雲に雁かりなきわたる

題しらず

天つ空てる日の下にありながら曇る心のくま(累)をもためや(以上、風雅集)

題しらず

神や知る世の爲とてぞ身をも思ふ身の爲にして世をば祈らず（新拾遺集）

後深草院の御事おぼしめし、いでして七月十六日、月のあかよりけるによませ給うける

算ふれば十とせあまりの秋なれど、面影ちかき月ぞかなしき（以上、伏見院御製拾遺）

後ご伏見ふし天皇み（第九十三代）

御在世 一二八八—一三三六（崩御・四十九歳）

御在位 一二九八—一三〇一（十一歳—十四歳）

（この間、御父・伏見上皇の院政が行はれた）

——通称「持明院統・第三代」——

第九十五代・花園天皇の御在位期間の後半期における 院政期間 一三一三—一三一八

（二十六歳—三十一歳）

第九十三代・後伏見天皇は、第九十二代・伏見天皇の第一皇子。御在位は短く、かつ御幼少であられ、伏見上皇が院政をなさったが、後伏見上皇御自身も後に一代おいて次の花園天皇御在位の後半期に、六年間（上皇、二十六歳から三十一歳まで）院政をなさった。（花園天皇御在位の前半期は、伏見上皇が第二回目の院政をなさってをられ、そのあとを、後伏見上皇が院政をなさったものである。）

（御陵墓は、京都市伏見区深草坊町にあり、深草北陵〔法華堂〕と申し上げる。）

題しらず

山かぜはふけど聞えず岩がねやたぎりて落つる瀧のひゞきに

風後草花といふことをよませ給うける

夜すがらの野分の風のあと見れば末うねふす萩に花ぞ稀なる

萬葉集の詞ことば一句を題にて、人々に歌よませ給ひけるに、「ひかりは清く」といふことを

天つ日のひかりは清くてらす世に人のこゝろのなか曇れる（以上、玉葉集）

春のあしたといふことを

花の上にさすや朝日のかげ晴れてさへづる鳥の聲も長閑けき

題しらす

何となく見るにも春ぞ慕はしき芝生に交る花のいろ／＼

建武のころ、雑の御歌の中に

沈みぬる身は木がくれの石清水さても流れの世にし絶えずば（以上、風雅集）

伏見院（註・御父君）の御忌のころ、花園院（註・御弟君）いまだ位におはしましけるに、紅葉につけて奉らせ給う

ける

かき暮す袖の涙に堰きかねて言の葉だにも書きもやられず（新拾遺集）

神祇の御歌の中に

やはらぐる光くもらずもろ神のうけまもるべき國はたのもし（臨水集）

夏雨（乾元二年一三〇三―四月、仙洞五十番歌合）

夏草のみどりの若葉雨をうけてなびくすがたは見るも涼しき

寄雲雜（嘉元三年一三〇五―三月歌合）

見るままに星の光もきよくなりて雲ぞ晴れゆくあかつきの空

正和元年（一一三二）八月、十五夜五首の歌講せらける時、秋朝といへる事を詠ませ給ひける

今朝の朝け袂涼しき風立ちていとはや秋のしられぬるかな（新千載集）

後二條天皇（第九十四代）

御在世 一二八五—一三〇八（崩御・二十四歳）

御在位 一三〇一—一三〇八（十七歳—二十四歳）

（この間、御父・後宇多上皇の院政が行はれた）

——通称「大覺寺統・第三代」——

第九十四代・後二條天皇は、第九十一代・後宇多天皇の第一皇子。天皇御在位のまゝ二十四歳の御若さで崩御せられた。その短い御生涯のあひだにも、かなりの数の御歌を詠んでをられ、約三百首が残されてゐる。

（御陵墓は、京都市左京区北白川追分町にあり、北白河陵〔円墳〕と申し上げる。）

花下送日

ちるまでもながめすてじと山ざくらひとき一本の蔭に日數へにけり

雨後蟬あまご

村雨むらさめの晴るゝこずゑの山たかみすゞしき露にせみぞ鳴くなる

秋歌

小男鹿こせしかは妻こひわびぬ草がれの小野の夜さむの秋風のころ

暮林鳥

夕あらしのさむき林のむらすずめやどりあらしそふ聲聞ゆなり（以上、墨蓮）

述懐

人としていかでか世にもありふべきいっつ五の常のみちはなれては（*）五つの常のみち（五常）仁義禮智信をいふ

釋教

さとるべきその源はひとつにてさまざま（説）にとく道やかはれる（後二條院御百首）

百首の歌召されしついでに、聞蟲といへる心を

菘きりぎりす そことも見えぬ庭の面の暮れゆく草のかけに鳴くなり

題しらず

萩が花散りにし小野の冬がれに霜のふる枝の色ぞさび寂しき

忍契恋といふ事をよませ給ひける

誠かと又おしかへし問ふ程の人目のひまもなき契ちぎりかな（以上、新後撰集）

寄夢恋

戀しさの寝てや忘ると思へどもまた名残なごりそふ夢の面影（玉葉集）

二月餘寒といへる心を

三吉野はなほ山さむしき（二）さらぎ（月）の空も雪げののこる嵐に

題しらず

草も木も冬枯さむく霜降りて野山あらはに晴るゝ月かけ

神祇の心を詠ませ給うける

世の爲もあふぐとを知れ男山むかしは神の國ならずやは（*）男山（石清水八幡を指す）（以上、続千載集）

百首の歌詠ませ給うける中に

郭公ほととぎすその神山ほととぎすのそのかみもかばかり待ちし人は有りきや（統後拾遺集）

秋の御歌の中に

ながめわびぬ秋も名残なごりと夕日さす雲の旗手はたてはうちしぐれつゝ

人々に百首の歌めされけるついでに、神祇を

ちはやぶる神のすごもに霜さえしその曉あかつきは今も忘れず（*すごも||竹ですだれのやうに編んだもの） （以上、

などに敷く） （以上、新千載集）

新千載集

花園天皇はなぞのてんのう（第九十五代）

御世在 一二九七—一三四八（崩御・五十二歳）
御在位 一三〇八—一三一八（十二歳—二十二歳）

（この間、前半期は御父・伏見上皇が、後半期は御兄・後伏見上皇が、それぞれ院政を行はれた）

——通称「持明院統・第四代」——

第九十五代・花園天皇は、第九十二代・伏見天皇の第四皇子。「大覺寺統」の後醍醐天皇に御讓位のあと、佛道に精進せられ、正平三年（一三四八）五十二歳でおなくなりになった。深く和漢の学に通じてをられたが、ひたすら学問にお励みになったそのお姿は、天皇自らお書きとよめになった日記「花園天皇宸記」——によってお偲びすることが出来る。なほこの外、皇太子量仁親王（後の光厳天皇—歴代外天皇—）に与へられた「誠太子書」などが残されてゐる。

花園天皇の御代の末期、一三一六年（正和五年）に、北條高時が、鎌倉幕府の第十四代執権職に就任して後醍醐天皇の御登場も間近く、やうやく鎌倉幕府の末期が近づくとことになる。

（御陵墓は、京都市東山区粟田口三条坊町にあり、十樂院上陵〔田墳〕と申し上げる。）

つばくらめ簾すだれの外にあまた見えて春日のどけみ人かげもせず
春

柳

夕ぐれの春風ゆるみしだりそむる柳がすゑはうごくともなし

春雨

あさみどりみじかき草のいろぬれてふるとしもなき庭の春雨
夕霞かすみまさと見るまゝに雨になりゆくいりあひのそら

螢

飛ぶ螢ともし火のごともゆれども光を見れば涼しくもあるか

夏晝

庭の上の眞砂にみちて照れる日の影みるなべにあつさまさりぬ

遠近夕立

遠つ空に夕だつ雲を見るなべにはやこのさとも風きそふなり
(此 思)

初秋

ときわかぬ竹の小枝にふく風の音しも秋になりにけるかな

秋

世の色の哀は深くなりにけり秋はいくかもいまだあらなくに

冬朝

おきて見ねど霜ふかゝらし人の聲の寒してふ聞くも寒き朝あけ

霰あられ

さえくらす嵐に雪やちかゝらしさきだつあられ軒におつなり

雨後雪

今朝の雨の名残の雪やこほるらむくれゆく空の雪になりぬる

田家雪

すゑとほき刈田のおもの雪の中にたてるや庵の見るもさびしき

旅

越ゆれども同じ山のみかさなりて過ぎ行く旅の道ぞはるけき

旅にして妹を戀しみながめをれば都の方に雲たなびけり（以上、花園院御集）

五月雨

五月雨は晴れむとやする山の端に懸れる雲の薄くなりゆく（玉葉集）

貞和百首の御歌の中に

蘆原や正しき國の風としてやまと言の葉末もみだれず（新千載集）

百首の御歌の中に、秋

吹きうつりなびくすゝきのすゑぐを長閑に渡る野邊の夕風

百首の御歌の中に、雜

里々のあけゆく音はいそげどものどかにしらむ山の端の空

百首の御歌の中に、釋教

世を照らす光をいかでかゝげまし消なば消ぬべき法の燈火

神祇を

神風にみだれしちりもをさまりぬ天照らす日のあきらけき世は（以上、風雅集）

秋の御歌の中に

ながめつるゆふべの空はくれはてゝ萩の葉風の音のみぞする

祝のこゝろを

ちはやぶる神のたもてる我國のあまつひつぎは今もたえせず（以上、臨永集）

花園院宸記の中に

誓ひおきし心のすゑの違はずば神と人との道もみだれじ

世の中に偽る道のたつならば正しき神をたれか仰がむ

今更にわが私をいのらめや世にあれば世を思ふばかりぞ

よこさまの道をしとめよ神の心ただしかれとて世をしまもらば

正しきとまがれるとわく道なくばかすむるまゝに世は亂れなむ（以上、花園院御集拾遺）

後醍醐天皇（第九十六代）

御在世 二二八—二三三九（崩御・五十二歳）
御在位 二二八—二三三九（三十一歳—五十二歳）

（この間、一三二一年まで御父・後宇多上皇の院政が行はれた）

——通称「大覺寺統・第四代」——
——通称「南朝・初代」——

第九十六代・後醍醐天皇は、第九十一代・後宇多天皇の第二皇子。久々に壮年期での御即位が見られることになり、御年三十一歳で即位せられ、しかも御在位も二十二年間と長くあられた。

青年期に即位された方で、天皇として二十二年の御在位を見るのは、実に第七十代・後冷泉天皇（御即位二十一歳、御在位二十四年）以来はじめての御事であり、すなはち、皇位として二十六代目、年月として二百七十年ぶり、といふ驚くべき年月を経ての事であった。このことは、史上劃期的な「建武中興」が、この後醍醐天皇によってなされたことと共に、日本国民の銘記すべき所でなければなるまい。

後醍醐天皇は、御即位の四年目、元亨元年（一三三二）に、まづ後宇多上皇の院政をやめて天皇の御親政に戻されるために、北畠親房らの人材を登用して、朝廷に「記録所」を復せられた。天皇は、皇室の衰微を、深く憂慮せられ、王政復古を目指して鎌倉幕府打倒の一念に徹せられ、その御生涯をそれに捧げられたのはもとよりのこと、そのお子様方にも、その御志がうけつがれ、すなはち大塔宮護良親王をはじめ、尊良親王、恒良

親王、成良親王、そして後に後村上天皇になられた義良親王、宗良親王、懷良親王がたが、全国にお散りになって、御父君の御素志貫徹のために、筆舌につくし難い御奮闘の御生涯を捧げられた。皇室挙げてのこの御活躍は、神武天皇の御東征、日本武尊の国内統一への御盡瘁を彷彿せしめるものであって、後醍醐天皇はじめ南朝御一統の方々に忠節を誓った将士、公卿の中には、北畠親房・北畠顯家の父子あり、日野資朝・日野俊基、さらには藤原藤房・季房の兄弟その他、楠木正成・楠木正行の父子あり、菊池武時（としと）の一族あり、新田義貞あり、村上義光あり、名和長年その他忠臣義烈の武将、名臣の続出を見たことも、あはせて注目すべき所でなければなるまい。殊に近畿における楠木、九州における菊池一族が、後々までその子孫を挙げ、皇室に忠勤の志を貫いたことは、まさに史上特筆すべきことと思ふ。

後醍醐天皇によって建武中興が達成されたが、それも一朝にして出来たことではなかった。はじめは倒幕の御計画が、鎌倉側に洩れて、正中元年（一三三二）に失敗せられ、日野資朝が佐渡に流され、ついで元弘元年（一三三二）にも、また未然に失敗、天皇は、笠置に逃れられたが、これも六波羅勢のために落城、元弘二年（一三三三）天皇は幕府（北條高時）によって、後鳥羽上皇が百十一年前に配流させられ給うた同じ隠岐の島に配流させられ給ふに至った。これと前後して北條高時は、恐れ多くも皇位を私する政策を企て、「持明院統」の皇室にあたられる光厳天皇を勝手に擁立、ここに、史上いふ所の「北朝の天子」が、歴代天皇と併立して登場される、といふ悲劇が到来するに至ったの

である。

後醍醐天皇が隠岐へ配流させられ給ふた間にも、天皇の御志は大塔宮護良親王と楠木正成らによって継承された。楠木正成は、赤坂城・千早城に拠って幕府の大軍を迎へ撃ち、落城後も、護良親王と相謀って苦しい戦ひを続けたが、元弘三年（一三三三）には、天皇が隠岐の島からの脱出に成功せられ、名和長年これをお迎へ申し上げた。他方、幕府側の武将であった新田義貞も反幕の挙兵を宣し、機を見るに敏なる足利高氏（建武中興の功により、後に後醍醐天皇の御名の一字を賜り、「尊氏」と改名）も、後醍醐天皇に帰順するに至り、こゝにやうやく北條氏は滅亡（一三三三）した。従って、北朝の光厳天皇は廢位となり、こゝに、建武の中興（一三三四）が成ったのである。

しかしながら、その戦後の論功行賞に当を得ぬことがあり、しかも足利尊氏の謀叛意志について、天皇側近の公卿たちが、これを見破ることができなかったといふ不手際によって、折角の「建武中興」も遂に挫折、延元元年（一三三六）には、天皇は都を逃られて、吉野山に難をお避けにならざるを得なくなった。楠木正成が湊川に討死したのをはじめ、多くの忠臣らは、次々に戦死し、こゝに都をお離れになったまゝ、後醍醐天皇のあとを継がれた後村上・長慶・後龜山各天皇が、吉野のあちこちを転々とお移りになられながら、いはゆる吉野朝五十七年間にわたって、至尊たる天皇の御生活としては、空前絶後ともいふべき、まこと御いたいたしい御生活が営まれることになったのである。

なほ後醍醐天皇は、吉野の行宮（かみぐさ）（仮りの皇居）におかせられて御年五十二歳で御生涯を

終へられたが、左右の御手に法華經の經卷と劍とをお握りになられたまゝ「魂魄は常に北闕の天を望まん」と仰せられ、北の方京都の空をみつめながら崩御せられた、と伝へられてゐる。その故であらうと思はれるが、歴代天皇の御陵墓が南向きにつくられてゐるのに対して、吉野の如意輪寺横の山腹の、まことに狭い御墓地につくられた後醍醐天皇の御陵墓は、北向きにできてをり、特に「北面の陵」とも申し上げるのである。なほ天皇には、年中恒例の公事を国文で書かれた「建武年中行事」、禁中の日々の御行事を記された「日中行事」などの著が残されてゐる。

(御陵墓は、奈良県吉野郡吉野町にあり、塔尾陵〔円墳〕と申し上げ、また、御霊は吉野山の一角にある吉野神宮に祀られてゐる。)

聞擣衣といへる心を

急ぐなる秋のきぬたの音にこそ夜さむの民のこゝろをも知れ

恋の御歌の中に、題しらず

まだ知らぬ人の心をたどるまにいはで月日のつもりぬるかな(以上、統千載集)

待郭公といふことをよませ給うける

人づてに聞き初めしより郭公ながなくこゑを待たぬ日はなし

百首の歌召されしついでに

露よりも猶なほことしげし萩の戸のあくれば急ぐ朝まつりごと

世をさまり民やすかれと祈るこそ我が身につきぬ思ひなりけれ

題不知

みな人の心もみがけちはやぶる神の鏡のくもる時なく（以上、続後拾遺集）

元享元年（一二三二）七月七日乞巧奠（註・陰曆七月七日の夜、供へ物をして牽牛・織女星をまつる行事）の夜

笛竹のこゑも雲井にきこゆらし今宵たむくるあきのしらべは（増鏡）

十首の歌めしけるとき、秋夕雨といふことをよませ給うける

夕づく日しぐれてのこる山の端のうつろふ雲に秋かぜぞ吹く

正中（一二三四）の百首の歌めされけるついでに、賀

四方の海をさまりぬらし我が國の大和島根に波しづかなり（以上、新拾遺集）

正中二年（一二三五）百首の歌召されしついでに

おのづから人の心の隈もあらばさやかに照らせ秋の夜の月（新後拾遺集）

百首の歌めされけるついでに、夏

民のため時ある雨をいのも知らでや田子の早苗取るらむ

秋の御歌の中に、題しらす

くもりなきためしと見てぞ秋の夜の月にも分きて心とよめし

建武二年（一二三五）人々題をさぐりて千首歌つかうまつりけるついでに述懐歌とてよませ給うける

身にかへて思ふとだにも知らせばや民の心の治めがたさを（以上、新千載集）

うへのをのことも歌合し侍りけるついでに、夏夜言志といふことをよませ給うける

みじか夜ははやあけがたと思ふにも心にかかる朝まつりごと（臨永集）

笠置の行宮(註・天皇の仮の御殿)におはしける時

うかりける身を秋風にさそはれて思はぬ山のもみぢをぞ見る(増鏡)

笠置の行宮をのがれ出で、有王山といふところまで落ちのびさせ給ひて、幽谷の岩を枕にて、うつゝの夢にふし給ふ折しも、梢を払ふ松の風を雨の降るかときこしめして木の蔭に立ちよらせ給ひたれば、上露のはら／＼と御袖にかゝりけるを御覧して

さしてゆく笠置の山をいでしより天が下にはかくれがもなし(太平記)

隠岐國へうつされさせ給ふべき日、六波羅にて

遂にかく沈みはつべきむくひあらば上なき身とは何生れけむ
いさしらず猶うき方のまたもあらば此宿とても忍ばれやせむ

隠岐國へ遷御の御道すがら淀のわたりにて警固の將、佐々木道譽にたまはせける

しるべする道こそあらずなりぬとも淀のわたりは忘れしもせじ

播磨國を過ぎさせ給ふに、いと高き山の峰に花おもしろくさきつゞきて、白雲をわけゆく心地するも艶なるに、都のことかす／＼おぼし出で給ひて

花はなほうき世もわかず咲きてけり都も今やさかりなるらむ
あと見ゆる道のしをりのさくら花この山人のなさけをぞ知る

御心地なやましくて美作國に二三日やすらはせ給ひけるとき

あはれとはなれも見ゆるらむ我が民をおもふ心は今もかはらず
よそにのみ思ひぞやりしおもひきや民の寵をかくて見むとは

久米のさら山といふ所越えさせ給ふとて

聞きおきし久米のさら山越えゆかん道とはかねて思ひやはせし

隠岐國におはしましけるとき、浦めく所にたちいでさせ給ひて、はるかに浦のかたを御覽して

こゝろさす方をとほや浪のうへに浮きてたゞよふ蟪の釣舟（以上、増鏡）

雑の御歌の中に

まだなれぬ板屋の軒のむら時雨おとを聞くにもぬるゝ袖かな

埋もるゝ身をばなげかずなべて世のくもるぞつらき今朝の初霜

題しらず

これまでではなほも都の近ければおなじ空なる月をこそ見れ

ながむるを同じ空とぞ知らせばや故郷人も月は見るらむ

題しらず

忘れめやよるべもなみの荒磯を御舟の上にとめし心は

元弘三年（一二三三）隠岐國より忍び出でさせ給ひける時に、名和長年御迎へに参りて船上山といふ所へなし奉

りける程の忠、ためしなかりし事などしるしおかせましましける物の奥に書き添へさせ給ひけるとぞ

いかなる時にかありけむ、後京極院の御方より御琵琶をめされけるをたてまつるとて

「おもひやれ塵のみつもる四の緒にはらひもあへずかゝる涙を」とよみて奉らせ給うけるに、御返し

涙ゆゑなかばの月はくもるともなれて見し世の影はわすれじ（以上、新葉集）

建武二年（一二三三）（註・その前年、「建武中興」成る）千首の歌に立春の歌とてよませ給うける

もろびとにたまものすらし立つ春の始の今日の豊とよのあかりは

建武二年（一二三三）千首の歌よませ給うけるに

九重まことや近きまもりの圓居まどして名のるを聞けば夜は更よけにけり（以上、新千載集）

吉野の行宮あきつにおましましてとき、雲居くもの櫻つばきとて世尊寺のほとりにありける花の咲きたるを御覽ごらんして、よませたまうける

こゝにても雲居の櫻さきにけりたゞかりそめの宿とおもふに

吉野の行宮にて、うへのをのこども題を探りて歌よみ侍りけるついでに、五月きみ雨だまといふことをよませ給うける

都だにさびしかりしを雲はれぬ吉野のおくのさみだれのころ

吉野の行宮にてよませ給うける御歌の中に、冬

ふし（風）わびぬ霜寒き夜の床はあれて袖にはげしき山おろしの風

吉田前内大臣、右大弁清忠など、うちつゞき身まかりにける頃、おぼしめしつゞけさせ給うける

こととはむ人さへ稀まになりにけり我が世の末の程ぞ知らるゝ（以上、新葉集）

後村上天皇（第九十七代）

御在世 一三二八—一三三八（崩御・四十一歳）
御在位 一三三九—一三六八（十二歳—四十一歳）

—通称「南朝・第二代」—

第九十七代・後村上天皇は、第九十六代・後醍醐天皇の第十二番目の皇子。御名を義良（親王）と申し上げた。十二歳で即位されたが、その後、九年にして楠木正成の子正行が、足利尊氏の将、高師直と戦ひ、遂に自刃して果てた「四条畷の戦」（正平三年—三四八）があり、九州における南朝側の忠臣菊池武光が、征西將軍・懷良親王を奉じて、足利側少貳頼尚らと久留米附近の筑後川をはさんで戦ひ、之を走らしめた「筑後川の戦」（正平十四年—一三五九）など、各地における戦ひは続いた。その間、後村上天皇も、吉野の行宮から、賀名生の仮の宮に、ついで、山城の男山、河内の天野山、摂津の住吉へと転々とお移りになり、御父君・後醍醐天皇の御苦闘に勝るとも劣らぬ御苦澁の御生涯を送られたのである。

なほ後村上天皇（義良親王）は、六歳の御時に建武の中興が成り、北畠顯家に奉ぜられて奥羽に赴かれた。その後、足利尊氏が謀叛するに及び、延元二年（一三三七）北畠顯家らと共に奥羽を発し、西上なされたが、敗れて吉野にのがれられ、越えて延元四年（一三三九）に再び顯家の父・北畠親房らと海路、東国に赴かれる途中、遠州灘で暴風雨

に遭遇せられ、海上でちり／＼になった挙句、多くの船が千葉その他に漂着した中で、
義良親王の御乗船だけは、不思議にも伊勢に漂着、やむなく吉野にお戻りになられるこ
とになった。この年、御父・後醍醐天皇が、吉野の行宮で崩御なされ、これに御立ち合
ひなさることが出来たのは、まことに不思議な御天命と申し上げるよりほかに言ひ様が
ない。(なほ北畠親房は、無事目的地の常陸の国にたどりつき、その小田城で「神皇正統記」の
著述を完成した。)かくして皇太子・義良親王は御即位せられた。天皇は、御在位が三十
年に及ぶが、その長さは、三十七代前の第六十代・醍醐天皇の御在位三十四年以來のこ
とであった。

(御陵墓は、大阪府河内長野市寺元にあり、檜尾陵〔円墳〕と申し上げる。)

花の御歌の中に

咲きぬべき片枝にうつる心かなかつ見る花もめかれせぬまに (*めかれ目離れ)

吉野山の行宮(註・仮の御殿)にてよませ給うける御歌の中に

おのづから故郷人のことづつても有りけるものを花のさかりは

正平八年(一二五三)うへのをのこども題を探りて千首の歌つかうまつりけるついでに、禁中花を

あひ思はゞ見ざらむものか百敷の花も千とせの春のさかりを

水邊壺をよませ給うける

夏草のしげみが下のうもれ水ありとしらせて行くほたるかな

中務卿宗良親王(御弟君)あづまに侍りし頃、すみよしの行宮よりたまはせ侍りし

年をふるひなのすまひの秋はあれど月は都とおもひやらなむ

(詠)
初冬の心をよませ給うける

夜やさむきしぐれやしげき曉のねざめぞ冬のはじめなりける

中務卿宗良親王あづまにすみ侍りしころ、御こゝち例ならぬ(註・御病氣)よしなどおほせられしついでに

めぐりあはむ頼みぞしらぬ命だにあらばと思ふほどのはかなさ

題しらす

都をも同じひかりと思はずば旅寝の月をたへて見ましや

石清水を

神もまたあはれと思へ石清水こがくれて我がすめるこゝろを

百首の歌よませ給うける中に、日吉を

おしなべて照らさぬ方やなかるらむたのむ日吉の神のひかりは

百首の歌よませ給うける中に、寄社祝を

ゆく末をおもふも久し天つ社やしろにつやしろのあらむかぎりは

百首の歌よませ給うける中に、寄屋恋といふことを

人しれずものをぞ思ふ津の國のこや(風俗)のし(後屋)のやの隙ひまもなきまで

年中行事を題にて、人々百首の歌つかうまつりけるついでに、朝拜のこゝろを

高御座たかみくらとばりかゝげてか(權原)しはらの宮のむかしも(著)しるき春かな

建武(一二三四七七)のころ、花山院を内裏だいり(註・御所)になされて侍りけるとき、

御元服ありしことなどおぼしいで、よませ給うける

花山のはつもとゆひの春の庭わが立ち舞ひしむかし戀ひつゝ(*)はつもとゆひ||初元結、御元服のこと

百首の歌よませ給ひて前大納言爲定の許へつかはされける中に

すなほなる昔にかへれたねとなる人のこゝろのやまと言の葉

うへのをのこともえんあはせ歌合し侍りけるついでに、思往事といふことをよませ給うける

忘ればや忍ぶも苦しかず／＼に思ひ出でても歸りこぬ世を

懐舊非一といふことを

我が忍ぶおなじ心の友もがなそのかず／＼をいひいでゝみむ

雑の御歌の中に

我が末の代々にわするなあしがら(尾櫓)や箱根の雪をわけし心は

鳥の音におどろかされて暁のねざめしづかに世を思ふかな

百首歌よませ給うける中に

仕ふべき人や遣ると山ふかみ松の戸ざしもなほぞたづねむ

賀の御歌の中に

四つの海なみもをさまるしるしとて三つの寶を身にぞつたふる(*)三つの寶||三種の神器

九重にいまも(眞澄)ますみの鏡こそなほ世をてらすひかりなりけれ(以上、新葉集)

住吉の行宮より宗良親王におほせられし

いたづらに今年もなかば過ぎにけり我があふ事はいつを限ぞ

長慶天皇（第九十八代）

御在世 一三四三—一三九四（崩御・五十二歳）

御在位 一三六八—一三八三（二十六歳—四十一歳）

—通称「南朝・第三代」—

第九十九代・後龜山天皇の御在位期間の初期における 院政期間一三八五—一三八六年頃まで
（四十三歳—四十四歳頃）

第九十八代・長慶天皇は、第九十七代・後村上天皇の第一皇子。長慶天皇の御代は、官軍と賊軍（足利側）の交戦が絶えず続き、天皇は常に暗澹たる御心境で御父君・後村上天皇の御志を継承せられたが、明徳二年（一三九四）五十二歳で崩せられた。御父君の後村上天皇と同じく、御在世中はつねに皇居らしき所もなく、摂津の住吉の行宮（あんぐう）で踐祚なさったあと、その翌年は吉野、文中二年（一三七三）には金剛寺、ついでまた吉野、そして天授五年（一三七九）から弘和二年（一三八二）までは、大和の榮山寺（註・奈良県五条市の東方）へと行宮を移され、御苦闘休むいとまもなき御生涯であられた。なほ、天皇には国事多難の間にあっても、歌学を究められ、源氏物語中の語句に解釈を加へられた「仙源抄」という御著書がある。

長慶天皇は、歴代天皇の中で一番おそく大正十五年（昭和元年—一九二六）になって、天皇の御在位が確定し、皇統譜に第九十八代の天皇として正式に登列せられることになったが、長い間長慶天皇の御在位が疑問視せられてきたことをはじめ、次の後龜山天皇

の院政をいつまでなさったかもわからぬことなどは、南朝の天皇がたの御生涯が、足利

幕府の追撃の中で、いかばかりか苦しい御逃避の連続であられたかを示して餘りあると

申すはかはない。恐らく南朝の天皇がたについては今日に伝はらぬ澤山の御製があられ

たのではなからうかと考へるのは、必ずしも編者の感懐のみではなからうと思ふ。

(御陵墓は、京都市右京区嵯峨天龍寺角倉町にあり、嵯峨さか東陵ひがしのみやま〔円墳〕と申し上げる。)

春

出づる日の影も神代にかはらねばわが國よりや春はたつらむ

夏

あつめては國の光になりやせむ我が窓てらすよはのほたるは

秋

風はやみしぐるゝ雲もたえぐにみだれてわたる雁の一つら

冬

うつろはぬ人の心のためしとやこの山路まで残る白菊

*星うたふ聲にもしるしちはやぶる神の鏡はただここにます(*星神樂歌の名、賀名生あなぶの皇居内の神鏡を奉安した内侍所で神樂を奏したのである)

雜

しづかなる心はなほぞなかりける世を思ふ身の山のすまひに

峯たかき龜の尾山の瀧つ瀬のながれは絶えじよろづ代までに(以上、天授元年一三七五―五百番歌合)

夢中懷旧（同）

思ひつつぬればみし世にかへるなり夢路やいつも昔なるらむ

都月（天授二年—三七六—千首和歌）

月はなほ同じ雲のをめぐりけり身にはへだつる都なれども

寄煙述懷（同）

高き屋に煙をのぞむいにしへにたちもおよばぬ身をなげきつゝ

寄道述懷（同）

教へおくひじりの道はあまたあれどなすは一つの誠なりけり

寄江述懷（同）

すみやらぬ世のことはりを思ふにも猶にこり江のみづからぞうき

伊勢（同）

神路山あふげば高くいづる日の上なくてらす光をぞみる（*神路山＝伊勢神宮の内宮を指す）

賀茂（同）

雲わけてのぼる光の誓あればわが思ふことの末もたのもし

吉野の行宮にて、人々に千首の歌めされしついでに、山花といふことをよませ給うける

わが宿とたのまずながらよしの山花になれぬる春もいくとせ

千首の歌めされしついでに、花挿頭といふことをよませ給うける

をさまらぬ世の人言のしげければ櫻かざしてくらす日もなし

みこにおましましけるとき、内裏にて三百首の歌講ぜられけるに、寄日祝といふことを

久方の天の岩戸を出でし日やかはらぬかげに世をてらすらむ

千首の歌めされしとき、朝落葉

風さむみ朝日ももらぬ山かげに霜ながら散る木々のもみぢ葉

中務卿宗良親王、道にて世を背きけるよしきこしめされければ、この春、千首の歌の中に

「今年ばかりの花染の袖」とよみたりし事など、おぼしめしいでらるゝよしおほせられしついでに

忘るなよ木曾の麻衣やつるとも同じよし野の花ぞめのそで（以上、新葉集）

後ご龜かめ山やま天てん皇のう
(第九十九代)

御在世 一三四七—一四二四(崩御・七十八歳)
御在位 一三八三—一三九二(三十七歳—四十六歳)

——通称「南朝・第四代」——

第九十九代・後龜山天皇は、第九十七代・後村上天皇の第二皇子で、第九十八代・長慶天皇の御弟君にあられる。三十七歳で踐祚せられ、御在位十年のとき、正統の皇位継承者のみが御所持になって来られた「三種の神器」を、北朝・第六代の後小松天皇に御渡しなされて、御讓位になられた。

これによって、第八十九代・後深草天皇(持明院統)と第九十代・龜山天皇(大覺寺統)からはじまった「兩統迭立」の悲劇は、約百五十年近い年月を経て、表向きに終止符を打ち、歴史上では、南朝・北朝の合体が成った、といふことになる。しかし、この間を幹旋した足利氏(室町幕府)の行動は、「南朝」の後龜山天皇を欺き奉ったともいふべく、自己一族が擁立し来った「北朝」をして、正統の皇位に切り替へるための謀略を成功せしめたものといふべきであらうか。

すなはち、「南朝」の天皇方は、いづれも「大覺寺統」であられたのに対して、足利氏が擁立してきた「北朝」の天皇方は、いづれも「持明院統」であられたことから、幕府の足利義満は、約七十五年前の「兩統迭立のルール」を楯に取って、皇位が長らく「大覺寺統」のみで続いたことを問題にし、義満は、後龜山天皇に対し、「皇位の兩統

迭立を将来にわたり履行する」など三ヶ条を条件に、「北朝」の後小松天皇に、「三種の神器」をお渡し下さるやうに願ひ出た。時に元中九年（一三九二）。所が足利義満は、後龜山天皇が後小松天皇に皇位をお譲りになられる（同年）と、自ら提示した条件を履行せず、幕府権力の確立にのみ意を注ぎ、応永元年（一三九四）に太政大臣の位を得、その翌年、出家しても、実権を握ったまゝでをり、応永四年（一三九七）には、北山に別荘として、豪華な金閣寺を建てると、後龜山上皇をはじめ、「南朝」の人々に対する傍若無人の振舞ひを続けた。

かうした足利義満以下、室町幕府の面々の所行を目のあたり見続けられた後龜山上皇は、応永十七年（一四一〇）に御歳六十四の御高齢にも拘らず、吉野に籠られることになり、南朝の旧臣も参集して、こゝに南朝再興の運動が起きた。しかし「三種の神器」を捧持してこそ「南朝」の大義名分は立ってゐたが、実力皆無に近い情況で事こゝに至っては、もはや如何ともなしがたく、翌年、幕府とのあひだに和議が成り立ち、応永二十三年（一四一六）には、上皇も京都にお帰りになられることになった。

（御陵墓は、京都市右京区嵯峨鳥居町にあり、嵯峨小倉陵〔五輪塔〕と申し上げる。）

春宮（註・皇太子）のときの御哥

なりはひにたのむ所や多からん日をへてつきずとる早苗哉

尋ねばやうきをそむける住みにも世は忘れぬ月のかげ哉

物思へばには（場）のうきすもよそなれや沈む計りのみ（身）を歎く哉

(以上、群書類従、第七輯和歌部、中務卿宗良親王、跋千首和歌の「跋文」の末尾に)

正平廿三年(二六八・この年御父君後村上天皇崩御)八月、つねよりもあはれなりし夕暮に、春宮(後龜山天皇)の御かたより嘉喜門院(註・御母君と推定されてゐる)へ(天授三年―一三七七―嘉喜門院御歌卷)

おもひやれおなじ空にやながむらんなみだせきあへぬ秋のゆふ暮

(嘉喜門院から御かへし)

(せきあへぬなみだのほどもおもひしれおなじながめのあきの夕暮)

山深く住みたまひける頃、梅の花の咲きたるを御覧じて

山深み人こそ訪はね咲きなばといひし計りの宿の梅が枝

嵯峨の奥に住ませ給ひける秋の頃

思遣る人だにあれな住慣れぬ嵯峨野の秋の露は如何にと

夜更くるまで月を御覧じて

見るからに慰めかぬる心とも知らずがほなる月のかげ哉(以上、新統古今和歌集)

光こう 嚴ごん 天てん 皇のう

(歴代外天皇)

御在世 一三三三—一三六四(崩御・五十二歳)

御在位 一三三三—一三三三(十九歳—二十一歳)

(この間、御父・後伏見上皇の院政が行はれた)

——通称「北朝・初代」——

北朝第二代・光明天皇の御在位全期間
北朝第三代・崇光天皇の御在位全期間

における院政期間 一三三六—一三五—

(二十四歳—三十九歳)

北朝の初代・光嚴天皇は、第九十三代・後伏見天皇の第三皇子。嘉暦元年(一三三六)十四歳のとき、後醍醐天皇の皇太子になられたが、その後北條高時は、御歴代の皇位に後醍醐天皇が御在位せられてゐるにかゝはらず、勝手にこの皇太子を推戴して、「持明院統」の朝廷を建て、いはゆる歴史上、「北朝」と呼ばれることになった。

光嚴天皇は、歴代外天皇の初代であり、十九歳で踐祚、平安宮から穴生宮(あなまがらみや)の皇居で御在位二年、元弘三年(一三三三)北条氏の滅亡とともに、二十一歳で御廃位となる。かくして、「北朝」は中断され、その後三年間にわたる「北朝皇位の空白期」を経て、足利尊氏の擁立によって北朝・第二代・光明天皇が踐祚され、北朝が復活することになった。

以後、北朝・第二代の天皇と、第三代の天皇の在位期間中、北朝・初代天皇であられた光嚴上皇が院政をおとりになり、五十二歳でおなくなりなられた。なほ、今日のわが皇室におかせられては、「北朝五代の天皇方(がた)」については、皇位順位からは除外せら

れながらも、御靈の祭祀はじめすべての点で、歴代天皇と同じ御扱ひを遊ばされてをられる。特に「皇統譜」への御登録も規定せられてゐる由である。

（御陵墓は、京都府北条郡京北町にあり、山國陵〔円墳〕と申し上げる。）

波の上はあまぎる雪にかきくれて松のみしろき浦のをちかた

述懐

たゞしきをうけつたふべき跡にしようたてもまよふ敷島の道
舟もなくいかだも見えぬ大河に我わたりえぬみちぞくるしき

竹

風になびく竹のむら／＼すゑ見えて夕日に晴るゝ遠の山もと（以上、光嚴院御集）

貞和（二三四五九）の百首の歌召されけるついでに

十年あまり世を助けべき名は舊りて民をし救ふ一事もなし（新後拾遺集）

冬の歌の中に

寒からし民のわら屋を思ふには我のうちの我もはづかし

雑の歌の中に

鐘の音に夢は覺めぬる後にしも更に寂しきあかつきの床

雑の歌の中に

照りくもり寒きあつきも時として民に心の休む間もなし

百首の歌の中に

(歌)

治まらぬ世のためのみぞうれはしき身のための世はさもあらばあれ

河を

(五十鈴川)

よどみしも又立ち歸るいすゞかは流れの末は神のまに／＼(以上、風雅集)

光こう明みょう天てん皇のう
（歴代外天皇）

御在世 一三三二—一三八〇（崩御・六十歳）
御在位 一三三六—一三四八（十六歳〜二十八歳）

（この間、御兄・光嚴上皇の院政が行はれた）

——通称「北朝・第二代」——

北朝・第二代・光明天皇は、北朝・初代の光嚴天皇の御弟君に当られ、第九十三代・後伏見天皇の第九皇子。光嚴天皇が在位二年で、御廃位になられて三年後、こんどは足利尊氏の擁立によって、光明天皇が北朝・第二代天皇（歴代外天皇）として踐祚せられた。ついで、足利尊氏は、建武三年（一三三六）京都に室町幕府を開設した。

（御陵墓は、京都市伏見区桃山町泰長老にあり、太光明寺陵〔円墳〕と申し上げる。）

早春梅といふことを

ふりつみし雪（消）もけなくに深山みさまべ邊も春し來ぬれや梅咲きにけり

秋望といふ事を

夕日うつる外面とのもの杜もりのうす紅葉寂しき色に秋ぞ暮れゆく

冬の御歌の中に

霜こほる竹の葉は分わけ*に月冴えて庭しづかなるふゆの小夜中さよなか（以上、風雅集）（*葉分Ⅱ一枚々々の葉）

秋の御歌の中に

秋風の夜床をさむみいねがてにひとりしあれば月かたぶきぬ（新拾遺集）

崇光天皇こうてんのう

(歴代外天皇)

御在世 一三三四—一三九八(崩御・六十五歳)
御在位 一三四八—一三五二(十五歳—十八歳)

(この間、御父・光厳上皇の院政が行はれた)

—通称「北朝・第三代」—

北朝・第三代・崇光天皇は、北朝・初代の光厳天皇の第一皇子。御歳十八で御廃位なさったあと、北朝における第二回目の空位期が生ずることになる。さきに第一回目の空位が、北条氏の滅亡によって生じたのと類似して、この第二回目の空位の発生は、足利尊氏が正平六年(一三五二)に「南朝」に降服したために「北朝」が廃せられたがためである。そしてその翌年、北朝の崇光上皇は、光厳・光明兩上皇とともに、北畠顯能によってとらはれの御身となられ、賀名生あななぶにお移りになられたが、五年後の正平十二年(一三五七)には再び帰京せられることになる。なほ、この空位期間は約二年で終止符を打ち、正平七年(一三五二)には、後光厳天皇が足利尊氏らによって擁立された。(御陵墓は、京都市伏見区桃山町泰長老にあり、大光明寺だいこうみやうじ、寺陵(円墳)と申し上げる。)

懐舊の心をよませ給うける

瀬をはやみ行く水よりもとめがたく過ぎし昔ぞなほ忍ばるゝ

神祇をよませ給うける

鈴鹿川（八十題）やそせの波のたちるにも我が身のための世をば祈らず（以上、新千載集）

冬望といふことを

冬ふかみさびしき色はなほ添ひぬかり田の面の霜のあけがた

雑の御歌の中に

しきしまの道は正しきみちにしも心づからやふみまよふらむ（以上、新拾遺集）（*心づから||自分の心が原

因で）

後光嚴天皇ごこうげんてんのう
(歴代外天皇)

御在世 一三三八—一三七四(崩御・三十七歳)
御在位 一三五二—一三七一(十五歳—三十四歳)

——通称「北朝・第四代」——

北朝最後の第五代・後圓融
天皇の御在位期間の前期

(一三七一—一三七四)
(三十四歳—三十七歳)

北朝・第四代・後光嚴天皇は、北朝・初代の光嚴天皇の第二皇子で、同第三代の崇光天皇の御弟君に当られる。足利尊氏は一時、「南朝」に降服したが、再び室町幕府第二代將軍・足利義詮よしあきらと共に「北朝」を開設し、後光嚴天皇を擁立した。天皇は御在位中、しばし南朝軍に攻撃を受けられ、美濃・近江など諸所に難をのがれた。

(御陵墓は、京都市伏見区深草坊町にあり、深草北陵〔法華堂〕と申し上げる。)

百首の歌召されけるついでに、暮春の御歌

散り果つる花の跡だに寂しきをいかにせよとて春のゆくらむ

蘆橋

うつしうゑし昔をかけてかたならなむ代々のみはし(階)ににほふ橘たちばな

夕立

見るまゝに外山とやまのみねは雲はれて夕立すぐるかぜぞすゞしき

夏敷

みそぎする河瀬に秋やかよふらむ麻の葉ながす風ぞすよしき

里人のあさげ（朝）のけぶりたちそひて霧はれやらぬをち（遠方）の一むら

拂衣

きくからに民の心もあはれなり夜さむを時ところもうつこゑ

祝言

代を治め民をあはれむまことあらば天津日嗣の末もかぎらじ（以上、後光嚴院御百首）

百首の歌召されしついでに

なほざりに思ふ故かと立ち歸り治まらぬ世を心にぞ問ふ（新千載集）

後ご圓えん融ゆう天てん皇おう（歴代外天皇）

御在世 一三五八—一三九三（崩御・三十六歳）

御在位 一三七一—一三八二（十四歳）—二十五歳

（はじめの四年間は、御父・後光嚴上皇の院政が行はれた）

——通称「北朝・第五代」——

北朝第六代・後に歴代天皇第百代
になられた後小松天皇の御在位期
間のはじめの十二年間

における院政期間一三八二—一三九三

（二十五歳—三十六歳）

北朝・第五代・後圓融天皇は、北朝・第四代の後光嚴天皇の第二皇子。御讓位のあと三十六歳でおなくなりになられるまで、後小松天皇期約三十年間（うち歴代外天皇として約十年、歴代天皇として約二十年）のうち、はじめの約十年間、「北朝」としての院政をおとりになった。この間、明德三年（一三九二）室町幕府の足利義満の和平提案に対し、（南朝側）第九十九代・後龜山天皇が、（北朝側）後小松天皇に「三種の神器」をお渡しになることよって両朝合体を実現することに、同意せられた。古来、わが国における正当な皇位継承者たるの資格を証明するものは、この「三種の神器」を所持することである。たから、こゝに北朝・第六代の後小松天皇は、南朝・後龜山天皇の御意志に基き、改めて正当の歴代天皇の列に列せられることになったのである。

（御陵墓は、京都市伏見区深草坊町にあり、深草北陵〔法華堂〕と申し上げる。）

今朝はまず野守を友とさそひてや知らぬ雪間の若菜つままし（新後拾遺集）

至徳（北朝の年号）四年（二三八七）七月七日、仙洞にて七首の歌講ぜられけるついでに、暮山鹿を

しぐれゆく外山とやまの雲に鳴く鹿のおもひや晴れぬ秋のゆふぐれ（以上、新統古今集）

後ご小こ松まつ天てん皇のう（第百代）

御在世 一三七七—一四三三（崩御・五十七歳）

御在位 一三九二—一四二一（十六歳）
（三十九歳）

（北朝の天皇として御在位一三八二—一三九二）

（十六歳—十六歳）

——御即位前は通称「北朝・第六代・天皇」——

第百一代・稱光天皇御在位の全期
第百二代・後花園天皇御在位の三
十六年間のうち、初めの五年間

における院政期間一四二二—一四三三

（二十六歳—五十七歳）

第百代・後小松天皇は北朝・第五代の後圓融天皇（持明院統）の第一皇子。六歳で、北朝・第六代の天皇として即位されたが、後龜山天皇の項および前項で記したやうに、「北朝」として在位十一年目の明德（北朝の年号）三年（二三九〇）に、室町幕府の足利義満の介入によって、第九十九代・後龜山天皇から、「三種の神器」の御譲り渡しを受けられると共に、正統の皇位を継承せられることになられた。皇居は九十年ぶりに平安宮（その間、北朝の天皇が使はれたが）といふことになり、御在位二十一年。その後、五十歳でおなくなりになられるまで、院政をお執りになられたので、後龜山天皇から皇位を譲り受けられた時から起算しても、御在位二十一年、院政二十二年間、合計四十二年間といふ長期にわたって、政治をみそなはせられたことになる。

しかし、何と申しても、足利義満を深く重んぜざるを得ぬ御立場にあられたため、永

應元年（一三九四）には、義満を太政大臣に任ぜられたのをはじめ、永應十四年（一四〇七）には、義満の後室、日野康子を准母（天皇の母に准ずる方）として、北山院の号を贈られたり、さらにその翌年、永應十五年（一四〇八）この年に義満、死亡）には、北山殿（義満の居所、金闕寺）に行幸されて、義満の息子の義嗣を猶子（他人の子を自分の子とすること）となさるなどの事が次々に行はれた。すべては義満に気兼ねをされての、やむを得ぬ御行動であられたと思はれる。足利尊氏の後醍醐天皇に対する叛逆にはじまり、足利義満の後龜山天皇に対する欺瞞と違約を加へ、足利一族のわが皇室に対する不遜さは、こゝに極まるといふべきであらう。

なほ、義満の子で室町幕府・第四代將軍の足利義持は、義満の行き過ぎを自覚し、後小松天皇が、死せる義満に対して「太上天皇」の号を追贈せられたのを御辞退申し上げて、一大不祥事を未然に防いでゐるのは注目すべきことと思ふ。また、父・義満は明国に対して通商を求め、実質上では臣従ともいふべき朝貢の形式を取ってをり、一四〇四年以後になると、明国から室町幕府に対して勘合符を送って来て、それに従って貿易がなされたが、足利義持は、断乎として日明貿易の中止に踏み切った（一四一九）など、いくつかは正政策を断行した。しかしながら、この義持も、酒色に溺れるといふ欠点があり、ために政治面では、紛争が絶えなかった。

（御陵墓は、京都市伏見区深草坊町にあり、深草北陵〔法華堂〕と申し上げる。）

立春

たちかへる神代の春やしるからしたかまがはらに霞たなびく

苗代

なはしろの畔もしどろに行く水のすみもさだめず鳴く蛙かな

薄子

こと草は咲きこぼれても花すゝきなびく姿に似るものぞなき

蟲

思ひありと聞きふすからに秋の夜のふくるはかなし松蟲のこゑ

月

身をてらす影ともあふぎ憂き事をかこつもおなじ秋の夜の月

河舟

日くるればこもかり船ものほるなりかへさやいそぐ淀の里人（以上、後小松院御百首）（*かへさ||婦り道）

百首の御歌の中に

哀れなり小田もるいほにおくかびの烟や民の思ひなるらむ（*かび||蚊遣火のこと）

神祇（応永一四年—一四〇七—内裏九十番御歌合）

蘆芽と見えしかたちをはじめにて國つやしろの神のかしこさ

義仁法親王（註・後龜山天皇の御曾孫）、月の頃、桐尾よりまかり出でて内裏近き所にやどりて、よもすがら琵琶を

弾じ侍りけるを遙にきこしめしておほせごとありける

弓張のなかばの月のかげよりもなほ澄みまさる四の緒のこゑ

竹為師といふことを

九重や庭の河竹かはらねば代々の跡あるしるべとぞ思ふ（以上、新統古今集）

追日懷舊

こしかたはかく忍ばむと思ひきや老の心ぞあはれはかなき

社頭祝言

日とてらし土とかためてこの國を内外うちとの神のまもるひさしき（以上、後小松院御百首和歌）

後ご花はな園ぞの天てん皇のう（第百二代）

御在世 一四一九—一四七〇（崩御・五十二歳）

御在位 一四二八—一四六四（十歳—四十六歳）

（この間、はじめの五年間は後小松上皇の院政がつづく）

第百一代・稱光天皇は、後小松天皇の第二皇子。朝鮮の兵が對馬に來寇するなどの事があるにもかゝはらず、將軍・足利義持父子が酒色に溺れてゐるのを歎かれつゝ、御年二十八歳でなくなられた。歌は残されてゐない。

（御陵墓は、京都市伏見区深草坊町にあり、深草北陵〔法華堂〕と申し上げる。）

ついで第百二代に立たれた後花園天皇は、北朝第三代・崇光天皇（第九十三代・後伏見天皇の御孫に当られる）の御曾孫に当られる。稱光天皇が、お若くていまだ御嗣子があらぬまゝ、重病にお罹りになられた（一四二八）ので、室町幕府は、後龜山天皇との「兩統迭立」の御約束によつても南朝側からお迎へすべきであるのに、それを嫌つて、再び強引な手を打つに至つた。すなはち、彦仁王（後花園天皇）を、親王としての宣下（宣旨が下ること）もなく、また立太子の儀式もあらぬまゝに、後小松上皇の猶子（親族または他人の子を自分の子とすること）となし、直ちに彦仁王が、王のまゝで踐祚なさるることになった。時に御年は十歳であられた。このため、南朝系の小倉宮（後龜山天皇の御孫）が、幕府の違約を責められ、伊勢の国司・北畠満雅を頼つて挙兵された（一四二八）が、失敗に終られたといふ事態も生じた。

後花園天皇は、御在位三十七年といふ長い間、位にをられ、はじめの五年間は、後小松上皇の御存命中であったため、その院政がなされたが、御歳十五からは、御親政といふことになるわけである。そしてこのあと、約二百年間は、史上久々に院政が見られない時期が続くことになった。

後花園天皇の御代では、室町幕府の足利義満以来の強固な屋台骨にも、次第に脆弱さが見え出すのであるが、第六代將軍・足利義教のもとで、永享十年（一四三八）に「永享の乱」（足利持氏の謀叛）があり、これは平定し得たが、三年後の嘉吉元年（一四四一）には、「嘉吉の乱」が起り、將軍・義教は、赤松満祐のために遂に殺されるに至った。なほ、義教は、永享四年（一四三三）に明国との修好を復し、爾後、明との交流が再び活潑になっていった。またこの御代は、第八代將軍・足利義政の時であるが、太田道灌が長祿元年（一四五七）江戸城を築いてをり、天皇御譲位の前年（一四六三）には、僧・雪舟が明から帰国することも見えてゐる。その間にあって後花園天皇は、一字三禮の「般若心經」を書写して天下の平安をお祈りになり、或は足利義政の奢侈を誡められ、さらには、皇太子成仁親王（註・後の後土御門天皇）に御教誡の宸翰をお寄せになるなど、さまざまに心をくだいて生涯を終へられたのである。

（御陵墓は、京都府北桑田郡京北町にあり、後山國陵〔宝篋印塔〕と申し上げる。）

せき入れて水ゆたかなる小山田にはやうちむれて早苗とるらし

夏草

日にそへていとど深くやなりぬらむ茂りのみゆく野邊の夏草

夕立

夕立の過ぎ行くあとのうき雲ものこる入日のかげぞすよしき

時雨

村時雨むらしぐれふるかた見えて山の端はにうつりさだめぬ夕日かけかな

神樂

あくるまでうたふ神樂の聲さえて庭火の影もはやしらみつゝ

田家

あき過ぎてもる人もなきいほりにもなほ通路かよひぢの見ゆる小山田

述懐

いかばかり心をそへてまつりごと(直ぐ)とすぐなる世ぞと人にいはれむ

神祇

誰人もさぞあふぐらむ神風やみもすそがはのきよきながれは(以上、後花園院永享御百首)

祝(撰歌百首)

くもらしな天つ日つぎのいやつぎに守りきにける神の御國は

曉鷄(長祿二年一四五八御百首)

鳥の音は時をたがへず聞ゆなりをさまらぬ世をおもふねざめに

祝言（応仁三年—一四六九—御百首）

梓弓あづさゆみやまとしまねのをさまりし昔の道にいまぞかへらむ

獨ひとり述懐（御独吟百首）

思へたゞ空にひとつの日の本にまたたぐひなく生れこし身を（以上、後花園院御集、上巻）

神祇（文明二年—一四七〇—五十首）

天地のくにおやなる二つ神たちるに人のあふがざらめや

雜（永享九年—一四三七）

迷はじなことしげき身の行末もすぐなる代代の道をたづねば

神祇（永享十一年—一四三九）

よろづ民うれへなかれと朝ごとにいのるこゝろを神やうくらむ（以上、後花園院御集、中巻）

神祇（文安五年—一四四八）

天地のその神代よりうごきなき我が日の本とまもるかしこさ

曉眠易覺（同）

事しげきあさまつりごと思ひつつ寝ればや早きねざめなるらむ

書（同）

いつはりのなき世をみする文の道あふげばたかし人の言の葉

寄山述懐（宝徳二年—一四五二）

道しある代代にはかへれしのぶ山しのぶ昔のあととほくとも

冬月

わが袖におもひしれとや宿るらむ民のわらやのさゆる夜の月

獨迷悞

世のうさを外には何と恨むらむ我が身ひとつのとがを忘れて

祝言

むべしこそ我が世になびけ葦原やをさまる國の民のこころは（以上、後花園院御集、下巻）

儲たくらの君（註・後土御門天皇）をさとし給へる御消息のおくに

あはれしれいまはよはひも老の鶴の雲ゐにたえず子を思ふこゑ（後花園天皇御集拾遺）

述懐の心をよませ給うける

敷島の道ある代々のいにしへに猶立ち越えむ跡をしぞ思ふ（新統古今集）

後ご土つち御み門かど天てん皇のう
(第百三代)

御在世 一四四二—一五〇〇(崩御・五十九歳)

御在位 一四六四—一五〇〇(二十三歳—五十九歳)

第百三代・後土御門天皇は、第百二代・後花園天皇の第一皇子。皇室の御衰微は、次第にはなほだしく、皇室領も「応仁の乱」に及んで、次々に地方の武家勢力に侵され、朝儀すら容易に御挙行がお出来になれず、さらに驚くべきことには、崩御になられたあと、御大葬も出来ず、御遺体を黒戸(宮中の清涼殿の萩の戸の北、瀧口の戸の西にあった部屋)に御安置申し上げたまふ、四十九日に及んだと伝えられてゐる。まことに御痛ましき限りの史実といふべきか。なほ天皇には御集「紅塵灰集」がある。

天皇が踐祚されて四年目の応仁元年(一四六七)に「応仁の乱」が勃発し、実に十一年の長きにわたって、文明九年(一四七七)になって漸く平定する、といふ混乱状態が続いた。この騒乱によって、京都およびその郊外は、戦乱の巷となり、内裏をはじめ、社寺、邸宅は殆ど灰燼に帰し、幕威は失墜し、遂に群雄割拠の戦国時代が到来した。

なほ、乱平定の後、七年目(一四八二)義政は、京都の東山の山荘に銀閣寺を建造してこゝに移り、これを東山殿と呼んだ。この時期は、義政は明国に盛んに使ひを出して貿易の利を求め私利の追求に餘念がなかったが、これが支那大陸の宋、元、明などの文化をわが国に移入するに役立つことにもなった。東山山荘の庭園をはじめ、書院造りと呼

ばれる和風住宅様式、蒔絵、茶の湯、華道の発達、雪舟の水墨画、さらに、能や連歌などを生み出した東山文化は、いかにも絢爛たるものではあるが、そのかげに、前述のやうな驚くべき皇室の御衰微があり、幕府をはじめとする有力者は、あへてこれを顧みなかつたといふ事實は、決して見のがすわけにはいかないと思ふ。

(御陵墓は、京都市伏見区の「深草十二帝陵」にあり、深草北陵〔法華堂〕と申し上げる。)

社頭花 (文正元年—一四六六)

神もいま風しづかにもまもるらし宮木にまじる花のさかりは

文明六年 (一四七四) 春日社法樂の中に、山月

世をまもるためしに神よ三笠山さしのぼる日にくもりあらずな

さやかに月こそいづれみかさ山神も光をさしやそふらむ

寄国祝 (文明八年—一四七六—三月、日次百首)

なびくなり四方の夷のころまでやはらぐ國の風をうつして

早苗 (文明八年—一四七六—九月、日次百首)

さをとめがすげの小笠もけふの日も傾くまでにとる早苗かな

海路 (同)

波風のさわがばさわげわたの原すぐなる舟のみちはかはるな

瑞籬 (同)

へだてなく神やまもらむみづがきの久しく我も頼みきぬれば

祝言(同)

いにしへに天地人もかはらねばみだれは果てじあしはらの國

爐邊懷舊

寝られねば又かきおこし埋火のもとにもかはる世を歎きつつ(以上、後土御門院御製、紅塵灰集)

野若菜

心して摘みこそわかめ春日野のおどろまじりに見ゆる若菜を

帰雁かふたぎ

歸りゆく聲もあまたの天つ雁かずはかすみに見えわかねども

五月雨

けふいくか天の岩戸も雲とちて神代おぼゆるさみだれのそら

窓螢

わが心くらきにつけて窓のうちに螢あつむる人ぞうれしき

寒草霜

浮草の枯葉やのこるたきつ瀬のこほらぬうへも霜とちて見ゆ

里雪

海士人あまびとやあしやの里の雪なかに我が住むかたの道たどるらむ

炭竈

身の業わざをなげきこりつみさゆる日おきなにあはれ翁の堪へて炭やく(*こりつむ木を伐り出して集めること)

(*さゆる||きびしく冷える)

田家

冬もなほあけの細道ゆきかよひかど田のおもぞ人めかれせぬ (*めかれ||目を離す)

思往事

夢うつゝ誰に問はまし過ぎ來つる身のいにしへの定かならぬを

述懐

神ならでをさめむことやかたをかの森の風のさわがしき世を (以上、後土御門院御百首)

釋教

よしあしをわくる心のほかにこそなかなか深き道はありけれ (*なかなか||かへって)

無常

世の中は風の前なるともし火の光ありとも身をばたのみそ

別

思ひやりおもひおくにもなぐさまで別るるきはぞ旅は悲しき

祝

神代よりいまにたえせず傳へおく三種みくさのたからまもらざらめや (後土御門院五十首和歌)

寄鏡述懐 (文明九年—一四七七一) 吉社法樂百首

をさまりし昔をうつすかぐみとはみがきもなさぬ我が心かな

日吉 (同)

今はまたみやこの外ものどかにて照らす日吉の神のめぐみに

雨中懷舊（文明十三年—一四八一—千首和歌）

静かなることよひの雨に人はいさわれば寐られず思ふむかしを

寄山述懐（同）

ともすれば道にまよへる位山うへなる身こそくるしかりけれ

甘（明応四年—一四九五—水無瀬宮法樂百首）

みどりごの乳房のみかはまつりごと甘きに民もはぐまらむ

日（同）

仰げなほ岩戸をあけしその日より今にたえせず照す恵は

伊勢（明応四年—一四九五）

にごりゆく世を思ふにも五十鈴川すまばと神をなほたのむかな

祝（同）

名も高き三つの國にも日の本や神にうけつつ代代ぞただしき（以上、後土御門院御集拾遺）

後ご柏かしは原ばら天てん皇のう（第だい百ひゃく四し代だい）

御在位 一四六四—一五二六（崩御・六十三歳）

御在位 一五〇〇—一五二六（三十七歳—六十三歳）

第百四代・後柏原天皇は、第百三代・後土御門天皇の第一皇子。

皇室の財政の御窮乏は、御父君の時そのまゝのきびしさであり、踐祚の翌年、文龜元年（一五〇一）には、室町幕府に対して、御即位式を挙げられるに必要な費用の献上を命ぜられたが、幕府は必要だけのことをしなかった。かくて、後柏原天皇が御即位の式を挙げられたのは、踐祚後、なんと二十二年目の大永元年（一五二二）であられたといふ。そのことを見ても、さらにその経費も、本願寺光兼からの献金によって、漸くにして間に合せ得たといふことから見ても、当時の朝廷の財政窮乏の度合ひがいかにばかりであったかを窺ひ得るのではなからうか。かうした間に時代の様相は、次第に室町幕府の威勢の失墜を濃厚にしてゆくとともに、戦国武将の登場が間近なることを知らせてくる。その間にあられて後柏原天皇は、祭事、朝儀の再興に御努力を続けられた。また、御生涯に詠まれた御歌も、「列聖全集」によれば三千七百餘首といふ大変な数にのぼってをられる。このやうに御生活の御窮迫や政治の緊張の時期における歴代天皇の御製が大変な数にのぼってゐるといふことは、「しきしまのみち」の御修業と、天皇であられるといふ御事との間に深いつながりを示してゐるものと思はれ、わが日本思想史・日本政治学上においても、この点は向後の重要な研究課題に取り上げるべきことではなからうか。

（御陵墓は、京都市伏見区の「深草十二帝陵」で、深草ふかくさ北陵きたのみやま「法華堂」と申し上げる。）

花

色も香もおもひのほかの花をこそよもぎ(蓬)葎(むら)のかけにても見め

初窓

物ぞ思ふ月の初夜のはつかなるおもかげしたふ雲のはたてに

祝

をさめしる時世は文にやはらぐも弓にたけきも同じこゝろに

海上晚霞

見るがうちにみちくるならし夕潮の干潟の松も霞みあひつゝ

春月

野も山も霞めるうちに影見えて待ち出づるきはぞ月はさやけき

路藤

たちよりて見る人やなきさく藤の下にかくるゝ道ぞつゆけき

峽猿

吹きのぼる風も聲して山あひの木末をたかみ(猿)しら鳴くなり

深溪餘寒

炭やきし道さへたえて谷の戸は春のあらしにふゆごもりつゝ

村々煙細

山かげやひとりぐとすむ里はけぶりの末もわかれてぞゆく

社頭祝世

上下と人にみだれぬ道までも我が世にまもれ賀茂のみづがき

五月雨晴

見もなれぬ日影を吠ゆる犬もあれや五月をくらす雨の晴間は

神樂

八たびおく霜夜もふかしこゝにます神のみまへの神葉のこゑ

山路旅行

こし方のせめて見ゆやと行く先にあらぬ山路をよぢ上りつゝ

往事催涙

見ても知れなみだに向ふをりふしを言葉に出でぬ昔なりとは

寄筵恋

おもひやれくるゝ夜ごとの秋風は身に狭筵のねむかたもなき

寒蘆

霜がれの末葉にぞおもふ水底にくちせぬ蘆のもとのねざしを

述懐

をさめしる我が世いかにと波風のやそしまかけてゆく心かな

述懐

うき事を誰かまさると世をばたどひとりくの上にごそ見め

山家橋

山里のゆきゝにわたすこの橋もなほ世にかよふ道と見えつゝ

歳暮深雪

くれてゆく年木としぎきるべき道もなし深山みやまのゆきに冬ごもりして（*年木||新春用の薪。年末に伐り出す）

寄水懷舊

水もその濁にごらばといひすめらばと思ふも人の世にぞしたがふ

寄雲述懷

いかにせば月日をおなじ心にて雲のうへより世をてらさまし

夜燈

さよ風の窓のすきまに吹き入りて靜にも見ぬともし火のかげ

田家雨

くれやすき秋の日影もをしねほす賤しづが假庵かりあんのまたしぐれつゝ（*をしね||稻）

寄社祝

四方八隅よもぎをさまる道はへだてなく千々のやしろの神ぞ守らむ

秋

うき雲もおよばぬ山ををのへより猶そらたかくすめる月かな（以上、後柏原院御百首）

念ねん

閨ぬいはあれて霜をかたしく人もあれば厚きふすまも何にかはせむ（後柏原院詠百首和歌）

寄國祝（明應三年—一四九三）

こころをば隔てぬものかはるかなる人の國まで仰ぐこのとき
この國の日の本さしてあふぐなり高麗こまもろこしの遠つ人まで
敷島のやまとの國のいやつきにさかゆく道ぞ神のまにまに

寄道祝言（文龜三年—一五〇三—三十三番歌合）

かくてしも我が世は經なむふりにける人に正しき道を残して

述懐

おろかなる身をなげきても一筋に捨てぬ心やうき世なるらむ

はなちどり

あはれにも愚おろかにもみつ籠のうちを出でても鳥のたち歸りつつ（以上、後柏原院御集拾遺）

永正五年（一五〇八）の春、春日社造宮ありて遷宮行はれしとき

みしめ繩なながき世かけて言の葉の道は絶えせぬ手た向むかなるらむ（*みしめ繩なしめなわ）

永正十三年（一五二〇）後土御門院十七年の御法事おこなはせたまひけるとき

法の道みちは心の中に勤めなむ菜なつみ水くむわざならずとも（以上、池の藻屑）

春（大永六年—一五二六—内裏御屏風上帳）

鳥の音ねにおどろかさされて柴の戸の花も咲きそふ春をしるかな

雑

我身とてそれもこゝろのままならぬこの世に人の怨うらみあらめや

後奈良天皇（第百五代）

御在世 一四九六—一五五七（崩御・六十二歳）
御在位 一五二六—一五五七（三十一歳—六十二歳）

第百五代・後奈良天皇は、第百四代・後柏原天皇の第二皇子。

後奈良天皇の御代に及んでは、皇室の財政が極悪状況に衰微したまうた御時であった。御即位の大禮は、伊勢の北条氏らの献金によって、踐祚後十年を経過した天文五年（一五三六）にやっと行はれたと記録されてゐるし、紫宸殿（即位の大禮などを行はれる場所）の築地は破れ、三条大橋の上から、内侍所（現在の皇居の賢所に当る。三種の神器の一つである八咫鏡を祭つてある所）の燈火が望見されたほどの荒廃ぶりであったといはれるのも、後奈良天皇の御代のことであった。

しかも、このやうな御生活環境にあられながら、ひとたび天皇といふ御立場にお立ちになられると、天文九年（一五四〇）の悪疫の流行に際しては、宮中で祈禱を行はせられ、御親ら「般若心經」一卷を書写せられて、これを諸国一宮に奉納せられ、御祈願をつゞけられたのである。なほ、後奈良天皇は和歌詩文にもすぐれられ、その御日記は「天聰集」と呼ばれて、現存してゐる。

さて、この御代は、いよ／＼戦国時代への突入期であつて、西に毛利元就あり、東に甲斐の武田信玄、越後の上杉謙信あり、そして天文十二年（一五四三）にポルトガルの商

船が種子島に漂着して、日本にはじめて鉄砲を伝来させ、同じ年に信長の父・織田信秀は、皇居の荒廃を修築することに意を注いだ。さらに六年後の天文十八年（一五四九）には、フランシスコ・デ・ザビエルが鹿児島に來てキリスト教を伝へ、越えて六年後の弘治元年（一五五五）には、信濃の川中島で信玄と謙信との雌雄を賭しての戦ひがあり、同じ年に、西の安藝の厳島では、毛利元就が陶晴賢の陣を急襲して勝利ををさめ、毛利氏興隆の基礎を固めるに至ってゐる。かうして中世は終りを告げ、近世の正親町天皇の御登場をお迎へすることになるのである。

（後奈良天皇の御陵墓は、前項の「深草十二帝陵」で、深草北陵「法華堂」と申し上げる。）

神祇（大永元年—一五二二）

宮柱朽ちぬちかひをたておきて末の世までのあとをたれけむ

田家（大永八年—一五二八）

傾ける小田のかり庵はますらをが露霜ながらもりあかしけむ（以上、後奈良院御製集）

独述懐（享祿二年—一五二九）

愚なる身も今さらにそのかみのかしこき世世の跡をしぞ思ふ（後奈良院御製集拾遺）

神祇（享祿三年—一五三〇）

いそのかみふるき茅萱の宮柱たてかふる世に逢はざらめやは（後奈良院御製集）

樹陰照射

ともしたて歸るますらを木隠れにしるべかりの月はもるらむ

歳暮

つもりては老となりぬる哀れをも知らでや年のくれてゆくらむ（以上、後奈良院御百首）

田家（天文十一年—一五四—大神宮御法樂千首）

もりすてし跡とも見えずかりいほに遠山が（賤）つの残すかよひぢ

寄夢述懐（同）

いさむるもありしながらに＊たらちねの幾たび夢の昔をか見し（＊ありしながらに||御在世の折のままに）

田家秋夕（同）

夕つゆの外（上）面にひろき千町田（下）のをしねいろづく秋やさびしき

近

世（江戸時代）

（二五五七～一八六六）

第百六代・正親町天皇 } 第百二十一代・孝明天皇

正親町天皇おほぎ まちてんのう（第十六代）

御在世 一五二七—一五九三（崩御・七十七歳）

御在位 一五五七—一五八六（四十一歳—七十歳）

第十六代・正親町天皇は、第十五代・後奈良天皇の第一皇子。

こゝ数代の天皇がたと同じく正親町天皇も御即位せられて数年間は、大変な御辛苦を続けられ、国内の争乱は更にはげしく、御所の修理、日常の経費の御調達さへお困りになされた。京中の権は、三好・松永の手中にあった。天皇は、踐祚後足かけ四年目、すなはち永禄三年（一五六〇）になって、やうやく中国地方の雄、毛利元就父子の献上金によって即位の儀式を行はれ、はじめて御即位せられる、といふ有様であった。しかしこの同じ年に、桶狭間の戦たけがきまのたたかひがあり、織田信長が今川義元を奇襲戦で破り、信長が天下を半ば従へる素地が生まれ、やがて信長の皇室尊崇の念にさゝへられて、朝廷の経済的極貧が救済される糸口が見出されることとなるが、それが具体化したのは信長が京に入った後、天皇が踐祚されて十二年目以降の事であった。

すなはち信長は、永禄十年（一五六七）に隣国美濃の斎藤龍興たつみりゆうけいを破って居城をここに定め、岐阜と改めた。この年十月、正親町天皇は、信長に対して「御料所興復の勅みことろのしきり」をくだされ、信長は謹んでこれを拜受、翌永禄十一年（一五六八）将軍・足利義輝を廃して、その弟義昭を迎へ、これを擁して京に上り、室町幕府を再興すると共に、皇居の造営に従事したのである。信長のこの皇居造営の志は、次の豊臣秀吉にも受け継がれた。

織田信長が、京都の本能寺で明智光秀に襲はれて自刃した天正十年（一五八二）は、正親町天皇の御在位三十年間のうち、二十六年目であったが、その後は信長に代って豊臣秀吉が登場。山崎の合戦、賤ヶ嶽の戦、小牧・長久手の戦などを経て、天正十三年（一五八五）四国を平定、秀吉は天皇から従一位関白の位に任ぜられた。秀吉は、関白の職を拜するや、伊勢神宮遷宮の旧式を復興し奉り、皇居の御造営にも臣子としての赤誠を捧げたのである。天皇はその翌年天正十四年（一五八六）に皇孫・後陽成天皇に位をお譲りになられた。

（御陵墓は、京都市伏見区深草坊町にあり、深草北陵〔法華堂〕と申し上げる。）

叢 螢

しげりそふ草の葉がくれ飛ぶ螢露にひかりのみだれてぞ行く

夕立

なるかみのたゞひととほり一さとの風もすゞしき夕立のあと

秋夕

それとなくすゞろに物のかなしきは色かはりゆく秋の夕ぐれ

庭紅葉

秋はみな一木が上ものこりなくうつろひかはる軒のみみぢ葉

初冬

花に見し千種も淋し枯れて行く野邊のけしきに冬は來にけり

千鳥

沖つ風しほみちくるやむら千鳥たちさわぐ聲の浦づたひ行く

寄雨恋

待ちわびし心もしらで夕ぐれのまたかきくもり雨になりゆく

羈旅

たびごろも立ちし都をへだてつゝ峰こえてまた山ぞかさなる

述懐

うき世とて誰をかこたむ我さへや心のまゝにあらぬ身なれば

祝言

なにの道まさきのかづら末つひにたえずつたへよ家々の風（以上、正親町院御百首）

天正十四年（一五八六）二月十四日、豊臣秀吉参内（かんぱち）の後、禁庭の桜花の木蔭に暫時（たひら）佇み、飽かず眺めて帰館せり。

正親町天皇、この秀吉の雅興を聞き召され、二十八日、その花の枝に

立ちよりし色香ものこる花盛りちらで雲の春やへぬべき

の御製を添へて賜ふ。秀吉、勅使をお待たせして、即時に申上げたる御返歌

（忍びつゝ霞と共にながめしもあらはれにけり花の木のもと）（以上、川田順「戦国時代和歌集」）

天正十六年（一五八八）四月、内のうへ（後陽成天皇）聚楽第（むろくだ）に行幸ありける日、院の御所（註・正親町上皇）、

御短冊にかきて関白（豊臣秀吉）の許へおくらせ給ひける

萬代にまたやはよろづ重ねてもなほかぎりなき時はこのとき

（秀吉の御返歌——言の葉の涙のまさこはつくとともに限りあらじな君がよはひは）

同じとき、還幸の後、関白より内（註・後陽成天皇）に奏したりける歌（註・「時を得し玉の光のあらはれてみゆきぞ今日のもろ人の袖」）どもをさこしめして

うづもれし道もたゞしき折にあひて玉の光の世にくもりなき（以上、聚楽第行幸記）

後陽成天皇 (第七代)

御在世 一五七一—一六一七(崩御・四十七歳)
御在位 一五八六一—一六一一(十六歳—四十一歳)

第百八代・後水尾天皇の御代の初期における 院政期間 一六一一—一六一七

(四十一歳—四十七歳)

第百七代・後陽成天皇は、第百六代・正親町天皇の皇子誠仁親王の第一皇子。御歳十六で踐祚、そのすぐあと二十日たらずで御即位になられたが、南・北朝が合体された第百代・後小松天皇以来、踐祚と即位が同じ年になされたことさへ実に七代ぶりのことであり、年数にして約二百年目の御事であった。

天皇御即位の直後、豊臣秀吉は太政大臣に任ぜられ、翌天正十五年(一五八七)に九州を平定して天下人となり、京都に聚楽第を造営してこゝに居を移した。天正十六年(一五八八)には、四月十四日から十八日まで後陽成天皇の行幸を仰ぎ徳川家康以下諸大名を会し、朝廷を尊崇すべきことを誓はせて、自ら天皇への忠誠を示すと共に、天下にその勢威を示した。このやうに諸大名に対して天皇を尊崇すべきことを誓はせた一事は、その昔、政権が幕府に移った一一九二年以来四百年の間に、僅かに建武中興の時点における南朝諸将を除けば、まさに初めての盛事であった。

さらに、秀吉は朝鮮に対してその使者の来日する事を求め(天正十七年—一五八九—)、また、天正十九年(一五九一)書をフィリッピンの太守に与へ、翌文禄元年(一五九二)に

は、大軍を朝鮮に送って朝鮮征戦（文祿の役）を敢行。さらにその翌年、文祿二年（一五九三）には、台湾に服従を促し、慶長元年（一五九六）には、支那の明国と和を講じたが、その明国から来た使者が、国書の中に秀吉に対し「日本国王に封ずる」と記してきたことに対して、「日本には天皇のましますことを知らぬか」と激怒し、翌慶長二年（一五九七）再び朝鮮に出兵（慶長の役）、出来うれば明国に攻め入らうとさへしたが、戦ひは利あらず、翌年、秀吉は波瀾に満ちたその生涯を閉じた。

後陽成天皇の御在位期間の後半三分の二は、徳川家康ならびに秀忠が登場する時期である。これより先、家康は、天正十八年（一五九〇）江戸城に入って、秀吉に対決する本拠を確立、秀吉の死後三年目、慶長五年（一六〇〇）には関ヶ原の合戦で勝利を収め、慶長八年（一六〇三）に征夷大將軍に任ぜられることになり、こゝに徳川幕府は名実共に樹立し、以後慶応三年（一八六七）まで十五代・二百六十五年間存続することになった。その後家康は、京都に二条城を築き、己れの武威を誇ると共に、朝廷に対して皇居を守護するといふ名目で、最も信頼するに足る藩兵を駐屯せしめ、敵に天皇ならびに宮中の公卿らの行動を監視させ、また皇族の御一人を上野輪王寺の座主として江戸にお迎へし、これをもって朝廷に対する人質とする挙に出た。さらに宮中に対しては、慶長二十年（一六一五）日本政治史上かつて類を見ない内容を盛りこんだ「禁中並びに公家衆諸法度」を制定して弾圧を制度化し、さらに「武家諸法度」（同年）によっていかなる大名も、幕府の許可なくして宮廷に奉伺することを厳禁したのである。これらの「法度」は、將軍職を秀忠に譲ったあとではあったが、未だに家康の存命、施政中の所業であった。

後陽成天皇は、二十六年の御在位ののち、いまだお若くして御年四十歳で後水尾天皇に位をお譲りになられてもなほ院政（七年間）をおとりになり、元和二年（二六二六）家康が死去した翌元和三年（二六一七）、四十六歳の御若さで崩御になられてゐる。家康の朝廷圧迫の施策に対し、全身心を傾倒せられての御疲労によるものであられたかも知れない。天皇は、和漢の学に長ぜられ、学者に経学を進講させ、御自身も「源氏物語」や「伊勢物語」を講ぜられたほどで、また活版の伝来を機に、「古文孝經」「日本書紀・神代卷」「職原抄」（慶長勤版本）などを刊行せさせられ、近世の文運興隆の先駆をなしてをられる。天皇の御弟君、八條宮智仁親王によって「桂離宮」が営まれたのもこのころであつた。（御陵墓は、京都市伏見区深草坊町にあり、深草北陵〔法華堂〕と申し上げる。）

夏草（後陽成院御製詠五十首）

かくばかり繁れる野邊の夏草は枯れじとぞ思ふ霜はおくとも

伊勢（同）

月よみのみことかしこみ久方の天照るかみやあまくだりけむ

天正十六年（一五八八）四月、聚楽の第に行幸せさせたまへるをり、寄松祝

わきて今日待つかひあれや松が枝の世々の契をかけて見せつゝ

おなじをり、関白（豊臣秀吉）よろこびに堪へず、

空までも君がみゆきをかけて思ひ雨降りすさぶ庭の面かな

行幸なほ思ひしことのあまりあればかへるさをしき雲の上人

時を得し玉の光のあらはれてみゆきぞ今日のもろ人の袖

と三首の和歌よみて奉れる御かへし

かきくらし降りぬる雨も心あれや晴れてつらなる雲のうへ人
飽かざりし心をとむるやどりゆゑ猶かへるさの惜しまるゝかな

玉をなほ磨くにつけて世にひろく仰ぐひかりをうつす言の葉(以上、聚楽第行幸記)

春雨

なかぞらはうちかすみつゝ春雨の軒のたま水おとかすかなり

初花

春風もしばしはよぎよ今年よりわか木のさくら花咲きにけり

早苗

山もとは田づらの水のをちこちに早苗とるてふ袖あまたなり

水辺螢

風吹けば蘆の葉分はわけに飛ぶほたる暮るゝ川邊にみだれあひけり(*葉分||葉と葉のあひだが分れること)

六月祓みづうき

秋近きそれも知られてみそぎする川邊にかよふ風のすゞしさ

初冬時雨

日の影も山の端わけて冬きぬと雲のひとつむらしぐれゆくらむ

豊明節会とよあかりのせまひ(註・新嘗祭の翌日に天皇が新穀を召し上り、臣下にも賜ふ儀式、五人の舞姫による「五節の舞」が行はれた)

行はれた)

忘れめやとよのあかりの少女せらぬが節會せらぬのよるの舞のたもとは

冬月

ねや(團)のうち戸とざしも深き冬の夜の板間いたまもりいる月のさむけさ

寄社祝

天てらす神のいがきのすゑとほく治めしるべき世をや祈らむ

（* いがき=斎垣・忌垣。「い」は神事に関する
ことの意味。神社の垣根のこと）

寄日祝

日にそへてたゞしき道の嬉しさはつゝむ袖なく國ゆたかなり

（以上、天正十九年一五九一）
（後陽成院一夜百首）

山霞

春きても高峯の雪の消ぬけがうへに霞たなびくやまのをちこち

帰雁

あまつ雁かりおのがときとやかへるらむ霞める空の雲路たどりて

夕薄ゆふはく

花すゝき雨にぞなびくさらでだに露おもげなる秋のゆふべを

埋火

あづさゆみ春をも待たじ思ふどちまとる居る夜の埋火うづみびのもと

樵夫せうぶ

暮れぬればつれし樵夫も立ち別れ歸るさ(著)しるきおのがかた(著)く

神祇

ちかひなほ世々にかはらで八嶋もる國つみ神は頼もしきかな

祝言

まもれなほ國にたゞしき道しありて神の恵みをあふぐてふ代は(以上、文祿五年―一五九六―)
(後陽成院五日百首)

早蕨

さわらびを採りつゝ山のかくれ家に朝夕おくる人もありけり

蚊遣火

たへ侘ぶる賤家さぞなと蚊遣火のふかき煙におもひやるかな

炉火

夜を寒み更け行くまゝにいくたびかかきおこすらむ閨の埋火

除夜

行く年も今日を限りになりぬればこよひの空や起きあかさまし

懷舊

よむ歌のふかき心を慕ふ身に過ぎにしむかしかへる世もがな

述懐

學ぶべきをりふしごとをただにしも送りし年の身に積るかな(以上、後陽成院御著到百首)

故宅五月雨

さみだれのふるき軒端は朽ちそひておとこそたゝね露も雫も

路芝

芝草もなびきあひけり舊りはつる吉野の里はみちもなきまで

山家木

住むとても竹の柱にみやま木を折りかけ垣のかげのあはれさ（*折りかけ垣||竹や柴などを折り曲げてつくつた垣）

善薩界

彼の岸へゆくてふ道を知ることもげに舟長のあればなりけり

屋上藪（慶長十年一六〇五）

夢絶えてあられたばしる風の音に心くだくるねやのさむけさ（以上、後陽成院御集拾遺）

夢厭晚戀

（ちぎりおきし中も）
こころだにとくる小宵は明やらぬ天の岩戸の神代ともかな

中々に逢夜もうきは夢ことにおもふ別やよこ雲の空
（またきより）

右歌思案申候間、重而、談合申候。此題之義、先度承候。つるは、こよひ待えたる上に、夢厭晚之意

と候つる。其分覺悟申候。猶又稽古のためにて候間、尋申候。前々より契りし中にて、こよひ又こんとの

義、落着ならば、あはぬ以前にも、歌之義いかが候はん哉。中院なども兩様に可有かと申候。又夏月易明

歌に

明にけりながるる月の早瀬川すよしき波や袖にかけけん

此歌は、五文字へは、いづれの句よりかへり申候哉。是又委曲可ニ注給候。夜前者子細候而、曉天迄各祇

候故、書中うかうかと無ニ正體一候。

かしく

(註) この御消息は、後陽成天皇が、引合一枚を料紙として、墨痕も鮮かに御製の和歌三首の是非を照准に御相談になったものである。照准は、関白近衛植家の子で、佛門に入り天台宗聖護院門跡となり、その別院・照高院を開いた准后・道澄(一五四四—一六〇八)をさすものと見られる。また、文中の中院は中納言通勝(一五八八—一六二〇)であらう。共に当代和歌の名手であり、天皇の信任も篤かった。この御消息は、慶長十年(一六〇五)前後の、天皇が三十五、六歳頃のものであらう。△右の御消息は国指定文化財で富山県高岡市の瑞竜寺所蔵。解説は県教育委員会編「富山県の文化財―国指定篇」(昭和四十二年刊)から収録▽

慶長十五年(一六一〇)元旦の御製

今日よりは戀しき老いの始めぞといく春ごとに思ひ出でなむ

御辭世(元和三年—一六一七)

憂き秋の蟲の鳴く音のあはれをも今身の上に限りとぞ思ふ(元和三年文月の記)

(以上二首、北小路功光著「花の行方―後水尾天皇の時代―」より収録)

後水尾天皇 (第百八代)

御在世 一五九六—一六八〇 (崩御・八十五歳)

御在位 一六一一—一六二九 (十六歳—三十四歳)

(一六一七年まで御父・後陽成上皇の院政が行はれた)

第百九代・明正天皇(女帝)の御在位全期間

第百十代・後光明天皇の御在位全期間

第百十一代・後西天皇の御在位全期間

第百十二代・靈元天皇御在位の三分の二まで

における院政期間

一六二九—一六八〇

(三十四歳—八十五歳)

第百八代・後水尾天皇は、第百七代・後陽成天皇の第三皇子。十六歳で踐祚せられた。しかしその後、後陽成上皇は御讓位後も崩御されるまで七年間院政をお執りになった。後水尾天皇も、三十四歳の御時、徳川幕府の専断に勘忍の緒を切られて突如御讓位になられたが、次の明正天皇から、靈元天皇の御在位三分の二の時期まで、すなはち四代の天皇の御代、実に五十一年間の長期にわたって院政を続けられ、院政をおとりになられたまゝで、御年八十五歳でおなくなりになられた。

さらに、後水尾上皇の院政のあとを受け継がれた第百十二代・靈元天皇も、後水尾天皇と全く同じ御年齢の三十四歳の御若さで御讓位なされ、そのあと、後水尾上皇と同じやうに、あとの東山天皇、中御門天皇の御二方の時に、これまた四十六年間の長期にわたって院政をおとりになられ、そのまゝ御年七十九歳でおなくなりになつてをられるのである。後陽成院、後水尾院、靈元院、この御三方による院政存続の意義は、極めて注目すべきことであつて、徳川幕府の朝廷蔑視に対する御歴代の天皇がたの、皇位継承と

皇威保持についての、血のにじむやうな御心懐に基づくものと拝察すべきではなからうか。

なほ、これを数字の上で見ると、秀吉の死が一五九八年であり、それから後陽成天皇、後水尾天皇、靈元天皇とつゞいた院政が終るのが一七三二年、その間実に百三十五年といふ長期となり、徳川幕府二百六十五年の正に半分余りといふことになる。すなはち、徳川幕府二百六十五年の前半期を、朝廷は御三方の院政を中心にして相對せられ、皇祖皇宗の御遺訓を御心中ひそかに堅持せられたことと拝察すべきであらう。なほ、この間にあつて後水尾天皇がいかに皇子、皇女方の御教育に心をくだかれたかは、現在東山御文庫に收められてゐる「宸翰御教訓書」によって深く偲はれるところである。

なほついでながらこゝで記しておくが、靈元院の崩御のあとを受けられた中御門天皇の崩御は三十七歳、櫻町天皇の崩御は二十二歳といふやうに、いづれも幕府専横の中で御若くしておなくなりになられたが、いづれも御幼少の折から、すばらしい御歌をお詠みになつてをられるといふことは、まさに「しきしまのみち」の上で特筆すべきことと思ふ。それは、正親町天皇から、後陽成院・後水尾院・靈元院と受け継がれた皇威堅持の道統における、天皇としての御精神の御修業が大層きびしかったことを如實に示してゐる所ではなからうか。このやうに見てくると、幕末における孝明天皇が、わが日本の独立を堅持されつゝ維新の大業に及ばれた御偉業は、歴代天皇がたの御志のあられた所を、よくよく御継承遊ばされたことであつたことがうかゞはれてくる。

さて、後水尾天皇の御代のことに戻るが、踐祚されて四年目の慶長十九年（一六一四）の「大坂冬の陣」、その翌年の「大坂夏の陣」によって豊臣家は完全に亡びる。さらに後陽成天皇の項で述べた通り、慶長二十年（一六一五）幕府は「武家諸法度」^{ぶけしよほつど}を定めて武家に対するきびしい生活規制を強ひると共に、「禁中方御条目十七箇条」^{きんちゆうがたじしよちも}（別名「禁中並びに公家衆諸法度」）なるものを、朝廷に押しつけた。かくて天皇から征夷大將軍に任ぜられてゐる臣下が、逆に天皇に対して規制の文書を押しつけるといふ前代未聞の暴挙が起きたのである。しかもその法度の第一条は、「天子御藝能之事。第一御学問也」——天皇は御学問をなさらなければならぬ——と書き出されてゐるばかりか、「和歌は光孝天皇よりいまだ絶えず、綺語たりといへども我が国の習俗なり。棄て置くべからず……」とあった。だが光孝天皇は第五十八代目の天皇であられるが、その天皇から和歌をお詠みになつてをられる、などとは無智も甚だしい。神武天皇以降、どれだけ多くの天皇がたが、和歌を「しきしまのみち」としてその道を御つとめ遊ばされたことか。そればかりではない、幕府の「法度」は、和歌のことを「綺語たりと雖も」といふ。「綺語」とは、「巧みに表面だけを飾った言葉」、或ひは佛教が「十惡の一」とする「真実にそむいておもしろく作った言葉」といふ意味しかない。いづれにしてもそれは「しきしまのみち」としての和歌が、日本の文化の中核を貫いてきた事実——まごころの表白——とは、全く正反対の意味であらう。しかもそれにつけて「棄て置くべからず」と書かれてゐるのであるから、家康・秀忠の皇室に対する不遜さは、こゝに極まると言へるのではなからうか。

やがて、六年後の元和六年（一六二〇）には、二代將軍・徳川秀忠は、娘和子を皇室に入れ、その四年後の寛永元年（一六二四）には、天皇は、和子を皇后とせられた。かうした後水尾天皇の忍耐強い御姿勢の折、高僧として名高い澤庵和尚に、天皇が紫衣（註・勅許によつて賜はる紫色の僧衣）を賜はつた。これに対し幕府は、紫衣の「濫授」だとしてこれを奪ひ、さらに澤庵和尚を罰するという暴挙にさへ出た。天皇はいたくこのことに逆鱗あらせたまうたが、幕府が寛永六年（一六二九）、朝暮宥和のためとの名目で春日局（二代將軍徳川家光の乳母）を参内させた直後、後水尾天皇は「葦原やしげらばしげれおのがまゝとても道ある世とは思はず」と詠まれて、突如、第二皇女、興子内親王（當時七歳）に位をお譲りになつてしまはれた。ここで注意しておきたいことは、興子内親王は、二代將軍・秀忠の娘であつた和子（皇后）のお生みになられた方であること。いま一つは、さきに述べた「禁中並びに公家衆諸法度」の第六条に「女縁者の家督相続は古今一切これ無き事」とあり、これは公家についてのことではあらうが、皇室についても当然類推されるやうな書き方になつてゐることである。すると、後水尾天皇が興子内親王といふ女の方に位をお譲りになられたといふことは、當然幕府に対する御憤りのさまざまな意味が込められてゐたと言へよう。そして「法度」に抵触するやうな後水尾天皇のこの御行為を、幕府が不問に附したかげには、次の天皇が幕府の血縁の方であられるといふことから、自分に都合がよければ、自ら作つた「法度」に抵触しても異議を申し立てない、といふ幕府の態度であつたことはいなみ得ないであらう。

なほ万治二年（一六五九）後水尾上皇は、六十四歳の御時、洛北、比叡山の麓近く山腹

から山裾にかけての傾斜地に雄大な構想をもつた「修學院離宮」を御創建になられた。
(御陵墓は、京都市東山区今熊野にあり、月輪陵〔九重塔〕と申し上げる。)

ついでながら一言加へると、さきの興子内親王は、天皇の位を継がれて第百九代・明正天皇(女帝)となられた。御年七歳で踐祚、御在位十五年ののち、二十一歳で御讓位、七十四歳まで御存命であられたが、御歌は残されてゐない。御踐祚、御讓位ともに後水尾上皇の御意向によることと拝せられる。寛永十二年(一六三五)幕府は三代將軍・家光が諸大名統御の方法として、「參觀交代の制度」を定め、さらに中央及び地方の職制を整備した。また同年幕府は、耶蘇教を重ねて嚴禁し、このため寛永十四年(一六三七)「島原の乱」が起り、寛永十六年(一六三九)には、幕府は遂にオランダ以外の西洋諸国との貿易を嚴禁、「鎖国令(第一回)」を発令するに至った。

(明正天皇の御墓は、後水尾院と同じく月輪陵〔九重塔〕と申し上げる。)

——註、後水尾天皇以降は出来る限り歌をお詠みになった御年齢をも記すことにした。——

後陽成院崩御後、御追善の御製八首の中に(元和三年一六一七)御年二十二歳)

しら雲のまがふばかりを形見にて煙のすゑも見ぬぞかなしき
つかふべきみちだにあらば慰めむ苦のしづくを袖にかけても
さまざまに移り變るもうきことは常なるものよあはれ世の中
うけつぎし身の愚さに何の道も廢れ行くべき我が世をぞ思ふ

後陽成院崩御、御いたみの御歌八首の次に、「又」として載せたる「題不知」御製十四首の中に（同右）

夕暮はいとどさびしきいろそへて風にみだるゝ庭のみぢ葉
もみぢ葉をさそひつくして吹く音は木々にさびしき夕嵐かな
かきくれぬわかれし今朝の面影の立ちはなれぬも落つる涙に
みちしばの露の玉の緒消えねたと今朝のわかれに何残るらむ
散りしくをまた吹きたてて夕風の紅葉を庭にのこさぬもうし

社頭祝（寛永二年一六二五御年三十歳）

松の葉はちりうせずしてすみよしや守るもひさし敷島のみち
いのりおくいま行末もかぎりなく猶ふきとほせ五十鈴川かぜ（孟冬の頃、式部卿宮御点）

早春雪（寛永六年一六二九御年三十四歳）（註・この年十一月、御讓位）

かきくらし降るも積らでのどけさの雪の上にもしるき春かな

御位ゆづらせたまへるとき（同右）

思ふ事なきだに背く世の中にあはれ捨てゝもをしからぬ身を

——一説に澤庵和尚を東堂に被勅□時、東武（註・幕府）より申し返す故に、本院へ御譲りの時、云々として——
（同右）

葦原やしげらばしげれおのがまゝとても道ある世とは思はず

峯照射（寛永九年一六三二御年三十七歳）

明くる夜を残す影とや木のくれの繁き尾上にともしさすらし（聖廟御法巻）

秋里(同右)

秋さむきおのがうれへやわびかはす曉ちかきしづがいへく(聖廟御法衆)

寄社祝(同右)

九重のためならぬかはまもれたと天津やしるも國津やしるも(聖廟御法衆)

停午月(同右)

なかぞらに月やなるらむ呉竹のすぐなる影ぞまどにうつれる

速(同右)

あづさ弓いるにも過ぎて年ごとにこそにさへ似ず暮るる年哉(去年)

聞鹿(同右)

聞く人のかたるを聞きて思ふさへ身にしむものよ小男鹿せしがの聲

田家(寛永十一年―一六三四―御年三十九歳)

もる聲も水のひびきも絶えはてゝ氷る冬田のいほのさびしき(百首御当座)

旅行(寛永十三年―一六三六―御年四十一歳)

みやこにと聞けば賤しづさへ一筆のたよりにたのむ旅のみちかな

暮村雪(同右)

くれふかく歸るやとほき道ならむ笠おもげなる雪のさとびと

閑居(寛永十四年―一六三七―御年四十二歳)

のがれこし心にも似ず夢はなどなほ思はずに世にかへるらむ(*思はずに||思ひがけもなく)

雲雀（同右）

夕ひばりわがゐる山の風はやみ吹かれてこゑの空にのみする

残雪（同右）

みねつゞき都にとほき山々のかぎりも見えてのこるゆきかな

懐舊（同右）

みち／＼の百もものたくみのしわざまで昔におよぶ物はまれにて

寄世祝（同右）

祈りおく千歳は代々につきもせじありとある人のひとつ心に（國母御方御当座）

すまのまんだら
袖五月雨（同右）

眞木ながす川波高き五月雨にちからをもいれぬヒメ丹生のさま袖びと

寄道慶賀（寛永十五年—一六三八—御年四十三歳）

思ふことのみちみちあらむ世の人のなべて樂しむ時のうれしさ

寄国祝（同右）

ためしなやひとの國にもわが國の神のさづけて絶えぬ日嗣は

春風春水一時來（寛永十六年—一六三九—御年四十四歳）

あらたまる春のしらべにかよふらし泉のこゑも松のひゞきも（仙洞御会）

七夕祝（同右）

ほし（星）あひ（合）の空にくらべむ君も臣も身をあはせたる代々の契りを（禁中御会）

寄日祝（同右）

つきせじな天津日嗣もくもりなく出で入る影の照すかぎりは

早苗（同右）

山水のたきつながれをせきいれて雨待ちあへずとる早苗かな

山家（同右）

思ひ入るころのおくの隠家にすまばや山はよしあさくとも

伊勢（同右）

うごきなき下津岩根の宮柱身を立つる世々のためしならずや

にごりなきこゝろの道をたてそめし五十鈴の川の宮柱かも

寄道祝（寛永十七年—一六四〇—御年四十五歳）

行く人のみな出でぬべき道ひろくいままも治まる國のかしこさ（造営之頃）

霞（寛永十八年—一六四一—御年四十六歳）

水無瀬川とほきむかしのおもかげも立つや霞にくるゝ山もと

こひつゝも鳴くや四かへり百千鳥霞へだてゝとほきむかしを（後鳥羽院四百年忌）

為君祈世（寛永十九年—一六四二—御年四十七歳）

千代もしるし御垣の竹のふして思ひおきてかぞふる人の誠に

やすかれと萬の民をおもふまで代々の日嗣をいのるほかかは

九重の君をたゞさむ道ならで我が身ひとつの世をばいのらず（御会始）

庭竹（寛永二十年—一六四三—御年四十八歳）

呉竹の園生にのこせ世々の道に老いぬる松のにはのをしへを（*にはのをしへ—庭訓。家庭における教訓）

春到管絃中（寛永二十一年—一六四四—御年四十九歳）

國民とともにたのしむ絲竹にをさまるはるのいろをうつして（御会始）

浦（正保三年—一六四六—御年五十一歳）

暮れぬれば沖の友舟漕ぎわかれおのがうら／＼月や見るらむ

寄月述懐（慶安元年—一六四八—御年五十三歳）

世をなげく涙がちなる袂にはくもるばかりのつきもかなしき

寒草霜（同右）

朝顔のもろきも千代のしら菊もわかず枯野のしものあはれさ

いかなれや霜はわかじをみどりなる草も枯野の中にまじれる

深夜螢（慶安三年—一六五〇—御年五十五歳）

誰がおもひあまりて出でし魂ぞとも夜深く見えて飛ぶ螢かな

行幸の御おくり物のさうの琴のことちづつみに、かきつけさせ給ふ（慶安四年—一六五二—御年五十七歳）

（註・この年五月、御出家）

記しおく世のふる事のおのづから絶えたるをつぐ跡習はなむ

将軍（徳川家光）薨去（註・同年四月）のとき女院御方（東福門院、和子 \parallel 家光の妹）へつかはさる（同右）

あかなくにまだき卯月のはつかにも雲隠れにし影をしぞ思ふ

ほととぎす宿に通ふもかひなくてあはれなき人の言傳ことづてもなし

独述懐（承応二年—一六五三—御年五十八歳）

ともかくもなさばなりなむ心もてこの身一つを歎くおろかさ（御試筆）

後光明院崩御の御ときに壬生院みぶへつかはされし（承応三年—一六五四—御年五十九歳）

をり／＼に思ひいづれば草も木も見るに涙のたねならぬかは

延宝二年（一六七四）七十九の御寢覚に（御年七十九歳）

おもひやれいるがごとくも梓弓やそぢちかづく老のねざめを

延宝三年（一六七五）十一月（十四日）二十四日、法皇八十の御賀に、禁中（靈元天皇）よりしろがねの杖につけさせたまひて

「君が手に今日とる竹の千代の坂こえてうれしきゆくすゑも見む」といふ御歌をたてまつりけるに御かへし

（御年八十歳）

つくからに千年の坂も踏みわけて君が越ゆべき道しるべせむ

借残春（延宝四年—一六七六—御年八十一歳）

花鳥にまたあひ見むたのみなきなごりつきせぬ老が世の春（秋、御寢覚遊ばされて御詠）

月前雲（同右）

もれ出でゝいまひときはの光そふ雲にぞ月は見るべかりける

社頭祝（御詠年、不詳）

八幡山やそぢにあまる身ながらになほも願ひぞつきぬ（のあるぞ）かなしさ

いかでなほめぐみにあはむ神やしろかけて祈りし心ひとつに

河千鳥（延宝五年—一六七七—御年八十二歳）

河風にさそはれわたる小夜ちどり立ち居もしるく鳴きかはしつゝ

延宝五年七月五日、新廣義門院國子（註・後水尾院妃、靈元天皇御母）かくれさせ給ひしのも、今上（靈元天皇）におくらせ給へる御歌

六字の名號（註・なむあみだぶ）を初句のかしらにすゑて互疎をつらね、かのなきかけにたむけて懐なごみを述ぶるといふことしかり（六首中四首）

なにごと夢の外なる世はなしと思ひしこともかきまぎれつつ

むかひみて唯さながらの面影（に）もひとことをだにかはさぬぞうき

あけ暮にありしなからの事わざも目の前さらず見る心地して

ふたたびは（めぐり）うまれ逢はむも頼まれぬこの世の夢の契かなしき

題不知（延宝七年一六七九—御年八十四歳）

これをだに人に見えむもつゝましきやそぢの後の敷島のうた（御試筆）

秋水（以下一部、御詠年、不詳）

岩間ゆく水のひよきもおのづからすめるや秋のしらべなるらむ

閑見月

つくづくと月にむかひて思ふかな見ぬ世の中も語るばかりに

月秋友

うきこともかたりあはする心地してかたらひあかぬ秋の夜のつき（以上、後水尾院御集上巻）

八月中旬の頃中院大納言通村（註・中院通勝の子）武家の勘當の事（註・天皇の御讓位に關して幕府よりとがめあり）ありて（寛永七年一六三〇—）武州（武蔵の國、江戸）にある頃つかはさる

思ふより月日經にけり一日だに見ぬは多くの秋にやはあらぬ
秋風にたもとの露もふる里をしのぶもぢぢり亂れてやおもふ
いかにまた秋の夕をながむらむうきは數そふたびのやどりに
何事もみなよくなりぬとばかりをこの秋風にはやも告げこせ（*とばかり〓……だけ）

独述懷

へだてなくいひむつぶとも世の中におなじ心の友はあらじな

述懷非一

道々のその一つだにいにしへのはしがはしにもあらぬ世にして
いかにしてこの身一つをたゞさまし國を治むる道はなくとも

懷舊

ひらけなほ文の道よりいにしへにかへらむ跡は今ものこさめ
見ず知らぬ昔人さへ忍ぶかなわがくらき世をおもふあまりに

神祇

まもれなほ世にすみよしの神ならばこの敷島の道のまことを

祝

絶えせじなその神代より人の世にうけてたゞしき敷島のみち

神社祝（隱岐國へつかはさる）

おきの海のあらしなみ風しづかにて都のみなみ宮つくるなり

題不知

面影はたゞさながらにひと言もかはさでさめし夢ぞかなしき
現うつつとはおもほえなくにさりとてもさむるときなき夢ぞかなしき

つくづくとふみにむかへばいにしへの心ごゝろの見えてかしこき（以上、後水尾院御集下巻）

寄日神祇

八百よろづ神もさこそは守るらめ照る日の本の國つみやこを

釋教

耳に聞き目に見ることのひとつだに法のりの外なる物やなからむ

寄書述懐

古をかきおく筆のあともうしさらすばくだる世とも知らじを

いかなる折にか

思ふこと一つかなへばまた二つみつよいつゝむつかしの身や

御辭世（延宝八年一六八〇—御年八十五歳）

ゆきゆきて思ふもかなし末とほくこえしたか根の峰の白雲（以上、後水尾院御集拾遺）

後ご光こう明みょう天てん皇のう
(第百十代)

御在世 一六三三—一六五四(崩御・二十二歳)

御在位 一六四三—一六五四(十一歳—二十二歳)

(御在位の全期間にわたり御父・後水尾上皇の院政がつづく)

第百十代・後光明天皇は、明正天皇(女帝)のあとを継がれた方で、第百八代・後水尾天皇の第三皇子、御母は壬生院藤原光子であられた。この御代の慶安四年(一六五二)に、幕府側では三代將軍・家光が死に、第四代將軍に家綱が任ぜられた。この交替の年に由井正雪・丸橋忠彌らの浪人の一団が、幕府の覆滅をはかり「慶安事件」が発生した。しかし事は未然に防がれ、幕藩体制はむしろこれを契機に安定する方向に向った。なほ、後光明天皇は、ひときはきびしい御性格であつて、儒学、詩賦を好んで学ばれ、典禮格式を重んじ、衣服の制の復古を御主張になられたほか、殊に武藝を尚び撃劍を學ばれたといふ。御著書に「鳳啼集」があられる。

(御陵墓は、京都市東山区今熊野にあり、後水尾天皇と同じく月輪陵〔九重塔〕と申し上げる。)

松添采色(寛永二十年—一六四三—御年十一歳)

霜の後の松にもしるしさかゆべき我が國民の千代のためしは(御代始、公宴御会抜書)

歎冬露(御年不詳)

咲きしよりたゞ露の間に山吹の見らくすくなく暮るゝ春かな

鶴馴砌(正保五年—一六四八—御年十六歳)

住みなれてなれも千年の友よふや雲居の庭のつるのもろごゑ（御会始）

初春祝道（慶安四年—一六五一—御年十九歳）

祝思ふぞよこのあら玉の春年と共に道もかしこき世々御代にかへれと（御会始）

（御詠年不詳）

おのづからすよしくもあるか夏ころも日も夕くれの雨のなごりに（弘文荘・名家真蹟図録所載）

後西天皇 (第百十一代)

御在世 一六三七—一六八五(崩御・四十九歳)

御在位 一六五四—一六六三(十八歳)~二十七歳)

(御在位の全期間にわたり御父・後水尾上皇の院政がつづく)

第百十一代・後西天皇は、第百八代・後水尾天皇の第七皇子、御母は逢春門院藤原隆子であられる。天皇の御代には明暦三年(一六五七)に江戸の大火、万治元年(一六五八)に伊勢内宮の炎上、寛文元年(一六六一)に内裏の炎上など、諸国に大地震や水害の天災がひんびんと起ったが、幕府は、その原因を天皇に帰せまるといふ態度であった。

なほ、明暦三年(一六五七)徳川光圀が「大日本史」の編纂を始めてゐるが、これは皇室と幕府の關係のたゞならざるに氣づいての事でもあった。後西天皇は、書道に秀で、かつ和歌に長じてをられ、歌集「水日集」、御日記「後西院御記」が残されてゐる。

(御陵墓は、京都市東山区今熊野にあり後水尾天皇と同じく月輪陵〔九重塔〕と申し上げる。)

逢恋(承応四年—一六五五—御年十九歳)

嬉しきもうかりし節も打ち解けて逢ふ夜はいはむ言の葉ぞなき

古寺月(明暦二年—一六五六—御年二十歳)

寺ふりぬ誰れおこなひてしづかなる心よりすむ月を見るらむ

伊勢(同右)

ながつき
九月やながきためしのみてぐらのつかひは絶えし神の御前に

神楽（明暦三年—一六五七—御年二十一歳）

今もなほ神代のまゝの跡とめてうたふさかきのもとすゑの聲

（*もとすゑ₁||神楽では本方、末方に別れてうたふ故にかくいふ）

谷樵夫（同右）

くれふかみ嶺より谷の賤の男にこゑをかはしてかへる山人

樵夫婦月（万治二年—一六五九—御年二十三歳）

山人のわが里とほみ月待ちてかへるやおもきたきと負ふらし

遠村煙緜（遠そし）（同右）

住む人もひとりふたりと立ちのぼる煙もほそきをちかたの里

かさなる山は（同右）

故郷にゆめだにかよへ旅ごろもかさなる山はいくへなりとも

野鷹狩（同右）

み狩野やいかでわけまし御幸（みゆき）せし跡もなきまで雪つもりつゝ

冬朝（寛文六年—一六六六—御年三十歳）

かれあしも氷るみぎはに折れふして朝雪しろき池のおもかな

貴賤夏祓（寛文七年—一六六七—御年三十一歳）

おほぬ（大幣）さの敷も敷多（あまた）に今日といへば高きいやしき禊（みそぎ）すらしも

樵夫夕婦（同右）

(櫛)
こりはこぶおのが歎きをうたふらし暮るゝかへさの道も急がで (*かへさ||帰り路)

庭上竹 (同右)

誰れもこのすがたにならへおのづからまがらで直なほき庭の呉竹

旅行夕友 (寛文八年—一六六八—御年三十二歳)

嬉しくもおくれし友ぞたどりくる枕ゆふべのおなじやどりに

早苗多 (寛文十一年—一六七—御年三十五歳)

早苗とる田子の小笠のはるくと此方こなた彼方かなたにうたひつれつゝ (聖廟御法樂)

静見花 (寛文十二年—一六七—御年三十六歳)

世のうさも身のおろかさも思はれず花にむかへるはるの心は (聖廟御法樂)

寄国祝 (同右)

あしはらの中津國の名國の風このみちならでなにをあふがむ

青柳風静 (延宝二年—一六七四—御年三十八歳)

吹かぬまも風をすがたになびくなりしだり柳の枝もとをに (*とをを||たわむさま)

飛瀧音清 (延宝五年—一六七七—御年四十一歳)

いさぎよし岩根松が根玉ちりてみなぎり落つる瀧もとどろに

春雑物 (延宝六年—一六七八—御年四十二歳)

ながき日もまなばでくらすほど見えて書よみは蠶しみのみ硯すずりちりゐて

山家橋 (天和二年—一六八二—御年四十六歳)

山水のすむとばかりの丸木橋さてもうき世にかよふみちかも
このさとは竹あめる垣石の橋おろそかなるぞこゝろとまれる

夏晝（天和三年一六八三—御年四十七歳）

西東なめにはあらぬ日の影ぞあつさも今をひとさかりなる

言出恋（貞享元年一六八四—御年四十八歳）

思ひつゝうち出でそめし一言を忍びかねたるこゝろとは知れ
包むとてつゝみは果てじよしさらば思ひも戀も打ち出でゝこそ

花有遅速（同右）

いつまでもかくてをあれな散る跡につぎて櫻の咲き續きつゝ（*かくてをあれな||このやうであつてほしい）

樵笛聲 幽（同右）

淋しさやかへる木こりの吹く笛もかすかになりて暮るゝ山里
かすかにも樵夫きこりのかへさ吹く笛を友ならぬ物の慕ひてぞ聞く

雨中早苗（同右）

いそがしな雨に植田のしづの女めがみし（水波）ぶつきたるたすき姿は（*みしぶ||つまり水の上に浮く赤黒いかす）

旅行夕友（同右）

旅のうさも夕はまさるおもひまで語るこゝろもおなじ道づれ
まくらかる程もちかしとゆふぐれの道いざなひていそぐ旅人

田（同右）

一年の民のしわざやすからぬ思へゆきも植ゑてかるまで
やすからぬ身のいとなみよひたすらに民はたのみを思ふ豊年

寄国祝（同右）

神のめぐみ佛のをしへふたつ無くたゞこの國はこの道ぞかし

靈元天皇 (第一百十二代)

御在世 一六五四—一七三二(崩御・七十九歳)
御在位 一六六三—一六八七(十歳—三十四歳)

(一六八〇年まで御父・後水尾上皇の院政がつづいた)

第一百十三代・東山天皇御在位の全期間
第一百十四代・中御門天皇御在位の殆どの期間

における院政期間 一六八七—一七三二
(三十四歳—七十九歳)

第一百十二代・靈元天皇は、第八代・後水尾天皇の第十八皇子で、御母君は新廣義門院藤原國子と申し上げる。天皇の御在位は二十五年間であられるが、そのうち十八年間は、御父君・後水尾上皇の院政の最終時期に該当してゐる。従つて終りの八年間が、靈元天皇お一人での親政期間といふことになる。しかし御讓位後、東山天皇とその次の中御門天皇お二方の御在位のはとんど全期間に近い年月、七十九歳で崩御せられるまで実に四十六年間にわたつて院政をおとりになられたので、靈元院が政治をみそなはせられた年数は実に七十年といふ長期間に及んだことになるのである。なほ、靈元院が御在世中にお詠みになった和歌の総数は、「列聖全集」の中の「御製集」第八・九・十巻にわたつてをり、この集に集録されてゐるものですらすでに六、〇〇〇餘首(註・「歴代御製集」では三、八四二首)に及んでをり、歴代天皇のうち明治天皇の十万首近い御詠草を別格とすれば、天皇全史を通じて、最も多数の御詠草を残された方であられる。このことは、靈元院が、その御在世全期を通じて、いかにその精神の緊張を持続展開せられたかを証

してをり、天皇としての御心勞が並々ならぬものであったことを偲ばせるに餘りあるものがある。

靈元天皇の踐祚（一六六三）の二年後、すなはち寛文五年（一六六五）には山鹿素行（當時四十四歳）が、幕府の官学である朱子学を批判して「聖教要録」を記述し、ために播州赤穂の浅野家にお預けの身になってゐる。この山鹿素行は、その後「謫居童問」（一六六八）、「中朝事實」（一六六九）などの述作によつて、大義名分と朝廷を尊ぶべきことを唱へ続け、これが、大石良雄らにも大きな影響を与へ義士の討入り（一七〇二）へとつながつてゆくのである。だがこの當時は幕府政治の専横と私利追求、人心柔惰に流れての元禄文化の中にあつて、天皇の御事に心を向けることや、國體の尊嚴についての反省などは、一向に芽生えてくる様子もなかつた。この時期では、わづかに前述した山鹿素行や、国学者の僧契冲けいしゅうや荷田春満かたのあつたまろが登場してくる時期で賀茂眞淵や本居宣長の登場は、三十年・五十年の後、といふ時期であつた。従つてかうした中で、元禄五年（一六九二）水戸の徳川光圀みつたかが、摂津の湊川みなとがは（楠木正成が戦死した所）に朱舜水の撰文である「嗚呼忠臣楠木之墓」という碑を建て楠木正成をたゞへたことは、きはめて意義深いことであつた。それは建武中興以降三百五十年間の「忠義・忠節」思想の混乱に対して、天下に向つて一つの鮮明な解釈を示したことを意味する。すなはちこの建碑の裏を返せば、足利尊氏なる人物は、日本の國體と悠久なる歴史の本流からは、逆賊の汚名を甘受しなければならぬ人物であることを指摘し、ひいて足利氏の作つた室町幕府の基本的立場に疑問

符を投げかけ、さらには、當面の徳川幕府の犯してゐる許しがたい罪を浮き彫りにしたものであった。光圀が「大日本史」の編纂に着手したこともあはせ考へれば、この間の消息は自ら明かになるであらう。

さて、靈元院の院政のもとでの中御門天皇の御代（宝永六年—一七〇九）になると、幕府では新井白石の登用がみられ、さらに、享保元年（一七二六）には、第八代將軍として徳川吉宗が登場することゝなつた。この吉宗は、徳川幕府中興の英主といはれただけあつて、在任中、武藝・學問を奨励し、元祿の情風の改革に努力し、幕府の支配体制を強化した。一方皇室を尊崇したともいはれてゐるが、彼が手本としたのは、何と云つても徳川始祖の家康であつただけに、朝廷と幕府との本末關係を明確に把握してのことではなかつたことを忘れてはなるまい。

なほ、天皇は御父君・後水尾天皇に対する御孝心がとりわけあつくあられ、特に享保六年（御年六十八歳）から度々行はれた修學院離宮（後水尾天皇の御創建にかゝる）へのおでましの折の、数々のみ歌の中にその御孝心を厚く偲ぶことが出来る。

（御陵墓は、京都市東山区今熊野にあり、御父君・後水尾天皇と同じ月輪陵〔九重塔〕と申し上げる。）

雪（寛文五年—一六六五—御年十二歳）

都だにまなくときなく降る雪のいかに深山をうづみはつらむ（聖廟御法樂）

瀧音知春（寛文九年—一六六九—御年十六歳）

いはばしる音まさるなり春風に瀧のみな^(水)かみこほり解くらし(御会始)

時雨(同右)

風の上に曇りみ晴れみ行く雲やさぞな生駒^(いこま)のやまずしぐるゝ

深夜埋火(同右)

雪霜のふかき夜知らで思ふどち語らひあかすうづみ火のもと

披書逢昔(同右)

百敷^(ももふ)のむかしを今にとばかりもしのぶに餘るふみにむかひて

野徑^(のみち)堇(あざむら)(寛文十一年一六七一御年十八歳)

なつかしきゆかりの色とすみれ咲く紫野ゆき摘みてかへらむ

山家(同右)

山深く住む身とてこそとはさらめせめて忘れぬ世の友もがな

神樂(同右)

聞くからに身にしむものよ更^(よ)くる夜の霜に冴^(あ)えたる明星^(あかぼし)の聲

(* 明星||神樂の曲名、夜の明け方にうたふもの)

鏡(寛文十二年一六七二御年十九歳)

よしあしをうつさば今もうつし見む人にまされる鏡あらめや

夏居所(同右)

卯^(う)の花のかきねしわたしことさらに山里びたる住居さびしも

祝言（同右）

名ある者はやがて雲井に聞えあげよ聞きて我が代の樂たのしみにせむ

野分（同右）

秋の色はあたりののこらじ巖いははをも吹きあげつべき今朝の野分のわきに

家々歳暮（同右）

待ちをしむ思おもひやかはる誰たが里もいまはたおなじ年のゆきゝに

寒蘆蒲江（寛文十三年・延宝元年一六七三―御年二十歳）

波にをれ風にみだれて霜がれの入江はのこるむらあしもなし

寄絵恋（同右）

あぢきなきや面かげばかりかきえてもえしも情こころの色はうつさで

遠嶺雪（同右）

繪にうつし語るを聞きて富士の嶺ねの雪ぞ誠に見しばかりなる

月（延宝二年一六七四―御年二十一歳）

見るまゝに曇りみ晴れみ秋の夜の長きおもひをそふる月かな

寄神祝（同右）

朝な〜神の御前みまへにひく鈴のおのづから澄むこゝろをぞ思ふ

田水（延宝四年一六七六―御年二十三歳）

朽ち残る霜のいなぐさそのまゝに氷のとづる田の面おもさびしも

夕立（延宝五年—一六七七—御年二十四歳）

夕立しなごりもすゞしひとむらの雲ゆくあとの山はみどりに

瑞籬（同右）

あふげなほ久しき世より跡たれて九重まもる賀茂のみづがき

採早苗（同右）

幾町の田の面をひろみ今日もまた採らぬ早苗やなほ残るらし

夜雲収盡月行遅（延宝九年・天和元年—一六八一—御年二十八歳）

更くる夜の秋かぜきよく雲きえてひとり空行く月のしづけさ（九月十三日）

二月九日、数代中絶したる立坊のこと沙汰せしに、節会の儀式よりはじめ、

ことのさはりなく送けおこなひぬることを悦びおもひて（天和三年—一六八三—御年三十歳）

時しありて絶えたるをつぐこの春のわが嬉しさぞ身に餘りぬる

寄道祝言（同右）

あめつちの神のこゝろをつたへきて今も八雲の道はたゞしき（*八雲の道||和歌の道をいふ）

田家煙（同右）

朝夕のけぶりたえなく住む賤はおのがたのみの秋や待つらむ

行路春草（同右）

踏みしだく跡とも見えず道の邊に萌えていろこき春の若ぐさ

牧笛掃野（天和四年・貞享元年—一六八四—御年三十一歳）

道とはき野邊を忘るゝすさびにや笛ふきつれて歸るあげまき

(* あげまき＝髪を左右にわけ、耳の上でたばねた髪形をした少年)

山家水(同右)

山水のすみえてや知る塵の世にそめしこゝろの深きにごりも

世治文事典(貞享二年—一六八五—御年三十二歳)

時しありと今ぞさかえむをさめしる道の外なきやまと言の葉(御会始)

林首夏(同右)

見し花のはやしの梢こすねなごりなくみどりにしげる夏は來にけり

篠上蔽(同右)

かきくらし霰あられふる野の小篠はら枯れぬ青葉も散るばかりなる

春草(貞享三年—一六八六—御年三十三歳)

春さむみおく朝霜もこゝろせよまだうらわかき野邊せの小草こぐさに

秋菊あきく盆枝(同右)

なが月の今日をさかりに咲く菊は小枝も花のところせげなる

明年位としご譲るべき年の御走十日あまり四といふ夜、内侍所にて神樂を聴聞せしに、年比としご内陣にて聞き馴れ侍るもの音、明年よりはほかさまにて聞き侍るべきよと思へば、今更に神の御前なごりをしく侍るは、神慮もへだてなきやうにおぼえし。まことにかしこきことと、感涙をさへおしのごひて(同右)

忘れじとおもふこよひのものの音ももろ心にや神も聞くらむ

かくいへど年比としごのねがひ、今こむ春はみちぬべきこと、春宮はるみや(後の東山天皇)のふかく神慮にかけられ給へるこ

とどもをおもひつゞけて、いよ／＼天津日嗣の行末、天地とともにかぎりなからむ事を祈り申すに、いにしへの神勅いとたのもしく思ひいでられてこゝろやすければ

わがねがひながくみてよと思ふことこれもぞ神のもろ心なる

おなじくつとめて供米をいたゞくとて、また

祈りおくわがすゑまもれ年を経てなれし名残を神もおもはゞ（以上、三首、十二月十四日）

蚊遣火（貞享四年—一六八七—御年三十四歳）（註・この年三月、御讓位）

すだきよる聲をくるしみ夜もすがらする業わざならし賤しづが蚊遣火かやりび

籬まき瞿あざし麦あざし（同右）

花見むと種やはまきし山がつのせばき垣ほに咲けるなでしこ

社頭雪（貞享五年・元禄元年—一六八八—御年三十五歳）

今朝のあさけぬさとの袖もさむげにて雪に起きふす神の宮人（幣）

あと絶えずはこぶあゆみを雪の上に見るもかしこき神の廣前

山路蟬（同右）

蟬せみのこゑ木々にすゞしき夕かげの駒もすゞみて行く山路かな

春駒（同右）

若草のはるけき野邊を行きかへりいづこまでとかかける春駒

寄道祝（元禄二年—一六八九—御年三十六歳）

あふげなほ我が國なかにありとある道のはじめの大和言の葉

世ををさめ民をやはらく國の風吹きつたへたる道のかしこさ

市商客 (同右)

うるといへば哀あはれはかなきしわざにも我が身ひとつや辰たつの市人いちびと

(*辰の市市昔、大和の国で行はれた辰の日に立つ市をいふ)

鵜川 (同右)

うかひ舟さすかげうすき夕月の渡瀬(河)さやかに照らすかどり火
闇ふかき夜河にはなつうきわざを身にわすれても篝かがりさすらし

月下遊士 (同右)

思ふどち酌しやくむさかづきの影ふけて残る夜をしむ秋のさとびと (*思ふどち親友)

鶴帰きさ阜 (元禄三年—一六九〇—御年三十七歳)

まな鶴のあそぶ雲路も暮れぬとやもとの澤邊に立ち歸り鳴く
かへりくる翹つばさもとほき雲井路にさはべのたづの聲かはすなり

神社 (元禄五年—一六九二—御年三十九歳)

宮居して幾世をこゝに杉村のおくものふかき千木のかたそぎ (*かたそぎ片面をそぎおとした千木)
そのかみの教たがはぬ宮どころいすゞの河のすゑもいく千代

寄市雑 (元禄六年—一六九三—御年四十歳)

世々の道やうることかたき九重の西にひがしに市は立つとも

言出恋 (同右)

わが心見ゆらむものを言の葉のおよばぬきはは猶のこるとも

屋上葺（同右）

眞木の板も砕くばかりの音立てゝまやのあたりに散る葺かな（*まやⅡ切妻造りの屋根）

神樂（同右）

ながなきの鳥の聲そへ明けぬめり神世おぼえてうたふ夜の空

神祇（元禄七年—一六九四—御年四十一歳）

おこたらず祈る手向の言の葉はおろかなるをも神やうくらむ

独述懐（元禄八年—一六九五—御年四十二歳）

學びえぬ身には多くの月日をも誰があやまちと知らで過ぎけむ

悦方言恋（元禄九年—一六九六—御年四十三歳）

あひ思ふといひし睦言誠あらばともに老いなむ世にも忘れじ

寄歌述懐（同右）

敷島のこの道のみやいにしへにかへるしるべもなほ残すらむ

寄書祝（元禄十年—一六九七—御年四十四歳）

仰ぐぞよ神の御代より世々たえずしるせる國の史のかしこさ

新樹露（元禄十三年—一七〇〇—御年四十七歳）

露おちて涼しかりけり夜の雨の名残りしたゝる木々のみどりは

うらこぐふねの（同右）

あさなゆふな浦こぐ舟の往來にも波しづかなる時やうれしき

田家人稀（同右）

刈りあげて日敷へぬらし里の子の穂拾ふ袖も見えぬ田の面は
庵近くかよふ袖さへまれに見て刈れる田の面の秋ぞさびしき

幸逢太平代（元禄十四年一七〇一—御年四十八歳）

をさまれる世は玉はゝき玉の緒のゆらぐ春知れ大和もろびと

（*玉はゝき||正月初の子の日に蚕室を掃くために用ひた箒、箒の先に玉をつける）

梅雨（同右）

民の戸に待ちてよろこぶ雨ならば晴れず五月の日敷をもふれ

雲雀幽（同右）

いく千尋あがる雲雀ぞ見るがうちに雲のいづことわかぬ翹は

梅花風静（元禄十六年一七〇三—御年五十歳）

あかすなほにはへこの花吹く風も今は春べとのどかなる世に

早苗多（同右）

いく千町田の面にぎはふ時もきぬとる手敷そふ民のさなへに

春旅（元禄十七年・宝永元年一七〇四—御年五十一歳）

花とりとうさぞまぎるゝ旅ごろも春行くみちは野邊も山邊も

閑居雪（同右）

書をだに夜も見よとやつれくゝの窓降りうづむ雪のひかりは

九月二十日、後光明院（註・靈元院の御兄君）五十回聖忌に

いそぢへし今日長月のはつかにも知らぬ御影を更に戀ひつゝ（*はつかは僅か。二十日の懸詞）

楊誰家（宝永二年一七〇五—御年五十二歳）

誰がゆかり知らぬ軒端も楊咲く宿なつかしみとひやよらまし

滝（同右）

おち來るを千尋と見れば山とよむひゞきもたかき瀧の岩がね

樵路雨（同右）

降り出づるゆふべの雨におふ柴の濡れてやおもきかへる山人

燕米（同右）

住み捨てし去年の古巢の軒端をもあはれとひけるつばくらめ哉

社頭祝言（宝永四年一七〇七—御年五十四歳）

動かじな世をたひらけくやすらけくまもる北野の神の宮居は

歳暮言志（宝永五年一七〇八—御年五十五歳）

萬代に立ちかへるべきはじめぞとわきて春待つ年のくれかな

東山院（註・靈元院の御子・東山天皇）の御初月忌日、御看經のついで、

新院と称したてまつりしも、むかしになりぬる事となげかせたまふに（宝永七年一七二〇—御年五十七歳）

ありし名も今はふるとし春かけてみそか敷ふる今日の程なさ（註・東山院の崩御は、宝永六年十二月十七日）

深夜燈（同右）

思ふどちかたる昔はつきもせで圓居まゐりに更かくるともし火のもと

寄国祝（註・朝鮮の使節来朝の折に）（宝永八年・正徳元年一七二一御年五十八歳）

わが國の風をやあふぐこまびとも今年千さとの波路分けきて

高麗人の語るを聞かばもろこしも我が國（宮）とめる時や知るらむ

旅宿友（正徳二年一七二二御年五十九歳）

故郷をかたりなぐさむ旅寢してもろごゝろなる友はうれしき（*もろごころ〓心を同じくすること）

巖苔（同右）

苔こけのむすいはほにぞ思ふさざれ石のなれる世さぞと遠き昔を

社頭祝世（同右）

まもれなほ神の宮居に引くしめのすぐなれと世をいのる誠は

しき島の道のすなほにならへよとこの神垣に世をもいのりて

簾外燕（正徳三年一七二三御年六十歳）

小簾（外）のこすに見えみ見えずみ羽つばかろく行きては來ぬる燕つばぐちめかな

器中友（同右）

おもはずの友をもいまは都までさそはまほしくなるゝ旅かな

独述懐（同右）

代々の跡に今はおくれて入る道の及ばぬことを恥づる老かな

披書知昔（同右）

語りつぎ言ひつぐことは難き世の昔もふみにむかひてぞ知る

前参議、實陰卿（註・武者小路）古今集御伝授のとき（正徳四年一七二四―御年六十一歳）

ひさかたの	天のうきはし	かけまくも	かしこき神の
みかどより	心をたねと	まなびきて	世々に榮ゆる
しきしまの	わが日の本の	くにかぜ	吹き傳へたる
みちをまた	いやつぎ／＼に	のこすとて	和歌の浦なみ
ひとなみに	名をのみかけて	おほけなく	つたなき身をも
わすれつゝ	いにしへいまの	うたごと	深きこゝろを
いひさとし	ひめおくことの	かず／＼に	授けしまでの
日かづをば	いく日ばかりと	かぞふれば	五月のつきの
はじめより	すがの根ながき	日をおくり	みそかの程に
ひさしくも	なりにたれども	あめかぜも	時にしたがひ
おほかたの	世々にもくさの	さはりなく	遂げしねがひは
うれしけれ	これをおもへば	いちじるく	神のままれる
このみちを	この世にまもれ	このくにに	ありとある人の
あふがざらめや			

つたへゆくしるしは神のこゝろにて末たのもしき敷島の道

寄民祝(同右)

いにしへの授けしまゝに天がした民の時ある世をやたのしむ

冬雜物(正徳六年・享保元年—一七二六—御年六十三歳)

ねざめする霜夜の月のあけがたにこゝろも冴ゆる鐘の音かな

早春(享保二年—一七二七—御年六十四歳)

もゝしきの春につかふる諸臣や梅もかささでいとまなきころ

岡雉(同右)

いもと我れとねての朝けの岡の邊に妻こふきとす哀とぞ聞く

紅葉一樹(享保三年—一七二八—御年六十五歳)

たぐひなきものとぞめづるたゞ一木植ゑて砌に染むる紅葉を

燕來(享保四年—一七二九—御年六十六歳)

まだなれぬ軒の古巢はとひかねて空にまづ飛ぶつばくらめ哉

仙室(同右)

やまびとの道おこなへるあとなれや年ふる苔にうづむ岩屋は

明宮(註・靈元院皇子・職仁親王—有栖川宮)此の春より大學といふ文をうち／＼ならひ侍りし程に、ことし七歳なれば、書始の事をせさせむとて、日時を選み、十一月十六日になむ大藏卿を侍讀にて、古文孝經をならはせ侍るに、此のごろ雪をもよほして日ごとにくもりたる空のなごりなく、今朝よりはれて、日の色うるはしく春

などのやうにのどやかなるむまの時ばかり、いさゝかの讀みたがへなく、口うつしならひとりたるを聞き居て、よろこびにたへず。かねて闕如なからむことを天滿天神に祈願申し、そのしるしいちじるくありしかば、かへり申まうし（註・神佛へのお禮参り）のついで、思ひつゞけ侍りし（同右）

いにしへの書かきはじめせし今日よりはなほこそたのめ神の守りを

長月の二十日あまり、修學院普明院にまうづべきよしを仰おぼ定めしに、十日あまりの九日の夜の夢に、後水院（註・御父君）ありし御さまにて心よくうちゑませ給へるをまさしく見奉りしかば、さめて後をりからの感思あさからざりし程に、つとめておもひつゞけし（享保六年一七二一御年六十八歳）

夢ながらうれしと見つるたらちねのゑめる面影いつか忘れむ

その日になりて、はつかあまり七日といふあくるころほひ供奉の月卿・雲客・武士の警固まで事具するよしをいへば、出でたつ。正親町ただしなを北さまに行くほど、家ごとにあつまり来りて物見するものいくばくといふ數はかりがたし。されど、いさゝかも身をうごかし聲などたつるものひとりもなく、故院（註・御父君・後水尾院）のはじめて岩倉いわくらに行幸ありしとき、御製に

「わけくれば草木もさらにことやめて野山が末の道もさはらず」とよませ給へりしも、かくこそありけめと思ひ出でらるゝに、河原にうちいづるより、ことに見なれぬさまどもはるゝと見わたされたるも珍しきに、山々の麓ふもとうす霧たちわたり、しばしのほどに日いでなどして、さまゝの景趣に催されたる腰折ども道すがら數多あれど、させるふしもなき事どもなればもらしつ。道のなかなばにて、とはかりしぐれつれど、笠もとりあへぬほどにて晴れぬ。ゆくてに見れば、民の家居はおもひしよりもまれゝなるに、田面はいづこにもはるゝとかがりなく見わたさるゝほどに

はるかなる田の面を見ても違ちがなき民のしわざの程をしぞ思ふ

などつらねもて行くに、巳（午前十時ごろ）の刻ばかり林丘寺にいたりぬれば、普明院宮（註・後水尾天皇第八皇女・光子内親王）やがて出でおはして限なくよろこび給ふ。年久しくして逢ひ見たてまつらざりし老いかゞまれる御様にもやと思ひつれば、さしもあらで、八十八歳などには見え給はぬをめできこえさす。何くれとむかしの物語どものひまに

心のうちにつゞけし

これもまた夢かとぞおもふ白雲の八重たつ麓ふもと今日けふはとひきて

しばらくありて御堂にまゐりて観音の靈像舊院の御製など拜みたてまつりて、すぐに山路を八町ばかりあゆみ行きて山莊の隣雲軒にいたりぬ。昔寛文ふたつの年にやありけむ、舊院のこの山莊に御幸ごきやうせさせ給ひていざはなせ給ひしことありき。九歳の時にてあれば、今年六十年になりぬ。そこばくの春秋こゝにござりし事をいさらし思ひ出でて

この山のみるめをさへにはづるかな六十隔むそぢてし老おいのすがたに

やがてこの山にのぼりて松茸のすこし残りてあるをめぐらしとたづねもとめつゝとりもて行くほどに、おもほえず嶺までよぢのぼりぬ。この山の上ひんがしは繁れる山にて、その木の間より比叡の山たゞ咫尺（註・すぐ近）ばかりのやうに見ゆ。京にて遠く見しにはかはりて、目を驚かすばかりにぞある。南山のかた、野山はるくくと見わたされたり。山崎のわたりにやあらむ高からぬ山の上に、白くきら／＼としたるもの東西に長くひきはへたり。雲にもあらず何ならむと思へば、淀川なりけり。山の上に河を見ることが思ひもかけずめづらしかりければ

遠方をちかたのやまよりうへに雲をちかたよりもしろきを見れば淀のかはみづ

（午後四時ころ）

やうやう申まうの刻ばかりになれば、林丘寺にかへりぬ。晩食など終るほどに、夕日はなやかにさしきて、庭の紅葉色まさりたるをうちながめぬ。折しも此寺の鐘、耳にさしあてたるやうに響くもめづらかにおもしろくて

もみぢ葉は入相いりあひの鐘にいろぞ添ふこの山寺のあきのゆふぐれ（以上五首、九月二十日）

享保七のとし、きさらぎ（二月二十四日）はつかあまり四日、一位大納言（七十一）なむそぢの賀に、ことぶきを仰せつかはすついで筆をひ

きて（享保七年一七三二—御年六十九歳）

たらちねに見せばや長く仕へよといひし言葉の末とほる世を

これは、父の大納言實豊、朕わがが位くらゐのはじめつつかた、一位の大納言首服（註・元服）をくはへしその春の和歌會始

に、初春祝君といふ題にて

「かぎりなき君につかへよこの春の初もとゆひ（註・元服の時に結んだ紫の組紐）も霜むすぶまで」とありし。ともに（註・一位大納言も自分も）なまそぢのよはひにおよべることを思ひてなむ。

一乗寺曼珠院の寺は、むかし後水尾院たび／＼忍びて御幸ありしためしあれば、音羽川の左を八町ばかりありゆみて行くみちすがら、わらびをりなどして行きつきぬ。まづ天神の御まへにまあり、祈念などして本坊にいたり、かなたこなたを見る。人をはらひて屏重門のあなたまで見るに、七八間ばかりなる大木のさくらたゞ一本今さかりなるを見て（同右）

色も香も四方にこぼるゝさかりにて一木の花のあかぬ木高さ（三月十三日）

雲浮野水（同右）

さそふとも見えぬ野澤の水の面に空ゆく雲のかけぞながるゝ

蟲聲滋（同右）

さま／＼の聲をまじへて鳴く蟲は孰をそれと聞きもわかれず

（九月）
なが月のはじめつかた、修學院の山莊へたけがりに行くべきとて待るに、四日の夜の夢に、故院（註・御父君・後水尾院）をまさしく見たてまつりし。こなたへ御幸なりとて御輿かゝせたる所へまゐりて、わた殿のほど御手を引きたてまつり、御座にゐさせ給ひてもどかに御物がたりなどせさせ給ふ、とさだかに見侍りし。さめて後おもへば去年山莊へはじめて行きつるまへつかたに見たてまつりし夢の事を思ひ出でて、この山莊にあそぶ事よろこびおぼしめすやとかしこまりいさみて、九日になりて出でたつをりに思ひつゞけし

この秋もまたたらちねを見し夢の行方うれしき今日の山ふみ

二月一日、柿本社の神号をくはへられ、正一位をさづけらるゝ宣下ありしあした、よろこび思ひて法樂せし三首（享保八年一七三三御年七十歳）

神といま仰ぐにいとよめぐみありて守る言葉の道はたのものし
この神のめぐみをそへて守るよりさらに言葉の道ぞさかえむ
まもれ神ちとせの後もいく千年つきぬことばの道のさかえを

卯月はじめの六日、修學院の山莊にゆく。あくるころほひ門を出で、さかひ町を東にむかひて寺町にいづ。道のたよりあれば、いさゝか南にさがりて下御靈しもみたま（註・早良親王はか七人の無実の罪で亡くなられた方々を祀った社）のまへを行く。鳥居のうちにもいらまほしけれど、神前狭少なればさもなりがたくてうち過ぐ。されど心のうちにいさゝか祈念して法樂せしむる歌二首（同右）

於下御靈鳥居前心中奉法樂和歌

ふりはへて今日ぞ過ぎ行く出雲路にいつき祭れる神の御前を（*ふりはへて||困難をおして、わざわざ）
おりたゝで行くながめそ心にもまかせぬ道は神ぞ知るらむ

さて寺町を北へ行きて、賀茂道のつゝみの南より野にいであ鴨のやしろにまゐる。木だかきもりの下道を行きて、鳥居をいるほどより神々しく清浄なることいへばさらなり。橋殿はしどのに輿こしをかきあげさせて、それよりおりて拜殿にて手あらひ口すゝぎなどして神前にまゐる。……二拜の後、帖につき敷をくり和歌の一巻を懐中よりとりいでて法樂す。祝詞を申し祈念せしむることつねの如し

侍鴨社神前奉法樂和歌

霞

やはらぐる光を春のあさがすみ分け入る森のおくの木ぶかさ

神前をしりぞきいづるとて

ひろまへの眞砂地まじちとほく神さびて千木立ちぎならぶ賀茂の御社みやしろ
かしこみてむかふうちよりおのづから清き心は神ぞ知るらむ

山莊に至りてやがてまづ一乗寺の山に行く。おとは川をこゆれば、山蟬といふ蟲のこゑこゝかしこにきこゆ。修學院山のほどにては聞かざりし蟲のこゑなり

この山を行けば木毎に鳴く蟬の聞きもならはぬ聲しきるなり

と思ひつゞけて

一山經過了 亦入他山林

林鳥啄殘去 山蟬行處吟

など口ずさび行きつきぬ。天神山の社頭にまゐり法樂すべしと思ひつれど、このたびはえとげずして過ぎぬ。それよりまた八町ばかりの山みちをあゆみて、林丘寺のしるよしなるはやまと云ふ所の山莊にいたりて、都のかたを見やる。内裏ならびにわがすむ屋のむねなどまでさだかに見えて、景いとよきいほなり

いほりとふ端山の西の晴るゝ日にいでし都をはるかにぞ見る（以上七首、四月六日）

寄世祝（同右）

うごきなぎ世をいく千代と大比枝のふもとにまもる赤坂の神

我が國に他の國ほかよりあとたれてまもる神代のすゑはつきせじ（赤山社三ヶ年月次法樂、今日成滿）

（註・赤山社あせやまは比叡山延曆寺の守護神で、東麓の日吉神社に対して西麓を守つたもの。現在は左京区修學院に移る。醍醐天皇の行幸など、朝野の尊信が篤かつたが、もとは、支那から渡來した神である）

三條中納言・鳥丸中納言・武者小路三位など、酒饌をまうけて年満を祝す。家々の家珍どもを覽にそなへければ、とりあへず（同右）

遠くなほつたへて殘せいそのかみふりぬる世々の水莖のあと（十二月二十一日）

各々贈答たてまつる又の日、とひより、各々家藏の物ども覽にそなへし事をつゞり出で、坊城・東園兩宰相＊下に仰せきかず（＊重相しげあきは中納言）

家々に傳へてあまた見しもみな世にまれらなる筆のあとかな（その數日後）

夜述懷（享保九年—一七二四—御年七十一歳）

老いぬとて思ひすてめや燈火のかげにしたしむ夜のまなびは（正月元日、於種本社影前令講之、十首和歌

のうち）

寄道慶賀（同右）

萬代のことがなかにも言の葉のみちこそ國のはじめなりけれ（御会始）

山莊に御幸ありける前つかた、舊院を夢に見たてまつること、三度におよばれければ（同右）

三たび見し中にもわきて言の葉をかはせる夢ぞさらに嬉しき（十月朔日）

内へまありし折、いかどおぼしたりけむ、かきて給はりし御製（註・靈元天皇の次の次の天皇で、御皇孫に当られる中御門天皇）

「何事も君にまかせてたのむぞよ言葉の道のしるべのみかは」とありし返しに、よみてまゐらせし（同右）

老の身に聞くぞうれしきすべらぎの道をおもへる君が言の葉

（十月）（十八日）
神な月なかの八日、又例の山莊にもみぢ見むとて行く。……舊院（註・御父君・後水尾院）の御影のまへにまゐりて禮拜念誦をいたす。（享保十年—一七二五—御年七十二歳）

侍故院御影前述志

さとりえし君のおましとあふぎ見む上が上なる蓮のうてなを（*さとりえし||悟道遊はされ涅槃に入られた）

かくてまた

あはれとや猶みそなはす垂乳根の教へし道にいたりえぬ身を

今もなほ親の守のあひそはとことぶきのみやせめてつかまし（*ことぶき||生命）

この山に十度は來けり行くさきも君が御幸のかずにあへてよ（*あへてよ||あやからせていたゞきたい）
この山にあらぬ山々野邊河邊きみがみゆきのあとならばばや*

かうやうの事ども思ひつゞけたれど、御影のまへにははばかりてえたてまつらざりし。さて野づら（まづら）をあゆみ行き
て、池のにしをめぐる。このあたりの紅葉はみなおちばして見る色もなし。窮遠（註・窮遠亭）のあたりちかき
程にぞ、散りのこりたるすこしはある。磷雲（註・磷雲軒）にいたりぬれば、軒端なる一木ぞ今さかりに千しは
染めたるこの木は、はやくもおそくもわが来るたびごとに色濃く千しほのさかりを見せて心ありげなれば、こと
さらに愛賞する木ここに二木ぞある

心ありてをりよく染むるこのいはの軒の紅葉ば見ぬ秋ぞなき（以上、十月十八日）

新廣義門院（註・御母君）五十回忌、詠五首和歌（享保十一年一七二六—御年七十三歳）

別れける五十（てはうしよち）の秋のいつかとも思ふばかりにめぐりこしかな
五十（いそち）をもはや經（へ）にけりな垂乳女（たらちめ）のちぶさの酬（むくひ）なしあへぬまに
仰ぐなりこの一ことゝ垂乳根（たらちね）のめでしもひとつ蓮のうてなに

長かれと思ひおきけむ垂乳女に見せばや老のたもつよはひを

今も身のかげにたぐひてまもるらしあはれと親のそへし心は（七月五日）

神祇（享保十二年一七二七—御年七十四歳）

あふぐにも高天の原の神代よりつたへし國のやまことこの葉（正月元日、柿本影前令講之、十首のうち）

（九月）九日例の山莊に行くべきとさだめ仰す。この頃は晴うちつゞきたるなかに、八日の日はことによく晴れ
たり。夜になりて早く寐ぬべしなど思ひいふほどに、寺のそや聞ゆ（*そや||現在の午後八時ごろに行ふ読経）

（同右）

明けぬまに明日は起き出でむ今宵とくねよとの鐘の聲に任せ

その後まどろみたるに、故院（註・御父君・後水尾院）を夢に見奉りてさめてのち思ひつゞけし

三度見しそれだに世にはあやしきをまた數そふる夢の嬉しさ

曉ふかく起き出でぬれば、空なほよく晴れて雲一点もなし。いつも晴を祈ること驗者（註・修驗者）どもへ仰せつかはす事なり。このたびは事多きにまぎれ、そのこともなかりしに快く晴れぬれば

仰ぐぞよ祈らずとてもとばかりのまことを見する今日の大空（以上三首・九月九日）

ゆめ（享保十三年一七二八―御年七十五歳）

人心かよひて見ゆる夢ならば我がおもひ寐もうれしからまし

寄書祝（同右）

唐やまとかしこき跡をならへとて記せる書ぞよろづ代のため

見る文は大和もろこしかはりても世を治めしる道ひとつにて

暮春盃（享保十四年一七二九―御年七十六歳）

行く春ををしむ圓居に言の葉のかずさへそひて廻るさかづき

彌生二十日あまり八日、山々躑躅の盛なる頃なれば、松が崎賀茂の壇の躑躅なども見るべし。又西賀茂の山に幸茶壇といふ所は、舊院御幸の事ありし所にて、それ故に所の者今に幸茶壇といふ由なり。さらばこの所にゆくべしとて出立つ（同右）

ありあけの月を都にかへり見てゆけばそなたの野邊とほき道

と口ずさみて行く。（三月二十八日）

もろこしの廣南といふ所より、象をのぼせて江府にひかす事ありしに、めづらかなるものなれば、内(宮中)にても洞裏(上皇の御所)にても、わざとひかせて觀るに、みこたち攝録をはじめ群臣おの／＼内洞中にわかちまゐりて見るに、かれこれ歌よみ詩つくりなどす。歌にはむかしよりよめる事なし。唐の詩にだに二首ならでは見えすといふ。そのついでによめり、四月二十八日の事になむありける(同右)

めづらしく都にきさのからやまと過ぎし野山はいく千里なる

(來・象)

なさけ知るきさの心よ唐人にあらぬやつこの手にも馴れきて(四月二十八日)

享保十四年仲の秋、舊院(註・後水尾院)五十回忌辰を迎へて、如來壽量品(註・法華經卷六)をみづから全書せしに、月のあかまりける夜おもひつゞけし(同右)

たらちねの見し世も今は五十ふる秋にむかしの月を戀ひつゝ

社頭祝世(同右)

神がきにまもるもさぞな諸心もろこしすぐなれと世をいのるまことはなべて世ををさむる道も言の葉のほかにもとめずいのる神垣

こよひ雪深きところは八寸ばかりもやあらむ(享保十五年一七三〇—御年七十七歳)

稀に見る雪の深さをゆたかなる年にかへらむしるしともがな

こゝろざしわりなく深かりける女の三回忌に(同右)

忘れぬ姿かほばせそれながら今はほとけと聞くぞうれしき
かぎりあればまもる命ののちはたゞ同じはちすの上に迎へよ

二月の十一日、式部卿宮あらたにしつらはれし何陋といふ座敷を見にゆきたるに、ふるきかさね硯はこを見せられて、むかし後水尾院桂の別業(註・別邸、桂離宮)へ御幸のをり、當座の御會ありし時もちひられし古物なり。

この硯にて一首かきつけよと申されしかば（同右）

たらちねの君が手ふれし跡とめて石のみるめをはづる言の葉

野雪（同右）

隈もなく今朝降りしきて晴るゝ野の雪に見渡す末のはるけさ（柿本法楽、影前講之、詠十首のうち）

雉思子（同右）

狩人にありか知られて鳴く雉は身にかへとや子を思ふらむ

神楽（同右）

神さびてうたふ本すゑものの音も雲井の月にすみのぼりつゝ

試筆（享保十六年一七三二—御年七十八歳）

世にまれの齡にあまる八とせへていまは八十もとほからぬ春（*世にまれの齡ニ古稀、七十歳のこと）

遠村鶏（同右）

夢はとくさめぬる枕そばだてゝ聞くやとほちの鳥のはつごゑ

「法華經二十八品和歌（一品三首づゝ計八十四首）」の中に（御詠年月、不詳なるも、ごく御晩年のものと拝せられる）
信解品

人の親の子はすてざりし心をも年へてこそはおもひあはすれ
わづかなる求もとめのみしてあはれびを受くるこの身と知らぬ愚さ

宝塔品

昔せしちかひのまゝにあらはれて告げし詞ことばもまたたぐひなき
いにしへの佛もこゝに聲そへてちかひし法のりのまことをぞ聞く

不輕品なげりほん

人の身はやがてそなはる佛あればたれをかるめむ物としもなし
すゑつひにみな佛ぞとなべて世の人をばつねにひろめたりけむ

陀羅尼品だらにほん

しきしまの道にかはらじ鬼神もあはれと聞きし法のことの葉

蟲聲非一（御詠年不詳）

さまざまの音をば野もせに鳴く蟲もおなじ思ひの露やわぶらむ

これもさぞ一つ思ひによる蟲のさまざま變る音には鳴くとも（桃葉御集）

東山天皇（第百十三代）

御在世 一六七五—一七〇九（崩御・三十五歳）
御在位 一六八七—一七〇九（十三歳—三十五歳）

（御在位の全期間御父・靈元上皇の院政が行はれた）

第百十三代・東山天皇は、第百十二代・靈元天皇の第四皇子。この御代には、契沖が「萬葉代匠記」を完成、さらに文学の世界では芭蕉、西鶴、近松などが活躍、儒学においても熊澤蕃山や伊藤仁齋などが輩出したが、一方、將軍・綱吉のもとで奢侈の風がくりひろげられ、世に元禄といふ懦弱な時代に低下していった。赤穂浪士の討ち入りもこの御代のことであったのは前項で記した通りである。なほ、東山天皇の御代に、久しく中絶されてゐた「立太子禮」ならびに「大嘗祭」（註・天皇即位後に、最初の新穀を天照大神を始め諸神に供へ、同時に天皇も召しあがるといふ天皇御親祭をいふ）を復活せられた。

（御陵墓は、京都市東山区今熊野にあり、御祖父・後水尾天皇、御父・靈元天皇と同じく月輪陵「九重塔」と申上げる。）

野雪（元禄六年—一六九三—御年十九歳）

降る雪のゆふべをさむみ思ひやる野守がいほや埋みはつらし（月次御会）

谷樵夫（以下、御詠年月不詳）

谷陰ははや暮れぬとやおのがどちさそひかはして歸る柴人（近代御会和歌集）

立春朝

出づる日の光のどけみ岩戸あけし神代おほゆる春もきにけり

樵路せうろ早蕨さわらび

爪木つまぎにはあらぬわらびも山人のわが家つとと手折たをりてやゆく（爪木つまぎ||たき木にする小枝）

春駒

のり行くも心をやひく打ちむれて嘶いほふむまき（むまき||牧場）のとほき春野に

寄紐ゆいづ恋

かくなから明して見ばや入紐いれひものとけて添ほひふす夜の火かけを（入紐||一方を結び玉にし他方を輪にしてかけ

ておく紐）

名所路

とひ見ばや布留ふちるの中道なかつち古ふるき世にかへるしるべは今も有りやと（布留の中道||奈良県天理市石上にある地名。

「古き」を導く序）

谷樵夫やせうぶ

木こりさへ行き通ふべき所とは見ぬ谷かげにうたふこゑして（以上、大神宮法樂、千首和歌）

中御門天皇なかみかどてんのう（第百十四代）

御在世 一七〇一—一七三七（崩御・三十七歳）

御在位 一七〇九—一七三五（九歳—三十五歳）

（御在位のはとんどの期間、一七三三年まで御祖父・靈元上皇の院政がつづいた）

第百十四代・中御門天皇は、第百十三代・東山天皇の第五皇子。靈元天皇の項で記した通り、新井白石が幕府に登用されたのは天皇御即位と同じ年であり、吉宗が將軍になったのもこの天皇の御代であった。なほ漢學が一世を風靡する中において、荷田かた春満のあづまらが「國學校」創建を志し、「創學校啓」を幕府に上請したのは注目すべきことであった。中御門天皇は、ご性質温厚であられたといはれ、旧典故実によく通じてをられたと伝えられる。

（御陵墓は、京都市東山区今熊野にあり、御曾祖父・後水尾天皇、御祖父・靈元天皇、御父・東山天皇と同じく月輪陵〔九重塔〕と申し上げる。）

春到管絃中（正徳五年—一七一五—御年十五歳）

春に今しらぶる琴のおのづからをさまれる世の聲はのどけし

靈元院の御もとにたてまつらせたまへる（享保九年—一七二四—御年二十四歳）

なにごとも君にまかせて頼むぞよ言葉の道のしるべのみかは

梅有色（享保十三年—一七二八—御年二十八歳）

この春のみやづくりする嬉しさを梅も色香に見せて咲くらし

古渡雨（同右）

わたしもりはや舟いだせふる雨によどの澤水みかさもぞ添ふ（*みかさ水かさ）

寄山述懐（同右）

くらぶ山つゝら折なるそれよりも世に經る道やなほ安げなき（*くらぶ山京都の北、鞍馬山のこと）

炭竈（享保十四年—一七三九—御年二十九歳）

雪のうちも煙をたてゝ炭がまの里のよそ目ぞあたゝかけなる（春日社御法樂）

禁庭の梅の花にそへて靈元院の御許に（同右）

言の葉はにほひなくとも梅の花手折るこゝろを君は知らなむ

秋のころ、紅葉の枝につけて靈元院の御もとにたてまつらせたまへる（同右）

この秋は御幸あらねどなぐさめよ飽かぬ藐姑射の山の景色に

（*藐姑射の山上皇がお住まひになる御所、仙洞御所のこと）

迎春祝代（享保十五年—一七三〇—御年三十歳）

わが代にもところをえてや民までも心のどかに春をたのしむ（御会始）

靈元院の御もとに—今日は吹く風ゆるく、花の色も夕日のかげに光そひて君に見せばやとながめくらしめて（享保

十六年—一七三一—御年三十一歳）

折りとれば色もはえなし花ざくらいかにか見せむ今日の盛りを

寄道祝世（享保二十年—一七三五—御年三十五歳）（註・この年三月、御讓位）

くれ竹の代々にかはして治めゆく道すぐなりと聞くが嬉しき（御会始）

櫻町天皇さくらまち てんのう

(第百十五代)

御在世 一七二〇—一七五〇(崩御・三十一歳)
御在位 一七三五—一七四七(十六歳—二十八歳)

第百十五代・櫻町天皇は、第百十四代・中御門天皇の第一皇子。天皇は御年二十八歳の時、幕府の抑圧が原因で御子(桃園天皇)に御譲位、その三年後の御年三十一歳に、お若くして崩御になった。

櫻町天皇は、大変聰明な方で、先に述べた後陽成院・後水尾院・靈元院の御三方の御志をうけつがれたものごとく、青年天皇として朝廷と幕府との関係について深くお心にとめられて皇位を相承せられた方であった。天皇は御年二十一歳の折に、元文五年(一七四〇)、すぐる二百八十年間にわたって廃絶せられてゐた「新嘗祭」しんじょうさいを断乎として復興せられた。(註・新嘗祭は、にひなめさい、とも云ひ、毎年十一月下の卯の日、太陽暦になってからは十一月二十三日、天皇が純白の祭服を召されて、その年の新穀を、祖先の神々にお供へるうへ、同殿で召しあがるといふ祭儀)このことは、二代前に青年天皇であられた東山天皇(三十五歳で崩御)が、靈元上皇のもとで「立太子禮」の復活と「大嘗祭」だいじょうさいの再興を決定せられたのに続くものであり、きびしい幕府の抑圧下における御断行であっただけに、大いに注目すべき所であらう。かうした天皇の御行動に、幕府側はおそれをなしたか、天皇御年二十七歳の時、勝手に天皇の御退位を考へ、仙洞御所(上皇の御居所)を改修するなどの傍若無人な振舞を始めた。櫻町天皇二十八歳での御譲位の直接原因は、幕府のこ

これらの態度が反映したに相違なからう。

これらの事に注意を向けてみると、後陽成院・後水尾院・靈元院の御三方で、以心伝心的な緊張した御姿勢で幕府と相對して来られた朝廷は、この櫻町天皇(三十一歳で崩御)と次の桃園天皇(二十一歳で崩御)といふ青年天皇お二人によって、前記御三方の御遺志を堅持して幕府に相對せられたことがクローズアップされてくる。

わが国の歴史を遠く遡れば朝鮮半島南端の直轄領「任那日本府」が西暦五六二年に新羅に滅されて以来、数代にわたっての天皇方が、第二十九代・欽明天皇の御遺詔(御遺言)をうけついで、「任那日本府再興」のことを御悲願とされたといふ史実があり、鎌倉幕府に対する後鳥羽上皇の討幕計画も後醍醐天皇の建武中興の御事も、さらに吉野朝における天皇方の御苦闘も、いづれも数代にわたる天皇がたが御悲願を相承相繼せられてこられた。そしていま、江戸幕府からの抑圧を受け続けられた前記数代の天皇がたが、政権の座から遠ざけられてをられたにもかかはらず、皇室の御伝統である仁慈の御心をもって国民をいつくしみ給うた御姿を拝すると、わが国に二千余年にわたって、義は君臣、情は父子といふ、天皇と国民との深い結びつきをもつ國體が堅持されたことも、決して故なきことではなかったことを知ることが出来る。

櫻町天皇は、次の桃園天皇と共に、その御生涯が大変に短かかったが、その御歌のしらは、まことに高らかであり、威厳に満ちたものを拝するのである。お二人とも御年

十歳および御年八歳からの御歌がある。もとより多少のことは御側近の人たちの御添削申し上げたこともあったと考へるべきであらうが、和歌のもつ「しらべ」や「風格」は決して文字や辞句の添削などで一変し得るものではないのであつて、この御二方が、さらに御成長なされての御歌を拝すれば、御幼時の御歌の「しらべ」「格調」が御生來のものであつたことは、一層顯著にうかゞはれるであらう。櫻町天皇（三十一歳で崩御）が御年十五歳（皇太子の折）の御歌に「神祇に寄するの祝」と題されて、二月御月次つきなみの和歌御例会に詠まれた

あし原の國はうごかじいくとせもあまてる神の守るめぐみに
にしても、御年二十四歳の「立春」

君も臣も身をあはせたる我國のみちに神代の春や立つらむ
にしても、次の桃園天皇（二十二歳で崩御）の御年十七歳の折の「神祇」

もろおみの朕わらをあふぐも天てらす皇御神すめみかみのひかりとぞおもふ
などにしても、くり返し／＼拜誦するだに、お若い青年天皇が日本の太古から未来へわたってお心を寄せられ、而も、かろやかにして至純かつ力強い御心情で天皇の御地位に座まはしましたことがしのばれてくる。ことに櫻町天皇の「君も臣も身をあはせたる我國」といふ御表現と、桃園天皇の「もろおみの朕わらをあふぐも」といふ御表現は、両天皇の前にも後にも、歴代天皇の数々の御歌の中では、いまだ拝せられなかった御表現の如くである。

なほ櫻町天皇の御歌は、「列聖全集」に一千五十余首が掲載されてゐる。三十一歳と

いふ短い御生涯と合せ考へれば、大変な数といふべきであらう。櫻町天皇の歌集として、「櫻町院坊中御会和歌」「櫻町院御集」などが残されてゐる。

(御陵墓は、京都市東山区今熊野にあり、こゝ数代の天皇がたと同じく月輪陵〔九重塔〕と申し上げる。)

元日(享保十四年一七三九―御年十歳)(註・この前年、皇太子に立たせられた)

春きぬと玉しく庭にすべらぎのとなふるほしの光のどけし

更衣(同右)

今朝よりはうすき衣にぬぎかふるたもと涼しく夏は來にけり

時雨(同右)

冬枯れにもみち葉ちりし夕されもまなくしぐるゝ音のはげしさ(夕され夕さりの転、夕方)

寄天祝(同右)

大空にみちててらせる日の本のこの國とてやむべもくもらぬ

雪埋松(同右)

いつとなき松のみどりも埋もれて雪にしづけきこのへの庭

旅宿夢(享保十五年一七三〇―御年十二歳)

故郷をいま見る夢ぞなつかしき馴れぬ旅寐のくさのまくらに

禱衣(同右)

このごろの夜さむに賤がいそぐとか百度千度ころもうつらむ

籬竹（同右）

いろかへぬ籬の竹をいくとせかこころの友とあかずこそ見れ

初冬（同右）

いつしかと秋の別れもすぎて今朝あらしはげしき冬はきにけり

村々煙細ほろほろ（享保十六年—一七三二—御年十二歳）

たえく／＼にたつる煙のはるかにも見えて淋さびしき里のむら／＼

苗代蛙（享保十七年—一七三三—御年十三歳）

せきいるゝみづゆたかなる苗代にところをえてや蛙鳴かはづくらむ

行路藤（同右）

すぎがてに心ぞとまる道のべの松にかゝれるふじのさかりは

寄神祇祝（享保十九年—一七三四—御年十五歳）

あし原の國はうごかじいくとせもあまてる神の守るめぐみに

社頭櫛うかき（同右）

神がきやかはらぬ色をさかき葉のときはに君が代を守るらし

述懐（同右）

あふぐぞよおろかなる身もあまてらす神と君とのすてぬ恵みを

寄道祝世（享保二十年—一七三五—御年十六歳）（註・この年三月に御踐祚）

おしなべてすなほなる世もさかえゆく言葉の道の光とぞ思ふ

露暖梅開（元文四年—一七三九—御年二十歳）

春をしる梅を見るにもなべて世に恵みのつゆのかゝれとぞ思ふ

暁天鶏（同右）

おどろかす鳥の初音におきなれて夜深くいそぐ朝まつりごと

瑞籬（同右）

五十鈴川したつ岩根のみづがきのながれ久しき末もうごかで

述懐（同右）

思ふにはまかせぬ世にもいかでかはなべての民の心やすめむ

述懐（元文五年—一七四〇—御年二十一歳）

身の上はなにか思はむ朝な／＼國やすかれといのるこゝろに

草庵（同右）

思ふにもさぞないぶせき露霜をしのぐばかりの草のいほりは

独見月（同右）

吹く笛もねぞすみまさる雲の上や更けゆくつきに獨りむかひて

逢恋（同右）

にひ枕つゝましげなる言の葉のよなれぬさまも哀れとぞおもふ

樵夫（元文六年・寛保元年—一七四一—御年二十二歳）

あはれなりさも苦しげにはる／＼と薪おひつれかへる山びと

清 (同右)

わが心すが／＼してふあととめていままも八雲の道はけがさじ

土のあかりせらる
豊明節会 (同右)

新嘗(新ひなめ)の赤丹(わさ田)のはつ穂(穂)もろ人にとよのあかりの今日たまふなり

心静酌春酒 (寛保二年一七四二御年二十三歳)

天が下たのしむ民のこゝろをもまづ酌みて知る春のさかづき

採早苗 (同右)

露のまもいとまをしげに若苗をとり／＼いそぐ小田の賤の女

谷花 (同右)

誰が植ゑし種にかあるらむ里とはきこの谷かげに咲ける櫻は

連日苗代 (同右)

ときぬとなはしろ急ぐ賤の男や昨日も今日もかへす荒小田あらをだ

天象 (同右)

あきらけき神代のまゝに月日星くもらぬ天のみちぞたゞしき

神祇 (同右)

天てらす神ぞ知るらむ末ながき代々のひつぎ(日)を祈るこゝろは

暁神祇 (同右)

もとがしは白酒黒酒(しろきくろき)を打ちそゝぎ新嘗(新ひなめ)まつるあかつきのそら

(*)もとがしは¹柏の古い葉で大嘗会の時その葉を酒にひたして神に供へた。*白酒黒酒²大嘗会などに神前に供へる酒で、常山の根を黒焼にしてまぜたものを黒酒といひ、まぜないものを白酒といふ)

竹有佳色(寛保三年—一七四三—御年二十四歳)

色かへぬ竹のよろづ代かくて見よなほきに民の靡くすがたを(大樹六十賀)(*)大樹¹將軍徳川吉宗

立春(同右)

君も臣も身をあはせたる我が國のみちに神代の春や立つらむ(春日神社御法樂)

独述懐(同右)

まつりごと正しき道に治めおきて代々に亂れぬのりを残さむ

懐旧涙(同右)

たらちねの恵みの露のふりし世をしのぶなみだは袖に落ちつゝ

かつ見る人に(寛保四年・延享元年—一七四四—御年二十五歳)

うちつけにさぞとはいかにいひ出でむかつ見る人にかくる思ひを(水無瀬宮御法樂)(*)かつ¹わづかに

神樂(同右)

ものゝ音も神さびけりな小夜神樂更け行く月の杜のこがくれ

寄神祝(延享二年—一七四五—御年二十六歳)

よろづ代と神もさこそは守るらめ我が敷島のみちのさかえを(柿本社御法樂)

禁中月(同右)

秋いくよながめし代々のいにしへを仰ぐもたかき雲の上の月(聖廟御法樂)

山家友（延享三年—一七四六—御年二十七歳）

世離れて住む山ながら年を経て馴るればなるゝ友もありけり

閑待月（延享四年—一七四七—御年二十八歳）（註・この年五月に御譲位）

ことしげき世をば忘れてこむ秋はしづかに洞の月をめでまし（*洞—仙洞御所）

尋蟲聲（延享五年・寛延元年—一七四八—御年二十九歳）

野を遠く夕づゆわけて松むしの聲するかたをたづねてぞゆく（住吉社御法樂）

薄暮時雨

見るがうちに麓は早く暮れそひて夕あるみねの雲ぞしぐるゝ（住吉社御法樂）

落花（寛延二年—一七四九—御年三十歳）

吹くまゝに情なげなる春かぜのちらすも花のひとさかりなる

述懐（同右）

國ながくをさめし神のあととめてかはらぬ代々の誠をぞ思ふ

述懐（同右）

かしこしな神代のまゝに皇神のめぐみつたふるあまつ日嗣は（内宮御法樂）

忘恋（同右）

やる文のいらへもうとく年を経ぬさればよ遂に忘れはてぬる（同）

初秋（同右）

露のめぐみ深き千五百の秋は來ぬうるふ瑞穂の國ゆたかにて（外宮御法樂）（*うるふ—うるはふ）

祝言（同右）

しるしおく聖の書ををしへにもたがはぬ御代の道のたゞしき

原春駒（寛延三年一七五〇御年三十一歳）（註・この年四月、崩御）

駒いばゆ聲ぞのどけきかすみたち風さむからぬ春の野はらに（住吉社御法樂）

花添春色（同右）

もろこしは知らず日本の國の中の春の色香は花にぞありける（後鳥羽院御法樂）

神樂（以下、御詠年月不詳）

鳥居たつ杜もりの木の間まの月つきさえてかみさびまさるほし神樂かぐらかな（*ほし神樂かぐらは神樂かぐらの一種、星神樂）

冬月

冬枯の杜の木の間はあらはにてあらしに冴ゆる月のくまなき

夢中懐旧

幾度か見しが中にもたらちねのいさめかしこき夢ぞわすれぬ（以上、櫻町院御集拾遺）

神祇

あまてらす神のさづけしかぐみこそむべわが國の光なりけれ

祝

神代より天つ日つぎのいやつぎにさかゆる國は動きなくして（以上、櫻町天皇御百首和歌）

追慕儀同三司一回忌和歌（實陰公御画像におさる）（*儀同三司は大臣に準ずる者、ここでは武者小路實陰）

敷島の道にはおやとたのみこし臣のいさめはいまもわすれず（櫻町院御集）

桃もも園ぞの天てん皇のう

(第百十六代)

御在世 一七四一—一七六二(崩御・二十二歳)
御在位 一七四七—一七六二(七歳〜二十二歳)

第百十六代・桃園天皇は、第百十五代・櫻町天皇の第一皇子。御在位のみ、二十二歳といふきはめて御若い年齢で崩御された。御父・櫻町天皇(桃園天皇が御年十歳の折に、三十一歳で崩御)と共に、二代にわたる青年天皇として自ら親政せられたことの意義については、前項で記した通である。

桃園天皇の御年十八歳の折、宝暦八年(一七五八)に「宝暦事件」が発生した。この事件は、京都にゐた尊皇論者らが、江戸幕府によって処罰された最初の事件であった。すなはち、天皇の側近の徳大寺の家臣・竹内式部(一七二一—一七六七)はかねて、桃園天皇の近習、徳大寺公城らの公卿たちに神書・儒書を講じてゐたが、これらの公卿たちは直接桃園天皇に竹内式部の説を御進講申し上げるに至り、天皇も深く心を寄せられ、特に日本書紀の御講義には御熱心であられた。しかしながら朝廷内において、朝幕関係の悪化するのを憂慮してゐた関白の一條道香は、竹内式部を「公卿ながら武術稽古にはげんでゐる」との理由で、京都所司代(京都朝廷などに対する江戸幕府の監視機関)に訴へ、このため、前記の徳大寺らの公卿に対し、天皇は、罷官・永蟄居・謹慎に処せざるを得ない立場に追ひ込まれたまひ、竹内式部は、京都所司代の審理をうけ、翌宝暦九年(一七五九)「重追放」といふ処分を受けて京都から追放されてしまった。(なほ、続いて次の後

櫻町天皇の御代に、類似した「明和事件」が発生して山縣大貳らが処刑されるが、竹内式部は、それにも影響を与へたといふ名目で、重ねて処罰され、八丈島へ流罪が決定、護送の途中、三宅島で病死してゐる。桃園天皇は、このやうに御年十八歳ではやくも幕府から弾圧を受けられ、二十二歳で御在位のままおなくなりになったのである。にもかかわらず「列聖全集」によれば四六二首の御歌が残されてをり、しかも大変に格調の高いしらべがうかがはれることは、御父君・櫻町天皇のところでも記した通りである。

なほ、賀茂真淵が江戸に出て田安宗武に仕へ、「萬葉考」などを著はして、国学史上輝やかなしい業績を残したのは、この御代であつたし、一方西洋の学問もオランダを通して輸入され、杉田玄白が西洋外科医学を唱へたのも、桃園天皇の御代（宝暦七年―一七五七）のことであり、それから十八年後（安永三年―一七七四）に「解体新書」が出版されることになるのである。

（御陵墓は、京都市東山区今熊野にあり、こゝ数代の天皇がたと同じく月輪陵〔九重塔〕と申し上げる。）

池（寛延元年―一七四八―御年八歳）（註・この前年に御踐祚）

秋の夜のながむる空もくもりなくひかりさやけき池の月かげ

初春山（寛延二年―一七四九―御年九歳）

ながめやる山もかすみてはつ春の雲井の庭はのどかなりける（水無瀬宮御法樂）

水辺螢(同右)

せきいるゝ流れもきよき遺水やうみづにかけもすゞしくほたる飛びかふ

櫻(寛延三年—一七五〇—御年十歳)

のどかなるわが九重のさくら花さかり久しく見るぞうれしき

寒草(寛延四年・宝暦元年—一七五二—御年十一歳)

いつしかとおく霜寒く冬枯れて野邊の千ぐさの色かはりゆく

惜秋(同右)

をしめども秋の日數のほどもなく暮るゝ名残りを慕ふこのごろ

田家(同右)

秋更けてかりほさびしく小山田に残る稻葉のかぜぞ身にしむ

早苗(同右)

ときぬと田の面の早苗とりぐにおりたつ民の聲もにぎはふ

野董(宝暦二年—一七五二—御年十二歳)

つゆながら濃き紫のつぼすみれ野邊の芝生に今朝は摘ままし

夕立(同右)

見るがうちに雲重りてなるかみもやがて過ぎゆく夕立の空(*なるかみ=雷)

閑居燈(宝暦三年—一七五三—御年十三歳)

友とのみかゝぐる影も小夜更けていとゞ淋しき窓のともし火

早苗多（宝暦四年―一七五四―御年十四歳）

わか苗をとる手あまたに植ゑわたす賤の小笠の數ぞそひゆく

樵夫（同右）

夕まぐれ山路をとほくかへるさに歌ふきこりの聲ぞさびしき

禁中花（宝暦五年―一七五五―御年十五歳）

ことしげき世をも忘れてあかず見む雲井の庭の花のさかりは

春田（同右）

ますらをが山もとかけて荒小田をあらすきかへす春のこのごろ

十三夜（同右）

たぐひなやわが秋津洲の秋ごとにこよひ名におふ長月のかげ（九月十三日）

萬民祝（宝暦六年―一七五六―御年十六歳）

天が下なべての民のたのしみも我がよの春にわきてうれしき（御会始）

簾外燕（同右）

春はまた小簾の外近くつばくらめ古巢ありとや行き歸るらむ

聴（同右）

身の恥も忘れて人になにくれと問ひ聞く事ぞさらにうれしき

曉述懐（同右）

夢さめてなほもかしこき道々を思ひつづくるあかつきのそら（聖廟御法業）

七夕管絃(同右)

吹く笛もかきなす琴も秋かぜにしらぶるこゑを星やめづらむ(七夕御会)

蟲聲むしこゑ滋し(同右)

露しげき草葉をおのがやどりとや蟲てふ蟲の音ねにたてゝ鳴く

旅行友(宝曆七年一七五七御年十七歳)

知らざりし人も親しく行きつれておなじ道にと馴るゝ旅かな

九月盡夕(同右)

入相いりあひのこゑないそぎそ長月も今日ばかりなるあきのゆふべは

竹紅葉ははき(同右)

佐保山のはゝその梢こすねいかなれば染めも盡つくさで散らむとすらむ(*はゝそハクヌギ・オホナラなどの総称)

神祇(同右)

もろおみ(諸臣)の朕われをあふぐも天てらす皇御神すめらみかみのひかりとぞおもふ

貴賤迎春(宝曆八年一七五八御年十八歳)(註・この年、宝曆事件発生)

いやしきもよきもへだてず我が國の春まちえたるやまと諸人(御会始)

筆写人心(同右)

見てぞ思ふむかしの人のまことある心をうつすみづくきの跡(聖廟御法楽)

月前松蟲(同右)

暮るゝ夜の月まち出でゝ松蟲のみぎりにすだく聲のさやけさ

祝（同右）

神代より世々にかはらで君と臣の道すなほなる國はわかくに

社頭鶏（宝曆九年一七五九—御年十九歳）

神垣やかみ代おほえて長啼ながなきのとりがねながら明るるひろまへ

寄道祝（同右）

萬代もたえすさかゆる道なれやあまつ日嗣にやまと言の葉

寄道祝言（宝曆十年一七六〇—御年二十歳）

さかえゆく道ぞかしこき天地のかみのまもりのやまと言の葉（道御伝授竟宴御会）

寄絵恋（同右）

その儘ままにせめては人の面影を繪にかきとめて見るよしもがな

不盡山（同右）

大空にあふぎで高くむかふかな雲よりうへに晴るる富士の嶺

尋花（宝曆十一年一七六一—御年二十一歳）

まだき咲く花やあらむとわけぞいる數多木あまたこの芽も春（張る）の山路に（*まだき||まだその時にならないのに）

新樹（同右）

あかず見む青葉木あおはぶかく繁りあふなかに楓かへでのうすきみどりは

見月（同右）

照らせなほ思ふ友ともどち圓居まじりして見る影あかぬ秋の夜の月

惜月（同右）

飽かずなほながむる西の山の端にかたぶく月の影をしぞ思ふ

逢恋（同右）

新たまくら待ちえてかはす今宵よりよを隔てじと契るうれしき

山館煙（同右）

世はなれて住む山窓のあけくれに立つる煙ぞよそめさびしき

田家（同右）

にぎはふと聞くぞうれしき小山田やまだの四方よもにかずそふ民の家々

旅（同右）

いでしわが故郷ちかみ乗る駒もこゝろもいさむ旅のかへるさ（*故郷ちかみ||故郷が近いので）

採早苗（宝曆十二年—一七六二御年二十二歳）（註・この年七月に御在位にて崩御）

しづの女が千町の早苗とる手にも今こむ秋のたのみをや思ふ

寄弓述懐（同右）

ひかぬ世と聞くにうれしき梓弓ならすゆづるの音ばかりして（*ゆづる||弓の弦―つる―）

後ご櫻さくら町まち天てん皇のう

(第百十七代
・女帝)

御在世 一七四〇—一八二三(崩御・七十四歳)
御在位 一七六二—一七七〇(二十三歳—三十一歳)

第百十七代・後櫻町天皇は、第百十六代・桃園天皇が二十二歳の御若さでおなくなりになられたためであらう、第百十五代・櫻町天皇の第二皇女であられる所から皇位におつきになられたものと拝せられる。御年二十三歳で踐祚、御在位九年の時点で、桃園天皇の第一皇子(後の後桃園天皇)が、ほど御成長の時期である十三歳におなりになられたのを待って位を譲られ、その後は七十四歳まで御存命であられた。いはゞ、皇男子皇位継承のため、桃園天皇御父子のあひだをお埋めになられたものと解し申し上げてよからうと思ふ。

この御代にはさきの「宝曆事件」について「明和事件」とよばれるものが、明和三年(一七六六)に起きてゐる。すなはち、宝曆事件に連坐した藤井右門が江戸に来て先に「柳子新論」を著はして幕府を震撼せしめた勤皇学者・山縣大貳の家に寄宿し、江戸の攻略の軍法を論じてゐることを耳にした幕府は兩名を捕へ、翌明和四年(一七六七)大貳を死罪に、右門を磔刑に処し、さらに竹内式部にも八丈島への流罪を加重した。これが「明和事件」であるが、この処罰の年が、明治維新の前年の大政奉還(一八六七)のちょうど百年前に当ってゐることも注目すべきことであらう。この事件から維新までの百年間こそ、幕府の屋台骨が大きくゆらぎだす時期であり、また西洋諸国がわが国へ侵略の牙をさし向けてくる時期でもあった。

この御代には、こゝ数代しば／＼みられたことであるが、朝鮮や琉球からの使者が到来してゐる。なほ本居宣長が賀茂眞淵に師事して「古事記傳」の著述に着手したのは、天皇御即位の翌年（宝暦十三年—一七六三—）であるが、その後六年にして眞淵は世を去つてゐる。

（御陵墓は、京都市東山区今熊野にあり、こゝ数代の天皇がたと同じく月輪陵〔九重塔〕と申し上げる。）

寄道祝言（明和四年—一七六七—御年二十八歳）

絶えせしなむべすなほなる教をも代々につたふる言の葉の道（竟宴御会）

氷室（同右）

この頃のあつさも知らじ夏かけて消えぬ氷室の山の木かげは

述懐（同右）

まもれなほ神のめぐみにつたへきて明暮あふぐことの葉の道（住吉社御法楽）

五節（同右）

少女子が袖うちかへし立ち舞ふや昔のあとをいまものこして

恨（同右）

身のとがと思ひもはてずとにかくに人のみしひて恨むはかなさ

竹（同右）

見るに猶わが心をもならはなむうてなの竹のなほきすがたを（*うてなは清涼殿の東にある呉竹の台）

神祇（明和五年—一七六八—御年二十九歳）

まもれなほ伊勢の内外の宮ばしら天つ日つぎの末ながき世を（御会始）

摺衣（同右）

里つゞきおなじ心に賤やいま夜さむのころもうちもたゆまぬ

述懐（同右）

ゆひそむる初元結の末ながくさかえむ世をもおもふうれしさ（*初元結 II 元服の時、髪を結んだ紐）

述懐（明和六年—一七六九—御年三十歳）

おろかなる心ながらに國民のなほやすかれとおもふあけくれ

迎春祝（明和七年—一七七〇—御年三十一歳）（註・この年の十二月御譲位）

諸人もひとつころに祝ふ代のゆたけさ見えて春ぞたのしき（御会始）

寒草（同右）

冬きては野邊も垣ほも草はみなしもがれはつる色ぞさびしき

禁中月（同右）

いつとなく十年にちかき秋もへて思はずなるゝ雲の上の月

杜神楽（明和九年—一七七二—御年三十三歳）

榊とり杜のしめなはくりかへしうたふを神も飽かずうくらし

蟲吟露（安永六年—一七七七—御年三十八歳）

百草の露をよすがに蟲ぞ鳴くおのがさま／＼こゑをつくして（聖廟御法楽）

谷樵夫（同右）

やすからぬわざとこそ見れ谷深く柴おひつれて通ふやまびと（聖廟御法楽）

寄道祝（安永七年—一七七八—御年三十九歳）

あめつちとともにつきせぬ敷島の道は神代のひかりなるらし

四句
かやり火に（安永十年—一七八一—御年四十二歳）

しづやさぞいぶせかるらむ蚊遣火にたつる煙のつづく軒端は（聖廟御法楽）

山家友（同右）

たれとふと待つこともなき山住はおなじ心のともぞしたしき（水無瀬宮御法楽）

早苗多（天明七年—一七八七—御年四十八歳）

賤の女がとれどつきせぬ若苗はいく日いく町うゑわたすらむ（水無瀬宮御法楽）

請衣幽（天明八年—一七八八—御年四十九歳）

小夜風にたぐへて聞くも身にぞしむ賤がきぬたの幽かなる聲（聖廟御法楽）

月出嶺（同右）

秋風に雲はのこらず晴るゝ夜のみねさしいづる月のくまなさ（聖廟御法楽）

採早苗（寛政三年—一七九一—御年五十二歳）

五月雨の降るもいとはず賤の女がとる手ひまなく見ゆる若苗（聖廟御法楽）

隣里鶏（寛政六年—一七九四—御年五十五歳）

誰がかたも夢さめぬらし里つゞきあかつき告ぐる鳥の八聲に（水無瀬宮御法楽）

（*鳥の八聲＝曉方になく鶏の聲）

曉

こしかたもまた行末も思ふぞよひとりねざめのあかつきの床（聖廟御法衆）

神祇（寛政九年—一七九七—御年五十八歳）

君と臣のみちぞたゞしき三笠山さしてたのむを神やまもらむ（春日社御法衆当座御会、内裏和歌御会）

（*さして＝笠の縁語、特に名ざしをして）

寄道祝言（同右）

神代よりながくつたへて天地とともたえせぬしきしまの道（春日社御法衆当座御会、内裏和歌御会）

秋田（寛政十年—一七九八—御年五十九歳）

豊年とよとしと聞くやうれしきいく千町ちまら（総丈）ほなみをわたる小田のあきかぜ（聖廟御法衆）

朝（享和二年—一八〇二—御年六十三歳）

朝な／＼心のかどみみがきそへて祈るまことは神や知るらむ（聖廟御法衆）

夕蟲（同右）

夕露をわけゆくさきもこしかたもげに秋しるき蟲のこゑかな（聖廟御法衆）

冬夕海（同右）

夕汐ゆづしほのさしくるならし海とほく鳴きわたるたづの聲も寒けき

夏月（享和四年—一八〇四—御年六十五歳）

しづが屋も蚊遣かやぢのけぶりたきさして涼しき月の影や見るらむ

祝言（文化二年—一八〇五—御年六十六歳）

たまはこの道のひかりを敷島の大和ことばにあふぐよろづ代（水無瀬宮御法葉）

柞紅葉（同右）

染めつくす中にわかれてたゞひと木柞ははせの紅葉いろはめづらし

磯波（文化三年—一八〇六—御年六十七歳）

磯の松しづ（下枝）えをかけて打ちよする波のひゞきは聞くも烈しき（聖廟御法葉）

市人いちびと（文化七年—一八一〇—御年七十一歳）

うりかふはおなじ心のわざならし朝夕たえずさわぐいちびと

夕敷遣火（文化八年—一八二一—御年七十二歳）

しづがやのゆふべをとへばいぶせくも蚊遣かやうの烟たゞぬ方かたなき（水無瀬宮御法葉）

竹契か週年か（文化九年—一八二一—御年七十三歳）（註・この翌年間十一月、崩御）（*週年||長生き、長寿）

ならひつゝ千代も契らむ呉竹のなほきすがたを人のこゝろに（御会始）

後ご桃もも園ぞの天てん皇のう
 (第百十八代)

御在世 一七五八—一七七九(崩御・二十二歳)
 御在位 一七七〇—一七七九(十三歳—二十二歳)

第百十八代・後桃園天皇は、第百十六代・桃園天皇の第一皇子。御父君が二十二歳の御若さでおなくなりになられたとき、未だ五歳の御幼少であられたため、桃園天皇の一つお年上の姉君が後櫻町天皇としてお立ちになり、皇子が十三歳に御成長になられるのを待たれて御讓位になられたことは、前項で記した通りである。かうして、御年十三歳で踐祚になられたが、皇室には何といふ御不幸がお続きになられるのか、御父君がおなくなりになられたのと全く同じ御年齢、すなはち二十二歳の御若さで御在位のまゝおなくなりになられたのである。御歌は、ごく少数しか残されてゐないやうである。

なほ、後桃園天皇の御在位十年間のことを見てみると、幕府側は第十代將軍・家治の時期にあたって、家治の寵を受けた田沼主殿頭意次たぬまのんかみぎつぐが、後桃園天皇の踐祚の翌々年、明和九年(安永元年—一七七二)に老中に就任、以後十五年間にわたって、政權を擅断せんし、ために綱紀はおそるべき乱れかたを示した。一方、日本の近海をめぐる状勢は、やうやく急を告げはじめ、安永六年(一七七七)にロシア人が千島列島の国後島くにしろに来てをり、これらを憂慮した林子平は、次の光格天皇の御代に至って「海國兵談」を刊行してわが国民に日本の危機を訴へたが、幕府に忌まれ、禁錮の刑をうけて罰せられるに至った。

このころ、イギリスは産業革命期の只中にあり、アメリカ大陸においては独立戦争が行はれ(安永四年—一七七五)、その後フランスでは大革命が勃発(寛政元年—一七八九)してゐる。すなはち、この後桃園天皇の御代から次の光格天皇の御代にかけては、西欧において「近代」が確立され、世界史における新たな局面が準備されつゝあつた時期であつたのである。

(御陵墓は、京都市東山区今熊野にあり、後水尾天皇以降代々の天皇がたと同じく月輪陵〔九重塔〕と申し上げる。この「月輪陵」には、第八十七代の四條天皇も神鎮りますが、四條天皇を除いて第百八代・後水尾天皇からこの百十八代・後桃園天皇までの十一代の多数の御方々が神鎮りますので、いかに徳川専横の時代であつたとはいへ、狭い御兆域にかくも十一方が、同じ陵墓にしづまりますといふことは、家康を祀つた華麗な日光の東照宮と対比するだけでも、何とも評しやうのないこと、といはなければならない。)

迎春祝代(明和七年—一七七〇—御年十三歳) (註・この年十一月、御踐祚)

のどかなる春を迎へてさまざまの道榮えゆく御代ぞにぎはふ

早春鶯(安永五年—一七七六—御年十九歳)

いと早も春を告げてや我が園に今朝のどかなるうぐひすの聲(内裏和歌御会)

光格こうかく天皇てんのう

(第百十九代)

御在世 一七七二—一八四〇(崩御・七十歳)

御在位 一七七九—一八一七(九歳—四十七歳)

第百二十代・仁孝天皇御在位
三十年のうち二十四年間
における院政期間 一八一七—一八四〇
(四十七歳—七十歳)

第百十九代・光格天皇は前代の第百十八代・後桃園天皇より五代遡った第百十三代・東山天皇の御曾孫に当たる方である。すなはち、東山天皇の第五皇子が第百十四代・中御門天皇となられたが、その御直系が四代続いたあと、第百十八代・後桃園天皇が御若くしておなくなりになられて御後嗣がをられなかったためであらうか、中御門天皇の御兄弟・閑院宮直仁親王の御直系の方の御登位がみられることになったものである。

光格天皇は、御年九歳で踐祚せられ、御在位三十九年に及ばれたばかりか、次の第百二十代・仁孝天皇(光格天皇の第四皇子)の御在位三十年間のうち、二十四年間にわたって院政をおとりになられた。こゝに靈元院以来、百十六年ぶりに、そして史上最後とも思われる院政をおとりになったのである。天皇は殊に第百十七代の女帝・後櫻町天皇の慈愛深い御薫陶をおうけになって御成長遊ばされてゐるが、天皇がいかなる御気持で皇位についてをられたかは、天皇二十九歳の折(寛政十一年—一七九九)後櫻町天皇(当時御年六十歳)にさしあげられた御書簡(京都御所内、東山御文庫所蔵)につぶさに記されてゐる。

光格天皇の御代、踐祚後九年目の天明七年（一七八七）に、幕府では、第十代將軍・家治の死去により第十一代將軍・家齊いえはらが登場、田沼意次たぬみよつぐは退けられ、代って白河樂翁公と呼ばれた松平定信が老中となり、田沼時代の乱れの是正に取りかゝった。いはゆる「寛政の改革」といはれるものである。さらに天明八年（一七八八）一月に京都に大火があつて、皇居が炎上するといふ大事があつた時、老中・松平定信は自ら皇居造営の監督となり、二年後の寛政二年（一八九〇）八月に、天皇は新皇居に還幸遊ばされるに至つた。しかし、このことは單純に家齊・定信の忠節と考へるべきではなく、幕府財政の緊迫からしても、天下の形勢から見ても、彼らなりの意図に出でた「公武合体政策」の必要性を感じ取つた上での行動としても見るべきであらうか。

なほ、光格天皇の御代には、本居宣長もとぢのりながが「古事記傳」を完成せしめたのをはじめ数々の著述をのこし、平田篤胤あつちゆうも独自の立場から、わが國體の本義を明らかにしてをり、また安藝藩の儒官・頼山陽らいさんやうが出て「日本外史」ほかの著書を出し、幕末の思想界に大きな影響を与へてゐる。また、高山彦九郎が世を憤つて自決し、蒲生君平がまよきんべいが荒廢した歴代天皇の御陵を訪ねて「山陵志」を著はしたのもこの頃であるが、前項で述べた林子平と、高山彦九郎、蒲生君平のいはゆる「寛政の三奇人」の登場などが、明治維新の機運をいち早く醸成してゐたことも注目すべき所であらう。また盲人ながら刻苦研鑽の末、搦保己はなほまき一が「群書類從」六六六冊、「統群書類從」一、一八五冊を出し、測量の大家、伊能忠敬いねうただたかが寛政十二年（一八〇〇）に北方の蝦夷地測量をはじめてゐるのも注目すべきことと思ふ。

一方、文化元年（一八〇四）には、ロシア国の使節が長崎に来て通商を求めたの対し、幕府は翌年これを「鎖国令」施行中の故を論じて帰させたが、すぐ翌文化三年（一八〇六）には、ロシア人が樺太に來攻してをり、その翌文化四年（一八〇七）には、北海方面に來寇してゐる。間宮林蔵が樺太探検に出向いたのも、イギリス軍艦フェートン号が、不法に長崎に侵入し、オランダ商館員を捕へ、薪・水・食糧などを手に入れて退去したのも、いづれも光格天皇の御年三十八歳の時のことで、文化五年（一八〇八）であつた。続いて文化七年（一八一〇）にイギリス船が常陸に、文化八年（一八一二）にはロシア船が蝦夷に、文化十三年（一八一六）にはイギリス船が琉球に來る、といふ緊迫した状態が続いた。

（御陵墓は、京都市東山区今熊野にあり、後、月輪陵〔九重塔〕と申し上げる。）

野薑葉（天明六年—一七八六—御年十六歳）

こむらさき咲きにはひけり薑草すみれぐさうすみどりなる野邊の芝生に

若菜（同右）

諸人の今日うちむれて春の野に若菜つむなるよそめのどけき（聖廟御法業）

待恋（同右）

かならずと頼めおきにしことの葉の偽いつはりしらで待つぞつれなき

秋祝（同右）

いく千年たえせぬ秋の月とともに曇らぬ御代みよをあふぐもろ人

籬竹（同右）

朝夕にこゝろをならふ友なれやまがきの竹のすなほなるかげ

逢恋（天明八年—一七八一—御年十八歳）

新（に）ま（ひ）くらかはせる今宵もろともにおもはゆながら契（ちぎ）るむ（ご）つ言

初春（御西（賜））（寛政二年—一七九〇—御年二十歳）

もろ人のみきたぶ袖もゆたけしな春くる今日のもゝしきの庭（聖廟御法案）

竹亭夏月（寛政三年—一七九一—御年二十一歳）

小夜風（きよかぜ）にのきの若竹うちなびき葉ごしの月のかげぞすゝしき（聖廟御法案）

華夷皆榮春（寛政四年—一七九二—御年二十二歳）

梅が枝をうたふもひなの一節も春をたのしむこゝろならずや（御会始）

庭夏草（寛政五年—一七九三—御年二十三歳）

はらふやと見るほどもなく生ひそひて茂りあひぬる庭の夏草

時雨（寛政七年—一七九五—御年二十五歳）

幾度か行きかふ雲ぞさだめなき晴るゝと見れば又しぐれつゝ

埋火（寛政八年—一七九六—御年二十六歳）

更（か）くる夜も聞（き）あた（わ）ゝかきうづみ火に賤（しづ）が伏屋（ふしや）を思ひこそやれ

寄国祝言（寛政九年—一七九七—御年二十七歳）

よろづ民やすくたのしむときつ風とよあし原の國さかえつゝ（御会始）

おもかけ(同右)

おもはじと思ひかへせばあやにくになほ立ちそひぬ人の面影

寄道祝言(同右)

しきしまの道は神代のみちなればいにしへ今にいや榮えつゝ(春日社御法楽)

向炉火(同右)

うづみ火のあたりは冬をわするにも忘るな賤がさむき夜床を

谷樵夫(同右)

あはれなる業わざにもあるか谷かげの岩のかけみちかよふ樵夫きこりは(*かけみち||石の多いけはしい山道)

早春(寛政十二年—一八〇〇—御年三十歳)

さかえ行くこの初春のよろこびに神のめぐみを猶あふぎつゝ(石清水社御法楽)

立春(寛政十三年—一八〇一—御年三十一歳)

あらたまの年のひかりも天地とともにやはらぐ春はききにけり

春祝(同右)

すべらぎの世々の例たとひをうけつぎて神につかふる春ぞかしこき

寄鏡神祇(享和二年—一八〇二—御年三十二歳)

朝ごとにかけてぞ仰ぐあきらけき八咫やたのかよみは神の御影みかげと

水上夏月(文化三年—一八〇六—御年三十六歳)

いろくづ*の底の玉藻にあそぶさへ見えすく月の川瀬すずしも(*いろくづ||魚類)

住吉（文化五年—一八〇八—御年三十八歳）

あしはらやみだれぬ風に住吉の神まもるてふしきしまのみち

暮秋鳥（同右）

初霜のおくての稲葉いろさびてかりがねさむし秋も暮れゆく

里竹（文化六年—一八〇九—御年三十九歳）

誰が里か住む人がらもなつかしき軒のめぐりになびくむら竹

門（文化十一年—一八二四—御年四十四歳）

四つの門よもにひらけて言の葉を聞きし聖の代々ぞたふとき

（* 四つの門 中国の古代の帝王・舜が宮廷の四方の門をひらいて数多くの賢人を客として迎へ入れ、すぐれた政治を行った故事をさす。）

神祇（文化十三年—一八二六—御年四十六歳）

天津神くにつやしろのめぐみもてとよあしはらの風ぞ正しき

春草漸滋（文政八年—一八二五—御歳五十五歳）

雪間のみ草のはつかと見しいろの春の日ごとに青みわたれり（* はつか 僅か）

迎春祝言（天保二年—一八三一—御年六十一歳）

天地も人のこゝろもやす國の世にやはらげるはるは來にけり

暮秋蟲（以下、御詠年月不詳）

秋もや々暮れなむとする浅茅原なく蟲の音もかれくにして

水辺杜若

咲きてこそそれと知らるれ杜若かきつばたみくさもふかき春のいけべに（*みくさ水草）

苗代水

はるの水ゆたかに賤がせき分けてこのもかのもにかこふ苗代

夕立廻

夕立のすぎつるそらは虹たじみえて木々のしぐれぞ風にみだるゝ（以上、年月不詳の御歌は「光格天皇御製集」）

仁孝天皇（第二百十代）

御在世 一八〇〇—一八四六（崩御・四十七歳）

御在位 一八一七—一八四六（十八歳—四十七歳）

（一八四〇年まで御父・光格上皇の院政が行はれた）

第二百十代・仁孝天皇は第一百十九代・光格天皇の第四皇子。仁孝天皇のあとには孝明天皇、明治天皇と続くのであるが、仁孝天皇は御父君・光格天皇の院政のもとに、御父子御一体となられて幕末の日本の危局に立ち向はれたことを、まづ念頭に入れておくべきであらう。しかしこの間にあっても幕府の朝廷に対する態度は不遜を極めてゐた。すなはち、文政十年（一八一七）、仁孝天皇は將軍・家齊に対して、従一位太政大臣の位をさづけられ、優渥な詔を家齊にたまはった。当時国内の政治は乱れ、（それより十年後一八三七には大塩平八郎の乱が発生してゐる）外には外敵が、国の周辺をうかぶといふ内外とも危急の時、朝廷はなほ幕府を励まして国難突破を祈念したまふ大御心によって、この破格の御沙汰が出されたのであるが、その際、將軍・家齊は、京都に上つてこの恩寵を拝受することをせず、恬然と江戸に居坐つたまゝ、詔を受け、世臣を代理として入洛せしめるといふ無礼きはまりなき所業を行った。この家齊の無礼さは、直ちに全国の勤王志士の憤激をさそひ、幕府崩壊に至る一つの直接的な契機を生むことになったのである。

なほ、仁孝天皇の御代には御踐祚の翌年、文政元年（一八一八）に、英船が江戸近くの

浦賀に到来、越えて文政五年（一八二二）にも英船が浦賀に、翌文政六年（一八二三）ドイツ人シーボルトが長崎に、翌文政七年（一八二四）英船が宝島に、と立て続けの外船の到来があった。このためさすがの幕府も、その翌年文政七年（一八二五）二月には、「外国船撃攘の令」（別名、「異国船打拂令」）を出した。この危局に際して仁孝天皇が、將軍家齊に太政大臣任命の「文政十年（一八二七）の詔^{みことり}」を出されたにかかはらず、家齊が無礼の限りをつくしたことは、多くの志士たちの尊皇攘夷の心を振ひ立たせた。吉田松陰が幼時からその父親によって暗誦させられたのもこの詔であったのである。さらに、天保八年（一八三八）にはアメリカ船モリソン号の来航があり、これに関連した天保十年（一八三九）には高野長英、渡邊華山らが処罰されるといふ、所謂「蛮社の獄」が発生、天保十三年（一八四二）になると、さきの「外国船撃攘令」は緩和されて有名無実になってしまふ。このころ海の彼方では、天保十一年（一八四〇）に始つた阿片戦争によって清国は遂にイギリスに屈し、天保十三年（一八四二）、南京条約を締結した。かうして仁孝天皇がおなくなりになられる二年前の弘化元年（天保十五年—一八四四）七月には、オランダ国王が使者をわが国に派遣し、鎖国を解除すべきことや、西欧諸国の情勢などを知らせてくるに至り、いよいよ幕末の動乱の幕が開かれるに至つたのである。

仁孝天皇は、学問をよく修められ、特に本居宣長の「古事記傳」をおそばからお離しにならなかつたと伝へられてゐるが、おなくなりになられる前年すなはち、弘化二年（一八四五）、皇居平安宮の建春門外に「學習院」を建立された。この「學習院」は天皇

崩御の翌弘化四年（二八四七）三月に開院、公家の子弟のための教育機関となり、儒学を主とし、これに国学を加へたものであった。少壮公家や志士も集り、尊皇派の一つの拠り所ともなつてゆく。今日の「學習院」の前身であった。

（御陵墓は、京都市東山区今熊野にあり、御父君・光格天皇と同じ後月輪陵〔九重塔〕と申し上げる。）

松添栄色（文化十四年—一八一七—御年十八歳）（註・この年三月に御踐祚）

言の葉の世々のさかえに松が枝もなほいろまされ九重のには

秋田（同右）

秋いくよたのみに賤が植ゑおきし千町の稻葉いまぞいろづく

時雨（同右）

晴るゝかと見ればしぐるゝ立田山のこる紅葉の色まされとや

貴賤迎春（文化十五年—一八一八—御年十九歳）

しづの女が摘むや雪間の若菜にも雲居へだてぬ春は知られて

祝（同右）

むかしいま榮ゆる道はしきしまの大和もろびといはふ言の葉

旅友（同右）

都をばいでにし日より行きつれてかたらふ旅の友ぞしたしき

すみがま（同右）

雪の色も霞むと見しは小野山にやく炭がまのけぶりなりけり

寄世祝言（文政二年—一八一九—御年二十歳）

四方の海をさまる世とて國つ民にぎはひうたふ聲もゆたけし（御会始）

松下水（同右）

あつさをもわすれて掬ぶ山かげの松のしたゆく水ぞすどしき

神楽（同右）

おもしろく神ぞ聞くらしとりづくに吹く笛たけやうたふ榊葉さかきば

鷹狩（同右）

降る雪の寒さも知らじ狩人のとだちの野邊にいさむこゝろは

（*とだち＝鷹狩のため、あらかじめ鳥が集まるやうに作っておく草むら）

埋火（同右）

よりそへばやがて寒さも忘れられてたちさがたき埋火うづみびのもと

霞（文政三年—一八二〇—御年二十一歳）

雪のこる深山みやまのおくも霞みけり春のいたらぬかたはあらしな

網代あじろ（同右）

篝火かがりびのかげふくる夜も網代守あじろもりなほ寝ねやらず氷魚ひまや待つらむ

（*網代守＝氷魚〔鮎の稚魚〕を捕へるため網代の番をする人）

増恋（同右）

逢ふにそひ逢はぬに増る思ひかな戀てふものはわりなかりけり

立春天（文政四年—一八二一—御年二十二歳）

岩戸あけし神代おぼえて天つ空日かげうららに春は來にけり

千鳥（同右）

鳴きわたる聲もさむけし小夜千鳥霜みつそらに友さそひつゝ

見恋（文政五年—一八三二—御年二十三歳）

ほの見つる人の面影忘れずおきふしわかで身に添ふもうし

鏡（同右）

みがけなほ光くもらずあさなく心もすみて向ふかどみは

秋鳥（同右）

うらがるゝ野邊の眞葛のあきかぜに夜寒を侘びて鶉なくらし

霰（同右）

聞さむみ小夜更けぬらし笹の葉にあられ亂るゝ音も身にしむ

歳暮述懐（文政七年—一八二四—御年二十五歳）

學ぶ書も調ぶる絃もそこはかとあらでぞ年のくれゆくは惜し

（*そこはかとあらでしつかりした進歩もなく）

神祇（文政八年—一八二五—御年二十六歳）

天照らすかみのめぐみに幾代々も我があしはらの國はうごかじ

祝言（同右）

ものゝふのやしまの波もうごきなく風ゆたかなる葦原のくに

和琴（同右）

たぐひなきあづまの琴のしらべこそ神代の風を吹き傳へけれ（*あづまの琴は和琴の別名。六絃で日本古来の

楽器）

庭冬月（文政九年—一八二六—御年二十七歳）

やりみづの流れもこほる庭のおもの眞砂まごさの月のかげぞさむけき

冬雑物（文政十年—一八二七—御年二十八歳）

埋火うりみびによりそひて猶なほまきかへしふみ見る夜半よはは冬もわすれつ

納凉水（同右）

すゞしさは夏をばよそに遺水やりみづのながれまぢかくいざ圓居まどひせむ

早苗多（文政十一年—一八二八—御年二十九歳）

賤しづはさぞうれしと見つゝ思ふらし千町にあまる水のわかなへ

雪中興遊（文政十二年—一八二九—御年三十歳）

おもふどち袖うちかさし駒こまなべてゆく／＼めづる雪の野山路

雪随風（文政十三年—一八三〇—御年三十一歳）

音たてゝ吹き誘さそふ空にうちきらし降りしきる雪ぞ風のまゝなる

欄はらま（天保十五年—一八四四—御年四十五歳）

鳴けや鳴け猶なほいく夜半よなに幾聲いくせいを聞くときも飽あかぬ山ほととぎす（聖廟御法薬）

花半開（同右）

片枝まづほころぶ色のえならぬにさぞさな盛さかのはなぞ待たるまゝ（*えならぬ〓なみなみならず美しい）

述懐（弘化二年一八四五―御年四十六歳）（註・この翌年正月、崩御）

いつしかと三十年みそとせ近ちかくなりぬれど世よをしるのみの身ぞおほけなき＊

（*おほけなき〓分不相応である。身のほどをわきまへない）

孝明天皇（第百二十一代）

御在位 一八三一—一八六六（崩御・三十六歳）
御在位 一八四六—一八六六（十六歳—三十六歳）

第百二十一代・孝明天皇は、第百二十代・仁孝天皇の第四皇子。弘化三年（一八四六）御年十六歳で踐祚され、翌年秋に即位の禮を行はせられた。天皇は以後二十年間、幕末の急運を告げる内外諸情勢の中で、終始、独立不羈の御精神を以て幕府の施政・外交のあやまりなきを凝視された。そしてともすれば対外屈從に傾き勝ちの幕府に対し、これを叱咤激励し続けられたが、慶応二年（一八六六）十二月十三日、抱瘡（天然痘）に罹られ、御発病後十日余りにして十二月二十五日、御在位のまゝ、三十六歳の御若さで崩御せられた。

孝明天皇が、当時の破局的な内外諸情勢に際して、常に国民の上に御心を馳せつつ「澄まし得ぬ水にわが身は沈むともにごしはせじなよろづ國民」の御歌に拝せられるとき捨身の大御心をもって、時局に相對され、しかも賢明な御措置を次々に打たれたことについては、「近世日本國民史」百卷の著者である徳富蘇峰が、「孝明天皇和歌御會記及御年譜」の「序」に次のやうに書いてゐることに尽きてゐると思ふ。

「維新の大業を立派に完成した其力は、薩摩でもない、長州でもない、其他の大名でもない。又当時の志士でもない。畏多くも明治天皇の父君にあらせらるゝ孝明天皇である。……然るに維新の歴史を研究する人々は元勳とか何とか言つて、臣下の働きを彼此申すが、この運動の中心とならせられた孝明天皇に感謝し奉ることのないの

を、甚だ遺憾と思ふのである。……実は私も歴史を書くまでは、孝明天皇が左程まで国の為に御尽し遊ばされたことを、充分には承知しなかったが、今日に至って実に恐入って居る。……孝明天皇は自ら御中心とならせられて、親王であらうが、関白であらうが、駆使鞭撻遊ばされ、日々宸翰を以て上から御働きかけになられたのである。即ち原動力は天皇であって、臣下は其の原動力に依って動いたのである。要するに維新の大業を完成したのは、孝明天皇の御蔭であることを知らねばならぬ。」

と。正に適切な指摘である。

先代・仁孝天皇の御代からロシア・フランス・オランダ・イギリス諸国の船が日本の近海を往き来して、日本に開国を迫ってきたが、御年十六歳で天皇となられた孝明天皇は、踐祚の年の秋に、早くも幕府に対して海防を嚴重にする様に御命じになつてをられる。すなはち、弘化三年八月に幕府に下された「御沙汰書」がそれであった。天皇の独立不羈の御精神は、かうして踐祚と共に具体化してゆき、そのため幕府も、外交上の重要問題については、天皇からのお許し（勅許）をいたゞいてから行はねばならぬ、といふ考へに傾いてくる。しかしなほ勅許を得ずに勝手に外国と条約を結んだことから、幕府は天皇からきびしいおとがめを受けることになり、これが基になって尊皇攘夷論がはげしく湧き上つてくることになった。このことは、とりもなほさず、幕府内治外交上の失政に起因することであるが、同時に徳川家康以来二百五十年に及ぶ朝廷棚上げをモットーとした幕政が、孝明天皇の御登場によって実質的に終止符が打ち始められたことを意味するのである。

このことをやゝ具体的に見てみると、天皇御年二十三歳の嘉永六年（一八五三）六月には浦賀沖にペリー提督の率ゐる黒船（米国）の来航があり、翌七月には長崎にロシア使節プチャーチン来航。ついで翌安政元年（嘉永七年）一月にはペリーの再来、かくして三月に幕府はその威圧に屈して「日米和親条約」を、八月には「日英和親条約」を、十二月には「日露和親条約」、といふ風に、いづれも勅許を得ずに調印させられてしまったのである。これらの諸国は、表では日本に開港の決意を促し、日本の啓蒙に援助の手を差し伸べてゐるかの如くであったが、内実は、各国それ／＼に日本国土への勢力扶植を、虎視たんたんとして狙つてゐたのである。この時期の日本は、文字通り一歩誤れば、支那の二の舞を踏んで西欧諸国に蹂躪じゆうろくされる危険にさらされてゐたのである。

このことは、この時期のことをわが青少年に教へる場合には、決して忘れてはならない重要な点である。すなはち幕末の日本を説明するのに、攘夷論と開港論の二つの思想的な対立があつただけごく簡単に割り切つてしまつて説明したり、さらには、それを解説して、前者を固陋なる保守派、後者を賢明なる進歩派として価値判断の基準にしたりすることは、全く軽率きはまらないことであつて、もしもこの様な教へ方が、今日の日本で流行してゐるとすれば、それはわが青少年を誤らしめるも甚しいものであると思ふ。すなはち、当時攘夷論を唱へたといはれる人々——孝明天皇をはじめ吉田松陰その他幕末の諸大名・志士たち——は、幕府側の主唱する開港論よりも、はるかに強い開国進取の氣象をその心中に蔵してゐたのであつて、その志を達成するためには、先づ自国

の独立を堅持できなくてはそれがかなへられないことを痛感してゐたので、あへて攘夷を唱へたのであった。祖国日本の独立の堅持といふこの一点における深淺が、いはゆる攘夷論と開港論との分れ目であったのである。当時、諸外国に脅かされて無定見に条約締結にはいつていつた幕府側の開港論を尊皇攘夷派が徹底的に糾弾したのは、決して正しい開港に反対したのではなく、いはれなき屈従の故に、であつた。

この点があつてはつきり判らないと、明治維新で尊皇攘夷派が佐幕開港派を倒して政權の座についたのに、なぜ明治政府が積極的に諸外国と国交を開始していつたのか、その因縁がわからなくなり、近代史の解明は、スタートでつまづいてしまふことになる。かうした重要な点への素直な取り組みがおろそかにされると、歴史的事実とは程遠い考へ方を持ち込んできて「下級武士が腐敗した指導者を倒して日本を近代化の緒につけた、それが明治維新の意味であつた」などといふ階級史観がひの妄説がまかり通ることになるのである。事実を正確に追求することと、何が重要事であつたかの判別が、歴史を見てゆく上でどんなに大切なことかを、改めて考へさせられる問題でもあると思ふ。

これらの点を踏まへて幕末期の朝幕關係を見てゆくと、さきの徳富蘇峰の見解が、いっそう至言として浮び上つてくるし、同時に、この時局收拾の実質的首導者としての孝明天皇の御心中がいかにきびしい緊張の御連続であられたかも、窺ひ得られるやうになつてくる。なほ幕末の真実を少しでも知りたいと思はれる方におすすめしたいのは、民間人としての吉田松陰が安政五年（一八五八）四月中旬、獄中から藩主毛利公に提出した「対策一道」といふ対外政策論と、孝明天皇が文久二年（一八六二）四月に内外の情勢

を深く御心配なさってお書きとめになり、近臣にお示しになったといふ「御述懐一帖」といふ御文章である。特に孝明天皇のこの御文章は、ここに謹選申上げた悲痛極りない御製の数々と共に、幕末を語るすべての日本人が必読すべきものとしてぜひごらんいただきたいと思ふ。

さて、ここに謹選申上げた御製は、今日われわれが知りうる天皇御在世中の御製総計一、二四五首の中からのものであるが、その一首一首に大御心のほどが御歌の高いリズムを伴なつて伝はつてくるごとき思ひがする。事実、当時の大名・志士たちの中には、これらの御製の一首を伝へ聞くことよつて、大御心を感じ、大御心にお応へ申し上げてその心懐を和歌に詠み上げたことなどが、いくた史実の上に記されてゐる。それゆゑに、幕末日本の動乱の実相を孝明天皇の御製を中心に学ぶことは、幕末史のみならず、歴史教育の上においても、決して軽視してはならぬ要点であると思はれる。

なほ、次に御登場になられる御子・明治天皇との御関係のことにわたるが、不世出の歌聖と崇められ、かつ御一生を通じて十万首近い御詠草を残された明治天皇は、実はその御幼時に孝明天皇から和歌創作の手ほどきをお受けになり、親しく御添削を受けられながら御成長なされたのである。このこともまた明治日本を語るに先立って見落すわけにはいかない事柄である。すなはち、明治天皇が御年七、八歳の頃、父帝・孝明天皇に御機嫌伺ひに参上されるごとに、父君から和歌の習作が課せられ、親王が詠進なさるのを待ってはじめて御父・孝明天皇は御子・親王にお菓子をお与へなさつたことが、「明

「治天皇紀」に見えてゐる。皇室に古来から踏み続けられた「しきしまのみち」の道統は、ここでもまた孝明天皇から明治天皇へと、御親おんみからの全心身の御努力によって伝へられていったのである。萬世一系の皇位の相承と、「しきしまのみち」が絶えることなく踏み続けられたこととの深い関連性を、改めて切実に見る思ひがするのである。

孝明天皇が、お子様（後の明治天皇）の御歌にどのやうに御添削なさったかの一例を左にご紹介しておきたい。

ある時、親王（明治天皇の御幼時）は

あけぼのにかりかへりてぞ春の日のこゑをきくこそ
のどけかりけり（傍線、編者）

と書かれて天皇にお差し出しになられた。天皇は、この作品の中でいくつかの点にすぐお気づきになられた様に拝せられる。おそらくその一つは「春の日のこゑ」といふのは正確ではない、「こゑ」は「生きもののこゑ」であってこそ「こゑ」だとお考へになられたのではなからうか。また、「あけぼのにかりかへる」といふのも、折角この作品の中に「春の日の」とあるのだから「春の日のあけぼの」と詠む方が一層具体的とお考へになられたのであらうか、第三句の「春の日の」を一番最初に移され「あけぼの」の前に「空」を入れて「春の日の空」と一層具体的な情景の表現に改めてをられる。そして第二句の「かりかへりてぞ」といふ「ぞ」をもっと正確に詠むやうにとの御配慮からか、「かりかへるこゑ」（雁が帰りながら鳴いてゐる声）と御添削を進められ、

春の日の空あけぼのにかりかへるこゑぞきこゆるのどかにぞなく（傍線、編者）

と御自筆で御添削なさってをられるのである。この一例にみる御添削を以上の様に私が

評しまつることは、まことに畏れ多いことであるが、くりかへしくりかへしこの二首を比較して味はつてみると、御添削といふ作業を通して、御父君が御子様の御歌を現実体験に、より一層近づけた表現にする様にと、大変に緊張したお心で御添削なさつてをられることに気づかれて来る。

われわれ人間の心といふものは、ともすれば、自分が見た情景や、体験した事柄などをありのままに表現しないで、つい観念的に表現してみたり、概念的に走つてまともてみたりするものであるが、それをより正確な、体験のままの言葉で、表現する努力が、「しきしまのみち」の大切な修業のやうである。それが素直に出来るやうになることは、とりもなほさず、相手が大自然であれ、人間であれ、要するに相手そのものを正確に把握することを意味するのであって、このことは人間社会における人生観上の修業としても、政治に携はる者の基本的な心構へから言つても、人の上に立つべき者には一番大切な心の素養を意味することにはかならない。それは皇室に伝承された「しきしまのみち」の奥義に通ずることであらうと思はれる。いまだ三十歳にも及んでをられなかつたであらう若き父君が、将来祖国日本の命運を御担当になる宿命を持ってをられる御子に対しての、たとへやうもない御期待を背景とした御添削であつて、単に和歌が上手になる様にといふ意味での御添削ではなかつたことが、しみじみと偲ばしめられる所である。

それにしても、ここに拝する若き父帝と幼い御子との「教へ」と「学び」は、今日の日本の小学校から大学に至るまでの教育の在り方と対比して、教育といふことの本義に

ついで何と深い意味合ひを示してゐることか、うたた感慨に耐へぬのは、単に私ひとりではあるまい。

かうしたことのほかに、孝明天皇は、祭祀の御席にも幼い御子をお連れになつてをられたことが天皇紀に記されてをり、幕末から明治に移り変わる日本の政治・外交には、孝明天皇から明治天皇に伝へられた御志が生き生きと息づいてゐることの重要性を、くれぐれも見落さぬやうにしたいものである。まさに累卵るいらんの危きにあつた日本に、光榮ある独立を保持せしめ給うた御方こそ、孝明天皇であられたのである。

(御陵墓は、京都市東山区今熊野にあり、後月輪のちづら東山陵〔円墳〕と申し上げる。また、京都の平安神宮に祀られてをられる。)

(嘉永元年—一八四八—御年十八歳)

女御入内の折の宸筆しんぴつの御製(十二月十五日)

かげならぶ千世のくれたけ河竹の根ざしふかくもなかにちぎらむ

(嘉永六年—一八五三—御年二十三歳)

* 米使ベルリ浦賀に来航

春朝日(正月二十二日水無瀬宮御法樂)

天のはらふりさけ見れば朝日影かすむも飽かぬ春のいろかも

秋雨(八月二十三日当座御会)

詠めつゝ思ふも淋し秋の雨の降るがまに／＼木の葉ぬれけり

煙（九月八日当座御会）

朝な夕な民のかまどのにぎはひをなびく煙におもひこそやれ

（嘉永七年、安政元年—一八五四—御年二十四歳）

* 四月皇居炎上の事あり。幕府、米、英、露などと和親条約締結

春懐（二月十四日御遊和歌当座御会）〔この御製は『孝明天皇紀』によれば翌安政二年の御作とあり〕

皆人のこゝろも花の紐とけてへだてぬ中の春のさかづき

寄神祝言（三月十一日神宮御法樂の和歌）

ことの葉のたむけうけてよ國民のゆたけきことを神もおもはじ

霞映日（同月二十一日内侍所御法樂の和歌）

千早ぶる神代の春の立かへり日かげうらゝに霞むそらかも

冬夜（同月二十二日鴨社御法樂の和歌）

烏羽玉のよすがら冬のさむきにもつれて思ふは國たみのこと

夏川（同前）

世をいのる心は神もくみしるやかものかはらの夏のすゞしき

述懐依人（五月二十八日御遊和歌当座御会）〔この御製は『孝明天皇紀』によれば翌安政二年の御作とあり〕

深き淵うすき水のいましめに日々にわが身をかへりみつゝも

柳（六月十一日神宮御法樂の和歌）

打なびく柳のいとすなほなる姿にならへ人の心は

磯千鳥（閏七月十一日神宮御法樂の和歌）

風絶て波こゆるぎの磯千鳥しづかなる世をつぐる聲かも

寄地祝言（十二月二十一日内侍所御法樂）

かみわざの天のみほこの雫よりなりにし國ぞすゑはひさしき

同年の御製として子爵六角博通所蔵の叢書の中に見えたる

あさゆふに民やすかれとおもふ身のこゝろにかゝる異國の船

（この年—嘉永七年、安政元年—四月六日、皇居炎上の事あり。この折天皇は、御避難の道中の御述懐や御見聞を、いはば連作的に詠ませられたものが三十七首ある。しかしながらこれは、大正初期に公刊された「列聖全集」「歴代御製集」にも見られず、昭和二年に東山御文庫所蔵の御中から歴代天皇の御宸翰の一部が敬選影印されて少数数刊行された「宸翰集」があり、それに添付刊行された「宸翰集解説」の中に挿せられるものである。同書には、「天皇、御避難御道中の御製和歌を、関白・鷹司政道に示し給ひしもの」と註して、同書二九〇頁に掲載されてをり畏友、夜久正雄氏が「月刊国民同胞第一二二号」に、原文の漢文的表記法を書き下しに改めるなどして発表紹介されたの基いて、ここに三十七首の全部を掲載することにした。それは一つには、容易に挿読の機が得られない御製であること。二つには、連作形式——江戸中期の靈元天皇にも挿せられたが——の作風を挿すること。なほ翌安政二年に近衛忠熙邸に行かれた折の三十一首も連作形式である。三つには、幕末の難局に立たせられた孝明天皇が皇居炎上といふ非

常の事態に出遭ひ給うて、はじめて国民大衆の生活の場を、ぢかに御見聞になられ、賀茂神社にも直接に参拜せられるといふ御体験を示された数々の御言葉が拜せられるからである。さらに天皇が御年二十四歳にして皇居を突然に生まれ、国民の生活の息吹きを、また時代のも、胸一杯にお吸ひこみになられたといふこの御体験は、以後崩御までの十三年間の天皇の御活躍、すなはち、王政復古、明治維新へと近づく重要な時期における天皇にとって、われわれの想像を超えた御体験であつたに相違なからうと思はれるが故である。あへて全首を掲載し、以て天皇の大御心をお偲び申上げるよすがとしたい。なほ、御歌の数ヶ所の仮名遣ひに疑義があるが、原文のまゝで掲載した。

立たちいづる行衛ゆくへいづくとしらねどもたゞ古ふるさとをあとに見みすてゝ
嘉永七年卯月六日午の時、おもはずも築地内より火移り、内裏も火及ゆえ、止む事を得ず、急いそぎのがれ出いるとて

其まより、余程興よほどとしをあゆませ、今はあぶなげなしと聞ても、劔けん撃げきも興きの中これ無く、内侍所ないじところもいかにともしらせれば、あんじわづらひつゝ（*劔撃けんげき||草雉くさじのつるぎと八坂瓊やちのまがたま。*内侍所ないじところ||神鏡かみかぎ。合あはせて三種さんしゆの神器）

身ひとつをのがれいでゝもこの國くにの三みつのたからの行衛ゆくへいかにと

其後、行々、けふぞ始はじめて、民の家居いへをみて

立たちならぶ民の家居いへをいまぞみてまづしき物をあはれとぞおもふ

賀茂河かもがはの橋を渡るとて

賀茂河かもがはの清きよきながれをいまぞみて心うれしく渡る板いたばし

鴨かもの社やしろ一いち之鳥居とりゐり邊あたにて、橋本中將馳付はせつけ、劔けん撃げき持参もちまゐ、輿こしの中なかに入る、余りの嬉うれしさに

あら嬉し國のたからのつゝがなくともに乗つる今のよろこび

其より程なく、鴨の宮居に輿を留て、少し心を安じつゝ

頼もしな鴨の宮ゐにこしをとめて今ぞ始めて心やすくも

右府内府兩公世話にて、とりあへず、神の土器にて水を呑とて（*右府、内府||近衛忠熙、鷹司輔熙を指す）

おもはずも神のうつはにのむ水をどろく胸もやすらげくして

とくとは分明ならず乍、堂上、女房、各、無恙よし聞きつゝ

誰もかもつゝがなきこそうれしけれよろづの品にかへむ命は

程なく輿の傍え、關白の來るゝまゝ余りの嬉しさに（*關白||鷹司政道を指す）

今こそはこゝろやすけれ杖はしら頼める人の來ますを見れば

其後、追々諸臣來つゝ、見舞くれる言葉に

諸臣の來つゝ尋ぬることの葉に少し心をたしかにぞおもふ

賢所も拜殿に御座すと聞て、見上つゝ

かしこしなかしこごころのみあらかもこゝにまします心たしかに（*みあらか||御殿をいふ）

常々は遙拜なれども、けふおもはずも、此御社に至ぬれば、いつよりも心たのもしくおもひつゝ

國民のやすけきことをけふこゝにむかひて祈る神の御前に

異船の治ることをさらにいまふかくも頼む鴨の御社

是より聖護院宮へ移替とて未時計、輿に乗出る折から

またこゝにまふづる程もしらざれば名残をしくも思ひつゝあれ

其より乗出、此度は始とは少しゆるくあゆませば

こゝろをも少し安けくおもひつゝ見たす道のめづらしきかな

諸司代・脇坂淡路守護にいで、路の傍に、おるを見て

武士のみちのほとりをまもるれば實たのもしくおもひこそすれ

ゆく／＼路の傍に菜種のいとうるはしく咲るをみて

春過ぎて卯月のそらにさき残る菜たねの花の色もゑならず

其よりまた少しあゆめば、賤が屋とみえて、せまき庵の内に山吹の咲亂たるをみて

口なしの色ながらも山ぶきの咲けるはけふの道の詠か

此の内のぬしはたれともしらねども立よりてまし山吹のはな

聞及關白殿の別荘常盤井の屋敷とは、萬里小路中納言申せしを聞て

名にもめで猶末ながくさかふらん千世の緑の常盤井の里

ゆかしくも立よりてみむ常盤井の里の臺をけふぞはじめ

五こく耕作はみあたられねど、野菜物の生きたるをみて、是も民のなりはいに相違あらずとおもひて

いつとなく心づくしに作なす民のなりはひおもひこそやれ

其より、程なく聖護院宮室へ着ぬれば、先々心やすくて、其日は何かと暮し、明ればあそここゝと庭の面を詠て

藤山吹のいとおもしろく咲みだれたるも、ゑならずおもひつゝ

春過ぎて夏來にけれと咲てみす藤山ぶきの花もゑならず

野邊を見渡して

夏ながら猶のどかにも見渡せば野邊はみどりの色のまに／＼

日々あなたこなたより賈物有、志をおもひて

かく計おもひをつくす人ごゝろなかあたにはをものはざらめや

菓子さかななど日々是も同様に、あなたこなたよりもらひぬれば、同じ火にあひし人々の事をおもひ遣つゝ

火におよぶほどは我らにかぎらねば同じ友にも恵もらさむ

我よりも民のまづしきともがらに恵ありたくおもふのみかは

十四日、八つ時餘り(午後二時すぎ)の頃、庭の後の馬場にて附の武士・長谷河肥前守乗馬を茶屋よりみて

武士のこまのあゆみをめづらしくこゝに宿りて詠めこそすれ

縁そふ木のしたかげを乗わたる駒のあゆみもゆたか成けり

其後、此茶屋にてめづらしく間物食つゝ

わが緑色そふかげの此庵にけふもてはやしめぐる 盃

十四日、けふは此宿りを立いづるところ、雨いと降つゞきしゆへ、まづけふは延引にぞ成にける

立いづる名残をもひてふる雨に又けふひと日足をとめて

十五日、こゝろよき晴なれば、けふぞ宿りをかへむと、朝とくよりこしらへつゝ

しばしながら馴し宿りを立いづる名残をしくもあとをみすてゝ

又こゝに來る事もあらじ、名残おしくもおもひつゝ更に端近く出て、庭の面をみて

我こゝに宿りしことをわするなよ藤山ぶきも心ありせば

時刻うつれば、輿に乗つゝ出にけり、聞及つる熊野の社を通りて

つたい聞熊野のやしるふしおがみ猶行末を頼こそすれ

其より路々餘程通り、賀茂の河の當りを通りしに、前の日通りし時とは降つゞく雨に水ましぬれば

さきの日の詠しおりにたちかへて河瀬の水の音まさりつゝ

其より内裏ちかく路々を通りつゝ、辻ごしに焼失の跡とおぼしく、板園などのあとを見つゝ

あはれさはいはん方なし住なるゝ我古郷のあとゝおもへば

其より桂家に入りつゝ此上の安心に

此殿にやどりさだめていまよりは猶すゑぐの榮へをぞまつ

此花 (註・孝明天皇の御雅号)

(註・以上三十七首の御製和歌は、さきにも記した通り、関白・鷹司政道にお示しになられたものであるが、その第一包紙には「賢覽に入れ候 此花」と御名を記され、第二包紙には「甚あやしき物、理不盡の事計に候へ共、四月八日より口ずさみ候を、漸清書候間、御笑草と爲て御目に掛申候、御所存之程 承度候事」とお書きになつてをられる。)

(安政二年一八五五御年二十五歳)

詠寄國祝 (正月、右大臣・近衛忠熙内旨を奉じて薩摩藩主・島津齊彬等に宸筆の御製を授く)

武士もこゝろあはして秋津すの國はうごかずともにをさめむ

安政二年きさらぎなかの四日かねて約し置きたる近衛の亭に行ひかひ、名にしおふ絲ざくらを見て

(二月十四日、紫宸殿代右大臣・藤原忠熙第に渡御。櫻花を觀給ひ御製を忠熙に賜ふ。一総數三十一首の内)

昔より名にはきけども今日みればむむべめかれせぬ絲ざくらかな(日庭)

見れどあかぬ風をすがたの絲ざくら花のいろ香は長々し日も

おのづからこゝろも花に匂ふまでいとに櫻の咲つゞく頃

いとざくらいと長き日もくり返し風のまに／＼なびく花房はなぶき

午の時ころよりとき／＼雨ふりければ(二首の中)

是もまたあかぬながめとなりてけりさくらがいとにかゝる春さめ

また／＼雨晴て日かげもはなの上に照そへば(二首の中)

村さめの晴行くあとに春の日やはなの光をみがき添へつゝ

夕景にもなりぬれば酒のたぐひとりかはし、今日はめづらしく男方を召寄せ花の宴催さす、ときに右のおほい
臣より數々儲物(註・献上物)ありければ喜のあまりかくぞありける

花のときあふてふさへも嬉しきをこゝろづくしの人のなさけは

夕景にもなりて猶更空もとく晴れ日影もうつろひし氣色又たぐひなければ

花のうへに夕日のかけのうつろひてさらに色ます庭の面かな

日のかげはをさまる頃のはなの上をさらにてらしていづる月かな

色みえぬたそがれ時の花のうへにはのめきわたるけふの月影

追々にぎ／＼しく盃もへだてなくめぐりて

やはらぐる人のこゝろも花ゆゑと猶よをかけてめぐるさかづき

それより庭へ下たち木の本に打つどひて(五首の中)

月のかげ花の光もいやまして春とは見えぬ庭の面おもかな

おもしろやさすさかづきに影みえて月もかすまぬ花の下かげ

なにごとも思ひわすれて月のかげはなの色香をさらにめでつゝ

又もとの所へかへりつゝ、盃のめぐる餘り人々手折りし花を冠かんざりにかざす、我にも右のおほい臣おみのかざして

(二首の中)

さかづきのめぐれるまゝに庭ざくら手折たせりし花をわれもかざしつ

何かとながき酒宴になりぬるほどに

かへるべき家路いへぢわすれていつまでもはなにめぐらす春のさかづき

程なく警固も揃そろひぬれば名残なごりをしくもかへらむとて

いつまでも何わするべきこの殿の花さくら木の今日のながめは

名残なごりあれやあかぬ心を木の本もとのはなにとよめてかへる夜の空

(註・以上、宸筆おんひつにて御製を記させたまひてそのあとに「安政二乙卯年仲春四日。於陽明家感花宴面
白慶悦之餘詠之。百二十一代孫。御名」と記されて下し賜へるものにて今に同家に秘藏せられあり)

秋夕傷心(七月十六日)

秋もわきてゆふべ淋しくなにくれと思ふ心に身をくだきつづ

祝(七月二十七日当座御会)

殿つくるその聲々のにぎはひをきくにたのしきちよの行く末

(安政三年一八五六―御年二十六歳)

天晴有鶴聲（正月二十四日御会始）

あさ庇日影うらゝに空みればさもうれしげにたづ鳴きわたる

春居所（二月十五日当座御会）

我がやどの北なる殿のいとさくらこそぞのきのふやおもひ出でつゝ（*こそぞのきのふ近衛邸行幸のこと）

牡丹（四月四日当座御会）

移し植ゑしことしをはじめ深見草さきそへ花の色もかはらず

夜をかけてめぐる盃とりくくに人のめづてふ名とりぐさかも

これは「うづきはじめのよつかこのへのふかみぐさ、えもいひしらぬさかりをみてひとびとつどひてよむやま
とことのは」の五十字を分ちて、おの／＼初句の頭におきて牡丹の歌五十首よめる中に「う」と「よ」とをよま
せ給へるなり

渡時雨（五月十日当座御会）

舟人のとま引おほふ隙もあらず時雨ぞわたる淀の川づら

述懐（同前）

おろかなるわが身も共に人並にまじるはづかし敷島のみち

寄世祝（同前）

天地の神のめぐみにまかせつゝ猶やすき世にあふがたのしさ

（安政四年—一八五七—御年二十七歳）

樹蔭流水（閏五月十一日新造の御茶室・聴雪に渡御。和歌当座御会あり）

ときは木のかげをながるゝ水の音に心すゞしき庭のおもかな

寄世祝（六月十七日）

天地とともに久しく世のなかのすゑがすゑまで安けくもあれ

秋夕傷心（八月七日賀茂社御法樂の和歌）

わが思ひゆふべとだにも限らねどまして心をくたく秋かな

（安政五年——一八五八—御年二十八歳）

* 大老・井伊直弼勅許をまたずして日米通商和親条約調印、安政大獄おこる

寄山神祇（五月十五日石清水社御法樂）

八幡山かみもここにぞあとたれてわが國民をまもるかしこさ

述懐（七月十一日神宮御法樂の和歌）

神ごころいかにあらむと位山くらやまおろかなる身の居をるもくるしき

菊花盛久（八月七日鴨社御法樂）

世の姿くちぬためしを花のうへに見せて久しき秋のしらぎく

寄書述懐（十二月二十一日内侍所御法樂）

聖なるふみのおきてを守りなばくくだし世の事はあらじを

（安政六年——一八五九—御年二十九歳）

* 水戸藩に密勅下る。吉田松陰ら刑死。翌萬延元年、井伊大老櫻田門外にて誅せらる

祈恋（六月十五日石清水御法樂の和歌）

わが命いのちあらむ限かぎりはいのらめや遂には神のしるしをもみん

寄風述懐（七月二十七日内侍所御法樂の和歌）

こと國もなづめる人も残りなく攘ひつくさむ神風もがな（*なづめる人ハ優柔不斷で決断の出来ない人）

（萬延二年、文久元年—一八六一—御年三十二歳）

* 皇妹和宮、將軍・徳川家茂に降嫁

六月二日長門藩主・毛利慶親の臣・長井雅樂を以て慶親へたまひたる

國の風ふきおこしてもあまつ日をもとの光にかへすをぞ待つ

一聲山鳥（八月二十四日月次御会）

なくからはいま一聲も二聲ももらせやもらせ山ほとよぎす

朝述懐（十一月十四日内侍所御法樂）

ねがはくは朝な／＼の言の葉をあはれみうけよ神ならば神

文久はじめの年季冬、物部の忠魂磐石をもつらぬく利劍おこせる事、時世にあたり、實に憂患をはらふ志と、たのもしく思ひつゝよめる和歌

世を思ふ心のたちとしられけりさやくもりなきものゝふの魂

（十二月薩摩藩主・島津茂久その族島津久光、藩臣をして京に至らしめ、權大納言・近衛忠房等に由て御劍を奉り、建議して密に朝旨を請ふ。天皇其の志を嘉して宸筆の御製を賜ふ）

（文久二年—一八六二—御年三十二歳）

* 島津久光入京。寺田屋事件おこる

夕立過（六月十五日石清水社御法樂の和歌）

過て行くこの夕立の空みればこゝろの雲もたゞ時の間か

述懐（七月十六日内侍所御法樂の和歌）

うれしさの思ひは猶なほもまされかしまさるまじきは世のうき事よ

神樂（八月二十三日鴨社御法樂の和歌）

こゝろをばこめてうたへよ神樂人かぐらびとかゝりける世をしるもしらぬも

寄風述懐（九月十一日春日社御法樂の和歌）

異人ことびとと共ともども拂はらへ神かぜや正しからずとわが忌いむものを

薄風（十月十六日石清水社御法樂の和歌）

夕嵐吹くにつけても花薄すずあだなるかたになびくまじきぞ

浦千鳥（同月十七日春日社御法樂の和歌）

浦づたふ千鳥につれてよゝの爲ためまこと正ただしき人を得とまほし

寄忍草恋（同月十八日鴨社御法樂の和歌）

みちのくの忍しのぶもち摺すりりみだるゝはたれ故ゆゑならず世を思ふから

述懐（十一月三日内侍所御法樂の和歌）

神ならばわが心をもしろしめしひたすら願ふことをうけませ

寄水述懐（同月十一日神宮御法樂の和歌）

天地にみつる寒さのあつ水あつくも思ひつくす願ひよ

砧つゐ（同年の御製とて久邇宮所蔵の叢書の中に見えたる）

うたでやむものならなくに唐衣からころもいくよをあだに猶なほおくりつゝ

（文久三年—一八六三—御年三十三歳）

* 將軍・家茂入京、攘夷の御祈願あり。八月政変、三條實美ら七卿、長州に落

春人事（三月五日鴨社御法樂の和歌）

此の春は花うぐひすも捨てにけりわがなす業ぞ國民の事

薄氷（同月二十三日内侍所御法樂の和歌）

愚なる心は寒し薄氷あやうきのに世をわたる身や

夕立雲（四月一日神宮御法樂）

世の事のこの夕立にならふならばこるあま雲もただ時のまか

寄弓違懐（四月九日鴨社御法樂の和歌）

梓弓まゆみつき弓年をへず治まれる世に引かへさなむ

寄矢違懐（同日賀茂社御法樂の和歌）

矢すぢをもつよくはなたむ時ぞ來ぬむべあやまたし武士の道

夏竹（四月十八日鴨社御法樂）

今年生の若葉の竹のよわくとも亂るるかたになびくとはなし

なくほととぎす（四月二十二日内侍所御法樂）

いつまでか思のみ鳴くほととぎすとく嬉しさの聲を聞かせよ

雨中郭公（五月十一日神宮御法樂の和歌）

五月雨のはれぬ思ひを時鳥なれもこゝろにかけてなくかな

急雨（六月十日鴨社御法樂）

こと人やわが忌む人は夕立のかくすみやかに過ぎてゆけかし

たやすからざる世に武士の忠誠のこゝろをよるこびてよめる（十月九日守護職・松平容保に宸筆の御製を賜ふ）

和らぐもたけき心も相生のまつおちばの落葉のあらず榮えむ

武士とこゝろあはしていはほをもつらぬきてまし世々のおもひで

（宸翰＝堂上以下疎暴論不正之所置増長ニ付痛心難堪下内命之處速ニ領掌憂患掃攘朕存念貫徹之段全其方忠

誠深感悅之餘右壹箱遣之者也。文久三年十月九日）

書（同月二十三日春日社御法樂の和歌）

日日日日の書につけても國民のやすき文字こそ見まくほしけれ

竹雪深（十一月十六日内侍所御法樂の和歌）

國のこと深く思へといましめの雪のつもるか園そののくれ竹

水鳥多（十二月七日石清水社御法樂）

むらがりて何をかたるぞ我がおもひひとしくおもへ池の水鳥

（文久四年、元治元年―一八六四―御年三十四歳）

* 長州兵上洛、蛤御門の変おこる。四カ国連合艦隊、下関を砲撃

弘前侍従より名だかき正宗まさむねの刀みごとにつくりなし送りこすとよめる（四月弘前藩主津輕承烈より名刀を獻す）

いく世にもめでなぐさまむ名もたかき玉の刀に玉のつくりは

詠五十首和歌（五月二十一日甲子の例に依て―元治元年の干支は甲子―勅使を宇佐八幡宮に遣し神宝御衣及び宸

筆の御製を奉り給ひて、特に外患を祈攘し給ふ）

梅雨

長くともかぎりはありぬ梅の雨さりとて晴れよ異國ことくにのうさ

夏祓

身につもるうきをば今日に夏はらへいざや涼しきよを渡らなむ

徑薄

ほそくとも直すくなる路みちにまねけかし秋風あきかぜ帯る花すゝきぞも

叢虫

草むらのくさ／＼物をおもふとは蟲さへ知りて音ねにや鳴くらむ

搦衣

音にたてゝ百度ももたひち千たびうてやうてや夜寒よさむを業わざの賤しんがさごろも

千鳥

難波なにはがた蘆あしの霜しもがれさは／＼とゆふなみ千鳥ちどり群ぐんて立たなり

戀笛

笛竹ふえたけのよをかさねけりいつしかはあな嬉うれしとも吹ふならしてん

述懐

天あまがした人といふ人こゝろあはせよろづのことにおもふどちなれ（*どち＝仲間）

神祇

奉たごまつるそのみてぐらを受ましてくにたみやすくなほ守りてよ

述懐（九月十日春日社御法樂の和歌）

さま／＼になきみわらひみかたりあふも國を思ひつ民おもふため

仙台の中將よりくらおきの馬おくりこすとて（十一月二十二日、仙台藩主・伊達慶邦、鞍馬三四を貢す）

みちのくの國のつかさの心あればみつぐもみつのいさぎよき駒こま

（元治二年、慶応元年—一八六五—御年三十五歳）

心在山花（二月十六日内侍所御法樂の和歌）

願くはこゝろ静しづかに山のはの花みてくらす春としもがな

獨述懐（九月十一日神宮御法樂の和歌）

人しらずわが身ひとつに思ひつくす心の雲のはるゝをぞまつ

（慶応二年—一八六六—御年三十六歳）

* 將軍・家茂薨。十二月二十五日、天皇崩御せらる

秋鳥（七月十五日石清水社御法樂）

よきことを告げもきたれよ天つ雁都のあきのちぎりたがはず

月照瀧（七月二十一日内侍所御法樂の和歌）

もつれなき瀧の絲すぢあらはしていはねに月の照まさるかな（以上、「列聖全集」および「孝明天皇紀」から）

但し、安政元年皇居炎上の節の三十七首御連作を除く）

詠三首和歌御懷紙（十一月二十八日、月次和歌御会の時）

雲間寒月

雪になるかみぞれに成なとみし雲のひまほのめかしさゆる月かな

垣根雪

枯し草のふたゝびはなのさくとみれば雪のつもれる垣根なりけり

契あや行末つ恋

假初かりそめのちぎりとしてしもゆくすゑをたのむは戀のならひなりつれ

(以上、東山御文庫所蔵「歴朝宸翰集」から)

(御詠年月、未詳の御製)

澄すましえぬ水にわが身は沈むともにごしはせしなよろづ國民くにとま

戈ほことりてまもれ宮人みやびとこゝのへのみはしのさくら風そよぐなり

あぢきなやまたあぢきなや蘆原あしはらのたのむかひなき武藏野の原(以上、「歴代御製集」から)

近

代

(明治時代以降) (一八六七以降)

第二百二十二代・明治天皇 } 第二百二十四代・昭和天皇

明治天皇めいぢてん

(第百二十二代)

御在位 一八五二—一九二二(崩御・六十一歳)

御在位 一八六七—一九二二(十六歳—六十一歳)

第百二十二代・明治天皇は、第百二十一代・孝明天皇の第二皇子として嘉永五年九月二十二日に御出生になり(陽曆十一月三日)、御幼時は祇宮きのみやと申し上げ、九歳で親王となられてからは睦仁むつひとと申し上げた。いづれも御父君がおつけになられた御名である。睦仁親王は、御父君・孝明天皇が宝算三十六といふお若さで急に崩御になられた十余日後、慶応三年(一八六七)一月九日、幕末の政情混迷をきはめる中を、十六歳で踐祚遊ばされたのである。それは奇しくも、御父君が踐祚されたのと同じ御年齢であられた。

踐祚せんそくの十ヶ月後、幕末期の大詰おほつづめが近づく秋の十月十四日には、薩長に対し「討幕の密勅」をお出しになるが、幕府側もその同じ日に、幕府の命運もはやこれまで、と決断したのであらうか、江戸幕府第十五代將軍・徳川慶喜とくがわ けいきは、政権を京都に在あります天皇に奉還申し上げる旨を申し出て、これが翌十五日に明治天皇の御嘉納ごかのうせられる所となるのである。そしてその後約二ヶ月を経た十二月九日には、遂に世紀の転換とも言ふべき「王政復古」の大号令が渙発くわんぱつせられることになった。ここに徳川家康以来二百六十五年間に及ぶ江戸幕府の政治に終止符が打たれ、天皇親政といふ古いにしへの姿に立ちかへる日本となつたのである。

孝明天皇の崩御に始まる明治天皇の御代のうち、とくにわれわれが先づ銘記しなければならぬことは、幕末最終期にあたる慶応年間末尾一年九ヶ月間と、それに続く改元

後の明治初年一、二年間、すなはち明治天皇の御年十八歳ごろまでの御事蹟についてである。この間に見られる主要な出来事は、前記の「王政復古の大号令」、それにすぐ続いて、翌慶応四年（一八六八）一月「鳥羽・伏見の戦（戊辰戦争）」が起り「以後、天皇と称することを各国公使に布告」のこと、また「王政復古を諸外国に布告」のこと、などがあり、三月十二日には「神佛の混淆の禁止」ついで二日後三月十四日には、天皇御親ら「天神地祇に國是誓約の御祭文を奏せられる」とともに、紫宸殿に天神地祇をお祀りになって「五箇條の御誓文」を奏上せられた。そしてその同じ日に、「明治維新の宸翰（天皇から国民へのお手紙、の意）」と名づけられる維新史上きはめて重要な一文を御布告になられたのである。これらの文献を通じてわれわれは、明治天皇が御みづからの政治姿勢にきはめてきびしく御自戒なさってをられる御心境を、実によくうかがひ知ることができるし、そこに注目することなしには、明治天皇の御生涯も、明治日本も、ともに語るわけにはゆかないのである。

そして同年閏四月には、新政府によって「政体書」が出され、六月には、教民に対する施政の誤りなきを憂慮せられて「救荒の勅語」といふ御慈悲深い大御心が伝へられた。そしてつづいて八月から九月にかけて、会津若松の戦が激しく戦はれるその間に、天皇御即位の大禮が京都の皇居の紫宸殿でおごそかに執り行はせられ（八月二十七日）、また、九月八日には改元の布告が発せられて慶応四年といふこの年は、以後明治元年と呼称されることになった。やがて会津若松城の開城（九月二十三日）の直ぐあと、十月十三日には、鳳輦（御車）を東に進められて皇居を京都から江戸（東京）に移され、江

戸城にしのみま西丸を皇居と定められると共に、十七日には「萬機親裁まいたのりの詔」を全国民にお出しになられて、こゝに本格的な明治日本がその緒につくことになるのである。

ついで御年十八歳を迎へられた明治二年（一八六九）には、早くも一月四日に「政まつりごと始はじめ」、十五日に「皇學所開講」、二十五日に「御講書始はじめ」、二十四日に「歌御會始うたごかいはじめ」を行はれる、といふやうに、以後毎年一月に恒例的に行はれることになってゆく思想・学問上の重要な御行事が、矢継ぎ早ばやに開始されていった。そして二月には、皇居の中に「公議所」が設置され、四月には「修史局」を設置してその総裁に三條實美まじもとみを任命されるなど、戦乱いまだ収まらざる中に、学問、文化に対する適切な措置が、つぎつぎに優先的に処理されていったのである。

そのあと五月に、北海道函館の五稜郭が遂に開城され、戊辰戦争が漸くにして終結したのを見ても、一方ではげしい戦が続いてあるときに、明治天皇がどれだけ御熱心に前記の文化的諸施策を進められたかを偲おもびたいと思ふ。

とくに右に列記した文化的の諸行事は、実は古くから皇室に受け継がれた御精神と表裏一体をなすものであつて、われわれは王政復古といふことを、ともすると政權の移動の面だけで考へ勝ちであるが、天皇親政に取り組まれた明治天皇が、国民とともどもに「心」の内面の向上をはかれるのに、いかばかりお心を尽されたかが偲おもばれる所である。世の一部の学者たちの中には、明治天皇がいまだにお若かつたことを理由にして、これら明治初期のことについても、あるひは「五箇條の御誓文」の文章は、天皇がお書きになれるわけはなかつた、とか、あるひは、この間の御詔勅は、側近者によつて書か

れたこと明らかである、と指摘して、当時の明治天皇の大御心を素直に憶念申し上げ得ない傾向が見られるのは、まことに遺憾なことである。しかし、さきの「詔勅」「宸翰」「御誓文」等の文章の書き手が、たとひ側近者であったにせよ、それらが天皇の御意志や御心情を体して執筆されたものであることは疑ひやうのない事実であらう。従つてそれらの文面の所要所のお言葉は、明治天皇の御一生を通じて示された御精神と、全く一連のものであつて、お若いころのこれらの文面の中にこそ、明治日本の偉大な足跡の出発点が、ことごとく網羅、内包されてゐると見ても過言ではあるまい。

前章「孝明天皇」の解説の中で触れたやうに、御父君・孝明天皇が、明治天皇の御幼時から、御歌創作の御修業をお命じになられたことや、その御作を御父君みづから御添削遊ばされて、その御子のお心を正しく整へられるやうにご指導なされたこと、また祭祀の嚴修の意義について手を取つてお教へ遊ばされたことなどを通じ、明治天皇の大御心の中には、その御幼時から、国民の上に立ちたまふ御心が養はれてをられたと拝察申上げるのが、事実 に即した見方と思ふ。

さうした意味で、次にかゝげる「五箇條の御誓文」末尾のお言葉は、天皇御自身が率先してこの五ヶ條を皇祖皇宗の神靈にお誓ひになられたことを示してゐるし、次に引用する「明治維新の宸翰」のお言葉も、襟を正して拝読するほかなき大御心を偲ばしめるものである。すなはち、

—「五箇條の御誓文」のお言葉—

「我國未曾有ノ變革ヲ爲ントシ、朕躬ヲ以テ衆ニ先ジ天地神明ニ誓ヒ大ニ斯國是ヲ定

メ萬民保全ノ道ヲ立ントス衆亦此旨趣ニ基キ協心努力セヨ

―「明治維新の宸翰」の中のお言葉―

「天下億兆、一人も其處を得ざる時は、皆朕が罪なれば、今日の事、朕自身骨を勞し、心志を苦め艱難の先に立、古、列祖の盡させ給ひし蹤を履み、治蹟を勤めてこそ、始て、天職を奉じて億兆の君たる所に背かざるべし」

といふ痛切悲痛なお言葉、言ってみれば天皇としてまことにきびしい御自省の深い御自覚や、また、

「汝億兆、舊來の陋習に慣れ、尊重のみを、朝廷の事となし、神州の危急をしらず、朕、一たび足を擧れば、非常に驚き、種々の疑惑を生じ、萬口紛紜として、朕が志をなさざらしむる時は、是朕をして君たる道を失はしむるのみならず、從て列祖の天下を失はしむる也」

など、われわれ国民は、深くこれらのお言葉を通じて、天皇親政における最も基本的なご姿勢、いひかへれば「天皇の人生観、政治観」をうかがひ知ることが出来るのである。

さて明治天皇は御年六十一歳をもって全国民号泣哀悼のうちに崩御せられたが、その御治世四十六年間は、わが日本が東海の一小国から世界の大国に列すべく、艱難の旅に立った黎明期であった。従つて天皇の御事蹟は余りにも内政・外政の多岐にわたつてをり、ここに一々記述できないので、主要な項目のみを、ここに列挙するにとどめることにする。すなはち、「西南の役」「軍人勅諭の發布」「教育勅語の渙発」「大日本帝國憲法

の制定と、それと同時にご発表になられた「御告文」「上諭」「勅語」に拝せられる大御心、そして国会の開設「日清戦役における挙国一致の結束と勝利」「ロシア・ドイツ・フランス三国によるいはゆる「三国干渉」を悲痛な御思ひで受諾なされ、そして発布された「遼東半島還附の詔勅」「日露戦役発生の因縁と、再び挙国一致の辛酸のもとでの勝利」「御晩年における国民精神の頽廃を憂へられて発布された「戊申詔書」」など、数へ挙げるに尽きる所を知らない次第である。

明治時代におけるわが国民は、明治天皇の広大無辺の大御心に信順しまつりながら、天皇を「大御親おほみかみ」のごとくお慕ひ申し上げた。天皇は、国民の信順の心にお応へ遊ばされ、その御生涯を通じて、また御多忙な内外の政務・軍事を御統率遊ばされる合同合同に、御自身の御心を常に「清く、直く、明く」御自省遊ばされた御方であられた。そのことを最も端的かつ如実に示してゐるのが、その御生涯中の「しきしまのみち」御詠草の九万三千三十二首といふ数字であり、その一首一首の中には観念的な御冥想がなく、すべてが実人生における御生活体験を直接に表現された御詠草であられた、といふことである。まさに人生をかくのごとく真剣に生き給うた実証は、他に求め得べくもない。本書はその中から、謹選申上げてわづか二〇六首をここに載せることにしたが、それは全体の約一五〇でしかないことをあはせ記しておきたいと思ふ。

「しきしまのみち」を、かくまで踏み分けられた御方は、御歴代の天皇の中でもその比を見ぬばかりか、古来からの日本人のすべてを通じて、恐らく明治天皇が第一人者であられたと拝せられるほどである。従って明治天皇の御製を拝誦しながら明治天皇の大

御心を偲びまつることは、同時に、わが日本における「天皇政治」の本旨を理解するに欠くべからざる学問であつて、これを怠つての天皇制論議が、いかに空虚なものに墮してしまふかを、よく／＼考へねばならないと思ふ。しかもこの学問が、わが日本の「精神文化」系諸学を通じて、まともな学問としての位置づけさへ、されてをらぬといふ実情は、まことに悲しい事態であり、全世界の人々から、やがては不思議がられるかも知れないことで、わが学界の悲劇といふはかはない。

「明治天皇御製全集」百五十七冊は、宮内庁によって保管されており、総数十万首近いこと前述の通りである。このうち千六百八十七首が、大正八年（一九一九）に宮内省から刊行されて「明治天皇御集」と名づけられ、つい最近になって昭和四十年（一九六五）に、明治神宮から（大正八年の「御集」所載の御歌をふくめて）八千九百三十六首が「新輯・明治天皇御集」上下二巻として刊行された。

大正八年の「御集」と昭和四十年の「新輯御集」とでは、語句に多少の異同があるが、「新輯」の方は宮内庁保管の「御製全集」にそのまま拠つたものといふので、ここでは「新輯」に拠ることとし、以前の「御集」との異同は、右側に小活字で併記した。なほ「御集」の研究について、これを精神文化に関する重要な学問としてこの研究に先鞭をつけたのは、昭和三年（一九二八）に東京堂から刊行された三井甲之著「明治天皇御集研究」であり、編者はこの書を指針として選定に當つたことを附記しておきたい。

（御陵墓は、京都市伏見区桃山町にあり、伏見桃山陵〔上田下方〕と申し上げる。また昭憲皇太后とともに明治神宮に祀られてをられる。）

(明治十一年以前)

をりにふれて

臣どもと駒はせ行けば大庭の梅の匂をちらす春風

國

人もわれも道を守りてかはらずばこの敷島の國はうごかじ

日本武尊

まつろはぬ熊襲たけるのたけきをもうち平げしいさををしも

述懐

いにしへのふみ見るたびに思ふかなおのがをさむる國はいかにと

逢友述志

きのふけふ長き春日を我と臣と昔の書よみのものがたりして

(明治十五年—一八八二—御年三十一歳)

* 一月、軍人に勲諭を賜ふ。七月、朝鮮京城の変あり

夕立

高間山たかまくもとどろくいかづちの聲こゑにきほひて
かきくもり降るゆふだちに荒磯の波もしばしは音なかりけり

(明治十八年—一八八五—御年三十四歳)

落葉

ひとしきりさそひし風はしづまりておのがまに／＼ちる紅葉かな

月照水

厚氷とちたる池の底までもてりとほるかとみゆる月かな
(照)

冬泉

冬ふかき池のなかにもほとぼしる水ひとすぢはこほらざりけり

(明治二十三年—一八九〇—御年三十九歳)

* 前年二月、大日本帝國憲法公布。十月、教育勅語渙發

京都をいでたむとするころ聽雪(註・孝明天皇御創建の茶亭)にて、

(渡 殿)
わたどのの下ゆく水の音きくもこよひひと夜となりにけるかな

(明治二十四年—一八九一—御年四十歳)

社頭祈世

とこしへに民やすかれといのるなるわがよをまもれ伊勢のおほかみ

(明治二十八年—一八九五—御年四十四歳)

* 四月、日清戦争終る、三國干渉により遼東半島を還付

旅順の戦のさまをききて

世にたかくひびきけるかな松樹山せめおとしたる突撃の聲
(つる) (かちどき)

(明治二十九年—一八九六—御年四十五歳)

月

としづくに光そひてもみゆるかなやまとしまねの秋の夜の月

(明治三十年—一八九七—御年四十六歳)

雨中落葉

山かぜの音すさまじきゆふぐれに雨もまじりてちる木の葉かな

(明治三十一年—一八九八—御年四十七歳)

落花

春雨のふる日しづけき庭の面にひとりみだれてちる櫻かな

梅雨

筑波嶺は雲にかくれて利根川の河(細の音)おとたかしさみだれの頃

月前言志

あきらけき月にむかへばひさかたの空もしたしくおもほゆるかな

(明治三十四年—一九〇二—御年五十歳)

* 前年、北清事変起り、北京に派兵

梅雨

すむ魚もいぶせかるらむ池水の浮藻しげりてさみだれのふる

(明治三十五年—一九〇二—御年五十一歳)

* 一月、日英同盟調印

をりにふれたる（註・同年一月、青森歩兵聯隊第一大隊行軍中、八甲田山の山中で多数凍死）

埋火にむかへど寒しふる雪のしたにうもれし人を思へば

風前島

大空に風のふきあげし木の葉かと思ふばかりにとぶ小鳥かな

述懐

曉のねざめしづかに思ふかなわがまつりごといかがあらむと

湊川懐古

あた波をふせぎし人はみなと川神となりてぞ世を守るらむ

演習地にて

もののふのせめたたかひし田原坂まつも老木となりにけるかな

寄道祝

千早ぶる神のひらきし敷島の道はさかえむ萬代よろづよまでに

（明治三十六年—一九〇三—御年五十二歳）

道

ちはやぶる神のひらきし道をまたひらくは人のちからなりけり

旅

まちかくもたづねし民のなりはひをこよひ旅ねの夢にみしかな

詞

ことのはの道のおくまでふみわけむ 政まつりごときくいとまいとまに

燈

ともしびの影まばらにもみゆるかな人すむべくもあらぬ山邊に

友

もろともにたすけかはしてむつびあふ友ぞ世にたつ力なるべき

披書知昔

ふみみれば昔にあへるこゝちして涙もよほす時もありけり

思往事

をりをりにおもひぞいづる國のため心くだきし人のむかしを

をりにふれたる

天てらす神のみいつを仰ぐかなひらけゆく世にあふにつけても

(明治三十七年—一九〇四—御年五十三歳)

* 二月、露国に戦を宣す

花

こずゑのみ人に知られて櫻花木こがくれながら散りや果つらむ

橘

たらちねのみおやの御代をしのぶかな花橘のかげをふみつ

をりにふれたる

暑しともいはれざりけりにえかへる水田にたてるしつ(暖)を思へば

月

たたかひのには心をやりながらむかひふかしぬ秋(つ)の夜の月
(あたる船)
あたなみをうちしりぞけていくさびと大海原の月やみるらむ

をりにふれたる

しぐれして寒き朝かな軍人(いくさびと)すむ山路は雪やふるらむ

いたでおふ人のみとりも(こ)こころせよにはかに風の寒くなりぬる

天

あさみどり澄みわたりたる大空の廣きをおのが心ともがな

ひさかたのあまつ空にも浮雲のまよはぬ日こそすくなかりけれ

星

夕やけの雲うすらぎてただひとつあらはれそめし星の影かな

暁

ねざめせしこの暁のこころもてしづかにもを思ひ定めむ

地

産みなさぬものなしといふあらがねのつちはこの世の母にぞありける

山

おほぞらにそびえて見ゆるたかねにも登ればのぼる道はありけり

道

遠くとも人のゆくべき道ゆかば危き事はあらじとぞ思ふ

澗

岩がねにせかれざりせば瀧つ瀬の水のひびきも世にはきこえじ

磯波浪

岩が根によせて碎くる荒波のしぶきにくもるいそのまつ原

思古宮

さくらさく春なほ寒しみよし野の吉野の宮の昔おもへば

旅

あとさきに人をともなふ旅ながらくれゆく道はさびしかりけり

歌

世の中にことあるときはみな人もまことの歌をよみいでにけり

思ふことありのまにまにつらぬるがいとまなき世のなぐさめにし

天地もうごかすばかり言の葉のまことの道をきはめてしがな

ときにつけ折にふれつつ思ふことのふればやがて歌とこそなれ（*やがて||そのまま）

劍

あらはさむときはきにけりますらをがとぎし劍つるぎの清き光を

しきしまの大和心をみがかずば劍おぶともかひなからまし

寶

つたへきて國のたからとなりにけり聖のみよのみことのりぶみ

筆

國のためふるひし筆の命毛のあとこそこのこれ萬代までに

軍艦

たか波をけたててはしるいくさぶねいかなる仇かくだかざるべき
なみ遠くてらすともしびかかげつつ仇まもらむわがいくさぶね

眺望

家なしと思ふかたにもとしびの影みえそめて日はくれにけり

述懐

たたかひの道にはたたぬ國民もちちに心をくどころかな

民草のうへやすかれといのる世に思はぬことのおこりけるかな

民草のうへに心をそぐかな雨しづかなる夜はの寢覺に

白雲のよそに求むな世の人のまことの道ぞしきしまの道

四海兄弟

よもの海みなはらからと思ふ世になど波風のたちさわぐらむ

心

しきしまの大和心のををしさはことある時ぞあらはれにける

かざらむと思はざりせばなか／＼にうるはしからむ人のこころは

夢

今も世にあらばと思ふ人をしもこの曉の夢に見しかな

おもふこと多かる頃のならひとて常にはみざる夢をみしかな

思往事

たらちねのみおやの御代につかへにし人も大かたなくなりけり

光陰如矢

思ふことつらぬかむ世はいつならむ射る矢のごとくすぐる月日に

祝

ちはやふる神の御代よりひとすぢの道をふむこそうれしかりけれ

かしの實のひとつ心に萬民よろづたみまもるがうれし蘆原あしはらのくに

橿原かきはらの宮のおきてにもとづきてわが日本ひのもとの國をたまたむ

仁

國のためあたなす仇はくたくともいつくしむべきことな忘れそ

誠

言の葉にあまる誠はおのづから人のおもわにあらはれにけり

をりにふれたる

石だたみかたきとりでも軍人いくさびとみをすててこそうち碎きけれ

おのが身にいたでおへるもしらずしてすすみも行くかわが軍いぐさびと
いかならむ事にあひてもたわまぬはわがしきしまの大和だましひ
思ふことつらぬきはてて國民の心やすめむときぞまたるる
はからずも夜をふかしけりくのため身をいのちすてたりし人をかぞへて
たたかひに身をすつる人多きかな老いたる親を家にのこして
思ふこと貫かむ世をまつほどの月日は長きものにぞありける
かぎりなき世にのこさむと國のためたふれし人の名をぞとどむる
戦のにはにたふれしますらをの魂たまはいくさをなほ守るらむ
すすむべき時をはかりて進まずば危いき道にいりもこそすれ
うつせみの世のためすすむ軍いぐさには神も力をそへざらめやは
世とともに語りつたへよ國のため命をすてし人のいさをを

(明治三十八年—一九〇五—御年五十四歳)

* 一月、旅順開城。三月、奉天会戦。五月、日本海海戦。九月、日露戦争終る

花

木このもとに出づればまづぞ待たれける花みてあそぶ春ならねども

夏草

國のため民のためには夏草のことしげくともつとめざらめや

月

たらちねのみおやの宮にをさなくて見しよこひしき月のかげかな

冬 夢

窓をうつあられ霰のおとにさめにけりいくさの場たはにたつとみし夢

雲

とほければ（風のひびき）あらしのおとはきこえねどたかねの雲の動きそめたる

暁

暁のねざめのところにおもふこと國と民とのうへのみにして

原

山よりもさびしきものはかぎりなき荒野の原をゆく日なりけり

道

踏みわくるひとなかりせば末つひにわかずやならむ（千代）ちよのふる道

波

荒るるかと思ればなぎゆく海原のなみこそ人の世に似たりけれ

草

うとましと思ふ（むぐら）葎はひろごりて植ゑてし草の根はたえにけり

竹

ますらをの心に似たりいささかもまがるふしなき窓のくれ竹

書

よろづよの國ののりともなる書よみをのこしてしがなこの時にして

歌

ひとりつむ言の葉ぐさのなかりせばなに心をなぐさめてまし
むらぎもの心のうちに思ふこといひおほせたる時ぞうれしき

新しきふしはなくとも呉竹のすなほならなむ大和言の葉

戦のいとまある日はものふも言葉の花をつむとこそきけ

鏡

國のためのちをすてしものふの魂や鏡にいまうつるらむ

述懐

末つひにならざらめやは國のため民のためにとわがおもふこと
ゆくすゑはいかになるかと曉のねざめねざめに世をおもふかな

心

すなほなるをさな心をいつとなく忘れはつるが惜しくもあるかな

夢

まどろめば夢にぞみゆるむらぎもの心にかけて思ふひとこと

誠

疾とき遅きたがひはあれどつらぬかぬことなきものはまことなりけり

をりにふれたる

むかしよりためしまれなる戦におほくの人をうしなひにけり(しかな)
おのづから仇のころもなびくまでまことの道をふめや國民

さまざまにも思ひこしふたとせはあまたの年を経しこちする

ひさかたのあめにのぼれるこちして五十鈴の宮にまゐるけふかな

(明治三十九年—一九〇六—御年五十五歳)

野夕立

かがやきし入日のかげは(も)きえはててふじの裾野に夕立(の)ぞふる

薄暮

いづこ(く)をかわけてきつらむかへりみる野みちはすべて薄なりけり

秋夕

國のためうせにし人を思ふかなくれゆく秋の空をながめて

天

ひさかたの空はへだてもなかりけり地(ち)なる國は境あれども

道

ひろくなり狭くなりつつ神代よりたえせぬものは敷島の道

近きよりゆかむとしてはなかなか遠くぞまよふ世の中のみち

里

うつせみの代代木の里はしづかにて都のほかのこちこそすれ

書

石上いそのかみふるごとぶみをひもときて聖ひじりの御代のあとを見るかな

筆

思ふことつらねかねてはつくづくとふでのさきのみうちまもるかな

射弓

梓弓ひきしほりてもはなつ矢のまをつらぬくおとのををしき(ま)

教育

いかならむ時にあふとも人はみな誠の道をふめとをしへよ

心

つくろはむことまだしらぬうなぬごのを(もとの)さな心のうせずもあらなむ

孝

たらちねの親につかへて(まめなるが人のまことの始なりけり)まめなるぞ人のまことのもとのなるべき

凱旋の時

外とつくに國にかばねさらしますすらをの魂も都にけふかへるらし(む)

をりにふれたる

波風はしづまりはててよもの海にてりこそわたれ天つ日のかげ

ますらをも涙をのみて國のためたふれし人の(うへをかたり)ものがたりしつ

むらぎもの心たゆまず進みなばさかしき山も越えざらめやは(*さかしきけはしい)

國のためか(いのちをすてし)ばねざらししますらをのたままつるべき時ちかづきぬ
たひらかに世はなりぬとて敷島の大和心よ撓まざらなむ

(明治四十年—一九〇七—御年五十六歳)

落花

時のまにちりゆくものか櫻花ここの日數人にまたせて(*ここの日數多くの)
人みな*の惜む心はしりながらかぎりある世と花のちるらむ

夕立

俄かにも照る日のひかりかきくらしいらかをたたたく夕立のあめ

薄

はるくくと風のゆくへの見ゆるかなすゝきが原の秋の夜の月

秋風

遠山の雲も動きて秋の野の茅ちはら萱かやはら風わたるなり

月

むかしいま思ひあつめてつくづくとふけゆく月をながめつるかな

秋雲

あかねさす夕日の色に匂へども秋のみそらの雲ぞさびしき

寒松

こがらしの風にすまひてひとつ松いくらの冬をしのぎきぬらむ

道

いとまあらばふみわけて見よちはやふる神代ながらの敷島の道

水

山川のながれはすゑになりぬれどにごらぬ水はにごらざりけり

磯岩

いそぎきはかくれ岩こそ多からめよせくる浪のくだけてはちる

古寺松

月の輪のみささぎまうでする袖に松の古葉もちりかかりつゝ

松

波風をしのぎしのぎて荒磯の松はちとせの根をかためけむ

歌

おもふことうちつけにいふをさなごの言葉はやがて歌にぞありける（*やがて||そのまま）

天地もうごかすといふ言の葉のまことの道はたれかしらむ

こともなくしらべあげたる言の葉の花にぞにほふ國のすがたも

述懐

ことしあらば火にも水にも入らばやとおもふがやがて大和魂

ことのはのまことのみちを月花のもてあそびとおもはざらなむ

（*月の輪のみささぎ||御父君・孝明天皇の御陵）

世の中をおもふたびにもおもふかなわがあやまちのありやいかにと

子

(みなし)
かなし子にかたりきかせよ國のため命すてにし親のいさをを

神祇

目に見えぬ神にむかひてはぢざるは人の心のまことなりけり

(明治四十一年—一九〇八—御年五十七歳)

* 十月、戊申詔書発布

蟲

さ夜ふかく心しづめてきく時ぞむしの鳴くねはあはれなりける
浪のおとのとはざかり行くひきしほに蟲のねたかし濱のまつ原

星

みるままに數そふものは大ぞらにつらなる星のかげにぞありける

歌

まごころをうたひあげたる言の葉はひとたびきけばわすれざりけり

述懐

千ちよろ萬の民の力をあつめなばいかなるわざもならむとぞおもふ

(明治四十二年—一九〇九—御年五十八歳)

花

さく花のかげうごくなりはまどものにはの池水しほやさすらむ

落花

あかずして庭にたかする篝火のうへともいはずちる櫻かな

蟲

ひとりしてしづかにきけば聞くままにしげくなりゆくむしのこゑかな

時雨

大根ほすしづがかきねの夕日かげにはかにきえてしぐれふるなり

日

さしのぼる朝日のごとくさはやかにたまほしきはこころなりけり

柱

樞原のとはつみおやの宮柱たてそめしより國はうごかず（*樞原のとはつみおや||神武天皇）

松

あらし吹く世にも動くな人ごころいはほにねざす松のごとくに

述懐

たたかひのかちにはこりてむらぎものこころゆるぶなわが軍人（いくさびと）

ふむことなど難（かた）からむ早くより神のひらきし敷島の道

ひらくれば開くるまゝにいにしへにかはるおもひもある世なりけり

心

ともすれば思はぬ方にうつるかなこゝろすべきは心なりけり
ことなしとゆるぶ心はなかなかに仇あるよりもあやふかりけり

義

おのが身はかへりみずして人のためつくすやひとのつとめなるらむ
(なりける)

(明治四十三年—一九一〇—御年五十九歳)

* 五月、大逆事件おこる。八月、日韓合併条約調印

詞

ききしるはいつの世ならむ敷島のやまとことばのたかきしらべを

心

ひろき世にまじはりながらともすれば狭くなりゆく人ごころかな

神 祇

わがくには神のすゑなり神まつる昔のてぶりわするなよゆめ

とこしへに國まもります天地の神のまつりをおろそかにすな

寄神祝

天てらす神の御光ありてこそわが日の本はくもらざりけれ

樂

千萬の民ともにもたのしむにますたのしみはあらじとぞおもふ
ちよろづ

をりにふれたる

ひと筋をふみて思へばちはやぶる神代の道もとほからぬかな
さだめたる國のおきてはいにしへの聖ひじりのきみのみ聲なりけり

(明治四十四年—一九二—御年六十歳)

蟲聲

さまざまの蟲のこゑにもしられけり生きとしいけるもののおもひは

蟲聲欲枯

かれがれになりぬる庭の蟲のねはなかなぬ夜よりもさびしかりけり

紅葉

うつろひて散らむとすなるもみぢ葉をうつくしとのみ思ひけるかな

川

岩がねをきりとほしても川水は思ふところに流れゆくらむ

眺望

雨雲の風にきえゆく山のはにあらはれそめぬ松のむらだち

披書知昔

讀むふみの上になみだをおとしけり昔のみよのあとをしのびて

夢

たらちねの親のみまへにありとみし夢のをしくも覺めにけるかな

をりにふれたる

むらぎもの心のかぎりつくしてむわが思ふことなりもならずも
きくにまづ身にぞしみける誠よりいふ言の葉は長からねども
思ふこといふべき時にいひてこそ人のこころもつらぬきにけれ

(明治四十五年—一九二—御年六十一歳)

* 七月、崩御。乃木大将殉死

春晓月

あけがたの霞のうちにつとなく消えゆく月のかげのしづけさ

花

たかどのの窓てふ窓をあけさせて四方よもの櫻のさかりをぞみる
うつろへばうつろふまゝになつかしと思ふは花のいろ香なりけり

落花

乗る駒に小草はませてやすらへば鞍のうへ白く花ちりかかる

惜春

あかずしてくれゆく春はあひおもふ友にわかるるこちこそすれ

雲

ひとむらと思ひし雲のいつのまにあまつみそらをおほひはてけむ

述懐

思はざることのおこりて世の中は心のやすむ時なかりけり

心

いかならむことある時もうつせみの人の心よゆたかならなむ

をりにふれたる

あやまたむこともこそあれ世の中はあまりにものを思ひすぐさば

開くべき道はひらきてかみつ代の國のすがたを忘れず（さうなむ）もがな

おもふこと思ふがままにいひてみむ歌のしらべになりもならずも

敷島のやまと心をうるはしくうたひあぐべきことのはもがな

なすことのなくて終らば世に長きよはひをたもつかひやなからむ

若きよにおもひさだめしまごころは年をふれどもまよはざりけり

大正天皇たいしやうてんのう（第二百二十三代）

御在世 一八七九—一九二六（崩御・四十八歳）
御在位 一九二二—一九二六（三十四歳—四十八歳）

第二百二十三代・大正天皇は、第二百二十二代・明治天皇の第三皇子として明治十二年八月三十一日に御出生になり、御母は権典侍・柳原愛子と申し上げる。御名は嘉仁・御称号は明宮と申し上げ、明治二十二年（一八八九）御年十一歳で皇太子となられ、二十四年間の皇太子時代を経て御年三十四歳で踐祚せられた。

大正天皇の御治世は十五年間であったが、その御晩年は御健康を害せられ、大正十年（一九二一）からは、皇太子（昭和天皇）が攝政として政務をお執りになられたので、統帥と政務とを総攬せられた期間は約十年間であられた。しかしその間の御精励については、侍従・藤波言忠の記録によると

「午前六時に御起床。午前九時半より十時迄の間に御学問所へ出御。而して百般の政務を御覧ありて或は拝謁又は召されて御對話（午後も政務）……午後八時には兩陛下御一緒に晚餐を召す。十一時に御寢所に被為入。」

とあり、大正初期の国事多端の政事・軍事に、専心御精励遊ばされたことをうかがひ知ることができぬ。

この時期における我が国内外の情勢を見ると、まことに変動ただならぬ時期であった。すなはち、大正三年（一九一四）、ヨーロッパにおける英・独兩國の対立を遠因として勃発した第一次世界大戦の開戦に当り、日本は日英同盟の盟約に基いて八月にこれに

参戦、支那大陸の山東省にあるドイツ領青島ツングタウを攻略、わが海軍もまたドイツ領であった南洋群島を占領、さらにその後は地中海にまで艦隊を派遣して連合国の一員として活躍した。かくて六年後、大正八年（一九一九）六月のフランスのベルサイユで調印された平和条約によって、日本は山東省におけるドイツ権益の継承と、赤道以北の南洋群島の委任統治権を獲得することになった。しかし日本がほとんど無傷のまま強大国になりかけてきたことについて、米・英・仏諸国の関心が急に高まり、二年後（一九二一）のワシントン会議においては、わが国のアジア大陸における既得権益の中国への返還や、シベリアからの撤退など、世界列強の威力の前に、やむなく後退を迫られることになった。

このワシントン会議は、日本に対して軍備制限を求める欧米列強の意図のもとに企てられたものであって、日米英仏伊の五ヶ国間の主力艦・航空母艦の保有トン数を、米5英5日3、仏と伊はそれぞれ1.1に制限し、十年間は主力艦の建造を停止する、といふ日本にとって苛酷きはまりない軍備縮小条約の締結となった。その結果わが国は、明治四十三年（一九一〇）以来着々として積みかさねてきた八・八艦隊計画（大型戦艦八隻、大型巡洋艦八隻、それに応じた補助艦を整備する）といふわが海軍の長期建造計画は、遂にここに中絶のやむなきに至り、建造中の諸艦も次々に規模・構造の変更を余儀なくされることになったのである。これらのことは、同時に国内問題としては、わが政府の英米屈従・軟弱外交を糾弾する国民輿論を生むと共に、逆に、少壮軍人の、政治家たちに対するはげしい不信任を生ずる遠因となり、遂に昭和時代に入ってから、軍人による政治支配の時代を到来させる誘因となってゆくのである。

一方、大正デモクラシーといはれる思潮の波は、大正初期から次第に勢力を増し、明治時代のわが国民性であった質実剛健の気象を次第に変質させ、大正十一年（一九三〇）には、秘密結社としての日本共産党がソビエトのコミンテルン日本支部として生まれ、無産労働階級の解放と天皇制廃止とを目標にして、非合法活動を開始するに至った。そしてその翌大正十二年（一九三三）には、関東大震災が起り、その大災害は、全壊十二万戸、全焼四十五万戸、死者十四万人を算するといふ前古未曾有の悲劇を伴ふと共に、その年の暮には、難波大助といふ共産主義者の、摂政宮殿下のお車に対する発砲事件さへ起きるに至った。このやうに見てくると、大正時代の日本は、明治日本の一大飛躍期のをうけて、近代国家が受けねばならなかった波瀾の第一期に際会してゐたとも言へるのである。

大正天皇は、かうした激しい変動期に当面された方であられただけに、御政務を総攬されたのは、十年の短い期間であつたとはいふものの、その間の御心労がいかにかりりものであられたかは、御察し申すも畏れ多いきはみである。御晩年の御病氣とて、このことと無関係とは申し難く、当時、政事と軍事にたづさはった側近の輔弼すけつりが、果して宜しきを得てゐたか否かについても、後世の史家が取り上げるべき問題の一つであらう。

それにしても、大正天皇の御人柄・御資質について、余りにも世に知られてをらぬのは、まことに歎かほしいことである。本書に謹選しまつた御製百十八首（総数四百六

十五首からの體選を拜しても、天皇の大御心の広く深く、かつまた国民の上に馳せたまふ御心のたゞならぬさまをうかがひ奉るのは、決して編者のみのことではなからうと思ふ。

その上、大正天皇には、漢詩の御詠草、実に一千三百六十七首が残されてゐる。元宮内序御用係・元岡山大学教授・木下彪著「大正天皇御製詩（註・漢詩）集謹解」（昭和三年、明德出版社刊、菊判二九八ページ）によれば、その内訳は、五言古詩十四首、七言古詩百二十一首、五言律詩七首、七言律詩九首、五言絶句七十七首、七言絶句一千百二十九首と誌されてゐる。同書によれば

「天皇は御年十七、八の頃から詩を御始めになり、四十頃に至るまで二十二、三年の間に千数百首も御作りになった。元來詩は和歌と較べても分るやうに、詞数も多く法則も厳しく、その工力を要すること大変である。最も短い絶句でもさうである。律詩や古詩は之に数倍し実に容易でない。而も之を御日課の余、御政務の暇に於て遊ばされたのである。天性御嗜好深く、聡明にわたらせられずしては到底不可能のことである。天皇御一生の中、心身ともに御健勝であらせられたのは、明治の末年から大正の初五、六年までで、御遺稿を拜見しても此の時期が一番御詩作が盛んで、技倆も進み詩境も広く、従つて優れた御作が多いのである。況や時は日本の全盛時代に当り、泰平天子の氣象自ら詩に表はれ、拜誦する者をして欽仰讚歎措く能はざらしむるのである。」（同書、二二一ページ）

と記されてゐる。そして木下氏はまた、大正天皇の漢詩について、次のやうにも指摘さ

れる。

「大正天皇の御詩を拝観するに、天皇は決して大作や名吟をものしようと遊ばされたのではなかった。唯耳目に触れ心に思ふ所を何の誇張も修飾もなく率直に詠出し給ひ、其の赤子の心（孟子の所謂「大人は其の赤子の心を失はざる者なり」）を失はずして天子の容を備へさせられて居るのである。明治天皇は『おもふこと思ふがままにいひてみむ歌のしらべになりもならずも』と仰せられたが、大正天皇の詩に於ける御心持も全く此に在るやうである。」（同書、一五ページ）

と。木下教授をして「その御多作で佳作に富ませられること、全く歴代天皇に其の比を見ない」と驚歎せしめた大正天皇の御詩については、本書に引用し得ないのが残念であるが、その詩歌における高きしらべは、きつと御製・御詩に相通ずるに相違なからうと拝察する。

（御陵墓は、東京都八王子市長房町にあり、多摩^{たまの}陵と申し上げる。）

（明治時代）（御詠年月、未詳の部）

をりにふれて

ちる花の雪ふみわけてかへるさは駒のあがきにうちまかせつゝ

沼津御用邸にて庭前の松露を拾ひて

はる雨のはるるを待ちて若松のつゆよりなれる玉拾ひつゝ

その松露を節子（註・後の貞明皇后）に贈るとて

今こゝに君もありなばとも／＼に拾はむものを松の下つゆ

大屋村にて田植をみて

おくれじと田毎に早苗とるさまを今日珍しくきてみつるかな

梅雨

いかばかりふる梅雨か池水もうき藻とともに庭にあふるゝ

夏月

月かげにさばしる鮎のかげみえて夏の夜川ぞすゞしかりける
水の面にうかべる月のかげゆれて吹く風すゞし池の釣どの

夏鶯

今日もまた池のはちすの葉がくれに鶯さきぞおりゐる魚ねらふらし

禁庭菊

秋ごとにくもゐの庭をいろどりて菊もさかりに匂ふ御代かな
色も香も大御心にかなふらむ菊の花さけり九重のには

秋雨

秋風に窓うつ雨のさびしさもわが身にしみて冬近づきぬ

秋田

おのがじしいとま暇なげにもいそしみて山田の稻を今日も刈りつゝ

氷

薄氷むすびにけらし池水にうかぶ木の葉の今朝はうごかぬ

朝水鳥

朝まだき池の汀みきは(鶺鴒)にをしかものはねぎる音の寒くきこゆる

馬

手綱たづなとる手のくるへるはのる人の心の駒のくるふなりけり

旅順閉塞隊

大君にさゝげまつるとをしくもふねとともにや身を沈めけむ

東郷司令長官

ふな軍いくなおもふがまゝに勝ちえつるいさを仰がぬものやなからむ

廣瀬中佐の戦功をめでて

ますらが世にたぐひなき功いさをこそあら波よりも高く立ちけれ

✓ 従軍者の家族を思ひて

御軍みいくさにわが子をやりて夜もすがらねざめがちにやもの思ふらむ

✓ 戦利品をみて

武夫もののふのいのちにかへし品なればうれしくもまた悲しかりけり

(明治三十年—一八九七—御年十九歳)

四方拜

もろくの民安かれの御いのりも年のはじめぞことにかしこき

橋姫（註・弟橋媛のこと、倭建命御東征の折、走水の海で御夫君、倭建命に代って入水された方）

波風にあひし御船をすゝめむと皇子にかはりて身をしづめけり

（明治三十三年—一九〇〇—御年二十二歳）

花時鞍馬多

咲きにほふ花の下道行くほどは馬にもむちをうつな諸人

千歳艦上にて

みるかぎり波もさわがず大ふねに心ものりて進む今日かな

（明治三十四年—一九〇一—御年二十三歳）

雨夜蟲

蟲の聲かすかになりぬ小夜ふかく降る村雨の音にけたれて

吾が子の生れたるを見そなはずとて皇后宮のいでましけるをかしこみて（*吾が子〓今上天皇のこと、四月二十九日

御誕生 * 皇后宮〓昭憲皇太后的こと）

このもとに今日仰がむと思ひきやわがははそはの高きみかげを

（明治三十五年—一九〇二—御年二十四歳）

淳宮（註・秩父宮雍仁親王）の誕辰に夏祝を

うるはしき園の若竹千代かけて民も祝ふぞうれしかりける

（明治三十六年—一九〇三—御年二十五歳）

新年海

舟ごとに印の旗手うちなびきうらにぎはしく年立ちにけり

海邊新年

海人が家もかたばかりなるかど松に年の始をいはひかはせり

(明治四十年—一九〇七—御年二十九歳)

伯耆国西伯郡御来屋にて後醍醐天皇の御上陸地にある御腰掛岩を見て

大御こしかゝりし岩のものは昔の事も問はましものを

(明治四十五年、大正元年—一九二一—御年三十四歳)

朝顔

朝がほの花を見むとてあけぼののなほほのぐらき庭めぐりする

草花満野

のる汽車の窓より見れば秋草の花さかりなり毛野の國はら

(大正三年—一九一四—御年三十六歳)

* 昭憲皇太后崩御。第一次世界大戦おこる

氷始解

雨ふりて池の水は解けにけり浮く水鳥もうれしかるらむ

始聞鶯

鶯のはつ聲きゝつあたゝけき春のあしたの庭めぐりして

野梅

今日もまた梅の林をたづねけり沼津の野邊のそよろありきに
駒なべてのべの細道行くほどに梅の林にいるぞうれしき

蓬よもぎ

庭もの面にもえたる蓬よもぎつみためてさきのみかどにそなへまつらむ
吹上よきあげの庭めぐりしておみたちと蓬よもぎつみけり籠こにあまるまで

蕨わらび

吹上よきあげの庭をたどりて初蕨わらびたづねながらも折るぞ樂しき

落花

明日もまたみむと思ふをこの夕をしくも花の風にみだるゝ

早苗

あまの子も早苗とるらむ湊田みなとだのあし原がくれうたふ聲する

をりにふれて

日ざかりのあつさいとはいくさびと軍人こまならずなりあを山のはら

秋日憶遠征

軍人いくさびとつゝがなかれと思ふかな秋の夜寒になるにつけても

秋深くなり行くまゝにつはものゝ敵うつ野邊を思ひやるかな

馬上雪

降りつもる雪をけたてゝつはものも駒もいさめり青山のはら

海

浪風は立ちさわげども四方よもの海つひにしづまる時もきぬべし

曉漁火

あま人の世渡わさる業を思ふかな曉近きいさり火をみて

雀

群雀むらさめのきは近くもきてぞ鳴く餌をやこふらむ友や呼ぶらむ

兎

かりたつる野邊に兎のあらはれて走せ行く影は目にもとまらず

義足

切りすてし足もつくりてつはものゝなほ世に立つをみるぞうれしき

飛行機

軍人いくさびとちからつくしてとりふねの大空かける時となりనికి

学校

つぎ／＼にさかしき人の出でむ世も教のには見えわたるかな（*さかしき／＼かしこい）

かげ高き松をしをりにおのがじし分けこそ（*おのがじし／＼おのおの）

練兵場

朝風にはづゝひよきてものゝふのときの聲あぐる青山の原（*はづゝ／＼大砲・小銃などの音）

をりにふれて

おしなべて人の心のまことあらば世渡る道はやすからましを

蓬

麻畑に生ふるよもぎの直きかな人の心のはづかしきまで

大阪につきける夜、提燈行列を見て

われを待つ民の心はともし火の數かぎりなき光にもみゆ

高槻停車場をいで、演習地にむかふ

いざ行かむかなちの車のりすて、手馴れの駒にむちをあげつ、
（*かなちの車＝汽車・電車）

憶遠征

ぬば玉の夢のうちにもつはものゝ出で、戦ふさまぞみえける

膠州湾外にて軍艦・高千穂、敵の水雷のために沈没して艦長以下

戦死し、十二名あまりいきのこりけるよしをきよて

沈みにし艦はともあれうたかたと消えし武夫のをしくもあるかな

負傷兵を見て

國の仇うち拂はむと軍人いたでおひても進み行きけむ

戦死者遺族

國のためたふれし人の家人はいかにこの世をすごすなるらむ

おもひつゞくるまゝを

わがいくさ占めつる島をおごそかに護りて民を撫でよとぞ思ふ

北海道夕張なる若鍋炭山の爆発しける時

うもれたる國のたからをほる人のあまたうせぬときくぞかなしき

久留米病院に侍従武官をつかはして負傷したる軍人を慰問せしめけるとき

とくいえて皆もとの身にかへらなむいたで負ひたる武士のとも（*とくいえて||早く快復して）

（大正四年—一九一五—御年三十七歳）

梅雨

餘りにもふる梅雨のはれずして思ひやらるゝ民のなりはひ

あつさ堪へがたき日に

民草を思ひこそやれまつりごと出てきくまも暑きこのごろ

國民の上やすかれと思ふまはあつさもしばしわすられにけり

海水浴

みるからにいさましきかな荒浪にうきしづみして泳ぐわらはべ

こどもらの手を取りながら親もまたしほあみすなり浦の遠あさ

あるときに

山水の清きながれを朝夕にきゝてはすますわが心かな

雷

鳴神のおと近づきぬ山のはに一村雲の立つとみしまに

麥

この年はいかにと思ひし麥のほのみのりゆたかにみゆる山はた

昨日までほづゝを取りしつはものもとがまふるひて畑の麥かる（*とがままよりよきれる鎌）

うなゐらに昔がたりを聞かせつゝ麥粉ひくなりさとの老人（*うなゐら子とも）

野徑薄のみのすき

吹く風に薄みだれてさきに行く人のすがたのみえかくれる

行路蟲

村雨むらさめのすぎし野道をわけくればくれぬさきより蟲ぞなくなる

掛衣かきえ

里人の上を思ひてねぶられぬ枕にひびくさよきぬたかな

秋鳥

色づける庭の柿の實つ**い**ばむと今日もひぐらし小鳥よりくる

嚴寒

冬ふかみ庭の池水ひるもなほこほれるまゝにいく日經にけむ

山路苔

ふむ人もなきおく山のそば路は木のね岩がね苔のむしたる

樵路雨

柴人のかへる山路雲とちて夕ゆふべさびしくむら雨さめの降る

海

あげ潮に風さへそひて相模がたよせくる波のあらくもあるかな

和布わかふ

白波のあらひしわかめ今日もまたわが夕みけにもて参るらむ（*みけ||御饌、天皇の御食事）
浪あらいその岩間にあまの子が和布刈るらし船よするみゆ

鴛

いづくよりわたりきにけむものすごきあら磯崎に立てる大わし

筆

なか／＼に新しきより手馴れたるふでこそもじは書きよかりけれ

心静延壽

しづかなる山の姿を心にてあらばよはひの延びざらめやは

をりにふれて

年どしにことはかりすと集ふ人ともに力をつくせとぞ思ふ

（大正五年—一九一六—御年三十八歳）

簾外螢

夕立のなごりかわかぬ高殿のをすに螢（簾）のひとつすがれる

夕立

庭木みなぬらしもはてず晴れにけり待ちにまちつる夕立のあめ

樹間冬月

霜むすぶか^(賢)し^(歴)こどころの松の上にこほりてのぼる月のさやけさ

嚴寒

たへがたく寒きけさかな筆をもつおよびの先も氷るばかりに（*およびゆび）

読書

いとまえてひとりひもとく書の上に昔のことを知るがたのしさ

寄國祝

年どしにわが日の本のさか行くもいそしむ民のあればなりけり

日の本の國のさかえをはかるにもまなびの業ぞもとめなるべき

（大正六年—一九一七—御年三十九歳）

* 帝政ロシアに共産革命おこる

苗代

苗代の水ゆたかにもみゆるかな引くしめ繩のひたるばかりに

鶉川

かのあたり鮎やよるらむさし下す舟のかより火しばしうごかず

扇

手にならす扇の風もあつき日は門守^{かども}る人のつらさをぞ思ふ

對月

おほ水にひたりし藁屋^{わらや}しのびつゝ語りふかせり月にむかひて

野徑

學舎まなびやは遠くやあるらむ朝まだき野道をいそぐうなる子のむれ

天盃

今日たまふおほみ盃さかづきに添へる心も臣は酌むらむ

綱

山川をさかのぼり行く船みれば綱つなひとすぢ一筋ぞいのちなりける

李王の國へかへるわかれに（註・李王＝韓國の王族）

十とせへてふたゝび會ひし君にまた別るゝ今日はかなしかりけり

（大正七年—一九一八—御年四十歳）

* シベリアに出兵。第一次世界大戦終る

梅雨晴

梅雨さみだれもかぎりなるらしこの夕雲ゆふぐもの絶間にほしのかげみゆ

月前陳思

さやかなる月にむかへばなか／＼に心ぞくもる昔しのびて

天の下くまなくてらす秋の夜の月を心のかぐみともがな

家

外國とつとのさまをうつせる家もあれど白木づくりぞゆかしかりける

田家鶏

庭つどり門田かどだのくろにひなつれて餌をはむ様のむつまじげなる（*くろ＝畔、田畑のあぜ）

海邊松

汐風しほのからきにたへて枝ぶりのみなたくまじき磯の松原

衣

たらちねのみおやの衣さらしつゝうら悲しさのまさる頃かな

（大正八年—一九一九—御年四十一歳）

*ベルサイユ條約調印

朝晴雪

ゆたかにも雪ぞつもれる秋津しまめぐりの海は朝なぎにして

夜雨

降る雨の音さびしくも聞ゆなり世のこと思ふ夜はのねざめに

（大正九年—一九二〇—御年四十二歳）

落葉

園守がおち葉かきやる音すなりねざめの床も寒きあしたに

冬湖

富士の峯の雪よりおろす木枯こがらしに夕浪高しあし（蘆）の水海

夕雨

かきくらし雨降り出でぬ人心くだち行く世をなげくゆふべに

猫

國のまもりゆめおこたるな子猫すら爪とぐ葉は忘れざりけり

(大正十年—一九二一—御年四十三歳)

* 皇太子殿下歐洲を御巡遊。ワシントン會議開く。皇太子殿下、攝政に任ぜられ給ふ

社頭曉

神まつるわが白妙しろたへの袖そでの上にかつうすれ行くみあかしのかけ

昭和天皇（第百二十四代）

御在世 一九〇一—一九八九（崩御・八十九歳）
御在位 一九二六—一九八九（二十六歳—八十九歳）

第百二十四代・昭和天皇は、第百二十三代・大正天皇の第一皇子として明治三十四年四月二十九日、東京の青山御所で出生せられ、御母君（後の貞明皇后）はこの時御年十七歳であられた。昭和天皇は御名は迪宮、御称号は裕仁と申し上げ、大正五年（一九二六）御年十六歳で皇太子となられ、大正十年（一九二一）十一月二十五日、御年二十一歳のとき、御父君・大正天皇の御病氣のため、攝政に御就任せられ、萬機をみそなはせられることになった。

攝政御就任直前には、原敬首相が東京駅頭において凶漢に刺され、高橋是清内閣が成立したばかりのときであり、攝政御就任のあと二年足らずにして、前章に記した関東大震災の発生によって、加藤友三郎内閣の総辞職、そのため、山本權兵衛内閣の親任式を、赤坂離宮の芝生の上で初めて行はせられ、また、その数ヶ月後には、共産主義者、難波大助の狙撃をお車に受けられる、といふまことに御多難な政務御総攬のスタートであられた。

しかし攝政御就任に先立ち、大正十年三月三日から九月三日までの正味六ヶ月の間、皇太子として御外遊をなさったが、このことは、昭和天皇の御生涯を通じて、さぞかし得難い御体験となられたに相違なかった。すなはち、わが海軍の巡洋艦「香取」に御召しになられて海路遠く印度洋、スエズ運河、地中海、ジブラルタル海峡を経てポーツマ

ス港に御入港になられるまで六十日間を海上で御生活なされ、またイギリス・フランス・オランダ・ベルギー・イタリアなどの諸国においては、各国の元首や国民・青年との御接触を深められるなど、わが国御歴代の皇室にかつてない御体験を積まれたのである。

踐祚せられてのちの日本、すなはち昭和時代の日本は、まことに多難な時代を迎へることになり、先づ対支関係において複雑な事態が発生するに至った。すなはち、さき大正時代に結ばれた大正十年（一九二二）のワシントン條約以降、欧米列強の外交攻勢に一步一步屈服の姿を示してきた日本を見て、支那各地には、『日本与し易し』との印象が、急速にひろがっていったのである。かくて支那各地における在留日本人に対する侮日、抗日の行動となり、さらに昭和五年（一九三〇）に英米兩國その他と日本との間で持たれたロンドン海軍軍縮會議において、わが国外交の対英米屈從が一層顯著になるに至って、支那における排日反日は一段とはげしさを増してゆくことになった。すなはち、ロンドン會議においては、さきのワシントン會議（一九二二）における主力艦の制限につづいて補助艦艇についてまで、日本はきびしい制限を承諾させられるに至ったからである。一方国内においては、わが海軍軍令部が、政府がロンドン會議において安易な妥協をなしたことをもって、『政府によって統帥権が干犯された』として、政事・軍事を峻別するといふわが国政治における大原則が犯されたことを指摘し、条約批准についての疑義を生むに至った。

間もなく昭和六年（一九三二）九月に、『滿洲事変』が勃発、昭和七年（一九三三）一月に、『上海事変』が発生、いづれも現地において日支兩國軍隊の衝突となり、それがやがて

昭和十二年（一九三七）七月以降の『支那事变』に発展し、さらに昭和十六年（一九四一）十二月の『大東亜戦争』に続き、つひに昭和二十年（一九四五）八月十五日のわが国の完全敗北といふ、有史以来未だかつてなかった一大悲劇に到達するまで、祖国日本は徐々に運命の悲路をつきすすんでしまったのである。

この間において昭和天皇が、いかなる御心境をもつて政事と軍事との御統率に当られたかは、後世史家の明らかにする所であらうが、昭和天皇は、この間、十年近くを通じて、軍部からの奏上内容がしばしば戦闘開始当初の企画を無視して、拡大の方向にのみ猪突してゆくことに、いくたびとなく痛切な御下問を發せられたことが伝へられてゐる。『大東亜戦争』の宣戦布告に当られても、御祖父君・明治天皇の御製「四海兄弟——よもの海みなはらからと思ふ世になど波風のたちさわぐらむ」をお示しになつて、戦争目的は、祖国の独立を完遂するといふ最低限度にとどめるべきを御確認になり、かつまた、戦争なるものは短期終結を目指すべきもの、との固い御信念を吐露遊ばされたことなどのことがあつた。当時の政事・軍事の輔弼者たちが、よくこの大御心に信順しまつる忠誠心に徹してゐたならば、と追想され、今に至っては及ばない千載の悔いを痛切に思はしめられるところである。

それにしても、終戦に先立つ最後の「御前会議」において、もはや軍部も政府も、事態收拾について的一致点を全く見出せなくなつた段階に至つて、遂に時の首相・鈴木貫太郎が『天皇の御裁断』を仰ぎ奉つた、といふ一事、ならびにそれに対して天皇が『陸海軍のしてきたことには、予定と実際との間に大變な相違があつた。これ以上陸海軍の

言ふ所に従ふわけにはゆかない。わが多数の軍隊や国民の上を思ひ、また戦死者の遺族の上に思ひをいたせば、実に断腸の思ひがする。わが一身および皇室のことは、どうなつてもよいから、ここでボツダム宣言（日本に対し、ほゞ無条件降伏を要求してきたもの）を受諾するの旨の「御聖断」が下されたのであった。この時点における昭和天皇の御心境は、本書に謹選申し上げた昭和二十年の「終戦後の御製」三首のしらべの中に、胸打つひびきとなつて今もなほ生々しくわれわれ国民の胸に迫つてくるところである。今日の日本の弛緩し切つた泰平ムードを思ふにつけ、今日への道を御身をもって切り拓かれた天皇の当時の御心をこそ、全国民は、永世忘れることなく心に残すべきではなからうか。

昭和天皇が生物学の御研究において、きはめて秀でた御方であらせられたことは、国民のよく知る所であり、その面において数々の御発見をなされ、その御著書も数冊公刊せられてゐる。（御書名は御出版の年ごとに後記。）しかしその反面、「歌人」としての昭和天皇は、御歴代の天皇がたに拜し得ぬ独自の御作風を示しておいでになると共に、「しきしまのみち」の正流を踏み分けられつつ、大御心を深く御自省遊はされてをられた点においても、まさしく皇統連綿の天皇のみ位に在しますにふさはしき御方と拜せられた。さて、ここに謹選申し上げた御製は、既に発表されたものからの謹選であるが、既発表の御製そのものが、御詠草のごく一部分にとどまつてをるであらうことは、もとより想像に難くない。しかしそのどの御製を拜しても、昭和天皇の御人生観は、きはめて現

実的・具体的に拝察されるのであって、やはり天皇が『しきしまのみち』の道統について、実に真剣な御努力を御積みになつてをられた方であり、『まごころ』をもって沢山な御製をお詠み遊ばされてをられたことが拝察される。それにしても、御製を拝して天皇の御心を直接に、具体的に、しみじみと味はせていただくことのできる日本の国のありがたさ、『やまとことば』の偉大な価値が、改めて思ひ返される次第である。

なほ昭和天皇は、去る昭和四十六年九月二十八日から十八日間にわたり、皇后様と御同道にてデンマーク・ベルギー・フランス・イギリス・オランダ・スイス・西ドイツを御訪問せられ、また、のち北米をも御訪問された。本項の最後に当って、新天皇・皇后・皇太后三陛下におかせられては、いく久しく御健康でありますことを御祈り申し上げて、御歴代天皇についての不徳・淺学の解説の筆を擱かせていただきたいと思ふ。

(御陵墓は、東京都八王子市長房町の武蔵野陵むさしののみやまと申し上げる。)

(大正十年—一九二—御年二十一歳)

* 攝政の任につきたまふ

社頭暁

とりがねに夜はほのぼのとあけそめて代々木の宮のもりぞみえゆく

(大正十一年—一九三—御年二十二歳)

旭光照波

世の中もかくあらまほしおだやかに朝日にほへるおほうみのらは

(大正十二年—一九三—御年二十三歳)

* 関東大震災起る。国民精神作興に関する詔書發布

曉山雲

あかつきにこまをとどめて見渡せば讃岐さぬきのふじに雲ぞかかれる

新年言志

あらたまの年を迎へていやますは民をあはれむ心なりけり

(大正十四年—一九二五—御年二十五歳)

山色連天

たて山の空に聳ゆるををしさにならへとぞ思ふみよのすがたも

(大正十五年、昭和元年—一九二六—御年二十六歳)

* 十二月、大正天皇崩御、昭和天皇踐祚

河水清

廣き野をながれゆけども最上川海に入るまでにごらざりけり

(昭和三年—一九二八—御年二十八歳)

* 前年三月から金融恐慌おこり、五月に鎮静。滿州で張作霖爆死

山色新

山やまの色はあらたにみゆれども我まつりごといかにかあるらむ

(昭和四年—一九二九—御年二十九歳)

田家朝

都いでてとほく來ぬれば吹きわたる朝風きよし小田のなか道

(昭和五年—一九三〇—御年三十歳)

海邊巖

いそ崎にたゆまずよするあら波を凌ぐいはほの力をぞおもふ

(昭和六年—一九三一—御年三十一歳)

* 九月、滿洲事変おこる

社頭雪

ふる雪にこころきよめて安らけき世をこそいのれ神のひろまへ

(昭和七年—一九三二—御年三十二歳)

* 事変上海に拡大。五・一五事件おこる。滿洲國建國

曉鷄聲

ゆめさめて我世をおもふあかつきに長なきどりの聲ぞきこゆる

(昭和八年—一九三三—御年三十三歳)

* 國際連盟を脱退

朝海

天地の神にぞいのる朝なきの海のごとくに波たたぬ世を

(昭和十一年—一九三六—御年三十六歳)

* 二・二六事件おこる。日独防共協定調印

海上雲遠

紀の國のしほのみさきにたちよりて沖にたなびく雲をみるかな

(昭和十二年—一九三七—御年三十七歲)

* 七月、支那事変おこる。十二月、南京を占領

田家雪

みゆきふる畑のむぎふにおりたちていそしむ民をおもひこそやれ

(昭和十三年—一九三八—御年三十八歲)

神苑朝

静かなる神のみそのの朝ぼらけ世のありさまもかかれとぞおもふ

(昭和十五年—一九四〇—御年四十歲)

* 日独伊三國同盟締結。大政翼賛會發足

迎年祈世

西ひがしむつみかはして榮ゆかむ世をこそいのれとしのはじめに

(昭和十七年—一九四二—御年四十二歲)

* 前年十二月、大東亞戰爭開始

連峯雲

峯つづきおほふむら雲ふく風のはやくはらへとただいのるなり

(昭和十九年—一九四四—御年四十四歲)

* サイパン島陥落。本土空襲開始

海上日出

つはものは舟にとりでにをろがまむ大海のはらに日はのぼるなり

(昭和二十年―一九四五―御年四十五歳)

* 沖繩陥落。ポツダム宣言受諾。連合軍の占領下に入る

社頭寒梅

風さむきしもよの月に世を祈るひろまへ清くうめかをるなり

終戦後の御製

爆撃にたふれゆく民のうへをおもひいくさとめけり身はいかならむとも
身はいかになるともいくさとどめけりただたふれゆく民をおもひて
國がらをただ守らんといばら道すすみゆくともいくさとめけり

折にふれて

海の外の陸とくがに小島にのこる民の上安かれとただいのるなり

(昭和二十一年―一九四六―御年四十六歳)

* 新日本建設に関する詔書發布。極東軍事裁判開廷

松上雪

ふりつもるみ雪にたへているかへぬ松ぞををしき人もかくあれ

戦災地視察(註・二月十九日神奈川縣を御巡幸、これより御巡幸全國に及ぶ)

戦のわざはひうけし國民をおもふ心にいでたちて來ぬ

わざはひをわすれてわれを出むかふる民の心をうれしとぞ思ふ
國をおこすものとみえてなりはひにいそしむ民の姿たのもし

皇居内の勤勞奉仕者

をちこちの民のまる來てうれしくぞ宮居のうちに今日もまたあふ
戦にやぶれし後の今もなほ民のよりきてここに草とる

(昭和二十二年—一九四七—御年四十七歳)

* GHQ 命令により 2・1ゼネスト中止。日本國憲法施行

あけぼの

たのもしくよはあけそめぬ水戸の町うつちのおともたかくきこえて

帝室林野局移管

うつくしく森をたちてわざはひの民におよぶをさけよとぞおもふ

こりて世にいだしはすとも美しくたもて森をば村のをさたち (*こりて=木を伐つて)

東北地方視察

水のまがにくるしみぬきしみちのくの山田もる人をあはれと思ふ (*まが=災難)

あつさつよき磐城の里の炭山にはたらく人をををしとぞ見し

奈良にて

大き寺ちまたに立ちていにしへの奈良の都のにほひふかしも

和倉にて

月かげはひろくさやけし雲はれし秋の今宵のうなばらの上に

長野縣大日向村

浅間おろしつよき麓にかへりきていそしむ田人たふとくもあるか

折にふれて

老人おじいどをわかき田子らのたすけあひていそしむすがたふとしとみし

冬枯のさびしき庭の松ひと木色かへぬをぞかがみとはせむ

潮風のあらきにたふる濱松のををしきさまにならへ人人

(昭和二十三年—一九四八—御年四十八歳)

* 極東軍事裁判判決、A級戦犯死刑

折にふれて

悲しくもたたかひのためきられつる文の林をしげらしめばや

秋ふけてさびしき庭に美しくいろとりどりのあきざくらさく

霜ふりて月の光も寒き夜はいぶせき家にすむ人をおもふ

風さむき霜夜の月を見てぞ思ふかへらぬ人のいかにあるかと

緑なる牧場にあそぶ牛のむれおほどかなるがたのもしくして

たゆまずもすすむがををし路をゆく牛のあゆみのおそくはあれども

(昭和二十四年—一九四九—御年四十九歳)〔「相模灣産後鰓こうさい類圖譜」を生物學御研究所名で御出版〕

* 下山事件、三鷹事件、松川事件等統發。中華人民共和國成立。六月、ソ連よりの引揚再開、第一船舞鶴に入る

九州地方視察、雲仙岳にて

高原にみやまきりしま美しくむらがりさきて小鳥とぶなり

同、開拓地

かくのごと荒野が原に鋤をとる引揚人をわれはわすれじ

同、福岡縣和白村青松園にて

よるべなき幼子どももうれしげに遊ぶ聲きこゆ松の木のまに

○

海わたのそこのつらきにたへて炭ほるといそしむ人ぞたふとかりける

葉山にて

潮のひく岩間藻の中石の下海牛をとる夏の日ざかり

引揚者に對して

外國につらさしのびて歸りこし人を迎へむまごころをもて

國民とともに心をいたためつつ歸りこぬ人をただ待ちに待つ

(昭和二十五年—一九五〇—御年五十歳)

* 朝鮮戰爭勃發。警察豫備隊設置

香川縣大島療養所

あな悲し病忘れて旗をふる人の心のいかにと思へば

船ばたに立ちて島をば見つつ思ふ病やしなふ人のいかにと

興居島ビゴシマ(註・松山市)にて

静かなる潮の干潟の砂ほりてもとめえしかなおほみどりゆむし

室戸にて

室戸なる一夜の宿のたましだをうつくしと見つ岩間岩間に

名古屋にて

日の丸をかかけて歌ふ若人のこゑたのもしくひびきわたれる

皇室博物館移管

いにしへのすがたをかたるしなあまたあつめてふみのくにたてまほし

(昭和二十六年—一九五二—御年五十一歳)

* サンフランシスコ講和條約。日米安全保障條約調印。「天皇歌集・みやまきりしま」が毎日新聞社から出版された

朝空

淡路なるうみべの宿ゆ朝雲のたなびく空をとほく見さけつ

貞明皇后をしのぶ(註・五月十七日、崩御)

いでましし浅間の山のふもとより母のたまひしこの草木はも

池のべのかた白草を見ることがに母の心の思ひいでらる

○

谷かげにのこるもみぢ葉うつくしも虹鱒にじますをどる醒井さめがらのさと

(昭和二十七年—一九五二—御年五十二歳)

* 四月講和條約発効、連合軍の占領終る

風さゆるみ冬は過ぎてまちにまぢし八重櫻咲く春となりけり

國の春と今こそはなれ霜こほる冬にたへこし民のちからに
花みづきむらさきはしどい咲きにほふわが庭見ても世を思ふなり
冬すぎて菊櫻さく春になれど母の姿をえ見ぬかなしき

わが庭にあそぶ鳩見て思ふかなたひらぎの世のかくあれかしと

東北視察の折に

秋ふかき山のふもとをながれゆく阿武隈川のしづかなるかな
うちあぐる花火うつくし磐城なる阿武隈川の水にはえつつ
ありし日の母の旅路をしのぶかなゆふべさびしき上の山にて

立太子禮（註・十一月十日）

このよき日みこをばいはふ諸人のあつき心ぞうれしかりける

しをれふすあしの葉がくれいづこよりわたりきにけむこがものあそぶ

木がらしのすさぶみ空はすみにすみてふけゆく夜半の月ぞ寒けき

古の文まなびつつ新しきのりをしりてぞ國はやすからむ

（昭和二十八年—一九五三—御年五十三歳）〔「相模灣産海鞘類圖譜」を生物學御研究所名にて御出版〕

すこやかに空の船より日のみこのおり立つ姿テレビにて見し

水害

嵐ふきて實らぬ稻穂あはれにて秋の田見ればうれひ深しも

高知にて

保育所のわらははべあまた楽しげに遊ぶを見れば心うれしも

新穀献上者に

新米^{にひよね}を神にささぐる今日の日^ひに深くもおもふ田子のいたづき

一年の誠^{まこと}こめたるたなつものささぐる田子^{たなつ}にあふぞうれしき（*たなつもの^米、五穀のこと）

（昭和二十九年—一九五四—御年五十四歳）

* 自衛隊發足

山崎あたりの車中にて

山崎に病やしなふ人見ればにはへる花もうつくしからず

舞子にて

見たせば海をへだてて淡路島なつかしきまでのどかにかすむ

〔昭和九年夏の天候（註・九月、室戸台風関西を襲ふ）とくらべられて〕

夏草のおひたち見つつ憂はしも二十年^{はたとせ}前のひよりにも似て

岩手縣にて

さきの旅路今また過ぎてくらぶればゆとりのあるが見えてうれしき

阿寒國立公園にて

えぞ松の高き梢にまつはれる薄桃色のみやままたたび

飛行機上より

松島も地圖さながらに見えにけり靜かに移る旅の空より

洞爺丸の慘事（註・九月二十六日、青函連絡船洞爺丸座礁顛覆、死者、行方不明一、二五五名に及ぶ）
その知らせ悲しく聞きてわざはひをふせぐその道疾くところ祈れ

伊豆西海岸堂ヶ島にて

たらちねの母の好みしつはぶきはこの海の邊に花咲き匂ふ

（昭和三十年—一九五五—御年五十五歳）〔「相模灣産後鰓類圖譜補遺」を生物學御研究所名にて御出版〕

相撲

ひさしくも見ざりし相撲すまひひとびとと手をたたきつつ見るがたのしさ

八月十五日、那須にて

夢さめて旅寢の床に十とせてふ昔思へば胸せまりくる

をりにふれて

なりはひに春はきにけりさきにはふ花になりゆく世こそ待たるれ

（昭和三十一年—一九五六—御年五十六歳）

* 日ソ國交回復。日本、國連に加盟

防府市の毛利邸にて

水清きいささ小川の流れゆくたたら庭の春のしづけさ

旅の宿にて

つたもみぢ岩にかかりて靜かにも旅の館やかたの秋の日は暮る

神嘗祭に皇居の稻穂を伊勢神宮に奉りて

八束穂やつかほを内外うちもとの宮にささげもてはるかに祈る朝すがすがし

我が庭の初穂ささげて來む年の田の實いのりつ五十鈴の宮に

(昭和三十三年—一九五七—御年五十七歳)

ともしび

港まつり光りかがやく夜の舟にこたへてわれもともしびをふる

岐阜の宿にて

夢さめし旅寢の床に鳥の聲きこえて樂し宿の朝あけ

甲府、春風寮にて

よるべなき老嫗おきなの身にもあたたかき春風かよふ家のあれかし

甲府の宿にて

ながむれば雨もいとほずまだきより湯村の小田に人のいそしむ

佐久間ダム(註・昭和三十一年八月完成、犠牲者は死者九十四人、重傷者は二千人を越えた)

たふれたる人のいしぶみ見てぞ思ふたくひまれなるそのいたつきを

(昭和三十三年—一九五八—御年五十八歳)

植樹行事に際して

美しく森を守らばこの國のまがもさけえむ代々をかさねて（*まがは災難）

下関の宿にて

見てあれば色とりどりの美しき花火ぞ開く海の夜空に

赤間神宮ならびに安徳天皇陵に詣でて

水底みなぞこに沈み給ひし遠つ祖おやを悲しとぞ思ふ書よみ見るたびに

防府の宿にて

櫻花今を盛りと咲きみちて霞にまがふ宿の見わたし

リデルライト記念養老院（註・熊本市）を訪ひて

母宮の深きめぐみを思ひつつ老人おじびとたちの幸さいちいのるかな

阿蘇の宿にて

裏山に登りて見ればなつかしき雲仙岳はほのかすめり

富山国民体育大会開会式

時々の雨ふる中を若人の足なみをそろへ進むををしさ

黒部の工場にて

たくみらもいとなむ人もたすけあひてさかゆく姿たのもしと見る

水見の宿にて

秋深き夜の海原にいさり火の光のあまたつらなれる見ゆ

輪島市の鳴ヶ浦にて

かづきしてあはびとりけり沖つべの舳倉島より來たるあまらは

(昭和三十四年—一九五九—御年五十九歳)

窓

春なれや楽しく遊ぶ雉子きざすらのすがたを見つつ窓のへに立つ

靖國神社の九十年祭

ここのそぢへたる宮居の神々の國にささげしいさををぞ思ふ

皇太子の結婚(註・四月十日、美智子妃殿下と御結婚)

あなうれし神のみ前に日の御子のいもせの契り結ぶこの朝

日の御子の契り祝ひて人々のよろこぶさまをテレビにて見る

埼玉塗上

雨はれし武藏の野邊ははてもなく麥生青々うちつづきたり

那須にて

谷川を下りてゆけば檜なの枝にかかりて葛の花咲ける見ゆ

み空には雲ぞのこれる吹き荒れし野分の後の那須の高原

愛知・三重・岐阜三県の風水害(註・九月二十六日、伊勢湾台風、死者五千名を越ゆ)

日の御子をさしつかはして水のまがになやむ人らをなくさめむとす

たちなほり早くとぞ思ふ水のまがを三つの縣あぶたつかさの司に聞きて

千鳥ヶ淵戦歿者墓苑(註・三月二十八日完成)

國のため命ささげし人々のことを思へば胸せまりくる

(昭和三十五年—一九六〇—御年六十歳)

* 日米新安保條約成立、安保反對闘争激化

光

さしのぼる朝日の光へだてなく世を照らさむぞ我がねがひなる

始めての皇孫(註・二月二十日、浩宮御誕生)

山百合の花咲く庭にいとし子を車にのせてその母はゆく

九州への空の旅

白雲のたなびきわたる大空に雪をいたたく富士の嶺みゆ

地圖を見るごとき海山しづしづと翼の下をさかりゆきつつ

(昭和三十六年—一九六一—御年六十一歳)

九州への旅

霞立つ春の空にはめづらしと雪の残れる富士の山見つ

鏡山の眺望

はるかなる壹岐は霞みて見えねども落美しこの松浦瀉

雲仙・薊谷にて

あいらしきはるとらのをは咲きにほふ春ふかみたる山峽ゆけば

藤色のやまるりさうは山峽の阻路に群れていま咲きさかる

西海橋

潮の瀬の速き伊の浦あたらしくかかれる橋をけふぞ渡れる

苦小牧營林署第十四號班にて

斧入らぬ林をゆきて驚きぬしらねあふひは群れ咲きにはふ

登別の宿にて

わかみどり朝日にはゆる山峽やまがきの出で湯の宿にまた來つるかも

翁島の宿にて

なつかしき猪苗代湖を眺めつつ若き日思ふ秋のまひるに

赤井谷地にて

雨はれし水苔原に枯れ残るほろむいいちご見たるよろこび

十和田湖の宿にて

十和田の湖波なみ風立たず夕まけて山はあかねに色かはりゆく

小河内ダム

水み濁れせる小河内のダム水底にひとむら舉げて沈みしものを

英国のアレキサンドラ内親王を迎へて

イギリスの姫を迎へて若き日の樂しき旅を語りけるかな

(昭和三十七年—一九六二御年六十二歳) (「那須の植物」を生物學御研究所名にて御出版)

福井縣の復興

地震にゆられ火に焼かれても越の民よく堪へてここにたちなほりたり

那智の滝

そのかみに熊野灘よりあふぎみし那智の大瀧今日近く見つ

串本にて

若葉さす潮の岬に来てみれば岩にうちよする波しづかなり

華厳滝

岩が根をつたひて落つる瀧の水白きしぶきとなりてとび散る

日本遺族會創立十五周年に際し

年あまたへにけるけふものこされしうからおもへばむねせまりくる（*うから親族）

日本傷痍軍人会創立十周年記念全国大会に際し

國守ると身をきすつけしひとびとの上をし思ふ朝に夕に

（昭和三十八年—一九六三—御年六十三歳）「那須の植物追補」を生物學御研究所名にて御出版

草原

那須の山そびえてみゆる草原にいろとりどりの野の花はさく

浅虫の宿にて

初夏の雨うちけふるむつの浦島影あはく見えてくれゆく

弘前にて

あかねさすゆふぐれ空にそびえたり紫にはふ津輕の富士は

秋芳洞にて

洞穴ほらあなもあかるくなれりここに住む生物せいぶついかになりゆくらむか

(昭和三十九年—一九六四—御年六十四歳)〔「増訂・那須産變形菌類圖説」を生物學御研究所から御出版〕

* オリンピック東京大会開催

紙

世にいだすと那須の草木くさみの書編みて紙のたふときことも知りなき

佐渡の宿にて

ほととぎすゆふべききつこの島にいにしへ思へばむねせまりくる

(昭和四十年—一九六五—御年六十五歳)〔「相模灣産蟹類」を生物學御研究所から御出版〕

鳥

國のつとめはたさむとゆく道のした堀にここだも鴨は群れたり(*ここだも〓たくさんに)

実道湖

夕風の吹きすさむなべに白波のたつみづうみをふりさけてみつ

三朝みささ(註・鳥取県)の宿にて

戦の果ててひまなきそのかみの旅をししのぶこの室むろを見て

鳥取の宿にて

飼ひなれしきんくろはじろほしはじろ池にあそべりゆふぐれまでも

(昭和四十一年—一九六六—御年六十六歳)

聲

日日のこのわがゆく道を正さむとかくれたる人の聲をもとむる

道後の宿にて

晴れわたるこの朝ぼらけはるけくも霞む四國の山なみを見つ

五色台に少年団の訓練を見て、日本にはじめて結成されし頃のことを思ひいでて

この岡につどふ子ら見てイギリスの旅よりかへりし若き日を思ふ

飛行機の旅にて

飛行機の翼のました工場を雲間に見たり水島のあたり

晴れわたる大海原ははてもなし八丈島も遠をちにかびて

秋季国民体育大会(註・大分県)

秋ふけてこの廣庭に子らはみなふるさとぶりの踊見せたり

若人の力のこもる球はとぶ高崎山見ゆるテニスコートに

山下湖畔(註・大分県九重)の宿にて

しづかなる山下湖には白鳥のうかぶ姿も見えてくれゆく

(昭和四十二年一一九六七―御年六十七歳)「日本産一新屬一新種の記載をともなふ『カゴメウヒドロ科Ca-

throniidae のヒドロ蟲類』の検討」を御尊名で御出版」

孝明天皇御陵

百年もとせの昔しのびて陵みかさざきををろがみをれば春雨のふる

春ふけて雨のそぼふる池水にかじかなくなりここ泉涌寺せんじゆうじ

武甲山（註・埼玉県）登山の散歩

山裾の田中の道のきぶねぎく夕くれなゐににはへるを見つ（黄 船 菊）

（昭和四十三年—一九六八—御年六十八歳）「相模灣産ヒドロ珊瑚類および石珊瑚類」を生物學御研究所名にて

御出版

* 十月、明治百年記念式典行はる

川

岸近く鳥城うじやうそびえて旭川ながれゆたかに春たけむとす

宮殿の竣工（註・十一月十四日、新宮殿竣工）

新しく宮居なりたり人々のよろこぶ聲のとよもしきこゆ

層雲峽より高原温泉に向ふ

そびえ立つ大雪山の谷かげに雪はのこれり秋たつらしも

稚内公園にて（註・昭和二十年八月二十日、ソ連軍上陸の折、樺太の眞岡郵便局の九人の乙女が殉職、稚内公園

に慰靈の碑がある）

樺太に命をすてしたをやめの心を思へばむねせまりくる

豊岡市コウノトリゲージにて

この秋の最中もなかに見たるこうのとりの雛ひなをもつらむその日思ほゆ

（昭和四十四年—一九六九—御年六十九歳）「天草諸島のひどろ蟲類」を御尊名で御出版

星

なりひびく雷雨のやみて彗星のかがやきたりき春の夜空に

○

あらたまの年をむかへて人々のこゑにぎはしきにひ宮の庭

長崎縣の國民體育大會

長崎の縣あがたの山と海の邊に若人きそふ秋深みつつ

ゆく秋の平戸の島にわたりきて若人たちの角力すまひ見にけり

久しくも五島を觀んと思ひあしがつひにけふわたる波光なみる灘を

富山・繩ヶ池にて

水きよき池のほとりにわがゆめのかなひたるかもみづ(水芭蕉)ばしようさく

靖國神社百年祭

國のためのちささげし人々をまつれる宮はももとせへたり

(昭和四十五年—一九七〇—御年七十歳)

* 大阪で日本萬國博開催。十一月、三島由紀夫氏自決

花

白笹山のすその沼原黄の色につこうきすげむれさきにはふ

明治神宮鎮座五十年大祭

おほぢのきみのあつき病の枕べに母とはべりしおもひでかなし

裏磐梯の宿にて

赤松の林の緑の中の宿ゆふべさわやかにみづばせう咲く

富士通輦會津工場にて

いたつきもみせぬ少女らの精こむるこまかき仕事つくづくと見つ

盛岡にて

すみわたる秋空のかなたはるかにも駒ヶ岳のみね煙はく見ゆ

平泉中尊寺にて

みちのくの昔の力しのびつつまばゆきまでの金色堂に佇つ

(昭和四十六年—一九七二—御年七十一歳) 「カゴメウミヒドラ、クラトロゾーンウイルソニスベンサーに關す

る追補」を御尊名にて、また、「相模灣産貝類」を生物學御研究所名に

て御出版)

三瓶山(註・島根県)のふもとにて

春淺き林をゆけば白花のミヤマカタバミむれさきにはふ

伊勢神宮參拜

外^とつ國の旅やすらげくあらしめとけふは來ていのる五十鈴^{いすず}の宮に

(註・ご渡欧の折の御製—九月二十七日、歐洲七ヶ國御訪問のため御出發、十月十四日、御歸國)

アラスカの空にそびえて白白^{しろしろ}とマツキンレーの山は雪のかがやく

(昭和四十七年—一九七二—御年七十二歳) 「那須の植物誌」を御尊名で御出版)

* 五月、沖繩、本土に復帰。九月、田中角榮首相訪中、日中共同聲明調印

伊豆須崎にて

谷かげの林の春は浅くして風藤葛の實のあかあかと見ゆ

マングローブの自生地（註・奄美大島）にて

汐のさす濱にしげれるメヒルギとオヒルギを見つ暖國に來て

ミュンヘン・オリンピック大會

朝も夕もドイツに競ふ若人をテレビに見つつ思ひやるなり

（昭和四十八年—一九七三—御年七十三歳）

* 十月、伊勢神宮第六十回式年遷宮。十一月、石油危機到來

子ども（歌會始御題）

氷る廣場すべる子どもらのとばしたる風船はゆくそらのはるかに

式年遷宮

秋さりてそのふの夜のしづけきに伊勢の大神をはるかをろがむ

須崎の夏

夏の朝をさなき孫の紀宮も潮あみしつあそびけるかな

須崎の冬

風寒く師走の月はさえわたり海を照らしてひかりかがやく

宮崎縣植樹祭

飲肥杉を夷守臺にうゑをへて夷守岳をふりさけみにけり

(昭和四十九年—一九七四—御年七十四歳)

(四月、兩陛下御成婚滿五十年を記念して歌集「あけぼの」を讀賣新聞社より御出版)〔小笠原群島のヒドロゾア類〕を御尊名で御出版)

*十一月、伊勢神宮御參拜、劍璽御動座二十八年ぶりに復活。フォード米國大統領來日

朝(歌會始御題)

岡こえて利島かすかにみゆるかな波風もなき朝のうなばら

八幡平ハイツにて

夕空にたけだけしくもそびえたつ岩手山には雪なほのこる

十一月八日內宮にまゐりて

冬ながら朝暖かししづかなる五十鈴の宮にまうで來つれば

米國大統領の初の訪日

大統領は冬晴のあしたに立ちましましぬむつみかはせしいく日を経て

弘道館にて

館にて若人たちに蘭學を教へしかの日の齊昭思ふ

(昭和五十年—一九七五—御年七十五歳)

*五月、エリザベス二世英國女王陛下來日。七月、皇太子殿下沖繩御訪問。九月三十日—十月十四日天皇・皇后兩陛下

御訪米

祭り(歌會始御題)

わが庭の宮居に祭る神々に世の平らぎをいのる朝々

湖畔のホテルにて

比良の山比叡の峯の见えてゐて琵琶の湖暮れゆかむとす

米國の旅行を無事終へて歸國せし報告のため伊勢神宮に参拜して

たからかに鶏のなく聲ききにつつ豊受の宮を今日しをろがむ

朝熊山の眺望

をちかたは朝霧こめて秋ふかき野山のはてに鳥羽の海みゆ

(昭和五十一年—一九七六—御年七十六歳)

*二月、ロッキード事件起る。三月、フセイン・シロルダン國皇帝陛下來日。十一月十日、政府主催御在位五十年式典

坂(歌會始御題)

ほのぐらき林の中の坂の道のぼりつくせばひろきダム見ゆ

佐賀の宿にて

朝晴の楠の木の間をうちつれて二羽のかささぎとびすぎにけり

折にふれて

夕餉をへ辭書をひきつつ子らとともにしらべものすればたのしくもあるか

(昭和五十二年—一九七七—御年七十七歳)「紅海アカバ灣産ヒドロ蟲類五種」を御尊名で御出版)

*三月、米ソ兩國二百カイリ漁業専管水域実施。四月、マルコス・フィリピン國大統領來日。最高裁、津地鎮祭台憲判決。

九月、日本赤軍ダッカ事件

海(歌會始御題)

はるばると利島としまのみゆる海原の朱あけにかがやく日ののぼりきて

高野山こうのさんにて

史ふみに見るおくつきどころををろがみつつ杉大樹おほき並なむ山のぼりゆく

折まにふれて

初秋の空すみわたり雲の峯ひざかりにそびゆ那須岳なすの邊へに

折まにふれて

強き雨のまがにもめげず青森のあがたの小田に稻穂いなほいろづく

和歌山縣植樹祭

かすみたつ春のひと日をのぼりきて杉うゑにけり那智高原に

日本遺族會創立三十周年に際し

みそとせをへにける今日ものこされしうからの幸さちをただいのるなり

(昭和五十三年—一九七八—御年七十八歳)

*四月、シニール独逸共和国大統領來日。八月、日中平和友好條約調印

母(歌會始御題)

母宮のひろひたまへるまてばしひ燒きていただけり秋のみそのに

折まにふれて

春はやく南風なまかぜふきたてて鳴神のとどろく夜なり雨ふりしきる

織維工業試験場

コンピューター入れて布地を織りなせるすすみたるわぎに心ひかるる

中央線の車中にて

山やまの峯のたえまにはるけくも富士は見えたり秋晴れの空

(昭和五十四年—一九七九—御年七十九歳)

*五月、東京サミット。六月、元号法公布。カーター米國大統領來日

丘 (歌會始御題)

都井岬の丘のかたへに蘇鐵見ゆこは自生地とみみの北限にして

加江田溪谷 (自然休養林) にて 宮崎縣

蘇こけむせる岩の谷間におひしげるあまたのしだは見つたのしも

甘樞あまがしのま丘にて

丘にたち歌をききつつ遠つおやのしろしめしたる世をししのびぬ

(昭和五十五年—一九八〇—御年八十歳) 「伊豆須崎の植物」を生物學御研究所名にて共同御研究として御出版)

*二月、皇孫・浩宮殿下御成年式。四月、カール十六世スウェーデン國皇帝陛下來日。五月、華國峰中共總理來日。十月、カロス一世スペイン國皇帝陛下來日

櫻 (歌會始御題)

紅くれなるのしだれざぐらの大池にかげをうつして春ゆたかなり

成人式

初春におとなとなるひらのみや浩宮のたちまさりゆくおひたちいのる

須崎の春

朝風に白波たてりしかすがに霞の中の伊豆の大島

上二子山にて

岩かげにおほやましもつけ咲きにはふところどころのももいろの花

箒川のほとり瀧岡にて

小雨ふる那須野が原を流れゆく小川にすめるみやこたなごは

明治神宮鎮座六十年大祭にあたり明治天皇を偲びまつりて

外國とっくにの人もたたふるおほみうたいまさらにおもふむそちの祭に

(昭和五十六年一九八一—御年八十一歳)

* 二月、ヨハネ・パウロ二世ローマ法王來日。三月、神戸ポートピア。四月、マルグレーテ二世デンマーク國女王陛下

來日。十月、北炭夕張火災

音(歌會始御題)

伊豆の海のどかなりけり貝をとる海人あまの磯笛の音のきこえて

折にふれて

伊香保山森の岩間に茂りたるしらねわらびのみどり目にしむ

桃華とうか樂堂らくどうにて

沖繩の昔のでぶり子供らはしらべにあはせたくみにをどる

那須にて

野分のびの風ふきあれくるひ高原の谷間のみちはとざされにけり

(昭和五十七年—一九八二—御年八十二歳)

* 二月、ホテル・ニュージャパン火災。日航機羽田沖墜落。四月、ミッテラン佛國大統領來日。七月、長崎市集中豪雨

橋 (歌會始御題)

ふじのみね雲間に見えて富士川の橋わたる今の時のま惜しも

折にふれて

わが庭のひとつばたごを見つつ思ふ海のかなたの對島つしまの春を

折にふれて

わが庭のそぞろありきも楽しからずわざはひ多き今の世を思へば

日御碕にて

秋の果の碕みさきの濱のみやしろにをろがみ祈る世のたひらぎを

折にふれて

住む人の幸さいちいのりつゝ三宅島のゆたけき自然に見入りけるかな

栃木縣植樹祭

栃と杉の苗植ゑをへて山鳥をはなちたりけり矢板の岡に

(昭和五十八年—一九八三—御年八十三歳) 「伊豆大島および新島のヒドロ蟲」を御尊名で御出版)

* 六月、浩宮殿下英國御留学。九月、ソ連軍機大韓航空機を撃墜。十一月、レーガン米國大統領來日

島 (歌會始御題)

凪なぎわたる朝明の海のかなたにはほのぼのかすむ伊豆の大島

行田なるとの足袋たびをおもふ

足袋はきて葉山の磯を調べたるむかしおもへばなつかしくして

那須にて

夏山のゆふくるる庭に白濱のきすげの花は涼しげにさく

折にふれて

秋くれどあつさはきびし生業なりはひの人のよろこびきげばうれしも

上州の秋

そびえたる三つの遠山みえにけりかみつけの秋の野は晴れわたる

折にふれて

秋くれて木々の紅葉は枯れ残るさびしくもあるか覺かくまん満まん淵まんは

石川縣植樹祭

津幡あがたなる縣の森を人びとのいこひになれと苗うゑにけり

(昭和五十九年—一九八四—御歳八十四歳)〔「バナマ灣産の新ヒドロ蟲」を御尊名で御出版〕

*五月、フィゲイレード・ブラジル國大統領來日。八月、ロスアンゼルス・オリンピック。九月、全斗煥韓國大統領來日

伊豆須崎にて

あたたかき須崎の岡も春寒くあたまざくらのまだ咲きのこる

赤坂東宮御所にゆきて

櫻の花さきさかる庭に東宮らとそぞろにゆけばたのしかりけり

鹿兒島にて

みわたせばしづかなる朝をちかたに白き煙のたつ櫻島

福島縣果樹試験場

黄の色にみのりたる實をもぎとれり梨の畑の秋ゆたかなる

(第三十五回鹿兒島縣全國植樹祭)

霧島の麓に苗をうゑにけりこの丘訪ひしむかし偲びて

(昭和六十年—一九八五—御年八十五歳) 「那須の植物・續篇」を生物學御研究所名にて共同御研究として御出版)

* 三月、筑波科學萬博。八月、日航ジャンボ機墜落。十一月、皇孫・あつひな禮宮殿下御成年式

旅 (歌會始御題)

遠つおやのしろしめしたる大和路の歴史をしのびけふも旅ゆく

(茨城縣へ行幸の折)

はるとらのをま白き花の穂にいでもおもしろきかな筑波山の道

熊本縣 (植樹祭) にて

なつかしき雲仙岳と天草の鳥はるかなり朝晴れに見つ

皇居のベニセイヨウサンザシ

夏庭に くれなゐ 紅の花さきたるをイギリスの ひろのみや 浩宮も見たるなるべし

後水尾天皇を偲びまつりて

建物も庭のもみぢもうつしく池にかげうつす修學院離宮

(十二月二十七日、宮内庁から熊本縣に傳達された御製) (註、同年五月植樹祭に行幸の折、熊本市の私立尚綱高

校のマンドリンクラブの演奏をお聞きになられた由

はなしのぶの歌しみじみ聞きて生徒らの心は花の如くあれと祈る

(*はなしのぶは阿蘇のあたりのみにあるといふ)

(昭和六十一年—一九八六—御年八十六歳)〔相模湾産海胆類〕を御出版)

* 四月、天皇陛下御在位六十年式典。五月、先進國首脳会議東京にて開催。十一月、三原山大噴火
水(歌會始御題)

須崎なる岡をながるる櫻川の水清くして海に入るなり

屋上よりハレー彗星をみて

晴れわたる曉空に彗星は尾をひきながらあをじろく光る

曉の空にかがやく土星の輪を見しよろこびは忘れざるべし

伊豆の海あまたかがやくいさり火に海人らのさちをこひねがふなり

須崎より歸京の車中にて

春ながら雪をいただく富士のやま相模川へだてはろはるとみゆ

皇居の春

わが庭にむらさきけまんの花あまたむらがりさけりのどかなる春

第三十七回全国植樹祭

大阪のまちもみとりになれかしくすの若木をけふうゑにけり

大阪府の旅行、母子保健総合醫療センター

母子センターにはぐくまれたる子供らのよろこびのいろ見つつうれしき

須崎の夏

夏たけて岡の林にかかりたるていかかづらの白き花さく

(六十一年八月、弟宮、高松宮宣仁親王殿下を偲んでおよみになった御製、昭和六十二年四月二十九日に發表)

うれはしき病となりし弟をおもひつつ秘めて那須に來にけり
成宮なりみやに聲たててなくほととぎすあはれにきこえ弟をおもふ

第四十一回國民體育大會秋季大會

晴れわたる秋の廣場に人びとのよろこびみつる甲斐路國體

山梨縣の旅、地場産業振興センター

山梨を旅する毎に進みゆく地場産業のととのひうれし

(昭和六十二年—一九八七—御年八十七歳)

* 二月、高松宮宣仁親王薨去。四月、國鐵民營化、JR發足。六月、天皇、伊豆大島に行幸。九月、天皇、慢性肺炎の手術をうけらる。十月、皇太子殿下、天皇陛下の御名代として沖繩國體に御出席

木(歌會始御題)

わが國のたちなほり來し年々にあけほのすぎの木はのびにけり

大島の噴火

島人の歸りきたりてあらたまの年をむかふるよろこびはいかに
大島の人々の幸さちいのりつつ噴きいでし岩をみておどろけり

佐賀縣の旅

面白し沖べはるかに汐ひきて鳥も蟹も見ゆる有明の海

浩宮のブータン訪問

ブータンのならはしわれに似る話浩宮よりたのしく聞けり

沖繩

思はざる病となりぬ沖繩をたづねて果さむつとめありしを

(昭和六十三年—一九八八—御年八十八歳)

* 三月、青函トンネル開業。四月、瀬戸大橋開通。九月、天皇陛下の御容態急変

車(歌會始御題)

國鐵の車にのりておほちの明治のみ世をおもひみにけり

伊豆須崎の春(三月、須崎御用邸にて)

みわたせば春の夜の海うつくしくいかつり舟のひかりかがやく

道灌堀(七月、皇居にて)

夏たけて堀のはちすの花みつつほとけのをしへおもふ朝かな

那須の秋の庭(九月、那須の御用邸にて)

あかげらの叩く音するあさまだき音たえてさびしうつりしならむ

(御大喪—平成元年二月二十四日—の前日に發表された御製四首)

(昭和六十二年、秋)

秋なかば國のつとめを東宮とうぐうにゆづりてからだやすめけるかな

(昭和六十三年、前半)

國民くわんだみに外國人とつぐにびとも加はりて見舞をよせてくれたるうれし

(同右)

くすしらの進みしわざにわれの身はおちつきにけりいたつきをおもふ

(昭和六十三年、那須にてご發熱の際)

去年こぞのやまひに伏したるときもこのたびも看護婦らよくわれをみとりぬ

— 寄稿 —

皇室と「しきしまのみち」の歴史

亜細亜大学・教授

夜久正雄

皇室と「しきしまのみち」の歴史

夜久正雄

「子等を思ふ歌」や「貧窮問答歌」で有名な山上憶良（六六〇—七三三頃）は、奈良時代の大歌人で、後に大伴家持（七一八—七八五）が「山柿の門」と言つて、柿本人麿（生没年不明、持統・文武兩朝の歌人）と並称したほどの歌人である。彼は歌人であるとともに大唐に留学した当時の新知識で、儒教・佛教に通じた外国学者でもあった。

その山上憶良の長歌の中に、遣唐使を送る「好去好來の歌」といふのがあつて、その冒頭に、日本の国柄について述べたかういふ一節がある。

「神代より、言ひ傳て來らく そらみつ 倭の國は 皇神の嚴しき國 言靈の 幸はふ國と
語りつぎ 言ひつがひけり 今の世の 人もことごと 目の前に 見たり知りたり」

〔萬葉集〕卷五。歌教番号八九四

八神代から言ひ傳へて來たことに「そらみつ大和の國は皇神の嚴しき國、言靈の幸はふ國」と語り継ぎ言ひ継ぎつづけてきたのである。そのことは、現代の人々もことごとく目の前に見て知つてゐる。▽

「皇神」は八皇室の祖神▽の意味で、「皇神のいつくしき國」とは、八皇室の祖神の定めが嚴として變らずに行はれてゐる國▽といふ意味である。憶良の言葉で言へば、「大君いまし」で「聞し食

す國のまほら」(「惑^{まど}へる情^{こころ}を反^{かへ}さしむる歌」——『萬葉集』卷五、歌數番号八〇〇)のことである。つまり八天皇統治の伝統のたえることのないVといふ意味になる。

「言靈の幸はふ國」とは、憶良より一時代前の「人麿歌集」の中にある次の歌の句をとったものであらう。

敷島のやまとの國は言靈のたすくる國ぞまさきくありこそ(『萬葉集』三三五四、「人麿歌集」)

ここに同一の思想信念が流れてゐることがわかるが、この言葉の意味は八まこと——真実の祈り——が実現される國Vといふ意味である。人の旅行くに際して「まさきくありこそ」(御健勝を祈る)と祈るまごころは、必ず実現されるにちがひない。かう信じたのである。しかも兩者ともこの「言靈」を「歌によまれたまこと」といふ意味で使つてゐる。「言靈の幸はふ國」とは、八まごころの通ふ國Vの意味でその八まごころVをあらはすものが歌であるから、言ひかへれば八歌のまことの實現される國Vといふほどの意味になる。結論的な言ひ方をすれば、「和歌の盛んな國」といふことにもなる。

そこで、通じて解釈すると、「皇神のいつかしき國、言靈の幸はふ國」とは「建國の精神のさかんな國、人と人とのまごころの通ひあふ、歌のさかんな國」といふ意味である。前者は宗教思想であり政治思想であり、後者は詩歌やことばに対する信念である。この兩者を表裏の關係に置いて統一したのが、人麿や憶良たちの伝誦した歌詞の意味であつて、ここに日本上代の思想・世界觀を見ることが出来る。『萬葉集』の歌人たちはかういふ思想に生きたのであつて、この根本思想のもとに儒教・佛教等の大陸文明を吸収したのである。

私はここに日本人の生き方の根本があつたと思ふ。それは天皇統治の国がらにしたがつて国のた

めにつくすことと、歌をよみあちはふことによつて君臣上下・国民同胞が心を通はせあふこととをひとつの道として生きることである。これを明治天皇のおことばでは、「しきしまのみち」といふのである。いはば、日本流の学問ともいへよう。

この道を率先して実行せられたのが建国創業時代の天皇がたであり皇族がたであった。『古事記』や『日本書紀』はさう伝へてゐる。

初代天皇の神武天皇は、祖先の神々をまつられ、国家統一の戦ひを戦ひぬかれた軍の統率者であられるとともに歌人であられた。古代英雄の典型と言はれる倭建命（日本武尊）も、同じく忠誠な武将であつて同時に歌人であられた。『古事記』から数首の御歌を引用しよう。

神武天皇御製

みつみつし 久米の子らが 粟生には 臭葦一莖 そねが莖 そね芽つなぎて 撃ちてしやまむ

みつみつし 久米の子らが 垣下に 植ゑし山椒 口ひひく 吾は忘れじ 撃ちてしやまむ
神風の 伊勢の海の 大石にはひもとほろふ 細螺の いはひもとほり 撃ちてしやまむ
葦原の しけしき小屋に 菅疊 いや清敷きて わが二人寝し

倭建命の御歌

倭は 國のまほろば たたなづく 青垣 山ごもれる 倭し うるはし
命の またけむ人は 疊薦 平群の山の 熊白薺が葉を 髻華に挿せ その子
はしけやし 吾家の方よ 雲居立ち來も

乙女の 床の邊に 吾が置きし つるぎの大刀 その大刀はや

神武天皇や倭建命を伝説上の英雄で実在の人物ではないとしてその歌は信頼できない、といふ人があるなら、——私はその説にはくみみしないが——、少くとも七世紀頃のわれわれの祖先は、英雄の必須条件としてすぐれた歌の作者であることを信じた、その事実を受けいれねばならぬことを注意したい。

つづく仁徳天皇（二九〇—三九〇）や雄略天皇（四一八—四七九）のやうな、外国の歴史にもはつきりとその存在が認められる時代の天皇がたについても、神武天皇や倭建命と同じ性格であるといふことが言へる。

国民の指導者であつた英雄の心は、歌によって国民に伝へられ、国民の心はまた歌によって指導者に伝へられ、ここに天皇と国民との心が通ひあつて、国の上下に通ずる一体感が実現されたのである。

聖徳太子（五七四—六二二）または二二が、憲法の第一條に「和を以て貴しと爲し忤ふことなきを宗と爲す」と仰せられ、「上和ぎ下睦びて事を論ふに諧ひぬる時は事理自ら通ふ、何事か成らざらん」と仰せられたのは、君民一体、挙国一致協力の総合的創造力をもつてすれば、いかなる難事も遂行しうるにちがひないとの意味で、つまり日本の国柄の信念を披瀝せられたのである。これは、第三條の「君言臣承」「承詔必謹」の政治思想の根柢としての、国家社会家庭生活の普遍的の原理であるから、第一條に示されたのである。

後に「倭国」の「倭」が「和」といふ文字に代へられ「やまとの国」の「やまと」に「大和」を

宛て、「漢詩」に対して「和歌」といふやうになり、「和國の教主聖德皇」（親鸞の『和讃』）の「和國」といふ言葉も使はれるやうになつた。これは、太子の憲法の第一條と無関係ではあるまい。

「和」とは心の通じあふ意味であるから「言靈の幸はふ」の意味でもある。

聖德太子は、道のとりに倒れてゐた飢人を見てすぐれた歌をのこしてをられるし、夫人の逝去をいたんだ挽歌は悲痛なしらべを今日に伝へてゐる。また、今日の『古事記』の原型と思はれるはじめての日本歴史を太子が編纂されたことを思ひあはせると、太子の「上和下睦」「君言臣承」のお言葉は「皇神のいつくしき國、言靈の幸はふ國」と同じ意味にうけとれるのである。

聖德太子の御歌

しなてる 片岡山に 飯に飢て こやせる その旅人あはれ 親なしに 汝生りけめや さす
たけの 君はやなき 飯に飢て こやせる その旅人あはれ（『日本書紀』「推古天皇紀」）
いかるがの とみの井の水 生かなくに たぎてましも のとみの井の水（『法王帝説』）

『古事記』や『日本書紀』の歌謡は、主として皇族がたの作であるが、力強い、それでゐて精妙な表現であることについては異論が無い。聖德太子以後も、舒明天皇（五九三—六四一）齊明天皇（五四九—五六二）天智天皇（六四六—六七二）天武天皇（六三二—六八六）持統天皇（六四五—七〇二）——たしかな伝承と思はれる歴史時代の天皇がたも、みなすぐれた歌をのこしてをられるのである。その御歌は本書によつて見られたい。

『萬葉集』の編纂は、「山柿の門」と言つて、憶良と人麿とを並称した（「山柿の門」は柿本人麿と山部赤人との二人であるといふ説もあるが筆者はとらない）。大伴家持の手による部分が多いと言はれてゐるが、天皇

がたをはじめとして皇族がた大臣たちから、「防人」や「防人の妻」など、名もなき地方民にいたるまで、身分や地位や貧富や生国や国籍の差にすらかかはりなく、文字通り全国民の歌を集めたのである。——世界史上の偉観ではなからうか。

かくして『萬葉集』は、天皇と国民全体が心を通はず道としての歌を集めた大歌集となつて、以後の歌集の模範となり、和歌の規範となり、復古の源流となつた。

平安時代初期の学問が大唐一辺倒の漢詩文中心であつて、それに対する和歌の復興が『古今集』（九〇五）の撰集せんじゆであつたことはよく知られてゐる。

当代随一の漢詩漢文をのこした菅原道眞すがはらのみちざね（八四五—九〇三）は遣唐使をやめて『新撰萬葉集』を撰しつゝ、道眞の和歌は『大鏡』に残されて今日まで愛唱されてゐる。彼も立派な歌人だったのである。

『古今集』の撰者の紀貫之きのつらゆき（八六八？—九四〇）は、明治になつてから子規に痛撃されて歌人としての榮譽を失つてしまつたが、「男もすなる日記といふものを女もしてみんとするなり」ではじまる『土佐日記』の和文は、やがて紫式部（九七八—一〇一六）の『源氏物語』を生み出すかな書きの散文文学の嚆矢をなすものとなつた。『古今集』の和文序も貫之の書いたものだが、

「ちからをもいれずして、あめつちをうごかし、めにみえぬ鬼神をもあはれと思はせ、おとこをむなのなかをもやはらげ、たけきものゝふの心をもなぐさむるはうたなり。」

と言つてゐる。歌は宗教・倫理——人の心をみちびくものといふのである。歌をよめないことは教養の低いこととされ恥とされたのである。

また、同じ序文に、うたは「そのはじめ」君臣の心を通はず道であつて、政治の根本であつたと説かれてゐるが、集中の歌そのものは、知的技巧に流れて、貴族階級の独占的教養のやうになつてしまつた。世は散文小説中心の時代になつて和歌は衰へたが、鎌倉時代になつて後鳥羽上皇（一一八〇—一二三九）によつて復興された。

後鳥羽院の『新古今集』（一二〇五）の序文には、

「色にふけり心をのぶるなかだちとし、世をさめ民をやはらぐる道とせり」

とあり、「敷島の道」といふ言葉も出てゐる。後鳥羽院の御口傳に、まづ『萬葉集』を読めとすめてをられるのも同じ精神のあらはれとみることができるといふのである。その「敷島の道」といふのは「皇神のいつくしき國、言靈の幸はふ國」といふ古代精神の復興でもあつたわけである。

この時代に、藤原俊成、西行、藤原定家などが出て和歌が盛んになつたが、源實朝（一一九二—一二二九）が後鳥羽院の御精神に呼応する真の代表的歌人といふことができよう。

山はさけ海はあせなむ世なりとも君に二心われあらめやも（『金槐和歌集』）

は、「太上天皇御書下預時」三首の最後の歌である。その他、数々の絶唱をのこした。

もの言はぬよものけだものすらだにもあはれなるかなや親の子を思ふ

神といひ佛といふもよのなかの人の心のほかのものかは

實朝は神儒佛三道を渾融して日本人の情意を表現したのである。

鎌倉時代の高僧として名高かつた無住法師（一二三六—一三二二）は、名著『沙石集』に、

「和歌の一道を思ひ解くに、散乱（そんらん）麤動（こどう）の心をやめ、寂然（じやくぜん）静閑（じやくかん）なる徳あり。又言すくなくして心をつくめり。惣持（そうじ）の義あるべし。惣持といふは、即ち陀羅尼（だらかに）なり。」

と言つてゐる。陀羅尼といふのは、梵語 Dhāraṇī 総持・能持と訳し「眞言」の意味である。

この一文はやや抽象的だが、同じことを述べた次の一文などさらによくこの消息にふれてゐるといへよう。

「離別哀傷の思ひ切なるにつきて、心の中の思ひを、ありのままにいひのべて、萬縁をわすれて、此の事に心すみ、思ひしづかなれば、道に入る方便なるべし。」

「心澄み、思ひ静かなれば」といふことは短歌創作の機微にふれてゐる。そしてその「思ひ」が佛道に入るたよりとなるといふあたり、宗教と藝術との一致を説くともみられよう。表現による解脱感情が、禮拜専念の忘我の感動に通ずるといふのである。

これは、實朝の歌の解説のやうに見える言葉だが、また当時の宗教家であつた慈圓、道元、明恵などの作歌の動機をも語つたものであらう。この三人の名僧にはそれぞれ歌集があるほどで、佛の道と歌の道とは両立してゐるのである。

鎌倉時代に勃興した武士は源實朝を中心として和歌を詠むやうになつたが、承久の変（一二二二）以後、その道は衰へた。

元の襲来（一二七四、一二八二）は国民的自覚を目ざまして、やがて後醍醐天皇（一二八八—一三三九）の建武の中興（一二三四）となるが、これも挫折して、南朝の悲歌が生れる。当代の代表的歌人は宗良親王（一二三一—一三八五）であるが、その歌集『李花集』、撰集『新葉集』には南朝の悲歌がある。

南北朝の対立から戦国乱世の時代となり、その中から国民的統一を求めて、蓮如（一四一五—一四九〇）、上杉謙信（一五三〇—一五七八）、武田信玄（一五二二—一五七三）、豊臣秀吉（一五三六—一五九八）たちの

秀歌が生れるが、それは皇室をあがめる気持のあらはれと平行してゐるのである。

不思議なもので、天皇をないがしろにするものによい歌はない。他人のまごころに共感するすなはな情意は、そのまま天皇の無私のお心に感応するのである。秀吉が聚樂第じゅらくだいに後陽成天皇（一五七一—一六一七）をお迎へして、公卿諸將に和歌を献上せしめた（一五八八）ことは、和歌史上の盛儀であるとともに、政治上の劃期的事件であつたが、秀吉はこれを皇室の伝統としての「敷島の道」に学んだものにちがひない。これもしかし一時の盛儀で、豊臣家の没落とともに絶えてしまった。

武田信玄

君を祈る賀茂かもの社やしろのゆふたすきかけて幾代いくよか我も仕へむ

上杉謙信

極樂も地獄もさきは有明ありあけの月の心にかかる雲なし（辞世といふ）

豊臣秀吉

なべて世に仰ぐ神風ふきそひてひびき涼しき宮崎みやざきの松

萬代よろづよの君がみゆきになれなれむ緑木高き軒の玉松（聚樂第行幸の折）

徳川氏は「禁中法度」（一六二五）を作つて、天皇の權威を制限し天皇を政治から排除した。禁中法度の第一条に御学問（漢学）と和歌とをおすすめしたのは、天皇を政治から追放しようとする手段だったらしいが、徳川時代の代々の天皇がたは「敷島の道」に精進せられ王政復古の原動力をやしなひつづけられたのである。

後水尾天皇（一五九六—一六八〇）靈元天皇（一六五四—一七三三）のお二方は特にお歌の数も多く、その

後の天皇がたの模範となられた。このことは本書の編者小田村寅二郎氏の著書『日本思想の源流』に詳しい。

後水尾天皇御製

うけつぎし身の愚さに何の道も廢れ行くべき我が世をぞ思ふ（後陽成院崩御後、御追善の御製八首の中

に）

これをだに人に見えむもつつましきやそぢの後の敷島のうた（題不知）

靈元天皇御製

朝な／＼神の御前にひく鈴のおのづから澄むころをぞ思ふ（寄神祝）

敷島のこの道のみやいにしへにかへるしもなほ残すらむ（寄歌述懐）

やがて、光格天皇（一七七一—一八四〇）は千四百四十余首の御歌を、仁孝天皇（一八〇〇—一八四六）は六百九十余首の御歌をのこされ、幕末の孝明天皇（一八三一—一八六〇）の御代になるのである。

孝明天皇の御歌は、当時の内憂外患の国の魂の叫びとでも申上げるべき御歌で、大胆率直自由在の御表現である。和歌史上稀有最勝の御歌の一つと申上げることができよう。

神ごゝろいかにあらむと位山おろかなる身の居るもくるしき（述懐）

さまざまになきみわらひみかたりあふも國を思ひつ民おもふため（述懐）

澄ましえぬ水にわが身は沈むともにごしはせしなよろづ國民（年月未詳の御製）

さかのぼって、國学の祖と言はれる契沖（一六四〇—一七〇二）といふ人物は、加藤清正（一五六二—一六二二）の遺臣の家の出で、無住法師の歌論の継承者である。『萬葉集』の研究で有名だが、彼は、神道・儒教・佛教の三道について

「三道ヲ連接シテ恰あたモ緯ニ似タル者ハ唯倭歌ノミ、斯ニ知リス、倭歌ノ用、皇ナル哉、遠イ哉」

(『厚顔抄』序)

と言つて、神儒佛三道を貫くものが和歌であると喝破した。

賀茂真淵かものまほ(一六九七—一七六九)は契沖を継いで『萬葉集』の復興に全力をささげた。彼は和歌の原理・古代精神は「まこと」にあると信じた。

本居宣長(一七三〇—一八〇一)の『うひ山ぶみ』は、古典の学問と和歌創作とを、日本人の学問の第一歩としてあげたのである。

明治維新の志士の主流はこの伝統をついだ。維新志士和歌集が集大成せられたとしたら、それは『萬葉集』をつぐものとなるであらう。吉田松陰(一八三〇—一八五九)の『留魂録』の遺歌はその一例で、永遠の作品である。また鹿持雅澄かもちまさずみ(一七九一—一八五八)は『萬葉集古義』を書いて『萬葉集』研究を集大成して宣長の『古事記傳』の精神を継承した。

吉田松陰「かきつけ終りて後」

心なることの種々くさくさかき置きぬ思ひ残せることなかりけり

呼びだしの聲まつ外に今の世に待つべき事のなかりけるかな

討たれたる吾れをあはれと見ん人は君を崇あがめて夷えい拂はへよ

愚かなる吾れをも友とめづ人はわがとも友とめでよ人々

七たびも生きかへりつつ夷をぞ攘はんこころ吾れ忘れめや(『留魂録』より)

明治天皇(一八五二—一九二六)は孝明天皇に集約せられた御歴代天皇の御遺志をつがれ、王政復

古・明治維新を実現された。同時に御生涯に九万三千余首の御歌をのこされるといふ御精進ぶり
で、正しく「敷島の道」を大成されたのである。御歌は本書に見るが如くである。民間には正岡子
規（一八六七—一九〇二）が出て、『萬葉集』『古事記』にあらはれた古代建国精神を復活した。彼は洒
落、理窟を排して、まごころの表現を人生価値の根本としたので、明治天皇の「敷島の道」に通ふ
ものである。

明治初年の太政大臣・三條實美（一八三六—一九〇二）が忠誠心のあつい歌人であったことも忘れて
はならない。

副島種臣（一八二八—一九〇五）や西郷隆盛（一八二七—一八七七）は漢詩や書にすぐれてゐたが和歌も
立派なものであった。

かうして、明治まで、盛衰はあったが、日本人の学問・教養の中核は和歌であった、といふこと
ができよう。

しかし明治以来の学問は、大学がその代表であるとすれば、一般に西洋の科学を追ふことに急
で、和歌を中核とする日本の学問の伝統とは離れてしまった。

ただありがたいことに「敷島の道」は皇室に伝へられて、大正天皇（一八七九—一九二六）には『御
製詩集』とともに『御製歌集』があり、生物学者として著名な今上天皇は、戦前戦中戦後一貫して
和歌を詠まれ国民をみちびきたまふのである。

亡国の危機をまねいた大東亜戦争を終結せらるゝに当って、今上天皇のおよみになられた三首の
御歌は、国の滅びるのを救ったちからの源がどういふものであるかを、はつきりと後代に示すもの
で、「皇神のいつくしき國、言靈の幸はふ國」の国がらのたふとさを現代に示した絶唱といふこと

ができる。

今上天皇、終戦直後の御歌

爆撃にたふれゆく民のうへをおもひいくさとめけり身はいかならむとも

身はいかになるともいくさとどめけりただたふれゆく民をおもひて

國がらをただ守らんといばら道すすみゆくともいくさとめけり

「敷島の道」^{しきしまのみち}はいまも日本文化の中核であり日本人の心のバックボーンである。——気づく人が少いのである。（昭和四十八年稿、従って文中に「今上天皇」とあるのは「昭和天皇」の御事）

皇室御系圖

編者略歴

小田村寅二郎

大正3年(1914)東京都(旧)四谷区に生れる。家系は山口県萩市。学習院初等科、東京府立一中、旧制一高を経て、東京帝大法学部政治学科中退。亜細亜大学教授。

現職—社団法人国民文化研究会理事長
編著—時事通信社版『日本思想の系譜—文献資料集—上・下二巻』、日本教文社刊『日本思想の源流—歴代天皇を中心の一』、同『昭和史に刻むわれらが道統』、国民文化研究会刊『学問・人生・祖国—小田村寅二郎選集—』ほか。

小柳陽太郎

大正12年(1923)佐賀市に生れる。県立佐賀中学、旧制佐賀高校を経て東京帝大文学部に入学、学徒出陣、戦後九州帝大文学部国文学科へ転学、卒業。福岡県立修猷館高校教諭。

現職—九州造形短期大学教授、社団法人国民文化研究会副理事長。
編著—同研究会刊『現下の学校教育の内容を正すために急務を要する問題点』、同『日本への回帰・各集』、同『戦後教育の中で』ほか。

初版発行 昭和48年9月1日

10版発行 平成元年5月10日

増補改訂 歴代天皇の御歌
—初代から昭和天皇まで二千首—

定価 1750円

〔検印省略〕

おだむらとらじろう
小田村寅二郎
編者
こやなぎようたろう
小柳陽太郎

発行人 中島省治

発行所 株式会社 日本教文社
107 東京都港区赤坂9-6-44
電話 東京(03)401-9111(代)
振替 東京4-55519番

落丁・乱丁の際はお取替えいたします
印刷・飯島印刷(株) 製本・凸版製本

©Torajirou Odamura, Youtarou Koyanagi,
Masao Yaku, Masaomi Seki, 1973 Printed
in Japan

ISBN4-531-06044-X

谷口雅春著 ¥979 円260
限りなく日本を愛す

戦後の偏向歴史教育より生じる青年諸君の質疑に答え、日本の実相——中心帰一の日本民族精神を詳述し、それに裏付けられた日本独自の世界的使命を力説する

谷口雅春著 ¥930 円260
国のいのち 人のいのち

反天皇、反国家的教育と社会状況の横行する今日、「国家は生命体である」という著者の国体論を基礎として日本国家建設の中心理念を説き明かす全国民必読の書

谷口清超著 ¥927 円260
日本よ永遠であれ

中心帰一の秩序をその生命体的理念として持つ国家「日本」の使命とは？ 記紀万葉に見る日本の精神を軸に天皇、防衛、憲法等内外の諸問題の本質を衝く。

谷口清超著 ¥412 円260
正しき日本の進路

著者が現代の混濁した世情を鋭敏に洞察し心魂こめて初めて世に送る警告の時局評論集。日本を思う愛国の熱意が迸り溢れた、全日本人が久しく待った必読の書

葦津珍彦著 ¥1545 円260
みやびと覇権

—類纂天皇論—

日本の天皇と西欧君主との違いを豊富な資料を駆使して分析。地鎮祭問題、元号問題等戦後生じた種々の国家的問題を取り上げ鋭く論及。葦津天皇論の決定版。

加瀬英明著 ¥1339 円260
神秘なる天皇

—教文選書—

皇族との関係も深い著者が、ベストセラー『天皇家の闇』以来久々に放つ出色の天皇論。ドキュメンタリータッチで日本及び天皇の真の姿が浮彫りにされてゆく

杉田幸三著 ¥1133 円260
エピソードで綴る
天皇さま

—明治・大正・昭和篇—

三代の天皇さまの御日常での出来事、一般国民との触れ合い等、常に国民を愛された天皇さまの感動的なエピソード45篇を収録。易しい文章で、さし絵も多い。

小田村寅二郎著 ¥1236 円310
日本思想の源流

—歴代天皇を中心に—

日本なるものの本質を歴代天皇の御歌の中に求め天皇の御人生観御思想を中心に天皇と国民の関係を正しく解明。日本人の心と思想の源流を探る独創的見解の書

杉田幸三著 ¥1236 円260
親子で読める
天皇日本史

121代の歴代天皇を中心に、神話の時代から幕末までの2525年間の日本歴史をやさしく描写。誰でも読める日本史読本。『エピソードで綴る天皇さま』の姉妹編

- ・各定価、送料は平成元年5月1日現在のものです。
- ・この定価、送料には消費税が含まれています。
- ・品切れの際は御容赦下さい。

